まちがった青春をもう一度。

作者：[滝](https://syosetu.org/user/342316/)

原作：[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。](https://syosetu.org/search/?mode=search&word=%E5%8E%9F%E4%BD%9C%EF%BC%9A%E3%82%84%E3%81%AF%E3%82%8A%E4%BF%BA%E3%81%AE%E9%9D%92%E6%98%A5%E3%83%A9%E3%83%96%E3%82%B3%E3%83%A1%E3%81%AF%E3%81%BE%E3%81%A1%E3%81%8C%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%82%8B%E3%80%82)  
タグ：[比企谷八幡](https://syosetu.org/search/?mode=search&word=%E6%AF%94%E4%BC%81%E8%B0%B7%E5%85%AB%E5%B9%A1) [雪ノ下雪乃](https://syosetu.org/search/?mode=search&word=%E9%9B%AA%E3%83%8E%E4%B8%8B%E9%9B%AA%E4%B9%83) [八雪](https://syosetu.org/search/?mode=search&word=%E5%85%AB%E9%9B%AA) [俺ガイル](https://syosetu.org/search/?mode=search&word=%E4%BF%BA%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%AB)  
[▼下部メニューに飛ぶ](https://syosetu.org/novel/257731/#fmenu)

人生に於いて、最も奇跡を身近に感じる日。  
目覚めると俺は、いつかの作文を目の前に突きつけられていた。  
  
──これは雪乃が大好き過ぎる八幡の、まちがった青春のやり直し物語。  
  
※タイムスリップ物ですが、アンチやヘイトではありません。むしろ原作礼賛です。  
2021/6/26　完結しました。

https://syosetu.org/novel/257731/

もう一度、初めて雪ノ下雪乃と出会う。

　あまりにも小さな手が、その手をいっぱいにして俺の小指を握っている。

　ついさっきまで顔も身体も真っ赤でまるで別の生き物みたいだとすら思っていた我が子は、雪乃の腕の中でその白い肌を映えさせながらすぅすぅと寝息を立てていた。

「気持ちよさそうに寝ているわね」

　産婦人科のロゴの入ったガウンを着た雪乃は、安らかな寝顔を見てから小さな微笑みを俺に向けた。

　たった数時間前に産み落とされた命は、確かな熱を持って俺の指を握り続ける。それが反射だと分かっていても、その感覚にさっきからずっと感動しきりで胸がいっぱいになっていた。

「結衣はいつ来るって？」

「明日よ。仕事を休んで来るって言っていたわ」

　ふさふさのその髪を撫でながら、雪乃は静かにそう答える。さっきから微笑みは、絶え間なくその寝顔に注がれ続けていた。

「明日か⋯⋯。俺とは入れ違いになるかも知れないな」

「大丈夫よ。結衣もせっかく休みを取って来てくれるんだし、あなたにも会いたいでしょう。引き留めておくわ」

「ああ、そうしておいてくれ」

　明日、俺は朝からこの子の名前を貰いに行かなくてはならない。

　俺たちの考えた何十通りという名前の中から、出生日時を元に最適な名前はどれかと助言を貰いにいくのだ。子どもの命名には姓名判断鑑定士の意見を聞きたいと、雪乃たってのお願いだった。

　生まれたその日に雪が降っていたから雪乃、という名付けに彼女は何か思うところがあったのか、それともただこの子にとっての最高の名前を与えたかったのかは敢えて聞かなかった。

　彼女がそう望むのならば、俺にはその願いを叶える義務と責任がある。それが雪ノ下雪乃と結婚した時の、俺が誰に宣言したわけでもない誓いの一つだ。

「そろそろ預けて来るわね」

　ああ、と俺が返事をすると、雪乃は優しく俺の指を握ったままのその手を解き、病室を後にする。生後間もない赤ちゃんは、新生児室にいるのが基本だ。名残惜しいが、仕方ない。

「そろそろ寝ましょうか。今なら目を瞑っただけで寝てしまいそう」

「ああ、本当にお疲れだったな」

　雪乃が部屋に戻ってくると、俺の答えを聞いてから部屋の照明を消す。

　本当に、お疲れ様というか、もう頭も何も上がらない。

　何年経っても雪乃の体力の無さは相変わらずだったから、俺は我が子の泣き声と雪乃の安心した顔を見るまで気が気ではなかった。

「雪乃」

　ソファベッドに座ったまま、本当にクタクタに疲れた様子の雪乃をじっと見詰めた。

　子を産む落とすという大変さは、その側で見ていてようやく分かるものがある。何度も気を失いながら出産を終えた雪乃の顔は、やつれたなんて言葉じゃ足りないぐらいの疲労が見て取れる。

　俺は雪乃に見つめ返されながら、深い息を吐いて、そして胸いっぱいに空気を吸い込む。

「ありがとうな、本当に」

「⋯⋯おかしな事を言うのね。何もお礼を言われるようなことはしていないわ」

　そんな訳がないだろう、とすぐにでも言ってしまいそうになるが、それを言葉にすることはやめておく事にした。長くなりそうだし、今は雪乃を休ませる事を優先するべきだ。

「おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

　見慣れない天井を仰ぎ、ただ目を瞑る。

　数分と経たずに耳に届く寝息の音に、俺は祈りを込めるように意識を手放した。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　懐かしい景色だった。

　リノリウムの床、プリントの擦れる音、仄かに香るタールの匂い。

　気がつくと俺の目の前には、レポート用紙が突きつけられている。

「比企谷。この舐めた作文はなんだ。一応言い訳ぐらいは聞いてやる」

　鋭利なまでの視線と、刺々しくも酷く懐かしいその声。俺の記憶そのままの平塚先生は、俺の郷愁とは相対するように厳しい表情を向けてきていた。

　俺の眼前に突きつけられたそれには、「青春とは嘘であり、悪であり」とか何とか書いてある。

　この日の事は、はっきりと覚えている。俺が雪乃と会った初めての日だから、忘れられるはずもない。今でもこんな風に夢を見たって、まるで現実かのように感じるほど俺の記憶の中で鮮やかな色彩を放っていた。

「いや、ホント何書いてるんでしょうねこいつ」

　もしもこれが数年以内に書いたポエムじみた作文だったら、思いっきり恥ずかしがれた事だろう。しかしさすがに干支も一回りするほど昔の事となると、笑うしかない。

「ふむ⋯⋯分かってやっているという事は、確信犯か。よりタチが悪いな」

　平塚先生は一瞬の思案を見せた後に、ギロりと鋭く俺を睨みつけた。えぇ⋯⋯こっわ。割と怖いもの知らずだった高校生の頃ですら怖かったのに、怖いものを知ってしまった今ではより怖い。いや俺ビビリ過ぎだな。

「この忙しい時期にその悪意のある行為は、如何なる理由を持ってしても看過できない。よって君には、奉仕活動を命じる」

　まるで既定路線のような台詞に、俺は思わず吹き出してしまいそうになる。この続きは、分かっている。俺は奉仕部の部室に連行され、強制的に入部させられるのだ。

「はぁ」

「ついて来い」

　有無を言わさぬその言葉に、俺は廊下を久方ぶりの上靴で叩き歩く。その音も凛と澄んだ空気も、何もかもが懐かしい。

「君は部活には所属していなかったな？」

「ええ」

　特別棟に踏み入れながら、俺は短くそう答える。昔懐かしい奉仕部の部室まで、あともう少しだ。

　名前のない、真白なサインプレート。それを見上げて俺は、胸が痛いほどの懐かしさに満たされる。こんなにも現実味のある夢を見るほど、総武高校で過ごした日々は鮮烈に記憶に刻まれているらしい。そのリアリティは、記憶の追体験と言う他ない。

「着いたぞ」

　そう言った瞬間に、平塚先生はその扉を開く。その瞬間、一陣の風が吹き抜けた気がした。

　教室の後ろの方へ押しやられた椅子と机たち。暫く使われた様子もない黒板。窓から差し込む斜陽は、彼女の完璧な造形により深い影を落とす。

　僅かな赤みを帯びたその世界の中、佇むようにただ本へと視線を落とす彼女。世界が終わってしまった後も、きっと彼女はこのままこうしているんじゃないかと思うほどに、その光景は絵画じみていた。

　──俺は彼女の名前を知っている。

　雪ノ下雪乃。

　俺の将来の妻であり、たとえ自分の名前を忘れようとも忘れられない名前。

「⋯⋯⋯⋯」

　⋯⋯いや、それにしても。

　高校生のうちの奥さん、可愛すぎません？　いや三十路に近い雪乃も大人の妖艶さも相待って途轍もない美人だし可愛さてんこ盛りなんてすけども、ええ。実際十代の彼女を見ると、わっかいなークソ可愛いなーとしか考えられないわけで。

「平塚先生。入る時はノックを、とお願いしていたはずですが」

　その声は耳馴染みのある声よりも、少しだけ高い。声まで可愛いですね、うちの奥さん。ほんとこの夢、最高だわ⋯⋯。

「ノックをしても、君が返事をした試しがないじゃないか」

「それは返事をする前に、先生が入ってくるからです」

　その棘のある言い方も諦めたような目も、随分と久しぶりに見るものだ。感慨深くそれを見届けていると、ふと雪乃と目が合う。

「それで、そのやたらと腐った目の奥がキラキラしている人は？」

　ああ、いけない。いくら夢とは言え、余りにも無遠慮に彼女を見詰めすぎていたようだ。

「彼は比企谷。入部希望者だ」

「⋯⋯二年F組比企谷八幡です。よろしくどうぞ」

　俺がそう答えると、平塚先生が怪訝そうに眉を顰めた。

　その表情に、この当時の事を思い出す。確か俺は、入部って何だよと抵抗したんだっけか。

「彼にはとある罰としてここでの奉仕活動を命じたところだ。目を見れば分かると思うが彼は相当に性根が腐っているものでな。人との付き合いを学べば多少はマシになるだろう。こいつを置いてやってくれるか。彼の捻くれた孤独体質の更生が私の依頼だ」

「⋯⋯お断りします。その男の獲物を狙うような目に、身の危険を感じるので」

　えぇぇ⋯⋯断っちゃうのかよ。比企谷八幡、奉仕部入部失敗。どんなバッドエンドだよ。いやそう言えば、元々こんな感じで拒否されていたっけか。

「そう言ってくれるな。こう見えて彼は阿呆ではない。下手な事をすればどうなるか、理解しているよ」

　何だか穏やかではない展開に、随分と居心地が悪くなる。

　まあ部屋に入ってくるなりキラキラした目で見てくる奴が居たら、きっと自分目当てでやってきた輩だと勘違いしても無理はない。この頃から雪乃は、自分が容姿に恵まれている事を自覚しているからこその態度だろう。

「⋯⋯それでもまだ、信用は出来ません」

「まあそれも無理もないかも知れんな。些細な事でもいい。もし何かあったら私に言いたまえ。学校から放逐する」

　いや、何だそれ。雪乃の告発ひとつで退学かよ。

　思わず突っ込んでしまいそうになるが、所詮は夢だ。もしあの時こんな風に過ごしていたら、本当に言われていたかも知れない言葉なのだろう。

「それなら⋯⋯まあ⋯⋯。分かりました」

　渋々、と言った様子で雪乃は小さく首肯する。本当嫌そうですね、雪乃さん。ぼくはこうこうじだいのあなたともういちどあえてとてもしあわせですが。まる。

「では、後の事は頼んだ」

　そう言うと平塚先生は長い髪を翻し、颯爽と奉仕部の部室を後にする。随分と懐かしい、奉仕部での雪乃との二人の時間だ。

　長机も、ペラペラの座面の椅子も、何もかもがあの頃の通り。よっこいせ、と俺は自分の席に座ると、その瞬間から雪乃に怪訝な目を向けられる。

「⋯⋯着席の許可も無しに座るだなんて、まるで躾がなっていないようね」

　えぇ⋯⋯許可制だったのかよ。こんな時、俺は彼女にどんな風に返していたっけか。

「俺はお前に『お座り』と言われないと席に座ることも許されないのかよ⋯⋯」

「お座り、という言葉の意味ができるなら、そうして上げましょうか？　犬並みの知能があればだけれど」

　⋯⋯いや初対面でこれは強烈だな。ここまで下に見られる俺も俺だが、雪乃の態度たるや上から目線どころか雲の上から目線レベルだ。

「別に勝手に座ったっていいだろ。部員なんだし」

「⋯⋯あなた、この部活が何をするか知っているの？」

「奉仕部。依頼が来るまでひたすら暇な部活。違うか？」

　飄々と答える俺に、雪乃は思わずと言った調子で自らの身体をかき抱いた。

「⋯⋯比企谷くん。どう平塚先生に取り入ったか知らないけれど、どうしてそこまで知っているの？　私が目当てなら、今すぐ出ていって貰えるかしら」

　まあ、そんな反応になるよなぁ。雪乃にとって見ればそこまで知られているなんて、ストーキングを受けているも同然だろう。

「なんでそうなる。ここに来る道すがら、平塚先生に聞いたんだよ」

　害意はありませんよ、と知らしめるように、俺は鞄の中から文庫本を取り出す。ぱらりとそれを捲った瞬間に、どこからか流れてくるように一枚の紙が床に落ちた。

『救え』

　拾い上げたその紙には、ただそれだけが書いてある。何度も直線を書き殴りつけて作ったような字は、どこか脅迫文じみていて鬼気迫るものがあった。

　思わず雪乃の方を見るが、彼女はもう俺の方を見ておらず手元の文庫本に視線を落としている。

　これは一体、どういう事だ。

　俺の知っている出来事の中で、ただこれだけが違っていて、あまりにも異質だった。

　長い沈黙の中、文庫本を読むふりをして頭をフル回転させる。俺が忘れているだけなのだろうか。それともこの空き教室には以前の使用者が居て、悪戯にしかけた紙が何かの拍子に落ちてきただけなのか。

　夢の中だというのに妙に冴える頭で考えていると、無遠慮なまでの音を立てて入口の扉が開く。

「雪ノ下、邪魔するぞ」

「⋯⋯先生、ノックを」

「悪い悪い。ちょっと様子を見に寄ったんだが⋯⋯」

　ふむ、と平塚先生は腕組みをして俺たちを見下ろす。平塚先生⋯⋯が仕掛けたわけでもないよな。意味も動機もなさすぎる。

「雪ノ下、いきなり諦めてしまっていないか？」

「⋯⋯その男と会話を続けていいものか、非常に疑問なので」

　その男、って⋯⋯あなたの将来の旦那さまですよ？　いや旦那さまなんて呼ばれた事は一度もないけれども。今度そういうプレイもありだなぁ⋯⋯。

「しかし会話が全ての始まりだ。会話がなければ、お互いの理解も進むまい」

「私は理解も馴れ合いもしたくありませんが」

「そうか。それならそれでも構わない。だが私の依頼は覚えているな？」

「それは⋯⋯はい」

　諦念と後悔の混じった表情で、雪乃は俺の方を見る。いいね、その表情。不信感もここまで露わにされるといっそ清々しいし、一周回って新鮮だ。雪乃はどんな表情をしていたって美しい。

「では、頼んだぞ」

　平塚先生は自分が居ては会話が始まらないと考えたのか、早々に部室を後にする。

　ピシャリと扉が閉まると、雪乃は「はぁ」と諦めたような吐息を一つつくと、読んでいた本を机に置いてこちらに向き合う。

　あの紙切れに書かれていた事の意味は未だ不明。だがこれは夢だ。ならば今は。

「自己紹介がまだだったわね。私は二年J組、雪ノ下雪乃。奉仕部へようこそ、比企谷⋯⋯三幡くん？」

「八幡だ。五幡足りてないぞ」

　──ならば今は精一杯、あの頃の雪乃との会話を楽しもうではないか。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　翌朝俺は、ダイニングテーブルに両肘をついたまま頭を抱えていた。

　そう、翌朝。

　夢の中なのに俺は眠りに落ち、そして目覚めた。夢の中で眠ってしまえば完全に覚醒するだろうと踏んでいたのだが、未だ焼き増しのような世界から目覚める気配もない。

　これは非常に困った事になった。俺は早く目覚めて、生まれたばかりのあの子に名前をあげなくてはならない。こんなタイムスリップごっこなんて、している場合ではないのだ。

「⋯⋯どしたの、お兄ちゃん」

　いつの間にかリビングに入ってきていた小町が、横から俺の顔を覗き込んでいた。昨日の晩にも会ったけど、十二年前の小町わっか⋯⋯。いや、今の小町が老けたとかは全然思わないけど、ついジロジロと見てしまう。

「いや、何でもない」

「ふーん⋯⋯」

　こちらの言うことを全く信じていない声色で、小町はトーストを焼き始める。

　とにもかくにも昔の彼女たちとの別れは名残惜しいが、俺は元いた世界線とも言える現実に戻らなくてはならない。その為のヒントは、きっとあの紙にあるのだろう。

『救え』

　ただそれだけが書き殴られた紙。あれだけが俺の記憶と違っていて、強烈な暗示をもたらしている。

　一体、誰を救えというのだろうか。

　思い出せば俺の高校生活には、後悔にまみれていたように思える。もっと上手くやれていれば、無用に傷つけたり勝手に傷ついたりなんてしなかった。助けるつもりでいて、救いようもない事態になってしまった事だってある。まったく、救うべき対象が多過ぎて途方に暮れるしかない。

「パン、焼けたけど」

「おぉ⋯⋯ありがと」

　俺が頭を上げると、小町が焼き上がったトーストを皿に乗せてくれる。香ばしい匂いに、沈鬱に溺れそうになっていた心も多少は軽くなった気がした。

「頂きます」

　手を合わせてそう言った俺を、小町は怪訝そうな目で俺を見る。そう言えば毎食前にこんな風に丁寧に頂きますを言うようになったのは、雪乃と一緒に暮らすようになってからだったかも知れない。

「お兄ちゃん、今日やっぱ何か変だよ」

　そう、俺は変わってしまった。

　十二年という歳月が、関わり合う人が、そして俺自身が──取り返しがつかないほどに、変えてしまったのだ。

　だからもし、俺がまたあのまちがった青春をもう一度過ごすとしたら。

　もう今度は、間違うわけにはいかない。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「比企谷、部活の時間だ」

　ホームルームを終えて教室を出た俺を待ち構えていたのは、平塚先生だった。

「いや、わざわざ迎えに来なくても⋯⋯」

「ちゃんと部活に行くとでも言うのか？　口だけではどれだけでも言えるぞ」

　どうやら俺はこの当時の平塚先生には全く以て信頼されていないらしい。実際迎えが無ければ、あの時の俺なら普通に家に帰っていたと思う。

　しかし俺には成すべき事がある。だから本当に部活には向かうつもりだったし、今の俺にはそもそも雪乃に会わないという選択肢が存在しない。

「信用ゼロですね、俺」

「当たり前だ。わざわざ人の手をわずらわせる事をする奴の、何を信用できると言うんだね」

　肩を並べ、特別棟に向けて廊下を歩いて行く。今日俺が言い出す事を、彼女は何と返してくるだろうか。芳しくない答えが返ってくるのは、必定だ。

「時に比企谷。君のその腐った目に、雪ノ下雪乃はどう映る？」

　唐突な平塚先生の問いかけ。それに俺は、何と答えたんだったか。

　いや正直JKゆきのん最高マジ可愛過ぎ抱きしめたいとかバカ正直に答えようものなら、即ゲームオーバーなのは見えている。⋯⋯いや本当抱きしめちゃダメかな？　ダメだわな。

「何というか⋯⋯自意識と人間不信の塊みたいなやつですね」

「そうか⋯⋯。まるで自分の事を言っているようだ、とは思わないかね？」

　それは本当に、そう思う。思うけどもうちょっと言い方あるんじゃないですかね、現国の教師なら。

　確かにそんな似た部分があったからこそ、コモンセンスの共有が容易だったのだろう。それ故に勝手に期待して、勝手に裏切られた。俺も彼女も、無用に傷ついたように思う。

「きっと君たちは、どこかでバランスを取り損ねて、狂ったままになってしまったんだろうな」

　平塚先生のヒールが床を叩く音が、黙り込んでしまった俺の耳朶を打つ。

「案外君たちは二人三脚でなら、上手く歩けるのかも知れないな」

「⋯⋯もつれて派手に転ける未来しか見えませんね」

「それだっていいさ。転ぶ時が二人一緒なら、一緒に立ち上がる事だってできるはずだよ」

　未来の事まで全て見渡してきたかのような平塚先生の言葉に、感嘆の吐息が漏れる。まさにだ。事実俺たちは名実ともにパートナーとなって以降、そうやって生きてきたのだから。

「さあ、着いたぞ。行ってこい」

　奉仕部の部室の入口に着くと、バンと背中を叩かれる。中にまでついてくる気はないらしく、ヒラヒラと手を振って平塚先生は踵を返した。

　扉の取っ手に手をかけると、中にいるであろう彼女を驚かせないようにゆっくりと開ける。

「うす」

「⋯⋯⋯⋯こんにちは」

　すでに部室内に居る雪乃は、俺の挨拶とも言えないような一言にたっぷりと時間を取った後にそう返す。手に持っていた本は開いたまま、僅かな時間こちらを見た後に彼女は言った。

「もう来ないかと思っていたわ。普通あれだけ言われたら、二度と行きたくないと思うはずだけれど」

「生憎面の皮が厚いもんでな。あんなぐらいじゃノーダメージだ」

　昨日は随分と辛辣で悪辣な言葉の応酬があったが、むしろ懐かしいと楽しんでいたぐらいだ。そう言って椅子に座った俺を、雪乃は何の遠慮もなく訝しむ。

「そう。⋯⋯あなたひょっとして、私の事が好きなの？」

「⋯⋯は？」

　雪乃の事が好きかどうかなんて、そんなの好き好き大好き過ぎて愛してるまであるって話だ。むしろ今すぐ抱きしめたいぐらい。いえ、抱きしめさせて下さいお願いします。

　って言ったら、一発退場レッドカードくらうんだよなぁ⋯⋯。だから取り敢えずは、あの時の俺が言いそうな事で繋いでいくしかない。

「お前、どうしたらそんな頭の中お花畑な発想になるんだ？　アルプスででも生まれ育ったの？　真名ハイジじゃないの？」

「あら違うの？　それなら安心ね」

　うふふ、と俺の言う事などガン無視で口元で笑みを作ったが、目は笑っていなかった。これちょっと怒っている時のやつだ。八幡知ってる。

「ああ、勝手に安心しといてくれ」

　しかしこの流れで、今日の目的を達成するのは何ともハードルが高い。けれど後になればなるほど、言い出すこと自体不自然で筋が通らなくなってくる。

　俺は「んんっ」と咳払いをすると立ち上がり、椅子を雪乃の目の前に持ってくる。そこに座り込んで相対するのは、随分珍しいシチュエーションだ。

「雪ノ下」

　俺が呼びかけると、雪乃は椅子の背もたれに身体を預けて仰反るように俺と距離を取ってくる。いや、そんなに警戒しなくても⋯⋯。

「連絡先、教えてくれ」

「絶対に嫌」

　机にバンと携帯を置いた俺に、雪乃はノータイムで拒絶を返す。ここまでは想定通りだから、問題ない。

「何でだ？」

「何で、って。あなたよくこの話の流れで連絡先を聞こうなんて思うわね。やっぱり私の事が好きなの？」

「どうしてそうなる。一応同じ部活に入ってるんだから、連絡先知っとかないと何かと不便だろ」

　思えばこんな風に、もっと早くに彼女の連絡先を聞くべきだったのだ。そうしていたら、いらぬ不安や不信は訪れなかったのかも知れない。

　もしも、この別の世界線での生活が続くのなら。

　早く元いた場所に帰りたいのは山々だが、最悪のケースも考えて置かなくてはならない。俺の言動の変容によって、すでにこの世界には変化が起き始めている。状況をコントロールする為にも、雪乃の連絡先は入手しておくべきなのだ。

「業務連絡以外、連絡しない。不適切な連絡だったら平塚先生に言えばいい。何か問題はあるか？」

「⋯⋯本当に連絡して来ないわよね？　業務連絡にけたメールのやり取りをしようとか考えてない？」

「だからしねぇって⋯⋯。そう感じたら無視してくれりゃいい」

「⋯⋯致し方ないわね」

　本当に渋々と言った様子で、雪乃も携帯を取り出す。

　雪乃は連絡先を交換する事に慣れていないようだし、俺も昔の携帯の操作方法を思い出しながらで少しばかり時間がかかったが、無事お互いの電話番号とメールアドレスを交換する事ができた。

「試しにメール送ってもいいか？」

「構わないけど⋯⋯セクハラと取られないように、十分注意する事ね」

　本当にこいつ、俺の事どう思ってるんだよ⋯⋯。気が抜けながらも俺はごく短い文章を新規メールの画面に打ち込む。

『よろしく』

　画面の中で紙飛行機が飛んでいくと、すぐに雪乃の携帯が鳴る。彼女はメールの文面を、心底興味が無さそうに眺めていた。

　今は、それでいい。

　もしもこの世界が続くとしても、俺の目指すところは変わらない。

　俺は絶対に、雪乃と一緒になる。その未来だけは、絶対に変えてはならないのだから。

お読み頂きありがとうございます。  
中々こういう設定でのタイムリープは珍しいと思います。  
八雪というタグで想像する話とは一味も二味も違うものになるでしょう。  
最後までお付き合い頂けたら幸いです。

由比ヶ浜結衣を諦めない。

　奉仕部の部室に、紅茶の香りはまだない。

　彼女がティーセットをここに持ち込み出したのは、一体いつ頃の事だっただろうか。

「⋯⋯⋯⋯」

　長く続く静寂の中、ページを繰る音だけが時折微かに聞こえてくる。

　今日この日の事を、俺はよく覚えていた。奉仕部が二名体制となって初めての依頼。その依頼はシンプルなようで、その実伏線じみた出来事だった。

　トントン、とこの沈黙がなければ聞き逃してしまいそうなほど弱々しいノックの音が、部室を横切っていく。

「どうぞ」

　雪乃は視線を落としていた本に栞を挟むと静かに、しかし凛とした声で扉の向こうの来訪者に告げる。

「し、失礼しまーす⋯⋯」

　緊張を隠しきれず、少しだけ上擦った声。初めてこの部屋を訪れた彼女は、いきなり「やっはろー！」なんて元気のいい挨拶をするわけもない。

　俺と雪乃の、最初の依頼者。──由比ヶ浜結衣は、いつかと同じように、キョロキョロと奉仕部の部室内で視線を彷徨わせていた。

　今朝方も教室でその姿を見ていたものの、こうして近くで、そして視線を交わす事でようやく再会したのだと実感できる。

　ティーンエイジャーの結衣は、どこからどう見ても可愛らしく素敵な女の子だ。薄く桃色がかった茶髪に、着崩された制服。そしていつものお団子頭を見て、俺は自分でもよく分からない安心感から思わず笑みを浮かべてしまいそうになる。

「な、なんでヒッキーがここにいんのよ⁉︎」

　俺と目が合うなり、急に慌てふためく結衣。思えばその反応から、様々な可能性は推測できたはずなのだ。

「いや、俺はここの部員だし」

　いつかの記憶を呼び起こしながら、可能な限りその言動をトレースする。

　俺が椅子に座ることを勧め、雪乃はフルネームで彼女を名前を言い当てる。何もかもがあの日の通りだ。

　悪態とも冗談ともつかない態度の雪乃と俺の言葉の応酬に、今日はもう一人ゲストを迎えて会話は進んでいく。

　ここでの会話は一字一句として間違いたくなかった。もし何かの間違いであの当時と齟齬があっては、俺の知りたかった事は永遠に知り得る手段がなくなってしまう。

「必ずしもあなたの願いが叶うわけではないけれど、可能な限りのお手伝いはするわ」

　雪乃のその言葉が、結衣の依頼のトリガーだ。本題に入ると結衣は急に慌て出して、早口で言う。

「ああ、あのね、クッキーを⋯⋯」

　思い出したように俺を見て、結衣は言葉を途切れさせる。思えばこれが最初で最大のヒントだ。その答えは、彼女の口から聞かない事には分からない。

「比企谷くん」

「⋯⋯ちょっと飲み物買ってくるわ」

　雪乃に促されるがままに、俺は立ち上がり廊下に出る。バンと扉が閉まる軽い音の後に、俺は室内の声が聞こえるように僅かな隙間を作った。

　まったく、盗み聞きなんて趣味が悪いし、最低な行為の一つだろう。しかしここで得られる事実は、俺にとって非常に重要な事だった。

　俺は廊下の壁に背を預けると、部室内の声に耳を澄ませる。

「それで、要件は？」

「うん⋯⋯。クッキーをね、あげたい人がいるの」

　気付けば俺は、結衣の声を聞くたびに心臓の鼓動を早くさせていた。彼女たちの表情は窺い知れないが、その声から真剣さが伝わってくる。

「あの、さっきそこにいた、ヒッキーなんだけど」

「⋯⋯比企谷くんに？　何故？」

「その⋯⋯ちょっと気になってるっていうか。⋯⋯うん。そんな感じなんだけど⋯⋯」

「由比ヶ浜さん。あなたの為に言うけれど、人を見る目を養った方がいいわよ？」

「え⁉︎　な、なんで？　ヒッキー、結構よくない？」

「⋯⋯正気なの？　全く理解できない価値観ね」

　雪乃の言い草は随分なものだったが、もうそこまで聞ければ十分だ。これで今日の俺の目的は、達成された。

　廊下の壁から背中を離すと、俺は音を立てないように歩き出す。少しだけ、ゆっくりと。そうすればまた彼女たちの会話は、終わっているだろうから。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　家庭科室にはバニラエッセンスの香りで満たされていた。⋯⋯のは数十分前の出来事だ。

　今この場に置いては甘ったるい匂いに焦げ臭さが混じって、何とも食欲をそそるどころか減衰させる香りが漂っている。

「な、なんで⋯⋯？」

　愕然とする結衣の姿は、今の彼女からは想像できないぐらいだ。俺の知る結衣はいつの間にやらお菓子作りが趣味になっていて、今では雪乃と比肩できるほどの腕前だ。最初ってこんなんだったんだなぁ⋯⋯と思うと、時間の流れというのをありありと感じる。

「おい、これマジで食うのかよ」

　俺は朧げな記憶の引き出しを無理やり開いては、あの当時の俺の言いそうな事を重ねていた。

　先程の彼女たちの会話から、結衣が最初に奉仕部に来た時から、俺に恋心の火種のようなものを抱えているのは分かった。俺にクッキーを渡したい、そして仲良くなりたいという結衣の思いを、雪乃は最初から知っていたのだ。

　だからこそあの高校二年の冬、雪乃は結衣に遠慮するような行動を繰り返したのだろう。いや、遠慮なんて言葉では足りない。俺の決断の甘さから、彼女たちに過剰なまでのを強いる事になったのだ。

　何もかもが後悔にまみれているわけじゃない。

　何もかも間違いだったなんて、思うわけもない。

　ただもっと上手くやれるはずだったと、そう思う。

「食べられない原材料は使っていないから問題ないわ。それに私も食べるから大丈夫よ」

　コソッと耳打ちしてくる雪乃に、思わず背中がそってしまいそうになる。油断したところにパーソナルスペースに入られると、それが慣れ親しんだ距離だとしても思わず反応してしまう。

　この繰り返しの世界の生き方は、俺の中でほとんど決まっていた。

　俺は最終的に雪乃と一緒になる。その目的は変わらない。そして俺は雪乃と結衣の関係性も、諦めたくはないのだ。

　結衣の恋が実らずに傷つくことは、この段階で俺が雪乃への気持ちを表明する事で回避とまでは言えないにしても、彼女の傷を最低限にする事ができるだろう。

　しかし、それではダメだ。

　俺が気持ちを明かせば、結衣はあっという間に雪乃との距離を取り、絆は育まれない。雪乃にとっての結衣は⋯⋯結衣にとっての雪乃は、生涯に一人出逢えるかどうかの親友であり、かけがえのない存在だ。

　どのぐらい二人の絆が強いかと言うと、映画のコマーシャルを見てそのうち観に行こうと約束していたのに、結衣に誘われたら俺に断りもなく観に行っちゃうレベル。いざ俺が映画に誘うと「その映画ならもう結衣と観に行ったわ」なんて事後報告されるんだぜ？　いやこれは俺がぞんざいに扱われているだけだな⋯⋯。

「⋯⋯死なないかしら？」

　さっきまでクッキーを見詰めていた目に不安を滲ませて、雪乃が俺を見ている。

　とにかく俺ができる事は、彼女たちが友情を育むのを邪魔しない事だ。基本的には、記憶のある限り元いた世界線での出来事をなぞることになる。その上で、適宜まちがいを修正していく。

　その過程で結衣が俺に恋心を募らせていくのは、自惚れと言われようと分かりきっている事だ。何せあの時も相当に情けない姿を見せたし酷い事をしたというのに、最終的に結衣は俺に惹かれていた。

　故に結衣が傷つかず、雪乃との友情も諦めないのは成り立たない。だからこれは、俺の酷く自己中心的な選択なのかも知れない。あの暗示めいた紙に書かれていた『救え』という言葉への答えとして、間違っている可能性だってある。

　それでも俺はその選択において、迷いはない。結衣と雪乃は、お互いにとって必要な存在であると確信している。

「俺が聞きてぇよ⋯⋯」

　黒焦げのクッキーを見ながら、まだ食べてもいないのに口の中に苦味が広がる。

　ああ、そうだ。あの頃の事を思い出すと、苦かったりしょっぱかったり。

　だから少しでも、俺はその苦味を取り除く。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　それからの日々は、目まぐるしいものだった。

　クラスで三浦に詰問される結衣を雪乃が救うというよりは後々長きに渡る禍根を残し、材木座は相変わらずのクオリティだった。材木座の依頼についてはあの時より酷くこき下ろしておいたが、まぁどうでもいい。

　つづくテニス対決では、戸塚が天使だった。今やアラサーの戸塚は俺より先に結婚して子どもまでいる。無精髭を生やしたイケメンになった戸塚を見た時の俺の絶望と新たな扉が開きそうになる姿を想像してみて欲しい。いやしなくていい。

　そんな繰り返しの日々の中で、あえて変化を与えている事がある。

　あの、事故に纏わる話。

　ことこの話題について俺は避けて動いていた。あの事故で借りがあるから結衣が俺に気を使っているのだと自他ともに欺き、結衣を酷く傷つけてしまった。俺は雪乃は嘘を吐く事をしないと勝手に決めつけ、勝手に失望した。

　思えば加害者だ被害者だという感覚すら、滑稽だ。怪我をしたから俺が被害者という扱いになっただけで、理由はどうあれ俺がした事は自転車という軽車両による進行中車両への進路妨害。物損事故なら俺が加害者になっていた可能性の方が高い。

　ではその変化を与えた結果、どうなるか。

「でさー、このお店行ってみたくって」

　チェーンメールの一件の後。あの時俺は職場見学の折りに、結衣に「事故の事で気を使う必要はない」と言い、傷ついた彼女は奉仕部へ来なくなった。

　それをしなかったこの世界線においては、結衣が部活を休むという事自体が無くなり、俺の知らない状況が始まったのだ。

「そう。またそのうちね」

「えー、それ断る時のやつじゃん！」

　仲良きことは美しきかな。しかし俺には漠然とした不安と、焦燥が常に付き纏っていた。

　一体俺は、いつになったら元の世界線に戻れるのか。もし時間の流量が共有されていて、戻った時には何日も経っていたとしたら？

　焦っても仕方のない事は分かっている。だが毎晩我が子の事を思い出し、出産でやつれた雪乃の姿を思い浮かべていると、会いたい気持ちは日に日に大きくなるばかりだ。

「ねぇヒッキー」

　急に声をかけられて、俺は声のした方へ視線を向ける。

　結衣はグイグイと雪乃の二の腕あたりを引っ張って、僅かな抵抗を見せる彼女を逃がさない。

「ゆきのんがつれないんだけど。なんかいい方法ない？」

　⋯⋯本人の前で聞くことじゃねぇな、それは。

　でもそんな無防備にじゃれつく姿を見れる事だけが、この世界線に来てからの唯一の救いだ。俺が俺についた嘘で傷つけられる事のなかった結衣は、こんなにも無邪気に彼女と戯れる事ができている。

「俺が知るわけねぇだろ⋯⋯」

「そうよ、由比ヶ浜さん。比企谷くんにそんなコミュニケーション能力があれば、こんな所にはいないわ」

「こんな所って言っちゃったしよ⋯⋯。けど見くびってもらっては困るな。ネズミ講の勧誘と堕転へう事に関しては俺の右に出る者はいないぞ」

「そうね。人の足を引っ張ることと他人の不幸が好物のようだしね」

　昔の俺の思考回路を思い出しながら、雪乃との応酬を繰り広げる。そんなやり取りを少し引き気味で見ている結衣の姿が、どこか懐かしい。

　けれど雪乃の一言に、俺は一抹の不安を覚えていた。

『比企谷くんにそんなコミュニケーション能力があれば』

　ありさえすれば、雪乃を遊びに誘えるだろうか？

　答えは否だ。誘ったとしても、まず間違いなく断られる。今の俺への対応を見れば、それは明白だ。それはもしもの時に、かなり困る事になる。

「とりあえずはあれだな、ゴリ押し合掌土下座、三種の神器でなんとか頑張れ」

「土下座は嫌だよ⋯⋯」

「酷い神器もあったものね⋯⋯」

　非難の目を向けられながら、俺はどこ吹く風で腕を組んで鷹揚に頷く。

　結衣ならきっと、ゴリ押しだけで簡単に雪乃は陥落させる事ができるだろう。まったくそういう点は、いつまで経っても結衣には叶わない。

「ねー行こうよー。ね？　いつ行く？」

「由比ヶ浜さん、会話を戻すのはやめてちょうだい。行かないと言っているわけではないでしょう？」

　ほら、この会話の流れならばもう後五分とかからないだろう。

　⋯⋯いいなぁ、JK雪乃とデート⋯⋯。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　不安や杞憂というのは、基本的に大当たりと大外れの二種類しかない。

　今回のケースでいくと、大当たりという事になる。

　週末の土曜日。

　俺と小町は東京わんにゃんショーに出かけ、会場で雪乃に会った。ここで俺が変化を与えたのは、同行する際に結衣とのニアミスを避けた点だ。

　あの時の結衣は俺と雪乃がデートしていると勘違いしていたようだし、折角彼女たちが築き上げてきた関係性に刺激を与える事は避けたかった。

　俺にとっての間違いを、正した結果。

　結衣に奉仕部に戻って来て貰うために、誕生日プレゼントを雪乃と買いに行くというイベントが消失してしまった。それはち、雪ノ下陽乃との初めての邂逅を避けるという事に繋がる。あの日初めて、今では義姉となった陽乃さんに出会ったのだ。

　どんな出会い方をするか分からないという状況は、何としても避けたかった。陽乃さんの行動を読むのは余りにも困難だし、より状況がコントロールしにくくなってしまう。それに何より女子高生の雪乃とデートしたい。したいったらしたい。

「⋯⋯どしたの、そんな深刻な顔して」

　ソファに座ったまま携帯を握り締めて項垂れている俺を見て、小町は心配そうに声をかけてくる。わんにゃんショーで歩き疲れたのか、俺の隣に腰を下ろす動作がいつもより乱雑で、僅かに身体が揺れる。

「まぁ、ちょっとな⋯⋯」

　まさか将来の奥さんをデートに誘うのにどんなメールを送ろうか悩んでいる、などと正直に言えるはずもない。

　多分、余程巧妙にメールを送らないと、俺からのメールは業務連絡として扱われず奉仕部からさよならルートだろう。いや流石に即刻そんな事になるとは思っていないが、結局雪乃に取ってみたら自分目当てに奉仕部に入ってきた輩になってしまう。まあ今この状況においてはそれが真実であるわけだが。

「何、結衣さんにメール？」

「⋯⋯違うけど」

　何故そこで結衣なのだろう。まあ、側から見ていて俺と雪乃は連絡先の交換していないと勝手に思い込んでいても仕方はない。

　俺から「結衣の誕生日プレゼントを買いに行きたいんだけど、付き合ってくれないか」と提案するのも、手の一つではある。しかしそうすると、雪乃からしたら俺が結衣に気があるように映るだろう。それもあまり具合がよろしくない。

　まさか自分の奥さんにメールを送るのがこんなに難しいとは思わなかった。色々拗れすぎだろあいつ⋯⋯。いや、俺もか。

「まあまあ、メールの添削なら任せてよ。気持ち悪いかどうか判定してあげるよ」

「判定項目がおかしいんだよなぁ⋯⋯」

　俺は空っぽのメールの画面を見られないように、スリープボタンを押して画面を消灯させる。すると画面が消えたその瞬間に、ポコンと通知バナーが現れる。差出人の名前を見て、俺は思わず画面を二度見してしまった。

「あれ、ひょっとしてもうメールのやり取りしてる最中だった？」

「いや、してない。アマゾンからだ」

　俺は携帯をポケットにしまうと、トイレに行くふりをしてリビングを出た。トイレに入った瞬間、メールの画面を開くと食い入るようにその文面を目で追う。

『明日の比企谷くんと小町さんの予定を教えなさい』

　無いよ無い！　むしろあっても全部キャンセルするからオールフリー！

　と思わず打ち込んでしまいそうになるが、ここは冷静にならなくてはならない。差出人の名前が『雪ノ下雪乃』と書いてあるのを何度も確かめながら、俺は深呼吸して心を落ち着かせる。

　あの頃の俺なら、どう答えただろう。自分の事だから、こんなどうしようもない事をつらつらと書いたのだろう。

『明日は一日中家に居て十分に休養を取るという予定でいっぱいだ』

　俺は震える指先で紙飛行機のアイコンを押すと、頼りない音を立てて電子手紙は飛んでいく。なんで自分の奥さんにメール送るのに、こんなに緊張してるんだか。

　それにしても、なぜ雪乃は小町に直接しないのだろうか。てっきり川崎大志からの依頼で川なんとかさんの問題を対処した時に、連絡先をやり取りしたのだと思っていたが。

　そんな事を考えていると、またメールの通知バナーが画面に現れる。

『明日の午前十時、千葉駅集合。必ず小町さんも連れてくるように』

　有無を言わさぬメールの内容に、思わず笑みが溢れる。本来俺と雪乃が連絡先を交換したのはもっとずっと後の事だったから、この頃の雪乃とメールをするとこんな感じになるのか。このツンツンしてる感じの文面も、新鮮でいい⋯⋯。

　などと感慨に浸っていると、流石にそのメールのままだと一方的過ぎると思ったのか、すぐに次のメールが届く。

『由比ヶ浜さんへのプレゼントを、一緒に選んで欲しいの。小町さんに』

　こんなメールのやり取りに、あの頃の俺ならなんて返したのだろう。きっと面倒くさがってあの手この手で逃げようとするに違いない。

　しかしまあ、そんな事をしても無駄なのを、今の俺は知っている。

『了解。部長』

　だから俺はそれだけ書いて送ると、そっと携帯をポケットにしまった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　翌日、日曜日。

　雪乃と合流した俺と小町は、電車に揺られ南船橋駅へ向かった。目的の駅に着くとららぽに向かい、そして小町は失踪した。当時の俺は何してくれとんねんと思ったものだが、今の俺なら素直に言える。ありがとう小町。八万ポイント進呈します。

「小町さんが居ないとなると、困ったわね⋯⋯」

　立ち並ぶ店と店の間を歩きながら、雪乃は悩ましげにため息を吐く。

　フェミニンなフレアスカートにカーディガンを合わせた軽やかでお嬢様然とした服装。それにツーテールというまさしく美少女という出立ちの雪乃が眩し過ぎる⋯⋯。特にこの髪型なんて結婚してから一度も見たことがないぐらい久しぶりだ。写真撮りたい。携帯の壁紙にして一生眺めていたい。

「その言い方だと俺がまるで戦力外のように聞こえるんだが⋯⋯」

「その言い方だとまるで自分が有用な人間であるかのように聞こえるのだけど」

　何ともバカにしくさった言い草と視線に、俺は苦笑を浮かべるしかない。まったく、みくびらないで貰いたいものだ。毎年雪乃の誕生日プレゼント選びにゲロ吐くほど悩んでいる俺が戦力外のわけがないだろう。

「とりあえず雑貨店だな。色々置いてあるから、それを見ながら相手の生活スタイルを想像してみて、喜ばれそうな物のジャンルを見つける」

「⋯⋯案外まともな事も言えるのね」

　心底意外そうな視線が、居心地悪いを通り越していっそ気持ちいい。本当に当時の俺、どう思われてたんだろ⋯⋯。

　手近な雑貨店に入ると、雪乃は商品を手に取るわけでもなくひたすらに多種多様な商品たちに視線を送っていた。しかし雪乃から結衣に贈るプレゼントはいいにしても、俺から結衣に贈るプレゼントはどうしたものか。

　あの時はわんにゃんショーで結衣と会った時に、サブレの着けていた首輪が壊れていたから首輪を贈ったのだが、今回はそのきっかけ自体が存在していない。

「由比ヶ浜さんって、どんな生活をしているのかしら⋯⋯」

　その言葉に俺は、顎に手をやり昔の事を思い出す。まだこの時は、雪乃と結衣の関係は深いとは言えない。お互いの家を行き来するようになるのも、まだまだ先の話だ。俺は俺である程度知っている事もあるが、それをらかに出来るわけもない。

「まあ、ゆるふわガーリーでちょっと頭のネジが緩んでそうな生活スタイルなんじゃねぇの」

「言い方に悪意を感じるわね⋯⋯」

　確かに言い方は酷いが、あながち間違った事は言っていない。ルームフレグランスで香りを楽しんだり、ただその空間を彩る為だけにオーナメントを飾るのも、良い意味で緩んでいるからこそだ。頭がガチガチだと、身の回りには実用的でミニマルな物しかないなんてよくある話。レスイズモアとか言い出して断捨離し始めるまである。

　俺の知り得る結衣の生活を思い出していると、思いの他早く彼女へのプレゼントを思い付いた。いや、目に留まった、というのが正しいかも知れない。

「俺はこれにする」

　そう言って手に取ったのは、デフォルメされた犬がプリントされた耐熱ボウル。お菓子を作るのにも料理をするにしても、ボウルは必需品だ。

「流石にそれは、当て擦りのように思われないかしら⋯⋯」

「お前の方こそ由比ヶ浜の事をどう思ってるんだよ⋯⋯」

　半ば引き気味の雪乃に、俺は苦味の走った笑みで応えるしかない。

　だが、彼女は知らないのだから仕方がない。きっと結衣は、犬のプリントが擦り切れるまで、このボウルを使ってくれるだろう。その頃には、とんでもなく腕の良いパティシエールの誕生だ。

「あとはお前の分だな」

「ええ⋯⋯。中々難しいわね」

　頬に手をやり首を傾ける姿は大変に可愛らしい。うっかりキスしてしまいそうになるから、自重して頂きたいものである。

　真剣に悩む雪乃の横顔を見ながら、俺は彼女の選ぶプレゼントを思い描いていた。きっと彼女は、この世界線でも結衣へのプレゼントにエプロンを選ぶのだろう。

　俺の知る結衣は、一度だって違うエプロンを着けた事はないのだから。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　ららぽの長い通路を歩きながら、俺はそろそろかと気を引き締めていた。

　ここから先は、陽乃さんとエンカウントする可能性がぐっと高くなる。陽乃さんと初めて会った場所は大体覚えているのだが、時間配分も寄る店もあの時とは少しばかり変わっている。ひょっとしたら今日遭遇しない可能性だってあるのだ。

　そうなったら、まあ仕方がない。何から何までコントロールできるとは、端から思っていなかった。

　俺と雪乃は適当に服屋の商品を見た後に、いつかのようにキッチン雑貨の店に入っていた。俺から結衣に贈るプレゼントに着想を得たのか、雪乃は先ほどの店よりも本格的なラインナップに目を凝らしている。

「比企谷くん」

　俺も何となしに商品を見ながら歩いていると、不意に声をかけられる。確かこの時、雪乃はエプロンを──。

「こんなのはどうかしら？」

　振り向きざまにずい、と俺の目の前に差し出されたのは、猫耳の生えたミトンだった。パクパクと猫の口を開閉させて、雪乃は俺の様子を窺っている。

　⋯⋯っべー、尊すぎて尊死するところだった。何もかもが同じではない、という事は、こんな風に個人的なサプライズも起こり得るという事なのか。

　しかしここまで来たら、JK雪乃のエプロン姿を見てみたいゾ！　と欲張ってしまうのも仕方ない事だと思う。

「⋯⋯ミトンとかはもう家にあるだろ。エプロンとかならどうだ？」

「確かにそうね」

　エプロンの売り場まで歩くと、雪乃はほとんど迷う事なく黒い薄手のエプロンを手に取る。猫の足跡のイラストがワンポイントで入ったそれを、雪乃は俺が促すまでもなくさっと羽織った。

「どうかしら？」

「いい。とても似合う。すげぇ可愛い」

　本当に、悶絶するぐらい可愛い。のたうち回りながら言わなかっただけ褒めて欲しい。

　コンマ一秒の間も許さず返された答えに、雪乃はポカンと呆気に取られたような表情を浮かべている。たしかこの時も褒めたはずなんだけど、ちょっと反応が大袈裟だったかも知れない。

「⋯⋯けど、由比ヶ浜に似合うかどうかというと、微妙だな」

「そ、そうよね⋯⋯」

　僅かに頬を朱に染めて、雪乃はさっとエプロンを脱ぐと綺麗に畳む。いつかと同じで、商品棚に戻すような事はしない。

　それに少し、安心する。このエプロンが大分くたびれてきて俺が新しい物をプレゼントするまで、大事に使ってたもんな。しかしうちの奥さん、俺に褒められたから即買いとか本当可愛らし過ぎでは？　史上最強ツンデレに素直属性とかカオス過ぎて最早キメラなんですが？

「もっと由比ヶ浜に似合う色とか柄とか、想像して選んでみたらどうだ。普段着てそうな服とかさ」

「⋯⋯比企谷くん。慣れているのね」

　含みのある言い方が、妙にひっかかる。いやこのノウハウ、あなたへのプレゼント選びで培ったものなんですが⋯⋯。

「まあ、妹がいるとな」

　俺がそう誤魔化すと、そうねと言わんばかりに雪乃は小さく頷いた。そして結局手に取ったのは、見覚えのあるピンクのエプロンだ。

「これがいいと思う」

「おお⋯⋯。悪くない」

　努めて大袈裟なリアクションはせず、静かに同意する。俺の反応に少しだけ安心したような表情をして、雪乃は二つのエプロンを胸に抱いてレジに向かう。

　その後ろ姿を見ながら、ふと思いついてしまう。けれどもう手遅れだ。

　ピンク色のエプロンも、試着して貰えばよかった⋯⋯。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「あれー？　雪乃ちゃん？　あ、やっぱり雪乃ちゃんだ」

　いつかのようにゲームセンターに寄ったあと。

　全然陽乃さんに会う気配もないし、そろそろ帰るかと通路をそぞろ歩いていると、不意にその声が耳に届く。

「姉さん⋯⋯」

　出会う場所は微妙に違うにしろ、これで予定調和は完了だ。陽乃さんは同行していた友人らしき人たちに声をかけると、嬉々としてこちらにやってくる。

「こんなところで──あ、デートか。デートだな？　やるじゃん雪乃ちゃん。このこのっ」

「⋯⋯⋯⋯」

　肘で小さく雪乃を突く陽乃さんと、冷め切った表情を浮かべる彼女。あの時は随分居心地の悪い思いをしていたものだが、今この時に限っては安心しているぐらいだ。

　そんな全力不機嫌の雪乃を気遣う様子もなく、陽乃さんは矢継ぎ早に続ける。

「ねぇ、この子は雪乃ちゃんの彼氏？　彼氏なんでしょ？」

「⋯⋯違うわ。ただの同級生よ」

　いえ、将来の旦那です。

　⋯⋯と言うのは心の中だけにして、俺は陽乃さんと雪乃やりとりを見守り続ける。相変わらず雪乃は凄い不機嫌だし怒っているぐらいだというのに、陽乃さんは嗜虐的な笑みを浮かべて楽しそうだ。

「雪乃ちゃんの姉の陽乃です。雪乃ちゃんと仲良くしてあげてね」

「⋯⋯どうも。比企谷です」

「比企谷⋯⋯へぇ」

　その表情を見て、俺はしまったと口を噤んだ。

　あの時と、全く同じ表情。俺の全身を確認するような視線。

　この視線の意味が、事故の後遺症がないかどうかを確認する意図があったとしたら？

　高速で頭の中のパズルが組み上がっていく。

　もうすぐやってくる夏休み。雪乃はほとんど軟禁状態で結衣とのメールはほとんどまともに出来ず、遊びの誘いにも応じる事は無かった。

　恐らく陽乃さんは、このやり取りによって事故で怪我をしたのは俺だと認識した。その俺と雪乃が一緒にいた事が雪ノ下家に伝わり、外部との接触を絶たれていたとは考えられないだろうか。

　少なからず雪乃は、入学式当日の事故にショックを受けていたはずだ。事故の件から接触を避けさせようとするのは、理解できる話だ。

「比企谷くんね。うん、よろしくね」

　にっこりと柔和な笑みを向けられて、俺は間違いに気付く。

　結衣からの口伝だから判然としないが、確か雪乃が連絡を取りづらくなったのは、千葉村から帰った後だったはずだ。総武高校へ戻った俺たちの前に現れたのは、あの時のハイヤーだった。事故の当時から運転手が変わってなければだが、都築と呼ばれたあの運転手から伝わった可能性の方が高いだろう。

「姉さん、もういいかしら。用がないなら私たちはもう行くわ」

「えー、用ならあるに決まってるでしょ？　雪乃ちゃんの彼氏のこと、もっと知りたいなー」

　そこまで言われて、俺は自らの口で否定していなかった事に気付く。

「⋯⋯⋯⋯いや、彼氏とかじゃないですけど」

「んんー？　でも顔にもう付き合ってますって書いてあるけどなー」

　陽乃さんに詰め寄られる度に、胃の中にゴロゴロとした異物感を覚える。おかしい。あの時の俺は、こんな風に詰問されるような事はなかったはずだ。元来行動の読めない陽乃さんだが、この繰り返しの世界線に置いてもまったくその先が読めない。

「いえ、ほんとに付き合ってないです⋯⋯」

　だってもう結婚してるんだもの。しかしだからこそ、俺の態度が雪乃に慣れ過ぎていたのだろう。それを訝しんだ陽乃さんの追撃は、休むことを知らない。

「またまたー。それで？　二人はいつから付き合ってるんですかー？」

　ぐいぐいと身体を押し付けるように詰め寄ってくるその姿は、いつかの光景と同じだ。しかし今回は、陽乃さんの中に確信めいたものが見て取れる。

「姉さん、しつこいわよ。人の話を聞いてちょうだい」

「んー。まあ付き合いたての頃って恥ずかしいから一旦否定したくなっちゃうよねぇ。でもわたし、雪乃ちゃんのお姉ちゃんだよ。嘘は将来の事を考えたらお勧めしないなー」

　試すような口振り、愉悦にまみれた声が不穏に耳朶に響く。⋯⋯やっぱりこの人は苦手だ。今では多少落ち着いたからいいものの、この頃の彼女が一番厄介な手合いだったように思う。

「ねえ、これからお茶しない？　お姉ちゃん、比企谷くんの事もっと知りたいなー、なんて」

「いい加減にして！」

　どこか遠くで爆発が起きたような、重い衝撃が身体を震撼させた。

　今のは一体誰の声だ？　目の前で発せられた言葉に信じられないでいると、近くを通りがかっていた人々まで何事かと俺たちの方を見てくる。見目麗し過ぎる彼女たちに、ねっとりと絡みつくような視線が注がれては、すぐに興味を失ったように剥がれ落ちていく。

　言った本人のはずの雪乃ですらその声の大きさに驚いているようで、はっとして口を押さえた。怒りを静かにしか表現しない彼女にして見れば、ブチ切れたと言っていい程の感情の発露だった。

　十二年も一緒にいる俺ですら、こんな雪乃は初めて見る。一体何が、雪乃にここまでの感情を与えたのだろう。さっきまでのやり取りだって、いつかの会話とそれほど大きな違いはなかったはずだ。

「あ⋯⋯。ご、ごめんね。お姉ちゃん、ちょっとしつこかったかな⋯⋯」

　きっと陽乃さんだって、こんな雪乃を見るのは初めてだったのだろう。俺の記憶の中でもここまで狼狽する陽乃さんなんて、初めてだ。元の世界線ではちょっと申し訳なさそうに謝るだけだったが、今のは本気の謝罪だった。

　何かが少しずつ変わっていく感覚。それがマイナスの感情を伴って現れたという事実に、妙な不安を覚える。

「じゃ、もう行くね。比企谷くん、本当に雪乃ちゃんと付き合うようになったら、お茶しようね」

　さっきまでの殊勝な態度はあっという間にどこかへ押しやったみたいに、陽乃さんは明るくそう言いバイバーイと手を振る。

　お茶、ね⋯⋯。陽乃さんとはお茶どころか、今では盆正月その他彼女の気の向くままに引き摺り出される身にとってみれば、まだ生易しい誘いだ。

「「はぁ⋯⋯」」

　思わず同時にため息をついてしまって、お互いを見る。バッチリ合った目は即座に外され、雪乃はかぶりをふりながらこめかみを押さえた。

「ごめんなさい、急に大きな声を出したりなんかして⋯⋯」

「いや⋯⋯」

　何とも微妙な空気になって、俺たちはただ床を見詰めていた。

　この後に続けるべき台詞を、俺は知っている。

「すげぇな、お前の姉ちゃん」

　俺はあの時よりも、ずっと実感を込めてそう言った。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　翌日の月曜日。

　放課後になり早々に部室へ向かうと、当然のように先に来ていた雪乃と二人、結衣の到着を待っている。今日は彼女の、誕生日なのだ。

　結衣に誕生日プレゼントを渡すに当たってはサプライズでも仕掛けようかとも思ったのだが、今の雪乃とでは上手く連携が取れそうにないのでやめておいた。元の世界線では毎年サプライズをやり過ぎて最終的に今年も何かあるんでしょ？　とバレバレになってしまっていたので、新鮮な結衣の反応を見たくもあったが。

「やっはろー！」

　元気よく扉を開けて、結衣は今日も謎挨拶を雄叫びが如く部室に響かせる。何とも微笑ましい光景だ。

「うす」

「こんにちは」

　結衣の「やっはろー」を十としたら三ぐらいの声量でもって返すと、結衣は何とも機嫌が良さそうに自分の席へと座る。ひょっとしたら教室で、プレゼントの一つでも貰ったのかも知れない。

　あの時結衣はおっかなびっくりと部室の外で部屋の中を窺っていたものだが、今回においてはそれがない。朗らかな表情を浮かべる結衣は、ある意味俺にとっての救いだった。

「由比ヶ浜さん」

　雪乃は読んでいた本に栞を挟むと、殊更丁寧に机に置く。鞄から綺麗にラッピングされたそれを取り出すと、んんっと咳払いしてから雪乃はそれを結衣の目の前に差し出す。

「その⋯⋯。誕生日、プレゼント⋯⋯。いつもお世話⋯⋯はしている気がするけど、お世話になってもいるとも思うから」

「ゆきのん⋯⋯」

　ゴニョゴニョと言い訳めいた言葉と共に差し出されたプレゼントを手渡されると、結衣はそれをギュッと胸に抱き締める。なんの奇のいもない渡し方だったが、雪乃からプレゼントが贈られるというだけで十分にサプライズになっているらしい。

　ふぅ、と息をついて俺は立ち上がると、後ろの机の山に隠したプレゼントを取り出した。さすがにボウルなんて大きな物を教室に持っていくわけにはいかなかったから、朝の内に隠して置いたのだ。

「ほい。おめでとう」

「え⋯⋯ヒッキーも？」

　俺からも贈られるとは思っていなかったのか、結衣は俺と雪乃を交互に見ながら目を白黒させていた。

「あなたね、もうちょっと気の利いた一言でも言い添えれないの？」

「お前の一言は気が利くどころか気を落としにかかってただろうが⋯⋯」

　雪乃にダメ出しを受けながらも、しっかりと結衣は俺からのプレゼントを受け取ってくれる。流石に抱え切れなくなって結衣はその二つのプレゼントを机に置くと、クリスマスに玩具を貰った子どものように目を輝かせていた。

「ね、開けていい？」

「どうぞ」

　雪乃からのプレゼントの包装を剥がすと「おぉっ」と結衣は反応し、続く俺からのプレゼントの正体を知ると「おおぉっ」と更に大袈裟に反応する。

　着けてみるねと言って結衣はエプロンを着ると、やはりそのピンクのエプロンは彼女によく似合っていた。

「さっそく明日何か作ってくるね！」

「いえ待ちなさいそれは私の管理監督下で行って貰う事にするわ」

「えぇ⋯⋯」

　秒で返した雪乃に、結衣は思いっきり引いていた。まあ今の説明では、結衣には伝わらないだろう。

「家庭科室の鍵を借りてあるの。それと、ケーキの材料も準備してあるわ」

「え⋯⋯？」

「自分で自分の誕生日ケーキを作るってのもおかしな話だとは思うが⋯⋯。そのボウル、早速使ってみてくれるか？」

「う、うんっ！」

　結衣はそう言うとガバッと雪乃の抱きつき、感動しきりといった様子で目に涙を浮かべながら彼女に笑いかける。割りかし雑なこの提案も、結衣にとっては思ってもみなかったサプライズ。

　⋯⋯しかしそうは行かない事を、俺は残念ながら知っている。

　ダンダンダン！　と焦ったようなノックの音が、部室に響き渡る。部室の外から聞こえてくるのは、およそ人間のものとは思えない、獣めいたきのみ。

「⋯⋯どうぞ」

　努めて冷静に雪乃は入室を促すと、恐る恐ると言った調子で扉は開けられ、次の瞬間にその獣は突進してきた。

「うぉぉーーーん！　ハチえもーん！」

　まったく、お呼びでないもいい所だ。まあこいつが空気を読んで最高のタイミングで登場したことなんざ、ただの一度もなかったが。

「帰ってくれねぇかなぁ⋯⋯」

　変わっていくもの、変わらないもの。

　それを一つ一つ選び取る事ができたら、どれだけ素晴らしい事だろうか。

　そんなありえない願望を抱きながら、俺は溜息を一つ吐き出すのだった。

お読み頂きありがとうございました。  
少し長い話になりましたが、第二話はいかがでしたでしょうか？  
僅かだったり、大きくだったり変わっていくにつれて、彼も彼女もその反応を変容させていきます。  
原作との違いを確かめながら読むのもまた一興ですが、流石にそれは面倒くさいと思うので単体で楽しんで貰えるように書いているつもりです。  
感想や評価を頂けると（例えそれが悪いものでも）励みになりますので、是非よろしくお願いします！

鶴見留美を救う為に。上

　山滴る、とは俳句に於いての夏の季語だ。

　早いもので、もう夏休み。いつかのように俺たちは千葉村の駐車場に降り立ち、高原の空気を胸いっぱいに吸っていた。

「んーっ、気持ちいーっ」

　結衣は思いっきり伸びをしながら、心底といった調子でそう言う。

　これから今日を含めて三日間、つまり二泊三日をここ千葉村で過ごす事になる。奉仕部の活動としては珍しい宿泊を伴うイベントに、俺の感慨もひとしおだ。

　未だ元の世界線に戻れる気配もないが、この千葉村での出来事をどうするかが、鍵となっている可能性は大いにある。

「うわぁ、涼しいね。八幡」

「おお⋯⋯そうだな」

　高原の涼やかな風に乗って、新緑の香りが鼻腔をくすぐる。戸塚の真似をして伸びをすると、下界の暑さが嘘みたい感じるほど爽やかな風を全身に感じる事ができた。

「⋯⋯すごく肩が凝ったわ」

「ごめんってば、ゆきのん⋯⋯」

「あ、帰りは席変えます？　小町が肩を貸しますよ！」

　千葉村へ向かう道中結衣の枕にされていた雪乃が不貞腐れ、小町がフォローするみたいに言葉を挟み込む。もちろん、この千葉村で過ごすに当たって役者はまだ揃っていない。

「さあ、ここからは歩いて移動だ。荷物を下ろしたまえ」

　俺たちが平塚先生に促されるまま車から荷物を下ろしていると、タイヤノイズを引き連れて一台のワンボックスカーが駐車場に入ってくる。

　俺たちの乗ってきた車の近くにそのワンボックスは停まると、中から見知った顔ぶれがわらわらと降りてくる。

「や、ヒキタニくん」

「⋯⋯葉山」

　それから三浦と海老名さん、ついでに戸部。やはりこの世界線に置いても、この面子は変わらないらしい。そうでなくては、大分困る事になるところだった。

「全員集まったな。それでは移動する」

　颯爽と歩き出した平塚先生に続きながら、みんな口々に「今日って何で集まったんだっけ？」「キャンプ？」「泊まりがけのボランティア活動でしょ？」などと困惑を撒き散らしていた。

「おいおい⋯⋯しっかりしてくれよ。これから君たちには林間学校のサポートスタッフとして働いて貰うんだぞ」

「っべー、タダでキャンプ出来るんじゃなかったん？」

「わたしも優美子からそう聞いてたけど？」

「あーしは戸部からキャンプって⋯⋯戸部？」

「おい⋯⋯最初から説明しておいただろ」

「っべー、俺やらかした系だわ。っべー⋯⋯」

　賑々しい四人を尻目に、雪乃は先頭を歩く平塚先生にそっと疑問を呈する。

「あの、何故葉山くんたちが⋯⋯」

「ん、人手が足りなさそうだったからな。学校の掲示板で募集をかけてみたところ、彼らが名乗りを上げたというわけだ」

　その答えを聞いても、雪乃の表情は芳しくない。当然の反応だろう。この時の雪乃にとっての葉山は、因縁の相手と言ってもいいぐらいの存在だ。

「これもいい機会だ。君たちも別のコミュニティとうまくやる術を身につけた方がいい」

　まったく、平塚先生の提案には頷くしかない。これからずっと先、俺たちは厄介な人たちと関わり続ける事になるのだ。

　黙ってしまった雪乃の隣を歩きながら、俺は懐かしい顔たちを思い出して、一人郷愁に耽るのだった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　小学生たちが全員集まっての集会が終わると、詳細な説明の後にオリエンテーリングが始まる。

　そのゴール地点で弁当や飲み物を配膳すべく、俺たちは森の中で歩みを進めていた。いよいよ俺にとって、二度目の千葉村が始まったのだ。

「頑張れー」

「ゴールで待ってるべー」

　葉山たちは気のいい高校生お兄さんお姉さんよろしく、地図を片手に右往左往する小学生たちにエールを送っている。

　時折木漏れ日を浴びながら、真夏とは思えない快適な道をただ歩く。急な曲線を描く道の先に、いつかの光景が広がっていた。

「⋯⋯⋯⋯」

　小学生の集団の中でも一際目立つ女子五人組。

　かしましいその輪から、一人だけ外れた少女──鶴見留美は俺の記憶のまま、孤独を背負い歩いていた。

「あのー、ここってどう行けばいいと思いますかぁ？」

　いつかのようにそのグループの女の子たちは積極的に葉山に話しかけてくる。一緒になって歩きながらテレビや芸能人の話、はたまた中学校の話などと、コミュニケーションに長けた子たちの集団よろしく葉山たちとの会話は弾み続けていた。

「⋯⋯⋯⋯」

　その集団から二歩ほど遅れ、一切会話に入らない留美を見て、雪乃は小さな溜息を吐く。その溜息が今に向けられたものなのか、過去の自分に向けられたものなのかは分からない。

　留美が黙っていても、残る四人は気にかけもしない。もし気にするとしたら時折彼女を振り返って、クスクスと耳にまとわりつくような忍び笑いを漏らす時だけだ。

　俺がこの千葉村において達成すべき目標は大きく三つ。その内の最たるものは、鶴見留美を救うことだ。まったく救うだなんて、自分でも傲慢だとは思う。

「チェックポイント、見つかった？」

　俺の記憶よりもずっと優しく、そして残酷に葉山は留美に話しかける。言うまでもない、公平性という悪手だった。

「⋯⋯いいえ」

「そっか、じゃあみんなで探そう。名前は？」

「鶴見、留美⋯⋯」

「留美ちゃんか。俺は葉山隼人。よろしくね」

　たったそれだけの会話だというのに、かしましかった四人の会話は完全に停止している。

　集団の中にいながら排斥するという絶妙なバランスが崩されようとしている事への不安と、緊張感。しかもそれは、さっきまで気を許しお喋りに興じていたイケメンのお兄さんによってもたらされようとしている。

「⋯⋯あれ、どう思う？」

　葉山たちと距離を取りながら後ろを歩いていた俺は、隣を歩く雪乃にねる。

「⋯⋯まあ、どこの小学校でもある事なんでしょうね」

　苦り切った表情で言う雪乃の声には、嫌悪のようなものすら聞いて取れる。

「くだらないわ」

　空気を読む、相手の意見に共感あるいは隷属し、誰かを貶めることで自分の立ち位置を固め、得られる束の間の安心感、歪んだ集団への所属欲求。

　中には社会生活に欠かせない要素であろうと、雪乃は「くだらない」と切って捨てる。それでこそ、この当時の雪乃だ。

「ああ、くだらない」

　俺は深く頷き、同意を返す。

　空を仰ぎ見ながら歩みを進めると、パラパラと降り注ぐような木漏れ日が眼を焼いた。

「雪ノ下」

　俺が呼ぶと、雪乃は返事をするでもなく怪訝そうに俺の顔を見た。後ろを振り返り、小声で話せば会話が聞き取れられないぐらいの距離が空いているのを確認すると、俺は少しだけ雪乃の耳元に口を寄せて言う。

「俺に協力してくれ」

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　オリエンテーリングのゴール地点につくと、俺たちは早速割り振られた業務にあたり、方々へ展開していた。

　ひとまずの俺の仕事、というか男手の主な仕事は弁当の配膳準備だ。段ボールに入った弁当たちを、えっちらおっちらと車のトランクから下ろしていく。しかしそんな作業も、あっという間に終わってしまう。

「なあ、葉山」

　葉山が一人でいる所を見計らって、俺は声をかけた。俺の方から声をかけるのが余程珍しいのか、少しだけ眉を上げた後に爽やかな笑みを浮かべる。

「どうした」

「ここに来る時に会った子たち、いただろ」

「ああ」

　俺が何を言いたいのか分からない、という顔で葉山は頷きを返す。しかし俺の表情からそれがあまりいい話題ではないというのは分かったらしい。

「休憩しがてら、話を聞くよ」

　そう言うと葉山は親指で炊事場の端を指す。確かにこんな誰が聞いているかも知れない場所、それにいくら平地より涼しいとは言え真夏の太陽の下でする話じゃない。

　俺たちは炊事場の端まで移動すると、そこに置かれたウッドベンチに腰掛ける。じっとりとかいた汗をタオルで拭うと、夏の匂いがした。

「一人だけ、除け者にされた子がいたろ」

「⋯⋯ああ」

　葉山の事だから除け者という表現にひっかかるのだろう。返事をするのに僅かな間を取った後、控えめに頷く。

「あの子に話しかけるのは、やめた方がいい」

「どうして君はそう思うんだ？」

　努めてフラットな声色で、葉山は俺に問いかける。俺の明確な否定に苛立つ様子も見せないとは、やはり流石葉山と言わざるを得ない。

「北風と太陽だよ」

　俺の回りくどい言い方でも、葉山はある程度の理解に至ったらしい。興味深そうな目で、俺の言葉の続きを促す。

「あの状態から留美に話しても、逆効果だと思う。それよりも残りの四人の方を気にかけてやるんだ」

「気にかけてやるだけか？　俺はもっと⋯⋯」

「いや、気にして声をかけるだけでいいだろ。高校生のお兄さんお姉さんが気にかけてくれているって分かったら、あの子たちも体面を気にして留美と普通に喋るようになるかも知れない。そこは自浄作用に期待だな」

「⋯⋯なるほどな」

　葉山の好きそうなキーワードを織り交ぜて説明すると、思ったよりもすんなりと俺の意見は聞き入れられる。こういう時に頭の回転の速いやつは助かる。

　俺にとって千葉村での留美の一件は、ずっと心でっていた事だった。

　あの時俺は葉山たちに悪役を押し付け、留美を取り巻く人間関係を崩壊させた。そして結果として、留美はそのまま孤独の道の真っ只中を歩いていく事になったのだ。

　クリスマスのイベントの時に見た留美の姿を、俺は忘れる事が出来ない。最終的にはイベントを通して周りに溶け込んでいったが、それまでの孤独が消える訳ではない。

　孤独が悪いことだなんて、今更言うつもりはない。それを決められるのは、孤独を感じている本人だけだ。

　だけど俺は、やはりどこかでまちがえた。

　その思いだけが今でもぐるぐると、心の一番奥底を回り続けている。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　キャンプといえばカレー。カレーといえばスパイスカレーだ。

　追い求めるはターメリック、コリアンダー、クミンの黄金比。カルダモンは欠かせないし、フェンネルも多めに入れていい。だけどクローブ、あいつはダメだ。あいつの香りは強烈かつ個性的だからな⋯⋯。

　などと雪乃が妊娠中に料理スキルをメキメキ上げた俺のスパイスカレー知識と秘伝のレシピをひけらかしたい所だったが、キャンプでのカレーといえばルーカレーが基本である。

「どう、うまくいってる？」

　件の女子五人組の班。彼女たちが晩御飯となるカレーを調理している所に、葉山は俺の提案通りに声をかける。

　途端に沸き立つ四人と、覚めた表情をしたままの少女が一人。すでに鍋は火にかかっており、手持ち無沙汰な様子だ。

「⋯⋯あんな感じだ。できるか？」

　俺は隣でその様子を見ていた雪乃にそう声をかける。先に葉山が声をかければ、多少に参考になるはずだ。

「どうかしら⋯⋯。あまり自信はないわね」

　普段の自信満々な態度とは打って変わって、小学生たちの反応を見る雪乃は物憂げだ。無理もない。これから葉山が去ったら、今度は雪乃の出番だ。あんな賑やかな集団は、例え小学生が相手でも苦手意識が働くだろう。

　しかし、これは今回の俺の作戦において非常に重要な意味を持つ。例えキャラじゃなくても、実行に移してもらわなければいけない。

「頼んだぞ」

　やがて話を終えた葉山がその場を離れると、四人はキャアキャアはしゃぎ、ひとしきり盛り上がると留美の方を見る。ひそひそと言葉を交わし、侮蔑混じりの密やかな笑みが交換されていく。

　雪乃は「はぁ」と小さな溜息を一つつくと、彼女たちの方へ向かっていった。俺は雪乃が動き出すと同時に、少し坂を登った所に移動する。様子を見る為と、留美を待ち受ける為だ。

「何か困っている事はない？」

　雪乃に声をかけられ、四人は一瞬で会話を止め、惚けた様子で彼女を見た。無理もない。イケメンお兄さんに声をかけられて盛り上がっていたら、今度はまるで雑誌からモデルが出てきたみたいな美人のお姉さんに声をかけられたのだから。

　というか実際雪乃は大学の時、芸能事務所からスカウト受けてたなぁ⋯⋯。事務所を三つも断るやつなんて、俺は雪乃以外知らない。やはり俺の奥さんは美人過ぎでは？　めっちゃ好き。

「あのっ、隠し味とか入れてみたいかなって思ってたんですけど」

　フリーズが解けた四人は、口々に料理について雪乃に相談をし始める。

　これで彼女たちのグループの立ち位置は、確固たるものになった。美男美女の高校生たちにも一目置かれる、カーストトップグループの完成だ。事実他のグループの小学生たちも、チラチラと雪乃たちの様子を窺っていた。

　そんな賑やかな輪の中から、そろりと抜け出す人影が一つ。いつかのように俺の佇んでいるすぐ近く、視界にギリギリ入るぐらいの所で留美は立ち止まりゴミ集積場の柵に背中を預けた。

「楽しんでるか？」

　急に俺に話しかけられて驚いたのか、留美は目を見開いてこちらを見ると、すぐに地面へと視線を戻した。

「楽しそうに見える？」

「いや、見えないな」

　少しだけ馬鹿にしてるようなニュアンスを混ぜた声で、留美は反問する。何も本気で聞いているわけがない。留美の本心に近づけるような会話であれば、何でもよかった。

「比企谷八幡だ」

　俺が名乗ると、留美は話しかけた時と同じように驚いた顔を見せる。じっと待っていると、留美も何を求められているか分かったようだ。

「⋯⋯鶴見留美」

「それでこいつが由比ヶ浜だ」

　俺と留美が話をしているのを見て何事かとこちらに向かってくる結衣の名前を紹介すると、彼女はひらひらと手を振る。

「由比ヶ浜結衣です。よろしくね、留美ちゃん」

「ん⋯⋯」

　留美が静かに頷き、それっきり会話は消え失せる。何か言おうとした結衣に俺はかぶりを振ってそれを止めると、再び留美に問いかけた。

「一人が好きなのか？」

「別に⋯⋯。でも一人でいるのも仕方ないかなって思う」

　そう言った留美の隣に、結衣はしゃがみ込んだ。留美に相対するわけでもなく、ただぼんやりと彼女と同じ方向を見る。

「どういう事か、聞かせてもらってもいい？」

　視線を交わすこともなくそう言う結衣は、無理に聞き出す意図はないとその態度で語っていた。やはり結衣は、この頃から結衣だ。底抜けに明るく、時に無遠慮で、そして誰よりも大人だった。

「⋯⋯前に、誰かをハブにして、話をしないっていうの、やってたの。そのうちちゃんと喋るようになって、また違う誰かが標的になって」

　そこで言葉を切ると、留美は小学生らしからぬ重々しい溜息を吐いた。

　孤独を良いと感じるか悪いと感じるかは、孤独を感じている本人が決める事だ。留美がそのどちらを取るかなんて、聞くまでもない話だった。

「私、そのハブにされてた子と色々喋っちゃったんだ。どうせすぐに終わるブームみたいなものだったし。⋯⋯そうしたら、今度は私の番になったっていう、ただそれだけ」

　ただそれだけ。本当にただそれだけであるならば、彼女は何故そんな悲嘆に暮れた表情をする必要があっただろうか。

　炊事場から聞こえてくる、非日常を彩る賑やかな声。大きな波のようなその声が音を小さくすると、結衣はポツリと呟いた。

「優しいね、留美ちゃんは」

　正しく彼女の方を見て、微笑む結衣。

　その哀切に満ちた表情を、俺は忘れられそうにない。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　夜の帳が下りてしばしの事。

　俺たちは自炊したカレーを食べ終え、小町の淹れてくれた紅茶を啜っていた。誰に言われるでもなく率先して紅茶を淹れてくれる小町はやはり世界の妹だ。

「今頃、修学旅行の夜みたいな会話をしているのかな」

　昼間の賑々しい小学生たちを思い浮かべているのか、どこか遠くの出来事を語るみたいに葉山が言う。

「大丈夫かなぁ⋯⋯」

　その言葉の先を引き継ぐように、結衣が密やかに声を出す。それは恐らく俺に向けられたものだったように思うが、それに反応したのは平塚先生だった。

「ふむ、何か心配事かね」

「まあ、ちょっと⋯⋯。一人、孤立してしまった生徒がいたので」

「ねー、可哀想」

　三浦はそう言うけれど、どこまでが本心なのか計り知れない。元来の性格がオカンだからそれなりに心配しているのかも知れないが、何せハブられたのならまた新しく友達を作ればいいとか簡単に言ってしまうような人間だ。それほど重大視しているようには見えない。

「それで、君たちはそれを見た上でどうしたい？」

　平塚先生の問いかけに、皆一様に黙り込む。

　この場で、どれだけ留美の問題に積極的に関わっていこうとする者がいるだろうか。

　その行動には責任が伴い、それでも彼女を救うと覚悟を決めている者。そこまで強い意思がある者は、この場では恐らく一人しかいないだろう。

「俺は、助けたいと思ってます」

　不退転の意思を込めたその表明に、誰もが俺の方を見る。心配そうに、あるいは何を言っているんだという目で。

「ほう⋯⋯」

　ただ一人だけフラットな視線を送ってくるのは、平塚先生だ。腕を組み、ただ教師然と目をめる。

「何故君はそう思う？」

「その生徒⋯⋯鶴見留美と話をして、一人でいる理由を聞いたからです」

「そうか⋯⋯。差し支えなければ、聞かせてくれるか？」

　留美の個人的な話になるから、全員にその話を共有するのは若干の躊躇いがある。しかし、この場にいる人間の手助けが必要なのも確かだった。

　俺が端的に留美が置かれている状況を説明すると、皆が一様に口を噤む。きっと誰もが、どこかで見聞きした、あるいは携わった経験のある事だったのだろう。

「それで、その生徒には助けを求められているのかね？」

　平塚先生は腕を組み直すと、真っ直ぐな目で俺を見据えた。隣に座った戸塚が、横から心配そうな視線を送ってくる。

「いいえ。でも後悔している様子でした」

「⋯⋯うん。留美ちゃん、ちょっと諦めているみたいだった。だから本人から助けて欲しいなんて、言い出せないんじゃないかな⋯⋯」

　結衣の補足に、再びその場に沈黙が流れる。さわさわと高原の緑が擦れ合う音だけが、静寂をかき消していく。

「比企谷の結論に反対の者はいるかね？」

　平塚先生が反応を見るようにぐるりとその場にいる全員の顔を見ていく。幸いな事に、俺が言い出した事に否定的な人間はいないようだった。いや、言い出せる雰囲気ではないというのが正解かも知れないが。

「よろしい。ではどうすべきか、議論したまえ。私は寝る」

　平塚先生はふわと欠伸を噛み殺して伸びをすると、その場を後にする。残された俺たちの間に再び沈黙が訪れると、小町が心配そうに言う。

「お兄ちゃん⋯⋯。助けるって言ってたけど、具体的に何か考えてるの？」

「ああ」

　即答すると、テーブルを囲んだ全員の耳目が俺に集まる。少し間を置いてから、俺はその作戦を説明する。

「雪ノ下と葉山には少し話をしたが⋯⋯。留美以外の四人の子たちを、気にかけてやって欲しい。少しに見えるぐらいでもいいと思う」

「それで、どういう効果があるの？」

　戸塚が首を傾げて、素直に疑問を呈する。俺の説明は、葉山にしたそれと変わる事はない。

「高校生のお兄さんお姉さんが、自分たちを特別に気にかけてくれていると、彼女たちは認識する。必然的に周りから目を向けられる事も多くなるだろうし、ちゃんとしなきゃって意識が働くはずだ。自然と留美とも話すようになるかも知れない」

「いや、無理っしょ」

　即座に切って捨てたのは、あーしさんこと三浦だ。まあ、彼女ならばそう言うだろう。

「これでいいんだって思って、調子乗るだけじゃん」

「あー⋯⋯まあそう取られるかもね」

「だべ。期待薄じゃね？」

　三浦に同調する海老名さんに、即座にのっかる戸部。相変わらず戸部は戸部だった。

「そうかもな⋯⋯。けどもし駄目でも、俺に作戦がある」

　勿論こんな小細工一つで解決するとは端から考えてはいない。彼女たちの拘泥した状況に、自浄作用などもう残ってなどいないだろう。

「作戦って？」

　結衣の続きを促す声に、俺は口を引き結ぶ。

「⋯⋯それはまあ、駄目だったらの話だ。リミットは明日の夕方。それで何も変わらなければその時に話すから、協力して欲しい」

　そう言って俺は手を膝を置いて、机につきそうになるぐらい深く頭を下げた。顔を上げると、皆が一様に唖然とした顔を浮かべている。

「一つだけ聞いていい？」

　僅かな沈黙の後に口を開いたのは、意外な事に海老名さんだった。

「ヒキタニくんは、どうしてそこまでするの？」

　海老名さんが疑問に思うのは、当然の事だ。なぜ会ったばかりの少女に対してそこまで干渉しようとするのか、側から見ていて意味が分からないだろう。

「あの子を救う事が、俺を救う事にもなるから」

　その俺の答えの真意を想像できた者は、この場には誰一人としていないだろう。普段の俺の様子から勝手に過去と現在を結びつけて、みんなそれぞれ納得したような表情を浮かべていた。

「⋯⋯そろそろ部屋に戻ろうか。少し冷えてきた」

　繰り返し訪れる沈黙に耐えかねたかのように、葉山がそう声をかける。

　各々が小さな声で同意を返すと、テーブルの片付けに取り掛かった。

　俺が何故、そこまでするのか。まったく、酷い動機もあったものだと思う。

　何もかも全て、自分の為。俺の後悔をかき消し、雪乃と我が子の待つあの世界線に戻れる可能性が僅かでもあるなら、俺は何だってする。

　ただそれだけなのだから。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　荷物を置く為に立ち寄っただけだったバンガローに戻ると、俺たちは順番に風呂に入った。

　またも着替えの途中を戸塚に見られる事になったが、まあそれはどうでもいい事だ。

「いいお湯だったね」

　最後に風呂に入っていた戸塚は戻ってくるなりそう言うと、敷いてあった布団に座り込んだ。

　まだ少し濡れている髪をしっかりとタオルで拭き取ると、ドライヤーで髪を乾かし始める。しっかし風呂上がりの戸塚、いい匂いがするなぁ⋯⋯。

「僕、もう大丈夫だけど⋯⋯」

「ああ、じゃあそろそろ寝るか」

　髪を乾かし終わった戸塚がそう言うと、葉山がそう返事をする。既に布団は引いてあるから、身の回りを少し片せばもう寝る準備は完了だ。

　パチッ、と古臭い型の照明のスイッチを切ると、裸電球は沈黙する。

「ちょーちょーこれ、なんか修学旅行の夜みたいじゃね？」

「ああ、そうかもな」

　浮き足立つ戸部の言葉に、葉山は眠気を隠そうともせず適当に返す。

「⋯⋯好きな人の話しようぜ」

「嫌だよ」

　やれやれ、と俺は誰にも聞こえないように小さく溜息を吐いた。やはりこの世界線でも、この話題になるのか。まあ戸部が戸部である限り、変わりようもないのだろう。

　戸塚はいないと答え、戸部が海老名さんの事を気になっている、と吐露した後は、必然的に葉山の番だ。

「隼人くんは？」

「俺は⋯⋯いや、やめておく」

「えー、そりゃないべー。俺言ったんだし」

　今のはお前が言いたくて言っただけだろ⋯⋯と心中突っ込みながら葉山の言葉を待つ。隣で戸塚も、息を殺しているかのように沈黙を守っていた。

「言わないって」

「いやいや、隼人くんらしくないべー。フェアじゃないっしょ」

「⋯⋯⋯⋯」

「イニシャルだけでいいから！」

　食い下がる戸部に、葉山はわざとらしく溜息を漏らしてみせる。僅かな間の後、静かに言う。

「⋯⋯、Y」

「え、Yって⋯⋯マジ？」

「もういいだろ、寝よう」

「いやいや、まだヒキタニくんの聞いてないっしょ」

「⋯⋯は？」

　ちょっと待てよ⋯⋯。俺の記憶の限りでは、こんな下りはなかったはずだ。

「いるんしょ？　好きな子」

「⋯⋯ちょっと興味があるな」

　戸部の一言に葉山が乗っかってくると、薄闇の中でこちらを見てくる戸塚と目が合った。いや、そんな目で見られても⋯⋯。

「イニシャルでいいから」

　先ほどと同じ誘い文句で、戸部は何とか答えを引き出そうとしてくる。まあ、この場で言ってしまったとしても、大きな問題はあるまい。それにさっさと寝てもらわないと、俺が困る。

「イニシャルは⋯⋯、Y」

「えっ」

　戸部は驚きの声を上げ、視界の端で戸塚の目が見開かれるのが分かった。そりゃまあ、そんな反応になるだろう。

「ひょっとして⋯⋯同じ相手とか？」

「ないな」

「ないよ」

　戸部の推測を、俺と葉山はほとんど同時に否定する。

　葉山の方から俺の事は分からないだろうが、俺は葉山の答えを知っていた。何をもって葉山は即座に否定したのかは分からないが、俺の方は断言できる。

「まあ、イニシャルがYって結構いるしなー」

　そう言う戸部に、俺は彼女たちの名前を思い浮かべる。雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、三浦優美子、雪ノ下陽乃──。

　あとはYoshiteru Zaimokuzaなんて名前もあるが、そんな事を言い出しても海老名さんしか喜ばないからやめておこう。いや、海老名さんでさえ喜ばないな⋯⋯。

「はい、言ったぞ。もう寝ようぜ」

「だな。流石に眠い」

　俺の提案に葉山が同調すると、ようやく静かな時間が訪れる。

　余程疲れていたのか、すぅすぅと幾つかの寝息が重なるまでそれほど時間はかからなかった。

　俺は勿論、目が冴えて眠れなかったし、眠るつもりもなかった。この日の夜の出来事を覚えていれば、寝られるはずがない。

「⋯⋯⋯⋯」

　俺は寝ている戸塚たちを起こさないように、抜き足差し足でバンガローを出た。

　目指すは林の方角。そこに行けば、あの時と同じで居場所をなくした彼女と、逢えるはずだ。

　しかし俺の記憶の中にある場所に辿り着いても、雪乃の姿は無かった。

　記憶違いかと思ってぐるぐると辺りを探し歩いてみたものの、いっかなその姿を見つける事ができない。

　おいおい、マジかよ⋯⋯。せっかく雪乃と二人きりになれるチャンスだったのに。しかも合宿の夜にとか、レア中のレアだぞ。

　諦めきれずに俺は施設の敷地内をあても無く歩いていく。高原の夜は季節が一つ先に進んだかのように肌寒い。上着でも持ってきておいた方がよかったと、随分と歩みを進めてしまってから考える。

　やがて視界の大部分を占めていた木々はまばらになっていき、川のせせらぎが聞こえてきた。開けた場所に出ると、川が見えてくる。そしてそのりで座り込む二人の少女の姿も。

　なるほどな、と俺はひとりごちる。

　俺が言動を変容させた所為で、夕食の後に起きるはずだった三浦と雪乃の口論が発生していない。その変化が故に、バンガローに戻った後に三浦と口論する場面もまた、訪れなかったのだろう。

「⋯⋯よお」

「え⋯⋯。あ、ヒッキー」

「比企谷くん⋯⋯」

　驚かせないようにわざと足音を立てながら近づき声をかけると、二人は同時に振り返る。

　月光を反射する川面に照らされた雪乃と結衣の顔は、この世のものとは思えないほど静謐な美しさを湛えていた。彼女たちの空間を壊してしまった自分が大罪人に感じるほどに、それは神秘的で何物にも替え難い光景だった。

「⋯⋯何してんだよ、こんな時間に」

「ヒッキーこそ、どうしたの？」

「なんか、寝付けなくてな⋯⋯」

　座るのに丁度いい石を見つけると、俺も彼女たちの目線の高さに合うように腰掛ける。

「あたしたちも、そんなとこ」

　ね、と結衣が視線を向けると、雪乃は小さく頷いた。

「なに話してたんだ？」

「んー⋯⋯。恋バナ？」

　結衣のその一言に、どきりと心臓が跳ねる。それを聞いた雪乃も、否定をしない。

「男子の部屋は、どんな事話してたの？」

「あー⋯⋯、まあ似たようなもんだな」

　俺の答えに「ふーん」と相槌を返すだけで、結衣は追及することもなかった。まあ聞いて答えられてしまったら、今度は自分たちの事も喋らなければいけなくなるから、当然かも知れない。

　それっきり会話は途切れ、川のせせらぎだけが耳に届く。川面は月明かりを受けてキラキラと輝き、まるで地上を流れる天の川のようだった。

「比企谷くん」

　長い沈黙を破ったのは、意外にも雪乃だった。彼女は俺と目が合って声が届いているのを確認すると、青白く光る川面を見ながら話し始める。

「本当にあなたのやり方で、解決できると思ってる？」

「⋯⋯まあ、期待は薄いな」

「だったら何故⋯⋯」

　思わずと言った調子で雪乃の声音が厳しくなると、それに気付いたのか彼女は言葉を飲み込んだ。その姿を、結衣は心配そうに見守っている。

「⋯⋯ゆきのん、昔になにかあった？」

　遠慮がちにかけられる声に、今の雪乃は何と返すのだろうか。固唾を飲んで見守っていると、彼女は訥々と語りだす。

「⋯⋯昔、ちょっとね。似たような事があって」

　それを語っていいのか確かめるように、雪乃は窺うように結衣の目を見る。彼女はゆっくりした動きで、続きを促すように首を縦に振った。

「その時に、助けてくれようとした人はいたわ。⋯⋯でも駄目だった。余計に拗れて、訳がわからないぐらいに複雑になって、どうにもならなかった」

　こんな事を話すのは、雪乃にとって辛い事だと思う。思い出せば思い出すほど古傷を開くようなものだし、友だちだからと言って積極的に知っていて欲しい事でもないはずだ。相手が結衣ならば、特に。

　それでも雪乃は自分の言葉で、ただ真っ直ぐに結衣に伝えようとしている。結衣に心の一部を、明け渡そうとしているのだ。

「⋯⋯ごめんなさい。こんな話、聞きたくないわよね」

「ううん、そんな事ない」

　大きくかぶりを振ると、結衣ははっきりした口調でそう言った。浮かべた微笑みは傾慕の想いに満ちていて、どこか嬉しそうだった。

「ゆきのんがちゃんと話してくれて嬉しい。なんか、すっごく」

　すん、と僅かな音がして、結衣が僅かに目を潤ませているのが分かった。その光景に、俺は酷く安心する。彼女たちの友情は、既に確たる形を持っている。

「留美ちゃんの為に、できる事はやってこうよ。それにもし駄目でも、ヒッキーには奥の手があるんでしょ？」

「⋯⋯ああ」

　頷く俺を認めると、結衣は「ね」と小さく首を傾げ、雪乃の手を握る。

「ええ、私たちにできることなら」

　結衣の手を握り返す雪乃を見て、俺は二人に聞こえないように深く息を吐いた。

　きっと、もう大丈夫だ。

　青白い月明かりの下で微笑み合う彼女たちを見ながら、俺は強くそう思った。

お読み頂きありがとうございます。  
千葉村編前編はいかがだったでしょうか。  
後編に向けた仕込みがどのような料理に変わるのか、楽しみにして頂けたらこれ幸いです。  
  
頂いた感想は漏れなく読ませて頂いています。ありがとうございます。

鶴見留美を救う為に。下

　千葉村を訪れて、二日目の朝。

　以前の俺は思いっきり寝坊してしまっていたが、今回は当然そんな事をしている訳にはいかない。戸塚たちが起きるのとほとんど同時に目覚めると、早々にビジターハウスに向かった。

　食堂に入ると、頭の割れそうなほどの大音声に思わず耳を塞ぎたくなる。朝っぱらだというのに、小学生たちのテンションはすでに天井に近い。たしか今日は夜の肝試しまで自由行動だから、その予定でも話し合っているのだろう。

「朝食は向こうでもらうみたいだね」

　すぐ近くを歩いていた戸塚が、カウンターを指差しながら言う。朝食は食堂を利用するから、特に俺たちに割り振られた仕事はない。

　俺は配膳を待つ列に並ぶと、ぐるりと食堂を見回した。雪乃と結衣の姿を探すと、すぐに目に留まる。元々その恵まれた容姿で人目につきやすい上に、小学生の集団の中だとより見つけやすい。

「どうしたの、八幡」

「いや⋯⋯」

　雪乃たちの方を気にしすぎて立ち止まってしまっていた俺に、戸塚は疑問符を浮かべながら首を傾げる。

　雪乃と結衣は約束通りに例の四人の女の子と何事かを喋り、彼女たちの笑顔からその話が盛り上がっている事が見てとれた。雪乃の笑顔はまだぎこちなかったが、留美も一応といった様子でその場にいるのだから、仕方がないかも知れない。

　留美の気持ちが分かるからこそ、雪乃に頼んだ事はある意味残酷な側面を持つ。それが俺の立てた筋書きに必要な事だとしても、胸はシクシクと痛んだ。

「八幡、大丈夫？」

「え⋯⋯。ああ、すまん、ボケっとしてた」

　ふと前を見ると、列はもう随分と前の方に進んでいる。気付けば戸塚の声かけに対して、俺は気もそぞろな答えしか返せていなかった。

「寝不足か？」

　俺の後ろに並んでいた葉山は、眠気の一つだって残していない爽やかな声でそう聞いてくる。

「まあ、少しな」

「⋯⋯昨日の晩、どこに行ってたんだ？」

　戸塚には聞こえないほどの小さな声で、葉山は俺に問う。こいつ、ひょっとしたらとは思っていたが起きていたのか⋯⋯。

「別に。寝付けなかったから散歩してただけだ」

「随分長いこと散歩してたんだな」

　葉山の目を見ると、俺の瞳の奥を読み取ろうとする視線が待ち構えている。

「⋯⋯何が言いたい」

「別に、ただの感想だよ」

　はっ、と短く息を吐き出して小さくかぶりを振ると、葉山のとの会話を打ち切る。

　こいつとは後々長い付き合いになるが、やっぱりこういう部分はいけすかない。

　お前なんか一生陽乃さんに振り回されてろ、バーカ。

　俺は俺にしか理解できない悪態を心の中でつくと、朝食の載ったトレイを受け取った。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　朝食を摂り終わった後の俺たちの仕事は、もっぱら肉体労働だった。

　キャンプファイヤーの準備の為に薪を割り、それをひらすらに積み上げていく。終わった頃には汗だくだ。だから当然、汗を流さなくてはならない。

「⋯⋯⋯⋯」

　歓声と水飛沫を上げ、水遊びに興じる結衣と小町。昨晩訪れた川辺で、俺は仁王立ちでその光景を眺めている。

　俺がこの千葉村において達成すべき目標は大きく三つ。その内の、二つ目。

　女子高生の雪乃とキャッキャうふふと水遊びしたい！（ドン！）

　いやだってJK雪乃の水着姿なんて二度と見れないだろうし？　俺が過去に千葉村で過ごした時は水着を持ってこれなかった所為で、そもそもそんな選択肢すら存在していなかった。これを後悔と言わずして何を後悔と言うのか。

「あれ、お兄ちゃん」

「おう」

　小町に声をかけられると、俺は履き替えたサンダルでじゃぶじゃぶと川の中に入っていく。

「いつの間に水着なんて持ってきてたの？　小町が準備した時には⋯⋯」

「いや、たまたまバッグに入っててな」

　勿論ばっちり準備しておいたのだが、それは俺だけが知っていればいい話だ。そんな俺の姿を、少し引き気味で眺める視線が一つ。

「⋯⋯ヒッキー、水着似合わない」

「余計なお世話だ」

　そう言う結衣は⋯⋯お世辞でも何でもなく、その水着は良く似合っていた。

　ブルーのビキニ姿は、あの頃と変わらない輝きを纏い、一瞬で視線と意識を奪う。今も昔も変わらないその抜群のプロポーションは、いつまで経っても見慣れることがない。

「⋯⋯⋯⋯ヒッキー、見過ぎだし」

　そう言って身体を覆い隠し、後ろを向いてしまった結衣にもはや何の言い訳もすまい。由比ヶ浜結衣が魅力的な女の子であるという事は、語らずとも誰もが知り得るところだ。

　俺は無遠慮に向けていた視線を川面に落とすと、そっと目を閉じた。俺の記憶のままならば、もうそろそろだ。川のせせらぎに混じって、その緩やかな流れに逆らう水音が聞こえてくる。

「比企谷くん。平塚先生との約束は忘れたのかしら？」

　その声に振り返ると、目の前に広がる光景に俺は息を呑んだ。

　透き通るように白く、降りかかる水飛沫をも弾き返す瑞々しい肌。普段ニーハイに秘匿された細く長い脚は陽光の元に晒され、川面よりもキラキラと光り輝いているように見えた。腰から美しい曲線を描くくびれを強調するようなワンピースの水着は、あの時よりも色鮮やかに彼女の魅力を引き立てている。

「私の進言次第で、あなたの学校生活の終了時期が決まるのよ？」

　黒々と深い色を湛える長い髪は、真夏の日差しの下ではっきりと天使の輪を映している。勝ち気で、柔らかな侮蔑を込めるように細められた目すら美しい。血色のいい唇が言の葉を紡ぐたびに、その甘やかな声に鼓膜が溶けて無くなってしまいそうだ。

　控えめに言おう。

　俺の奥さん（JK）の水着姿は、史上最高だ。

「⋯⋯ちょっと、何を黙っているの？」

「もはや何も言うまいて⋯⋯」

　俺はやっとの事で雪乃の水着姿から視線を上げて天を仰ぎ見ると、完全勝利に酔い知れていた。さっきから蚊帳の外にされていた小町は「うわぁ」と声に出してドン引きしている。

　意味が分からない沈黙が流れている所に、二人分の足音が近寄ってきていた。水着に着替えた三浦と海老名さんが、何事かを話しながら俺たちのいる川のりを通り過ぎていく。

「ふっ、勝った⋯⋯」

　いつかと同じように、三浦はすれ違いざまに雪乃の胸元を見て勝ち誇った笑みを浮かべる。対する雪乃の顔には、やはり疑問符が浮かんでいた。

「⋯⋯？　何の話かしら」

　あの時の俺は、「お前の姉ちゃんがああなんだから」とか何とか慰めたんだっけか。しかし未来を知っている俺は、そんな夢を抱かせるような無責任とも言える発言は出来ない。

　結局、あんまり大きくならなかったんだよなぁ⋯⋯。俺も「おっきくなーれ♪　おっきくなーれ♪」とし⋯⋯だいぶ協力したのだが、カップサイズが一つ上がったところで打ち止めになってしまった。まあ俺としてはゆき乳であればどんなゆき乳でも愛せる自信があるから、何も問題はない。ゆき乳最高。

「⋯⋯本当に全然まったく気にする必要はないだろ外見的特徴に依って優劣は決められるものでもないしもし仮にそれによって勝敗を決するのであれば相対的評価をするべきであって全体的なバランスこそが評価対象となるべきだから何も問題はない」

「⋯⋯⋯⋯何か酷く貶されながら慰められた気分なのだけれど」

　不満そうな表情を浮かべる雪乃に向けた俺の視線には、同情めいた感情がのっていたのかも知れない。

　まあ、それはそれ。これはこれ。

　機は訪れ、役者は揃った。であれば、後は俺の目標を達成するだけだ。

「そぉい！」

　阿呆みたいな掛け声と共に、俺は川の水を掬い上げて雪乃に水をぶっかけた。

「⋯⋯⋯⋯」

　水をも弾く黒髪をふるふると震わせながら、雪乃はその瞳に炎を灯す。⋯⋯いいぞ、雪乃。その負けず嫌い根性、しかと見届けてやる。

「⋯⋯やったわね」

　バシャーンを派手な音を立てて、俺の視界は奪われた。前髪から滴る雫を見ながら、俺は不敵な笑みを浮かべ戦線布告をする。

「甘っちょろいな。それぐらいで俺が怯むと思ったか？」

　今度は両手で水をかきあげ、雪乃の顔面に直撃させる。彼女の顎から滴り落ちるを認めると、俺の目標の一つは達成されたのだと実感できた。

「てやっ！」

　背後から聞こえた声とともに、土砂降りの雨が俺の頭上に降り注ぐ。振り返れば結衣は勝ちを確信しているかのような笑みを浮かべ、腰に手をやり胸を反らせている。たゆんたゆん。

「ふっふっふ。ヒッキー、今の状況、分かってる？」

「我が兄とは言え、何の策もなしに敵陣に突っ込もうとは浅慮よのぉ⋯⋯」

　芝居がかった台詞を吐く結衣に、小町が追従する。いいだろう、まとめて相手をしてやる⋯⋯。

「八幡っ」

　俺がいざ行かんと戦闘体制を取ると、弾むような声が耳に届く。振り返ろうとした瞬間、背中にトンと軽い衝撃が響いた。

「助太刀するよ」

　顔だけで振り返ると、勝気な笑みが俺に向けられている。

「男子チーム結成だね」

「と、戸塚ぁ⋯⋯」

　きっと戸塚はこの素敵な笑顔で、テニス部のチームメンバーを引っ張って行っているのだろう。可愛らしい男の子が、今日ほど頼りがいがあると思った事はない。

「せいっ」

　感動に咽び泣きそうになっている所に、バシャンと頭から水を被せられる。結衣が戸塚もろとも水をぶっかけてきたらしい。

「さいちゃんがいるからって手加減しないよ」

「背中がガラ空きね」

　結衣の方を向いた瞬間、今度は後ろから冷ややかな声と共に水をかけられた。そして雪乃の方を向いた瞬間に「そいやー」と小町が川面を蹴り上げ、またまた頭からずぶ濡れになる。

「うわわっ」

「ふふふ、お兄ちゃん。身内の恥は身内で処理しないとね」

「俺がいつ恥になった⋯⋯」

　ほーんと小町ちゃんたら、冗談きついゾ☆

　俺は手をわきわきと動かすと、川に沈めた両手をクロスさせるように振り上げて雪乃と小町に水をかける。

「きゃっ⋯⋯」

　自分の方にくると思っていなかったのか、雪乃が可愛い悲鳴を漏らした。その目には水をかけられたぐらいでは消火出来ない炎が浮かんでいる。

「こんの⋯⋯」

「ははははは、来い雪ノ下。いくらでも相手してやる」

　そして視界はまた水飛沫に遮られ、掛け声と冷たい水の応酬が始まる。

　もう一度、控え目に言おう。

　JK雪乃との水遊びは最高だ！

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「ふぅ⋯⋯」

　小一時間ほど水を掛け合い、身体が冷えてきた所で俺は川辺に上がっていた。

　シャツをかけておいた木の下で、いつの間にかやって来ていた留美の姿を見つける。

「八幡、大人気ない」

「おお⋯⋯」

　シャツに手を伸ばしたところで、手厳しい指摘が入る。そうね、そう言われても仕方ないですね。しかし三十路に近くなってから小学生にそう言われてしまうと、堪えるものがあるなぁ⋯⋯。

「留美も一緒に遊ぶか？」

「いい。水着持って来てないし」

　川の方を見たまま、留美は小さくかぶりを振った。分かりきっていた答えでも、一応聞いておかなくてはいけない。

「他の奴らはどうした」

「⋯⋯朝ごはん食べてから部屋に戻って、私が外に行く準備をしている時に置いていかれた」

　そうか、と言葉もなく頷く。相変わらず、えげつない事をする。人は集団に入れば、どこまででも残酷になれるものらしい。

「⋯⋯辛いよな、そういうの」

「八幡には、分かんないでしょ」

　そう言う留美の声は冷たく、突き放すようだった。

　まあさっきまでみんなで大はしゃぎしていたのを見られていたのだから、そう言われるのも仕方ない。

「いや、分かる。小中高とずっと一人だったからな。俺はぼっちマイスターだぞ」

　冗談めかして言うと、ようやく留美はこちらを見た。当然、欠けらも信じていないって表情だ。

「でもさっきまで、みんなで遊んでた」

「まあ、部活の合宿みたいなもんだからな⋯⋯。教室ではいつも一人だ」

　留美の目はまだこちらを訝しんでいたが、俺の口調から冗談ではない事を感じ取ったらしい。さっきまでよりいくらかは、真面目に聞こうとしているように見える。

「それに大勢でいれば孤独じゃない、ってわけじゃない」

　シャツを着て、髪から滴ってくる水滴をタオルに吸い込ませる。

　孤独は状況だけを言うものじゃなく、感じるものだ。もちろん俺が今それを感じているというわけではないし、留美には分かりにくい説明だったかも知れない。

「⋯⋯八幡は今、孤独なの？」

「今この時に限って言えば、違うな」

「よく分かんない。説明下手過ぎ」

「おお⋯⋯」

　またまた手痛い指摘である。人の気持ちに寄り添い、ただそれを表明したいだけなのだが、中々どうして伝わらない。

「まあなんだ、生きてりゃ孤独な時もあるし、そうじゃない時もある」

　何だか人生語るおっさんみたいになってきたな、と思いながら俺は留美に語りかけ続ける。留美の目にはまだ、納得の色は浮かんでいない。

「⋯⋯そんな時なんて、くるのかな」

　ようやく聞けた本心からの言葉に、俺は短く息を吐いた。

「選択の問題だな」

　孤独を選ぶか、そうではないか。実は単純で、だからこそ人生というシステムは冷酷なのだ。

　どんな状況だって、全て自分の選択の結果だ。

　あいつがどうでとか、こんな事があってとか、言い訳めいた事は関係ない。それですら選択に付随する結果であり、原因ではない。鶴見留美の状況は、そこにどんな思いがあったとしても、彼女の選択の結果なのだ。

「留美はどっちがいいんだ？」

　だから今一度、問おう。

　分かりきった、彼女の答えを。

「孤独⋯⋯じゃない方がいい」

　今、鶴見留美は選択した。

　であれば後に続くのは結果だ。その先に待つのが、残酷なものであったとしても。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　川辺での水遊びを終えた俺たちは、夜までの時間を使って肝試しの為の準備を進めた。

　俺と戸塚と小町で夜の肝試しのコースを下見と段取り、そして雪乃と結衣は件の四人を探し出してコンタクトを取って貰っている。俺の作戦の為の、重要な役割だ。

　すでに俺の示したリミットである夕方はとうに超え、作戦の内容は葉山たちを含め全員に説明をしてある。相変わらずみんなの反応はよろしくはなかったが、前回よりはいくらかマシな反応だったように思う。

「コースの確認、終わったよ。俺たちの方の準備は完了だ」

「ああ」

　葉山の報告に俺は頷きを返すと、すでに漆黒へと色を変えた空を仰ぎ見た。時刻は午後七時過ぎ。もうそろそろ肝試しが始まる時間だ。

　葉山たちには今回において、完全な裏方をお願いしてある。お化け役として小学生たちを驚かしつつ、鶴見留美を含むグループに対してコースの改変を行う。小町が出発の順番を指定する事で留美たちのグループが最後になるようにするのは、以前と変わらない。

「けどこの作戦、本当に上手くいくのか？」

「言っただろ。“あの子たちの良心”に期待するしかないって」

　またも葉山の好きそうなキーワードではぐらかすと、葉山は腕を組んで黙り込んだ。何か言いたげな表情だったが、彼は質問を重ねる事はなかった。

「⋯⋯それじゃ、持ち場に戻る。こっちの事は任せてくれ」

「ああ、頼んだ」

　葉山が頷くと、俺もおうむ返しのように深く頷く。葉山が森の中に消えて行くと、スタート会場から小町の声が聞こえてくる。拡声器でも使っているのか、その声は元気が良すぎて少し割れていた。

「比企谷くん」

　遠くから聞こえる悲鳴やら笑い声やらに耳を澄ませていると、不意に声をかけられる。振り返るとそこには雪女の衣装に着替えた雪乃の姿があった。

　雪乃だから、雪女。安直だけれど、和装の雪乃もいい。凄くいい。

「準備万端みたいだな」

「ええ⋯⋯」

　雪乃は肯定こそ返すものの、その声はいつも以上に元気がない。物憂げな表情と相まって、本物の雪女がそこにいるみたいだった。

「⋯⋯不安か？」

「そんなわけがないでしょう」

　俺の心配の言葉にも、即座に否定していつもの勝ち気な表情に早変わり。これだけ女優の資質があれば、まあ大丈夫だろう。

「彼女たちと普通に話すより、よっぽど気が楽だわ」

「⋯⋯それもどうなんだと思うけどな」

　俺が若干引いていると、「おーい」と背中に声がかかる。振り返ると普段着のままの結衣が、手を振りながらこちらに歩いてくる。

「うーん、遠目からでもやっぱり似合うね」

「それは褒めているのかしら⋯⋯」

　雪乃は頬に手をやり疑問に首を傾げると、結衣は肯定するようにうんうんと首を縦に振る。

　結衣の小悪魔衣装姿が見れないのは残念だが、今回は仕方ない。仮装する事によって作戦に支障が出るかも知れないなら、不安要素は潰しておくほうがいい。

「ヒッキー、もうちょっとで半分ぐらいだけど」

「ああ。そろそろスタンバイ頼む」

「うん」

　雪乃は結衣と呼吸を合わせるようにほとんど同時に頷くと、俺が動き出したのを合図に歩き始める。

　森の中に入ってしばらく歩くと、分岐に出た。ここが俺と結衣の持ち場で、最初の関所だ。

「じゃあね、ゆきのん。頑張って」

「ええ」

　雪乃は頷くと、深い黒を湛えた森の奥へと消えていく。夜闇に紛れる間際の背中は、まるで幽霊のようで少しゾッとした。こんな事を本人に伝えたら、また口を尖らすだろう。

「いよいよだね⋯⋯」

「⋯⋯ああ」

　そう言う結衣の口調からは、いつもの明るさが抜け落ちている。今日の作戦を知ってしまえば、まあそう言う反応になるだろう。

　ブブッとポケットの中で携帯電話が震えて、俺はすぐにその通知の内容を確認する。小町からは短く「最後の一組出発」とだけメールが届いていた。

「今、留美たちのグループが出発したらしい」

「うん」

　合図を送り合うように視線を交わすと、俺は元来た道を少し戻って茂みの中に身を隠した。今頃葉山たちがコースレイアウトを変え、こちらに彼女たちを誘導してくれている事だろう。

　息を殺して待っていると、やがて聞き覚えのある声たちが近づいてくる。肝試しという非日常もあってか、彼女たちの声は常よりも大きい。だから彼女たちがどのぐらい近くにいるか、そして俺の横を通り過ぎたのかどうか、よく分かる。

「留美ちゃん、こっち」

　結衣が細く小さな声で呼びかけると、四人から数歩遅れて歩いていた留美がハッと顔を上げた。留美と目が合うと結衣は「しーっ」と唇に人差し指をあてる。

「⋯⋯⋯⋯」

「こっちに来て」

　そう言う結衣を訝しげに見ながら、留美は何も言わずに俺の隠れる茂みの方へとやってくる。

　この役目は、やはり結衣にしか出来なかった。俺がもし暗闇の中から急に留美に話しかけようものなら、絶叫上げられて作戦台無しになるからな⋯⋯。

「⋯⋯なに？」

　俺の側まで来ると、留美は抱えた違和感を吐き出すように、小さな声で俺に問いかける。しかしその問いの答えは、俺ですらも知り得ない。

「まあ、見ててくれ」

　やがて四人は葉山たちに操作された道順のまま、袋小路に差し掛かる。コース順通りに来たはずなのに行き止まりになっている事に、彼女たちは口々に文句とも悪態ともつかない事を言いながら、不安を覆い隠すように声を大きくした。

　そんな彼女たちの前に、一つの人影が幻影のようにゆらりと、その帰り道を塞ぐように現れる。雪女さながらに冷たい表情の雪乃は、凍てつくような視線を彼女たちに送っていた。

「なんだ、雪乃さんじゃん」

「えー、登場の仕方地味ー。もっとちゃんと脅かせてよー」

　いつの間に彼女たちは、雪乃さんなんて名前呼びをしていたのだろう。しかしそれは、雪乃に対して心を開いている証拠。俺の作戦に置いて、非常に重要な役目を持つ。

　俺がこの千葉村において達成すべき目標は大きく三つ。その内の、三つ目。

　それは雪乃の手によって、鶴見留美を救うこと。彼女の過去を、彼女自身の手で救うことだ。

「貴女たち、一体どういうつもり？」

　真夏だというのに、氷点下の声が凛と響いた。それをしかと両の耳で聞き届けた彼女たちは、息をするのも忘れたみたいに言葉を失う。

　鶴見留美を救う為の俺の作戦は、あいも変わらず一か八か。それにコンセプトは何も変わらない。俺は彼女たちの関係を破壊する。自浄作用も何もない、腐敗した関係性は、一度壊すしかない。

「留美ちゃんは、どこに行ったの？」

「え⋯⋯っ」

　雪乃に指摘されて、彼女たちは初めて気付いたのだろう。ぐるぐると周りを見渡しても、身を隠している彼女が見つかるわけもない。

「どうして彼女を、除け者にしているの？」

「⋯⋯⋯⋯」

　あまりにも直截な質問に、すぐに答えられる者などいるわけもない。

　彼女たちにしてみれば、雪乃の言動は酷く恐ろしいものだろう。憧れ、心を許した存在からの厳しい糾弾。一人は唖然とし、一人は呆け、一人は違和感にその身を抱き、一人は恐怖を目に浮かべている。

「そんな事をして、何になるの？」

　雪乃の問いに、応える者は誰ひとりとしていない。

　私たちの何が分かるの？

　そう言わせない為に、雪乃は千葉村に来た当初から彼女たちに接触している。集団から排斥されている留美の事も認識し、その状況を黙認したように思わせながら、その裏で問題に目を向けていたという状況を作り出したのだ。

「留美ちゃんが貴女たちの集団から抜けたら、今度は貴女たちの中から誰かが標的になるだけよ」

　残酷なまでの事実を、雪乃は彼女たちに突きつける。彼女たちにすればどこかで既に分かっている事で、恐れているはずの事。なのにそれを続ける事を、俺は未だに理解する事ができない。

「そんな事を繰り返して、果たして友達と言えるのかしら」

「⋯⋯⋯⋯」

　耳が痛いほどの静寂と、張り詰めた空気。

　俺のやり方は、結局歳月が過ぎようと大差はない。斜め下の方法が、斜め上に変わったぐらいだ。

　一連のやり取りを、留美は食い入るように見詰めていた。握り込まれた手が、ぷるぷると震えている。俺がそっと留美の肩に手を置くと、少しだけその震えが収まったように思えた。

「お互いの顔を見なさい。貴女たちの中で、本当に友達だと言える人はいるの？」

　雪乃に促されて、彼女たちは遠慮がちに視線を交換しあう。その中でただ一人だけ、じっと地面を見詰め続けている少女がいた。

「違う⋯⋯」

「由香⋯⋯」

　由香と呼ばれた少女は、地表に視線を送りながら絞り出すように声を出す。その様子を、留美はまた震えるほど強い力で拳を握りながら見ていた。じっと沈黙を守っていた結衣が、さっき俺がそうしたように留美の肩に手を置く。

「そんな事ない。そんなんじゃない⋯⋯！」

　その静かで強い叫びは、一体どこから湧いて出てきたのだろうか。ひょっとしたら彼女も、今の留美のように排斥された経験があるのかも知れない。

「そ、そうだよっ。私たち、ちゃんと友達だもん」

「うん。そうだよ⋯⋯ね？」

　由香に同調しているようでいて、しかし彼女たちの言っている事は由香の意図を汲み取ったものではない。ただストレスフルな現状から逃げたいが為に、その否定に乗っただけだ。

　由香が言いたいのは、自分たちが友達同士であるという事ではない。彼女が「違う」と否定したかったのは歪んだこの集団と、その心理なのだ。

「私、探しに行ってくる」

「えっ⋯⋯ちょっと、由香⋯⋯」

　由香は駆け出すと、雪乃の横を通り抜けて元きた道を走っていく。後の事は、葉山たちに任せておけばいい。彼らにはグループからはぐれた子がいたら、ゴール地点まで誘導するように頼んである。

「⋯⋯貴女たちは行かないの？」

　由香が走り抜ける間も冷たい視線を彼女たちに送り続けていた雪乃は、殊更に冷たい声でそう言った。

「い、行こうよ」

「⋯⋯うん」

　一人が言い出すと、残る二人も頷き足早にその場を去っていく。後に残されたのは、夏の夜に憂いを浮かべた目で宵闇を仰ぎ見る雪女だけだ。

　留美は雪乃を、どう感じただろうか。四人ばかりを気にかけているようでいて、実は自分の事を救ってくれた救世主か、それとも恐ろしい断罪者か。

　これで鶴見留美の人間関係は、瓦解を始めた。以前と違うのは、そこに再構築の余地があるか否かだ。

「行くか」

「⋯⋯」

　黙って頷く留美に、結衣が寄り添って歩き出す。

　さあ、答え合わせの時間だ。

　俺は知らずに握り込んでいた拳を解くと、彼女たちの二歩後ろを歩き始めた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　一度として同じ形を取らない炎が、広場の中心で高く燃え盛っている。

　キャンプファイヤーを取り囲んだ小学生たちは輪を作り、次々と相手を替えながら二日目のイベントはフィナーレを迎えようとしていた。

　フォークダンスは自由参加なのか、輪の外で座り込んで話す留美と由香の姿を見つけた。残りの三人は、首をぐるりと回しみたが見えるところにはいないようだった。

「上手くいったのかしら」

「うん、多分ね」

　雪乃も結衣も、温かな目線を彼女たちに送り続ける。

　巨大な炎に照らされる度に由香の表情は泣いているようだったり、泣き笑いのような顔だったりと忙しない。留美は微笑みを湛えたまま何度か頷き、こちらには聞こえるはずもない言葉を紡ぐ。

　──上手くいったのか、否か。

　今この場面だけで判断するならば、結果は上々と言っていいだろう。元より全員が関係を再構築できるなんて思ってもいない。

　重要なのは、これからだ。俺たちがやったのは、ちゃんと友達になれるかどうか、そのきっかけを作っただけに過ぎない。

「まあ、いいんじゃないか」

　残る三人にだって、やり直せる可能性は残っている。その関係の崩壊はすでに始まってしまっているが、それを止められるかどうかは、無責任だが彼女たち次第だ。もちろん、彼女たちにその気があればの話だが。

　果たして留美と由香は、本当の友達になれるだろうか。俺にはもう、そうなる事を祈るぐらいしかできない。

　願わくば雪乃と結衣のように。

　何年経っても切れない絆で、時にぶつかり合い、互いに支え合って補い合い、生涯に渡る親友になって欲しい。そうして初めて、俺と彼女は救われたと言えるのだろうから。

　由香が何事かを言うと、留美はまた頷き、彼女の手を握る。

　その光景はキャンプファイヤーの炎に照らされ、さながらハイキーで切り取られた写真のようで。

　だからきっと、眩し過ぎたのだ。

　俺がパチリと瞬きをしたのと同時に、熱い雫が頬を転がり落ちた。

「比企谷くん、泣いているの？」

「あ⋯⋯」

　慌ててシャツの袖で涙を拭おうとした俺の腕を掴むと、雪乃は意思を込めた強さで制する。ポケットからハンカチを取り出すと、そっと傷口でも拭うかのように、優しく俺の涙を拭いた。

「驚いたわ⋯⋯。あなた、ひょっとしていい人なの？」

「あはは⋯⋯。あたしも一瞬そうなのかと思っちゃった」

「⋯⋯ばっか、気付くの遅ぇよ」

　ありがと、と小さく言うと俺は思わず顔を逸らす。まったく、こういう部分は変えたくとも変えられそうもない。

「そうかも知れないわね」

　真っ赤な炎に照らされた雪乃の顔には、慈しみの込められた微笑みが浮かべられている。この世界線で来てから一番優しい表情に、うっかりどころか思いっきり惚れ直してしまう。

「もしも比企谷くんが私と同じ小学校に通っていたら、きっと色んな事が違っていたんでしょうね」

「買い被りすぎだな」

　もしもそんな状況になったとしても、俺に彼女が救えたとは思えない。きっと彼女と人生を交わらせる事すらなく、仮に知り合っていたとしても高嶺の華と路傍の石ころでは何も起こりようがないだろう。

「今の俺だから、できたんだ」

　もしもこれで、鶴見留美を救う事ができたのだとしたら。

　それはお前と、出会えたからなんだよ。

　俺はそう心中呟くと、雪乃の微笑みを目に焼き付けるように、そっと瞼を閉じた。

お読み頂きありがとうございます。  
千葉村編後編はいかがでしたでしょうか？　この展開を予想できている人がいたら私が凹みます。  
結局壊してしまう所は八幡で、そこに救済の余地を残すのは大人であるが故なのかも知れません。  
次の話はどの話になるのか、楽しみにお待ち頂ければと思います。

だから比企谷八幡は、彼女を見詰めてそう言った。

　我が家にはペットが二匹いる。

　比企谷家の愛猫・カマクラと、由比ヶ浜家の愛犬・サブレである。

　千葉村から帰ってきてしばし。夏休みも折り返しを過ぎた頃に、結衣からサブレを預かったのだ。

　それ自体一度経験した事でもあるのだが、久しぶり過ぎてサブレのいる生活はどうにも慣れない。というか毎日のようにひゃんひゃんと足元に擦り寄って来られると、中々に心休まる暇がないのだ。

　そういやこいつ、犬種はなんだっけか。確かミニチュアダックスフント⋯⋯いや、キャバリア・キング・チャールズ・スパニエルだったか？　絶対違うな。

「毎日まいにち飽きないなお前」

　舌を出したままハッハッと俺の足元で座り込んだサブレに言うが、もちろんサブレは何も反応しない。

　千葉村から帰ってきてからというもの、俺はあの夏とほとんど同じように過ごしていた。つまり、あれから雪乃に会っていない。

　雪乃とこれほど長く会わない時間を持つ事なんて、それこそこの高校二年の夏以来ではないだろうか。故に雪乃に会う事によってのみ補給されるビタミンYが不足している。多分このままではビタミンY不足で俺は死ぬ。ゆきのん会いたいのん⋯⋯。

　そんな女々しい事を考えていると、ポコリンとメールの受信を知らせる音がする。

『あと五分ぐらいでつくね』

　差出人には、『☆★ゆい★☆』の名前が表示され、本文には短くそう書かれていた。もうすぐ彼女がサブレを引き取りに来るのだ。

　何の変哲もない夏休みの過ごし方の中でも、わずかに変わった事があった。メールの履歴には、結衣が旅行中に撮って送ってきた写真が何枚もあり、それ以上にたわいのないメッセージのやりとりが何通もある。

　これは俺の知る世界線では、無かった事だ。短い文面のやり取りは何度かしたけれど、こんな風に距離感が近いというか、仲の良い友達同士のようなメールのやり取りはしていない。

　ぼんやりとこれはどういう事なのか考えていると、ピンポンとインターホンが鳴る。どうやら結衣が到着したらしい。

　モニターでくしくしと髪型を直している結衣の姿を認めると、俺は一階まで降りる。がちゃりと扉を開けると、出し抜けに明るい声が届く。

「やっはろー！　ヒッキー」

「⋯⋯おう」

　とても旅行帰りとは思えない元気な挨拶に、俺は心の中だけで「ひゃっはろー」と言い返す。

「まあ、上がっていってくれ」

「うん。お邪魔しまーす」

　流石に俺の家に来るのは二度目⋯⋯いや事故の後にも来たらしいから、三度目か。多少は慣れたのだろう、家に上がる事にも抵抗がなくなってきているように思えた。

　リビングに戻ると、飼い主の匂いを敏感に嗅ぎつけたのか扉を開けるなりサブレは結衣に飛びつく。

「おー、サブレ久しぶり〜」

　サブレはワフワフと、滞在中の出来事を喋るかのように吠えまくる。それを見ながら俺は麦茶を用意していると、ふと気付く。小町はどこに行ったのだろう。

　思い出して来てみれば、サブレを引き取りにきた時は玄関での立ち話程度だった気がする。何がきっかけかは分からないが、あの時とは少し変わってきているらしい。

「あ、これお土産ね」

「おお、ありがと」

　はい、と紙袋ごと渡されたそれを見ると、何種類かのお土産が入っていた。パッケージを見るに、定番お菓子のご当地版というやつらしい。

「預かってもらってる間、何かサブレが迷惑かけたりしなかった？」

「まあ、迷惑被ってるとしたらカマクラだな」

　サブレがうちに来たことによって一番影響を受けたのは、やはりカマクラだろう。顔を合わせば追いかけ回され、相手をしてくれるはずの小町を取られと散々な目に遭っていた。

　それをかいつまんで結衣に話すと、あははと苦笑する。

「ヒッキーには？」

「ん？　いや、俺は別に。散歩で外に出るのが苦痛だっただけだな」

「散歩よりも外に出るのが嫌なんだ⋯⋯」

　結衣は麦茶の入ったコップを両手で持ちながら、ちょっと引いていた。いや当たり前でしょ⋯⋯この暑い中で外に出るなんて自殺行為じゃねぇか。

「なんかゴメンね。予定とか、色々狂わせちゃったかも」

「いや、特に予定はないからいいんだけど」

　事実、俺の夏休みの予定は何もなかった。社会人になってからというものあれだけ羨ましかった一ヶ月以上にも渡る長期連休は、いざ与えられてみると長過ぎて持て余すほどだ。まったく、贅沢な悩みではあるが。

「ふーん、予定ないんだ⋯⋯」

　結衣は手に持ったままの麦茶の水面に視線を落として、そうひとりごちた。彼女のその雰囲気から、俺は何となくその後に続く言葉が想像できてしまった。

「じゃあさ、今度の花火大会、一緒に行こうよ」

　ああ、やっぱりこうなるのか。俺は遠慮がちな結衣の視線を受けながら、次に言うべき言葉を探す。

「外に出るのが苦痛って、さっき言ったんだけど⋯⋯」

「もー、夏休みだからってそんな生活してたらだめじゃん。たまには太陽の光浴びないと、本当に目が腐っちゃうよ？」

　いや花火大会は夜だから、太陽の光関係ないんだけど⋯⋯。しかしそんな事を言っても、またその顔が不機嫌になるだけだろう。

「⋯⋯でも二人でいるところを誰かに見られたら、噂されちゃうかも」

「なにその言い方。キモい」

　女子っぽく言ってみたのだが、あっさりバッサリ切られてしまった。というか実際また花火大会に行ったら相模や陽乃さんにエンカウントする可能性もあるから、あのイベント自体は非常に億劫なのだ。

「いやでも、人ゴミがね？」

　なおも言い訳めいた事を続けていると、結衣はこちらをじっと見ながら黙ってしまう。非難するようだった視線は徐々に色を変えていき、やがて落胆のようなものを滲ませる。

「⋯⋯ヒッキーは、あたしと一緒に行くの嫌？」

　そんな風に聞かれたら、嫌だなんて答えられるわけがない。こういう時の結衣のかさというか女の子らしさというものに、やはりどうしても敵う気がしない。

「⋯⋯そんなわけないだろ」

「うん⋯⋯。はい、じゃあ決まりねっ」

　結衣は立ち上がると、テキパキとサブレを連れて帰る準備を始める。結局この世界線でも、結衣とは花火大会に行くことになるらしい。

「じゃ、また連絡する」

「おう」

　玄関まで送ると、結衣は空いた方の手を振る。

　別れの時を悟ったのかひゃんひゃんと鳴くサブレを、俺は片手を上げて見送った。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　その日は午前中からぽんぽんと空の大砲のような音が鳴っていた。確かあれは、号砲花火とか言うんだったか。

　俺が結衣との待ち合わせの駅に着くと、俺は周囲を見回した。格好からして俺たちと同じ目的地であるらしい人々が、コンコースを足早に行き交っている。

「お待たせっ」

　弾むような声と同時に、浴衣姿の結衣が視界にカットインしてくる。

　いつかと同じ薄桃色の浴衣に身を包んだ結衣は、髪はいつものお団子頭ではなく一つにまとめられてアップにしている。十二年ぶりのその姿はあまりにも感慨深くて、思わず上から下までじっくり見てしまう。

「⋯⋯ねぇ、見てるんなら何か言ってよ」

「⋯⋯茶髪と浴衣は合わねぇな」

「もー！　なんでそんなデリカシー無いこと言えるのっ」

　俺の答えは大変ご不満だったらしく、結衣は手に持った赤い手提げを振り回して二の腕にクリーンヒットさせてくる。手提げはモーニングスターじゃねぇぞ。

「あいったぁ⋯⋯」

　たいして痛くもなかったが、痛がらないというのも無礼というもの。二の腕をおさえる振りをしても、結衣の膨らんだ頬が萎む事はない。

「ヒッキー、もうちょっと気を使えないと女の子にモテないよ？」

「別にモテたくなんてねぇよ」

　たった一人にさえ、モテたらいい。そんな本心を口にするわけもなく、ガタガタと大きな音を立てながら現れた電車に乗り込んでいく。

　車内はレジャーシートやらパラソルやらを持った人たちで、中々の混み具合だった。俺たちを乗せた電車がゆっくりと走り始めると、不意に結衣は問いかける。

「そういえば、ヒッキーってゆきのんと連絡取ってる？」

「いや⋯⋯。千葉村から帰った後に、夏休み中にまた部活はあるのかって聞いたぐらいだな」

　残念な事に、非常に残念な事にそれが事実で、雪乃とはその一通しかやり取りしていない。しかも返信は『ないわ』の三文字である。そのあと携帯を一時間握りしめても続きが送られてくる事はなかったから、ちょっと泣いた。

　しかし俺の答えに思うところがあるらしい結衣は、顎に手をやり表情を僅かに険しくさせる。

「そっか⋯⋯。私もね、何回かメールとかしてるんだけど、電話はいっつも出れないみたいだし、メールの返信もすっごい遅くて」

　実際、俺とのメールのやり取りも返信がくるまで丸一日以上かかっていた。

　思い当たる節があるとすれば、それは雪ノ下家による隔離。あるいは、本当に家の用事で忙しいかだ。普通に考えれば後者だと思うが、前者の可能性があるのが雪ノ下家の恐ろしいところなのだ。

「まぁ、家の事が色々あるんだろ」

　千葉村から帰ったあの日、雪乃が家のハイヤーで連れ去られるように帰って行ったのは、あの時と変わらない。結衣から事故に関する出来事は遠ざけたかったが、流石にそこまでのコントロールは出来なかった。

「うん⋯⋯」

　結衣はそう返事をすると、小さく溜息を吐いた。

　あの車を見て、結衣は何を思ったのだろう。それっきり黙ってしまった結衣の横顔を盗み見ても、それが分かるはずもない。

　電車が目的の駅に滑り込むと、人波と一緒にホームへと降りる。そのまま列に流されるように進んでいくと、間も無く花火大会の会場だ。別の交通手段できた人々と合流するたびに、人口密度は上がっていく。

「だいぶ混んできたね」

　普段歩く分にはだだっ広いと思っていた歩道も、こうも混み合ってくるとただ歩くのすらも難しい。隣を歩く結衣は、徐々に増えてきた色とりどりの屋台に目を奪われていた。

　花火が始まるまで、まだ一時間以上もある。またあの時と同じように屋台をまわって時間を潰す事になりそうだ。

「まだ時間あるけど、どうする？」

「⋯⋯屋台でも見てくか」

「うん、そだね」

　今から場所取りという選択肢もあるにはあるが、人間飯を食べねば生きてはいけない。今回は小町の欲しい物を買って帰るというミッションは存在していないが、飲まず食わずというのも厳しかろう。

「あ、見てヒッキー。あの綿菓子⋯⋯」

「由比ヶ浜」

　しかし何もかも同じというわけには、いかなかった。このまま行けば、おそらく相模南と会う事になり、また結衣が不躾な興味と嘲笑の対象にされてしまう。それはなんとしても避けたい。

「悪い、こっちから見たいんだけど、いいか？」

「あ、うん⋯⋯。いいよ」

　結衣が見ている方とは反対の屋台の並びを指さすと、特に異論はないのかすんなり受け入れてくれる。表情に僅かな疑問が残っているようだったが、多少強引でもやむなしだろう。

「ねえ、何食べる？」

「まずは型抜きだな」

「食べ物じゃなかったっ⁉︎」

「いや、あれも食いもんだから」

　そんな何気ない会話も、結衣はどこか楽しそうだ。

　願わくばいつまでも、そんな風に笑っていて欲しかった。

　けれどそれは叶わない願いだ。それは他でもない俺が一番よく、知っている。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　屋台を回り始めてしばらく経った頃。

　俺と結衣が道端でリンゴ飴をもしゃもしゃ食べていると、聞き覚えのあるダミ声が耳に届く。

「あれー、結衣とヒキタニくんじゃん。うぇーい！」

　そう言って手を挙げているのは戸部で、その隣には葉山の姿もある。片手に屋台で買ったものらしきビニール袋を持っているから、こちらと同じく花火前の腹ごしらえ中だろうか。

「あ、とべっち⋯⋯と隼人くん。こんな所で奇遇だね。うぇーい！」

　結衣と戸部はパリピよろしくハイタッチすると、葉山は微笑ましい光景を見ているかのように目を細めた。すっとその視線が俺の方にスライドしてくると、途端にその目に浮かぶものは慈しみから興味へと変わっていく。

「やあ」

「⋯⋯よう」

　なるほどな、と心中でひとりごちる。相模と会わないようにするという事は、こんな風にあの時会わなかった人間に会う可能性もあるわけだ。

「戸部と二人だけなんて、珍しいな」

「いや、大岡と大和もいるよ。場所取りをしてくれてるんだ」

　そう言って葉山はビニール袋を軽く持ち上げた。彼らの分も含めて、買い出し中という事らしい。

「そっちはデートか？」

「そんなんじゃねぇよ」

　即座に否定するが、まあどこからどう見てもデートだろう。しかしその否定に意味はなくとも、一応言葉にはしておかなくてはならない。

　しかしこの状況というのは、またとない機会かも知れない。俺は結衣と戸部の話が盛り上がっているのを視界の端で確認すると、葉山との話題を変える。

「ところで、ちょっと聞きたい事があるんだが⋯⋯」

　声をひそめて言う俺に、葉山は胡散らしいとでも言うような視線を返してくる。

「夏休みの間、雪ノ下が何をしているか知ってるか？」

　俺の直截で唐突な問いに、葉山は言葉を失ったように目を瞬いた。しかしそれは一瞬の事で、返される答えは素っ気ない。

「そういう事なら、本人に直接聞けばいいだろ」

「あいにくプライベートな連絡は禁止されているもんでな」

「⋯⋯一体どうしたらそうなるんだ」

　そんなの俺が聞きてぇよ。と誰にも聞こえない声で呟き漏らす。この手の話はセンシティブでドメスティックな話題過ぎて、葉山の反応は芳しくない。

「雪ノ下さんから聞いてるかも知れないけど、俺だって頻繁に連絡を取り合うような仲じゃない。だから最近の事は、全然知らないんだよ」

「過去の事なら分かるのか？　例年どうだったかとか」

「もし知っていても言えないよ。プライベートな事だからね」

「⋯⋯まあ、そうだわな」

　当たり前だろ、と肩をすくめられてしまうと、もうそれ以上の質問は意味を持たない。

　俺が結衣の方を見ると、戸部との話も終わったところらしかった。

「そろそろ行くわ」

「ああ⋯⋯」

　葉山はそう答えるが、顎に手をやり思案顔だ。そのままにして置くのも気持ち悪いので続きを待っていると、結衣には聞こえないぐらいの小さな声で言う。

「どっちつかずは良くないと思うぞ」

「⋯⋯だからそんなんじゃねぇって言ってんだろ」

　どっちかだなんて、それはもう決まっている。

　それはもうどうしようもなく、取り返しがつかない程に。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　花火の打ち上げまでもう間も無くという時間になると、観覧エリアは人でごった返していた。

　当然空いているベンチなどはなく、一番見やすい場所はすでにレジャーシートや大型のブルーシートが敷かれ、二人とはいえ滑り込むようなスペースは無い。

「えっと、どうしよっか」

　結衣は浴衣だから、芝生にそのまま座るというのはよろしくない。かと言って立ち見をしようにも、観覧エリアの通路は立ち止まるのも難しいぐらいの往来である。

　しかし、そんな事は分かり切っている事だ。

「あんまいい場所は残ってないかも知れんが、レジャーシートなら持って来てる」

　俺はそう言ってたすき掛けにしていた小さめのバッグを指さすと、結衣はほえーっと間の抜けた表情をしていた。

「意外⋯⋯。あ、ううん。ヒッキーって割りと頼り甲斐あるなーって思ってたけど」

「⋯⋯微妙なフォローをどうも」

　それもこれも、こうなる事を分かっていたから準備できた事だ。何よりこのままフラフラと有料観覧エリアに近付いて陽乃さんに会うのも具合が悪い。また帰りしなに雪ノ下家の車を見る事になり、避けていた事故の話題に触れる事になるだろう。

「ここら辺でいいか」

「うん」

　芝生エリアに点々と植樹された木の下に空いているスペースを見つけると、二人がようやく座れるぐらいの小さなレジャーシートを敷く。あいにく空を見上げると枝葉が少し花火の邪魔をしてしまいそうだが、座れるだけマシだろう。

　俺たちが座り込んでしばらくすると、会場に花火大会開始のアナウンスが流れ始めた。そしてひゅるるるる、と火球が空に細い線を描くと、光の華が炸裂する。歓声に紛れてもう一発、さらにもう一発と次々に花火は打ち上げられていく。

「おぉ〜」

　結衣も控え目に歓声を上げながら、胸の前でパチパチと小さく拍手をする。本当に結衣は、どの仕草を切り取って見ても女の子らしい。

　光の輪が大きくなっていく度に、会場の歓声は大きくなっていき、どこか遠くから調子っぱずれな「たーまやー」という声が届く。

　彼女の瞳はいくつもの花火を色とりどりに映し込み、その横顔はあまりにも美妙だった。

　もしも、俺が好きになったのが結衣だったとしたら。

　俺と彼女はどんな未来を迎えていただろう。きっと俺は彼女の優しさに甘えて、酷く苦しめたり傷つけたりすると思う。あるいは俺が彼女の為に変わる努力をして、笑顔を見続ける事ができたのかも知れない。

　けれどそんな想像は、無意味だ。俺が感情によって誰かを選ぶ事は出来ても、好きになるという感情を選び取れるわけじゃない。

「ねえ、ヒッキー」

　瞬きも忘れて見入っていたのか、潤んだ瞳に花火を閉じ込めながら結衣は言う。

「サブレを助けてくれて、ありがとう」

　その一言に、俺は息をするのも忘れて結衣の顔を見詰めていた。

　結局、この話をするのは避けられないのか。あれだけ回避してきた事故の話題も、結衣の方から言われてしまっては避けようがない。

「入学式の日に、犬を助けようとして、怪我しちゃったでしょ？　あの犬が、サブレだったんだ」

「⋯⋯ああ」

「あ、驚かないって事は、やっぱり小町ちゃんから聞いてたんだ」

　頷く俺を見て、結衣はまた花火を見上げる。ぱらぱら、ぱらぱらと、光と音が降り注ぐ。

「だからあの時から、ヒッキーの事は知ってたの」

　さほど遠くない話だというのに、結衣の声は遥か昔を懐旧するみたいだった。それほどまでに、俺にこの話をするのに時間がかかったという事が、その表情から読み取れる。

「お見舞い、行かなくってごめん。小町ちゃんに入院先を聞ければよかったんだけど⋯⋯。そんな事までしてくれなくてもいいって言われて、そのままにしちゃってた」

　俺を正面に捉えてぺこりと頭を下げる結衣の姿に、何故だか罪悪感すら覚える。俺が下手に事故の話題を避けなければ、こんな風にする必要もなかったはずだ。

「いや⋯⋯。謝る事なんかじゃねぇだろ。俺が勝手にやった事なんだし」

　事実あれは俺が勝手にやった事で、誰にも謝られる必要なんてない出来事だ。助けなければ良かったなどとは露ほども思わないが、結衣にそう言われることは酷く息苦しい。

「うん⋯⋯。でも入院してたから、凄く大切な時期に学校にいなかったわけじゃん？　ヒッキーがいつも一人なの、あたしのせいなのかもって思ったら⋯⋯やっぱり謝りたい」

　あの時リードを離してしまったのは自分だという悔恨もあるのだろう。結衣の表情は未だ晴れず、いつしか花火を見上げる事もやめて俯いている。

「んな事気にしてたのかよ⋯⋯。俺がぼっちだったのは、この性格だからだ。元々社交性があれば、二年に上がった時に友達できてるはずだろ」

　これじゃいつかの繰り返しだ。避けても避けても訪れるというのならば、これは必要なやり取りだったのかも知れない。

　少なくとも結衣にはずっと心のどこかにっていた感情があって、それを吐露するのは必要なプロセスだったのだろう。彼女を傷つけない為にやっていたはずなのに、いつしかその所為で苦しめていたのかも知れない。そう考えると、自分は酷い偽善者のように思えてくる。

「ヒッキーは優しいね」

　空から降り注ぐまばらな光に合わせるようにして、ひたすらに柔らかい声色が耳朶を震わせた。

　いつの間にか俯かせていた顔を上げると、心の奥底を掬いあげるような視線が俺に注がれている。

「だから、なのかな」

　俺は彼女の、その表情を知っている。

　熱に浮かされたような、焦がれるような、確かな熱量を持った声。言葉を紡ぐ度に引き結ばれる唇。

「ヒッキー、あたしね」

　明滅を繰り返す空が、結衣の顔を幾度となく照らす。うっかりしていたら取り込まれてしまいそうなその目に、心が震えた。

「あたしね⋯⋯」

　駄目だ。

　そう強く思った。それが酷い欺瞞でも、誰の為にならないかも知れなくても、彼女にその先の言葉を言わせてはいけない。

「由比ヶ浜」

　結衣の話を遮るように、俺はその名前を呼ぶ。びくっと僅かに、彼女の肩口が揺れた。

「え⋯⋯。うん、何？」

「俺も、お前に言わなきゃいけない事がある」

　まったく、こんな時に言うなんて。デリカシーもなにもあったものじゃない、最低のタイミングだ。

　それでも、いつかは言わなければならない事だった。俺が何度この青春の時代を繰り返したとしても、不変の感情。それに伴う、残酷なお願いについて。

「俺、雪ノ下のことが好きなんだ」

　俺は気を抜けば逸らしてしまいそうになる視線を結衣に向けたまま、ただはっきりとそう言った。

　目を見開いた結衣の表情は純粋な驚き、であれば次に浮かべるのはどんな表情か。

　正直、また傷つけると思うと見ていたくなかった。それでも俺は、自身への戒めのように結衣を見詰めながら続ける。

「だから応援して欲しいとかそんな話じゃないんだけど⋯⋯。ただ知っておいて欲しいというか」

「うん⋯⋯」

「それからあいつと連絡取り辛くなってるかも知れないけど⋯⋯。また新学期が始まったら、一緒に居てやって欲しい。雪ノ下には、由比ヶ浜が必要だと思うから」

「⋯⋯なにそれ。お願いされなくても、一緒にいるよ」

　そう言う結衣の顔に張り付けられた微笑みの下にあるのは、悲壮か哀切か。その表情を見ていると、心臓が針で突かれているかのように痛んだ。

　また、彼女の優しさに甘えてしまった。悲しみさえ隠して見せる彼女の強さに、救われてしまった。

「ありがとう」

　だから俺は、結衣の目を見詰めてそう言った。

　少し前、千葉村での夜。川辺で語り合う彼女たちの姿を思い浮かべる。

　きっと彼女たちなら大丈夫だと、確信と祈りを込めて、俺はゆっくりと頭を下げた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　夏休み明けの初日。

　久しぶりの通学路は、学校が近づくにつれて数人で連れ立って歩く集団が目立つようになってくる。皆一様に夏休みの間にあった事を話し合っているのだろう。その声は夏休みの前と比べるまでも大きくかしましい。

　元の世界線で俺は、そんな光景をどんな気持ちで見ていただろうか。夏休みが終わってしまった絶望感と気怠さで背中を丸めながら登校していたような気がする。

「おはよっ」

　昇降口で靴を履き替えていると、二の腕に軽い衝撃を覚える。声のした方を見ると、結衣が片方の肩にかけた鞄を軽くぶつけてきたらしい。

「おお、おはよ」

　その声の掛け方も、声色も表情も、あまりにもいつも通りで拍子抜けしてしまう。もっとぎこちなくなったり、避けられたりしてもおかしくないというのに。

「なんか、そんなに久しぶりじゃないのに、すっごい久しぶりな気がする」

「⋯⋯まあ、そうだな」

　あの花火大会の日以来、ほとんど毎日のように来ていた結衣からのメールは、ただの一通も送られてくる事はなかった。

　そんな状況もあって結衣とどんな顔をして会えばいいかしていたのだが、彼女はあっさりとそれをブレイクスルーした。やはり結衣は、俺の知る結衣からブレる事はない。俺なんか足元に及ばないほどに一人の人間として大きくて、その懐は深く暖かい。

「ね、今日から部活あるのかな？」

「さぁな。直接聞けば分かるだろ」

　そう言って俺と結衣は隣り合って歩き出す。やがて教室へと上がる階段へと差し掛かると、俺はいつかと同じようにその姿を見上げた。

　大きなガラス張りの窓たちが透かす、夏の厳しさを残したままの陽光。その光を受けてなお涼やかに、雪ノ下雪乃は何者をも寄せ付けない空気を身に纏っていた。

「あら、久しぶりね」

　踊り場にさしかかった彼女は、視界の端で俺たちに気付いたらしい。後光のように陽の光を背負いながら、うっかりすれば見惚れてしまいそうなほどの微笑みを浮かべていた。というか、完全に見惚れていた。

「ゆきの〜ん！」

　俺が何か言うより先に、結衣は階段をダッシュで上っていくとその勢いのまま雪乃に抱き着いた。その光景に硬直の解けた俺は、一歩一歩踏みしめるように階段を上がっていく。

「ちょっと⋯⋯。こんな所で抱きつくのはやめてちょうだい」

「だって、だってさぁ、もう！」

　よほど雪乃と会えたのが嬉しいのか、彼女の非難もどこ吹く風で結衣は抱き着いたまま離れない。その光景は、ひたすらに眩しい。

「⋯⋯今日から始めるのか。部活」

「ええ⋯⋯。そのつもりだけれど」

「了解。また後でな」

「ちょっ、ヒッキー、置いてくなし！」

　俺が雪乃たちを追い越して階段を上り始めると、結衣は文句を垂れながら追いかけてくる。

「ゆきのん、また放課後にね」

「ええ、また後で⋯⋯」

　その言葉と一緒にどんな表情を浮かべているかは、背を向け歩き出した俺に知る由はない。

　振り返れば、きっと見えるだろう。けれど俺は振り返らない。

　決定的に変えてしまった事を、後悔しない為に。前だけを向いて、彼女たちと向き合う為に。

お読み頂きありがとうございました。  
花火大会編、というか結衣ちゃん編はいかがでしたでしょうか？  
結衣に対する態度が正解か不正解か、おそらく八幡ですらも迷いながらの答えで、正答の無い問いであると思います。  
俺ガイル原作でも結衣は重要な登場人物でしたが、この話でもそれは変わりません。  
雪乃の態度だけではなく、結衣の反応の変化も注視して頂けるとより楽しめると思います。  
それではまた次話で。感想もどんとこいばっちこいでお待ちしています。

雪ノ下雪乃の悲壮はもう要らない。上

　九月は台風の季節だ。

　それはここ千葉も例外ではなく、昨晩は凄まじい風雨に見舞われた。激しい雨に大気中の埃やら何やらが洗い流されたのか、教室の窓から望む空はまさに秋晴れの空と言うべき青さだ。

　しかし今はそんな空の青ささえも疎ましい。一晩中がたがたとシャッターを揺らされ続け、お陰でかなり寝不足だ。

「八幡、眠そうだね」

　くぁ、と欠伸を噛み殺していると、戸塚は苦笑混じりにそう言った。正直、眠い。保健室に直行して仮病使って眠りこけたいぐらいに眠い。

　しかしそういう訳にもいかない。何せ次のロングホームルームでは、文化祭での係決めがある。実行委員を誰がやるか、そこで決まるのだ。

「ああ、台風の音がうるさくてな」

「確かに、凄かったね」

　そんな他愛のない会話を遮るように、チャイムが鳴る。それを合図にバラバラと散っていたクラスメイトたちは、まるでパズルゲームのようにあるべき位置へと戻っていく。

「えー、ではロングホームルームを始めます。今日の内容は文化祭での係決めです」

　眼鏡のルーム長は教室にさざめく声が収まるのを待って、遠慮がちに話し始めた。教室は完全な静寂に包まれ、彼からしてみれば相当に仕切り難い空気だろう。これから各々が持つ手練手管で面倒な役目の押し付け合いが始まるのだから、無理はない。

「まずは文化祭実行委員ですが、誰かやってもいいと言う人はいますか」

　その問い掛けに、応える者は一人としていない。それもまた当然だろう。

　実行委員になってしまえば、クラスでの役割は免除される代わりにその出し物に関わる事は難しくなる。つまり文化祭という高校時代で一番フェスティバれる時期に、クラスから離れる事になるのだ。青春を謳歌したい者ほど、回避したい役割だろう。

「えっ、と、誰かいませんか」

　そう、普通ならば、避けて通りたい道だ。けれどそれにメリットを見出せる者もいる。恐らくこの中では、ただ一人だけ。

　俺はすっと背筋を伸ばすと、無言のまま右手を挙げた。

「あ、じゃあ比企谷くんと」

　ルーム長が黒板に「文化祭実行委員　男子　比企谷」と書くのとほとんど同時に、教室中の視線が俺に集まる。俺を知らない彼ら彼女らは無関心に、俺を知る彼女らと彼らは、その顔に驚きをのせて。

「他に誰か、立候補はいますか」

　こんな行動は、まったく自分らしくないと思う。それでも俺は、果たすべき目的の為には必要だと信じている。

　文化祭実行委員になり、このイベントを通して雪乃との関わりを持つ事。それは文化祭を迎える上で、最上位のタスクだった。

「じゃあ、誰もいないようなので、文化祭実行委員の男子は比企谷くんでいいですか」

　返事をする者は誰もいない。その沈黙を了解と受け取ったルーム長は黒板に書かれた『男子』の横に『女子』と書いた。

　続いては女子の実行委員選出だが、後は俺の知っての通りの展開だ。

　結衣がその仕事は大変なのかと訊き、三浦は自分と呼び込みをする予定だからと引き留める。葉山に推された相模は大変鬱陶しい態度で、実行委員の役を引き受けた。

　あの時と違う事があるとすれば、実行委員の仕事に興味を持っていた結衣が相模に揶揄されなかった事ぐらいだ。花火大会での遭遇を回避した事が、功を奏したらしい。

　誰もが嫌がる役さえ決まってしまえば、後は早い。次々と板書されていく名前を見ながら、俺はこれから繰り広げられるであろう未来へと思いを馳せていた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「ヒッキー、どういうこと？　あれ」

「あれじゃ分かんねぇよ。すぐに言葉が出てこないおじさんおばさんか」

　放課後になると、珍しく結衣は教室の中だと言うのに俺に話しかけてきた。まあ結衣にとっては意味不明だろうから、そう言うのも当然だ。

「もう！　分かるでしょ。実行委員の話」

「ああ⋯⋯。まぁあれだ。クラスに残っても居場所ないしな」

　俺は問い質された時の為に用意しておいた言い訳を言うが、結衣はまだ納得していない。というよりも『不満です』と顔に書いてあるし、隠そうともしない。

「別にそんなこと、ないと思うけど」

　拗ねたような態度が、なんともこの頃の結衣には似つかわしい。やたらと拗れている俺や雪乃に対して、よくしていた表情だ。

「⋯⋯部活、いくのか？　俺はあと少しで実行委員会だから、そっち行くけど」

「ううん。ゆきのんも今日は文化祭の用事で来れないから、部活はないって」

「そうか」

　だったら僕にも連絡くれませんかねぇ、連絡先知ってるんだし⋯⋯と思っていると、ポケットの中で携帯が振動する。

　画面を開くと雪乃から『文化祭関連の会合がある為、本日の部活は中止します』とだけ書いたメールが届いていた。ガチで業務連絡だなこれ。まあ結婚してからも『今日の晩ご飯はカレーにするので昼ご飯にカレーを食べないように』とだけ送ってくる事もあるし、割と素の文面なのかも知れない。それにしても昼飯にカレー食うと晩飯もカレーになる率は異常だ。

「それじゃ、そろそろ行くわ」

「あ、うん。頑張って」

　胸の前で小さく手を振る結衣に頷きを返すと、俺は教室を後にした。向かう先は文化祭実行委員会の開催場所である、会議室だ。

　普段は職員会議などに使われているらしいそこに近づく生徒は、そう多くない。廊下で合流したまばらな人の流れは、そのまま会議室の中へと吸い込まれていく。

　会議室の中に入ると、先に来ていたらしい相模の姿を見つけた。いつかと同じように、元々の知り合いと会ったらしくお喋りに花を咲かせている。

　俺は適当な席に座ると、ぼんやりと扉の方を見ていた。もうそろそろ、彼女が来るはずだ。

「⋯⋯⋯⋯」

　そうして扉を見続けていると、一人の少女が会議室に入ってくる。その瞬間、ざわざわと煩かった会話が完全に止まった。

　雪ノ下雪乃はぐるりと会議室内を見回し、俺と目が合うと頬に手をやり小首を傾げる。何故比企谷くんがここにいるのかしら、とでも言い出しそうな表情だった。

　そのやたらと可愛い仕草と視線の先に湧きたったのは男子たちだ。ひそひそと「今、俺みてた？」なんて期待に胸をときめかせている。いやどう考えても俺でしょ。っていうか人の奥さんジロジロ見んじゃねぇよ可愛いのは分かるけれども。

　そんな絡みつくような視線も空気も完全スルーで、雪乃は手近な席に座った。それを合図にしたように、再び会議室に会話の波が押し寄せる。

　やはりこういう大勢のいる場では、雪乃の異質さというか特別さがはっきりと分かる。まとまりのない有象無象の中で、雪乃は見た目から空気までが整いすぎていて、いい意味でも悪い意味でも目立つのだ。

「はい、では文化祭実行委員会を始めまーす」

　そう声に出したのは、ほとんど定刻通りにやってきた生徒会長・城廻めぐりその人である。生徒会メンバーに合図を送ると数人の生徒がプリントを配り始め、彼女たちより遅れて入ってきた平塚先生と体育教師の厚木が腕を組んでその様子を静観している。

　いや、それにしてもめぐり先輩と会うのは久しぶりだ。めぐり先輩が卒業してからというものほとんど会う事もなかったから、「わっか⋯⋯」という感想よりも懐かしいという感情の方が強い。

　嗚呼⋯⋯まためぐりッシュして貰いたい。ついでに「君、最低だね⋯⋯」って蔑まれたい。

　そんな阿呆な事を考えながら、俺は繰り返される光景をただ見守るのだった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　文化祭まで一月を切った。

　また本日も放課後に実行委員会があるわけだが、開始は午後四時から。それまでの時間潰しに部室へと寄り、文化祭準備期間中の部活動について話していると、コンコンと扉がノックされる。記憶のままの展開であるならば、俺は今日の客人の名前を知っている。

「どうぞ」

　雪乃はいつもと変わらぬ冷静な声音で、来訪者へ入室を許可する。ガラリと音を立てて、その引き戸は開けられた。

「失礼しまーす」

　扉を開けた生徒の名前は、相模南。

　それに実行委員で一緒になった二人の女生徒も連れ立って訪れているのも、あの時のままだ。社交辞令的な会話を交わすと、相模は早速本題に入る。

「雪ノ下さんも居たから知ってると思うけど、うち実行委員長やる事になったじゃん？　でもぶっちゃけ何やっていいか分かんないし、できれば助けて欲しいなって」

　貼り付けたみたいな軽薄な笑みを浮かべたまま、軽率に彼女はそう言った。

　当たり前の事だが、相模南は何も変わっていない。囃し立てられるがままに実行委員になり、そして実行委員長にまで就任してしまった。

　俺はできる事ならば、雪乃に実行委員長をやってもらいたかった。陽乃さんから見ればまた雪乃は姉の後ろ姿を追っているように見えるかも知れないが、実行責任者として人、物、金のリソースを駆使し文化祭という事業を運営してみせる事は、経験としてこれ以上ない貴重なものだ。義母さん──雪乃の母親に彼女が認められる一助にもなるだろうし、それに相模による失敗の後始末もつけなくてよくなる。

「つまりあなたの補佐をすればいいという事かしら」

「そうそう」

　しかし現実はそう簡単ではない。いくつかの会話の後、雪乃はそう相模に問い掛ける。

　あの実行委員会の場で、雪乃を実行委員長に推すのは実現性が無さすぎた。現に体育教師の厚木が雪乃に実行委員長になる事を勧めても、彼女は固辞した。残念ながら今のところ、こと文化祭においての物事は規定路線を走り続けている。

「それなら、構わないわ。私も実行委員なわけだし、その範疇から外れない程度ならお手伝いするわ」

「本当に⁉︎　ありがとう、すっごい助かるっ」

　手放しで喜ぶ相模を、俺は半眼で見続けていた。

　このまま行けば、彼女はとんでもない判断ミスを犯し、その結果雪乃は過労に倒れる事になる。本番では目を覆いたくなるような失敗とそれに付随する行動で、多くの人を巻き込む事になるだろう。

　絶対に、そうはさせない。

　あの時俺は、雪乃の孤高を支持した。共感し、憧れてすらいたと思う。しかしその結果が、雪乃に体力の限界を知らしめる事になってしまった。

　そんなまちがいは、もう要らない。彼女たちの知らない未来で、良き隣人たちに恵まれその中心で笑う雪乃の姿を、俺は知っている。彼女がその才腕でいずれそこに至るのだとしても、まちがいを見過ごす事はできない。

「じゃあ、よろしくね」

　そう言って相模は友人と言っていいのかどうか分からない二人を引き連れて、奉仕部の部室を後にした。

　後に残されたのは、晴れ晴れとした表情の相模とは真反対の表情を浮かべた結衣と、少し疲れたような様子の雪乃。ついでに地蔵化していた俺だけだ。

「⋯⋯部活、中止するんじゃなかったの」

　問い詰めるような口調と声に、色はない。結衣のいつもと違う調子に気づいた雪乃ははっと顔を上げるが、その表情を真似するかのように彼女もどこか冷めた表情を浮かべた。

「私が個人的にやる事よ。部活動とは関係ないわ」

「ううん、違うよ。だってさがみんたちが来たのは、この部室だもん。奉仕部に、依頼に来たんだよ」

　食い下がる結衣に、俺は強烈な違和感と空恐ろしさを覚える。

　結衣らしくない、とまでは思わない。ただ俺の知る限り、結衣がこんなにも自己主張するようになるのは、もっと先。それこそ関係性が拗れまくった後だったはずだ。

「だから、あたしも手伝うよ」

「⋯⋯由比ヶ浜さんだって、クラスの方の役割があるでしょう。私ひとりで十分よ」

「クラスの方なら大丈夫。ずっとかかりっきりって事にはならないもん。それに全然、十分じゃないよ」

　語気を弱めた結衣は、その眼差しを柔らかくさせる。その表情にさっきまでの刺々しさはなく、夜露に濡れながら咲く花のようにひっそりと微笑んだ。

「たった一人で十分なんてこと、絶対ないよ」

　哲学めいた響きを持つ言葉が、雪乃の表情に変化を与える。いつしか雪乃も、その表情から険しさを取り除いていた。

「⋯⋯分かったわ。でもクラスの方を優先してちょうだい。こっちの手伝いは、手隙の時だけ。それでいいかしら」

「⋯⋯うんっ！」

　そう言って結衣は、いつだったかのように勢いよく雪乃に抱きついた。

　そんな二人を見て、ようやく俺は思い至る。

　花火大会のあの日、俺が取り付けた結衣との約束。結衣の言動は、俺の「雪乃と一緒に居てやって欲しい」というお願いそのものではないか。

「そろそろ行くか。文実」

　まったくいつになっても、どこにいても結衣には世話になりっぱなしだ。俺は二つ重なる返事を背中に聞きながら、廊下へと続く扉を開ける。

「じゃあ、あたしはクラスに戻るから。手が空いたら連絡するね」

「ええ。でも直近で手伝ってもらう事は何もないわ。お願いしたい場面が出てきたら、こちらから連絡する」

「分かった。それじゃね」

　ひらひらと手を振る結衣と別れると、雪乃と二人で会議室に向かって歩いていく。

「なあ」

　視線を前にやったまま俺がそう言うと、視界の端で雪乃は訝しげに首を傾げる。こんな事を言えば疎ましがられるのは必定だが、言っておかなくてはならない。

「あんまり前に出過ぎるなよ。たぶん相模は仕事ができるタイプじゃないけど、委員長なんだからな」

「あら、誰に向かって言っているのかしら」

　そう言って浮かべられた勝ち気な笑みこそ、雪乃に相応しい。

　魚を捕って与えるのではなく、捕り方を教える。それが奉仕部の基本理念であるはずだ。

「比企谷くん」

　やがて会議室が近づいてくると、不意に雪乃は足を止める。その顔からはさっきまでの勝ち気な笑顔が抜け落ち、代わりに僅かばかりの不安を孕んでいた。

「その⋯⋯。比企谷くんもなの？」

「はい？」

　質問の意図が分からず、思わず間の抜けた返事をしてしまう。何が言いたいんでしょう、この子。

「比企谷くんも、手伝ってくれるのかということよ」

「ああ⋯⋯」

　注意して見なければ分からないぐらいに頬を染め、気恥ずかしいのか上目遣いでそう聞いてくる。久々に見せたさと、庇護欲全開になってしまいそうな程の可愛さに頭がクラクラする。

　正直、抱きしめたい。苦しいわと文句を言われるまで抱きしめ、うなじをくんかくんかと嗅いで嗅覚も触覚も全て雪乃で満たされたい⋯⋯。

　やっちゃダメ？　ダメだわな。うん知ってる。

「まあ、出来る限りでな」

　そんな考えているだけで学外追放級の願望を頭の中だけに押し留めながら、俺はそうとだけ答える事にした。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　雪ノ下雪乃が副実行委員に就任するとお触れがあったのは、数日後の事だった。

　それからすでに何度かの実行委員会が持たれ、その度に雪乃の存在感は増していた。最初こそ俺の忠告通り雪乃は相模を委員長として立てようとしたが、それが叶うことはなかった。相模南が、リーダーとしての才覚を持ち合わせていなかったが為だ。

　そのこと自体、分かりきっていた事だった。大抵の人間はリーダーなんてやりたがらないし、その才能を持たない者の方が多い。相模もその内の一人だったというだけだ。

　だからあまり期待はしていなかったが、確実に火種は燻り始めている。承認欲求を満たし、自尊心を取り戻さんとする相模の思惑は、この世界線の上でも崩れ去ろうとしていた。

　いつぞやと、あまりにも同じ。

　誰も救えない、救われないダンスを、皆一様に踊っている。

「何かあったの？」

　そう言ったのは葉山で、それを受け取ったのは会議室の前に立ちその中の様子を覗き見ている一人の女子生徒だ。

　有志団体の申し込み用紙を取りに行くという葉山と一緒に向かったその先で、数人の生徒が入口を塞ぐようにして中を窺っている。

「えっと⋯⋯」

　まごまごと喋り出す彼女の言葉にはまとまりがなく、よく分かっていない事だけが伝わってくる。無論その話を最後まで聞くつもりはない。干渉すべきタイミングを逃したら、取り返しがつかなくなる。

「ちょっとごめんなさいねっと」

　俺は入口を取り囲む生徒たちに手刀を切りながら割って入ると、ガラリと音を立ててその扉を開けた。

　事件現場になっている会議室の中央には雪乃とめぐり先輩、それから陽乃さんの姿。その三人⋯⋯というより雪乃と陽乃さんが纏う近寄りがたさと電気を放つような痺れるほどの緊張感に、誰もが黙って事の成り行きを見守っている。

「姉さん。何をしに来たの」

「やだなー睨んじゃって。私は有志団体のオファーがあって来てるんだよ？」

「ご、ごめんね。私が呼んだんだ。この前、街でばったり会って⋯⋯」

　詰問する雪乃に、陽乃さんはさらりとその怒気とも言うべき言葉をいなす。めぐり先輩のフォローの言葉も、雪乃にはほとんど届いていない。

「あ、比企谷くんだ。ひゃっはろー！」

「⋯⋯うす」

「あ、隼人も一緒だったんだ」

　陽乃さんに呼び込まれるように、俺たちは返事をしながら会議室の中へと踏み込んだ。どうやら間に合ったらしい。

　その後に起こる出来事を、俺はひたすらに静観していた。

　有志団体として、管弦楽部OGを集めて出演すると言う陽乃さん。彼女は遅れてやってきた相模を試すような視線と言葉で牽制し、そして取り入れる事に成功する。役者が揃えばここまで演目もかぶるのかというぐらい、記憶のままの展開だ。

「みなさん、ちょっといいですかー？」

　雪ノ下姉妹の一悶着を終え、会議室にいつもの光景が戻ったところで相模が声を上げた。立ち上がった彼女に、いくつもの視線が向けられる。

「ちょっと考えたんですけど、文実もちゃんと文化祭を楽しめてこそかなって」

　どこかで聞いたような言い回しに、俺はひとり鼻白む。

　文化祭においてのまちがいは、ここからだ。

　相模南による、決定的な誤判断。油断と甘い考えが招く、文化祭実行委員会崩壊の始まり。

　この日を境に実行委員は人員不足へと陥り、負担は残されたメンバーへとのしかかる。そして一人は倒れ、それでもなお立ち上がろうとする。しかしその悲壮と孤高を支持する俺は、もういない。

「文化祭をちゃんと楽しむには、クラスの方も大事だと思います。スケジュールもかなり前倒しで進めてこれてるし、仕事のペースを少し落とす、っていうのはどうですか？」

　相模の提案に対し、雪乃が口を開くその一瞬前。俺は声を張り、ただ一言をはっきりと告げた。

「俺は反対だ」

　元より静まりかえっていた会議室は、耳が痛いほどの沈黙に包まれる。ペンを走らせる音すら聞こえてきそうな静寂。それをかき消すように、俺は言葉を続けた。

「前倒しならそのまま本番まで走るべきだろ。こういうイベント事には途中でイレギュラーやら横槍が入れられて遅れてくもんだし。それで直前になってあれが無いこれが無いってバタバタしだすんだ。それを防ぐ為にも、今の進行をキープすべきだろ」

　思いもよらないところからの反対意見だったのか、相模だけでなく雪乃や陽乃さんまで目を丸くしていた。

　相模による誤判断が起きた原因は、あの頃の俺には分からなかった。いや、考えてすらいなかったように思う。いくら陽乃さんに気に入られ、気が緩んでいたとは言え、不自然なぐらいの状況の誤認識と、誤判断。

　目的論で言えば、そうする事で相模にとって達成される目的がある。それすなわち、進行の前倒しを理由に自分がクラスの出し物へと参加できるようにする事。文化祭実行委員会でコンセンサスを得ているという、大義名分を獲得する事だ。

　馬鹿らしい。そんなものの為に、あの時雪乃は倒れたのか。

「でも、みんなだってクラスの方にも参加したいだろうし⋯⋯」

「クラスの方に顔を出しにくくなるのは、実行委員になった時点で分かりきってる事だろ。クラスに貢献したければ文実が始まるまでにやればいいし、文実だって毎日あるわけじゃない」

　意思の弱い者ほど、相模の提案のような甘言になびく。そしてそれ以上に、声高に主張する者の意見を受け入れてしまうものだ。会議室に弛緩と私欲が伝播する前に、こんな愚考は叩き潰さなくてはならない。

「で、でも⋯⋯」

　暴力的なまでの正論に、相模の反論はあまりに弱い。ディベートの場であればもはや死に体といった様相だが、俺に手を緩めるという選択肢はなかった。

　悪いな相模。

　お前に恨みはないが、雪乃を守る為ならなんだってやる。まちがいはもう、見過ごせない。

「委員長権限でそう判断するというのなら、勝手にすればいい。けどそれでもし遅れや問題が出てきたとしたら、責任を取ってくれるって事でいいんだよな？　相模実行委員長」

　俺の真正面からの問いかけに、相模は今度こそ完全に沈黙した。

　あまりに手厳しいとは思う。しかしここまで言われて、自分の意見を押し通そうとはしないだろう。

「⋯⋯⋯⋯各自作業に戻ってください」

　相模は長い沈黙の後、か細い声を絞りだした。緊張感に耐えかねたかのように、またざわざわと会議室内に喧騒が戻ってくる。

　──なにあの言い方。

　──もうちょっと言い方あるよね。

　相模の取り巻き二人の方から何やら聞こえてくるが、彼女たちは気付いているのだろうか。相模の考えは間違いだったと、そう言っている事に。

　さて、俺も仕事をするかと机に視線を戻す刹那、不穏な視線とかち合う。

　いつからそうしていたのか、陽乃さんは俺と目が合っても逸らそうとせず、内緒話でもするみたいに片頬に手をあてる。

『か・ほ・ご』

　唇でその三文字を象ると、彼女は愉快そうに笑うのだった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　会議室での一件から今日でおよそ三週間、文化祭まで一週間を切った。

　今や文実の詰所になっている会議室にはほとんどのメンバーが揃い、進み気味だったスケジュールはキープどころか更に前倒し状態。お陰で現時点でオープニングセレモニーとエンディングセレモニーのリハーサルまで出来ている。

　やはり人の数は力だ。俺の発言の所為で簡単にサボれない雰囲気が出来上がり、毎回ほぼ全員が集まるようになっていた。

「相模さん、こっちの書類の確認を」

「うん。ありがと」

　相模はというと、当たり前だが文実には毎回出席している。もう自分の発言など忘れたのか、順調過ぎるぐらいの進行具合に自信を持ってきているようだ。巻きで進んでいくにつれて、本来の委員長としての仕事を雪乃から相模へと移行していったのも大きいだろう。

　もちろん俺と相模の関係は良好とは言えず、視線を合わせようともしないし、現時点でも一切口をきいていない。後からケチがつくパクリのキャッチフレーズを潰したのが、決定的だったと思う。

　そのお陰もあるが、あの時ほど忙しくはない。キャッチフレーズ再検討での俺の風刺的な発言がなければ、俺の事を悪く言う声も少なかった。まあ、「クラスより文実優先だからなぁ〜」って当て擦りのような事を言う奴はいたが。主に相模の取り巻きに。

「ゆきのん、有志団体の最終リストできたよ」

「ありがとう。確認しておくわね」

　準備が順調な背景には、少なからず結衣の活躍もあった。外部の人間の出入りが多くなってきたタイミングで、有志団体の取りまとめを快く引き受けてくれたのだ。約束通り雪乃の手伝いが出来て、結衣も満足そうだった。

　しかしそう、外部の人間の出入りが激しいという事は、この人もまた会議室に顔を出す回数が増えたということだ。

「ひゃっはろー、比企谷青年。順調そうだねぇ」

　背中に声をかけられただけで、思わず身震いしてしまう。その声が愉快そうであればあるだけ、空恐ろしさを感じるのだ。

　俺の隣の空席に腰掛けると、机に片肘をついて横顔を見詰めてくる。

「何しに来たんですか」

「おや、雪乃ちゃんみたいなこと言うね。やっぱり付き合ってるの？」

「なんでそうなるんですかね」

　俺は頭をかきながら致し方なしと仕事の手を止める。陽乃さんの目を見ると、やはり隠そうともしない好奇が滲んでいた。

「ねえ、作戦は上手くいったみたいだね」

　そっと俺の耳を手で覆うと、うような声音が不穏に鼓膜を震わせた。何もかもを知っているとでも言うかのように、彼女の言葉には確信が満ちている。

「⋯⋯なんの話ですか」

「さあ、なんの話でしょう？」

　ふわりと俺から離れると、可笑しそうに笑ってみせる。

　ぶっちゃけ、この人と話すのやだなぁ⋯⋯。この頃の陽乃さんは埒外すぎるし聡すぎる。彼女の年齢を追い越した俺ですら、手に余る存在だ。

「ねえ、君のしたことの意味、分かってる？」

　グロスに艶めく唇が、三日月を作った。ほら、またこんな表情をするのだ、彼女は。

「試練を遠ざけたり避けているだけじゃ、駄目だよ」

　俺を見詰める目は笑っているのに、その瞳は真剣そのもの。いつの間にか背中に汗が伝っている。

　分かってるんだよ、そんな事。一体何年、雪乃と一緒に過ごしてきたと思ってるんだ。

「そのうち君に頼りっきりになっちゃうよ、雪乃ちゃんは。それがいい事だとは思わないけどなぁ」

　その指摘は余りにも的確で、やはりというか彼女たちはどうしようもなく姉妹なのだと思う。

　雪ノ下雪乃は、優秀だ。豊富な知識と辣腕で実質的にこの文化祭を運営し、現時点では順調としか言いようがない。

　しかしそれは、陽乃さんがいたから。文化祭としての正解を、彼女は知っていたからだ。

　答えのある問題の対処は出来るが、こと友情や恋愛といった正答がない人間関係の話になると、雪乃はどうしたらいいか分からない。故に模倣する。そして依存する。

　悪癖だ。この頃の雪乃には仕方のなかった事とは言え、そう思う。いずれ彼女は自分自身の力でそれを克服していく事になるが、もし俺がその為に必要なプロセスまで排除してしまっていると考えると、得体の知れない焦燥感に襲われる。

「ま、君が雪乃ちゃんの面倒を最後までみてくれるんなら、いいんだけどね」

　心にもない事を言うと、陽乃さんは「じゃ」と手を振って会議室を後にした。

　面倒ならそりゃ、一生かけてみるけれど。そういう問題じゃないのだ、これは。

　後に残された俺は頭を抱えてしまいそうになる手をどうにか机に押さえつけ、仕掛かり中の仕事へと戻る。

　泣いても笑っても、高校二年の文化祭はこれが最後で、これっきり。三度目のチャンスなど、ありはしないのだから。

お読み頂きありがとうございました。そしていつもたくさんのお気に入りと感想をありががとうございます。  
誤字脱字報告も助かってます。何度確認しても残っているものですね⋯⋯。  
  
文化祭編前編は楽しんでいただけたでしょうか。後編は文化祭本番という事もあり、テンション高めに行きますよ！  
ログインしていなくても感想は頂けるように設定していますので、何か一言でも頂けると私が喜びます（そして筆が捗ります）。  
  
全体の話としては、これで折り返し地点といったところです。完結までお付き合い頂けたら幸いです。

雪ノ下雪乃の悲壮はもう要らない。下

「おまえらっ！　文化してるかー！」

「うおおおぉぉぉ！」

「千葉の名物、踊りと──⁉︎」

「祭りいいいぃぃぃぃ！」

「同じ阿呆なら──⁉︎」

「シンガッソーー──！」

　いつか見た光景に、俺は思わず胸を熱くさせていた。

　俺の知る、めぐり先輩の最高にフェスティバっていて輝いている瞬間だ。俺は装着したヘッドセットのマイクがオフになっているのを確認し、拳を突き上げて絶叫していた。やはりめぐり先輩はエモ過ぎる。

「比企谷くん？　何をしているの？」

　耳にしたイヤーピースの中からザッとノイズがのった後に、雪乃の冷静な声が鼓膜に届く。あー、見られてましたか。でも仕方ない。エモ中のエモを体感してしまったら、その情動に身を委ねるしかないではないか。

「なんでもない」

　マイクのスイッチを一瞬だけ入れてそう答えると、俺はステージの上を見上げた。

　総武高校の文化祭開催を告げる、オーニングセレモニー。

　めぐり先輩のコールアンドレスポンスの後に続くのは、大音量のダンスミュージックと派手な衣装を身に纏った踊り子たち。あの頃の熱量と熱狂をそのままに、華々しくそれはスタートした。

「──PAです。間もなく曲あけます」

「──了解。相模委員長、スタンバイオーケーです」

　雪乃からのインカムに、俺は口を引き結んだ。喋るのは自分ではないというのに、妙に緊張する。

　あの時の相模は、本当にダメダメだった。カンペを落とすは、カンペ見ながらでもまともに喋れないわ、あれ以上に酷い挨拶を俺は知らない。

　あの失敗の所為で相模はエンディングセレモニーをばっくれ、俺は校内中を走り回るハメになった。副産物的に雪乃たちのバンド演奏を聴くことが出来たのは、今となってはよかったと思う。

　もしこの挨拶が上手くいったらだが、ステージの上で輝く彼女たちの姿が見れなくなる。それは少し寂しい気がしたが、俺は相模が失敗しないようにする為に、スケジュールの前倒し進行を推し進めてきたのだ。そんな個人的な願望は、そっとしまっておくべきだろう。

「それでは続いて、文化祭実行委員長よりご挨拶です」

　司会進行を務めるめぐり先輩のアナウンスで、相模はステージへと歩みを進める。表情に余裕はなく、その目は真剣そのもの。しかしただの緊張とは違う、気迫めいたものを纏っているように見えた。

　キラキラと過剰なまでに飾り付けられたステージの、その真ん中。

　千人を越す生徒たちの視線を一身に受けて、ワイヤレスマイクを握る相模の手は震えている。

　すっ、と息を吸い込む音までそのマイクは拾い、アンプリファイされてスピーカーから溢れ出た。

　──頼むぞ、本当に。

　俺は祈るような気持ちで、相模の姿を見詰め続ける。

「文化祭実行委員長の相模南です。今年のスローガンは──」

　すらすらと喋り出したのを見て、俺は思わず「はぁーっ」と大きく息を吐いた。

　なんだよ。やれば出来るんじゃねぇか。っていうか前がやってなさ過ぎなんだよ。

　リハーサルのお陰で、喋り始めからハウリングさせるなんて初歩的ミスもない。雪乃が何度も繰り返し練習させていたから、ほとんど噛む事も詰まる事もなく挨拶は進んでいく。

「──挨拶、もう間も無く終了です。以降、オンタイムで進行します」

　了解。

　俺は安堵に胸を撫で下ろしながら、どこかで見ているだろう彼女に、唇の形だけでそう言った。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　文化祭の一日目は、校内のみの開催だ。

　二日目の一般公開日がメインだと捉えるなら、今日は本番環境での試運転日だと言える。

「君と俺は遊べないよ。俺は飼い慣らされていないから」

　俺は教室の外にえられた受付で、パイプ椅子に背中を預けながら舞台の台詞に聞き入っていた。

　いつかと同じで、俺がクラスの出し物に協力できるのは今日だけ。明日からはがっつり文実の仕事が待っている。突然やってきたにわかには、相変わらず受付ぐらいしか出来る事はない。

「おつかれっ」

　耳に馴染んだ声が、頭上から降ってくる。俺が見上げると結衣は呼びかけたくせに目を逸らし、その手には何やら小さな包みを持っていた。

「おお、お疲れ」

　結衣は俺の隣に置いてあったパイプ椅子に腰掛けると、トン、と静かにその包みを置いた。ちょうど俺と結衣の、真ん中のあたりに。

　備品か何かだろうか。しかし今現在も海老名さん監修のミュージカルは進行中だし、机に置くというのも解せない。

「⋯⋯何これ」

「⋯⋯お弁当」

　待っていても何も言ってくれないので俺がそう訊くと、結衣はそうにそう言った。

　ほう⋯⋯お弁当⋯⋯。しかし俺の記憶にある限り、この場で振る舞われたのはハニートーストと称された生クリームオンザ食パンだったはずだ。そのクオリティが衝撃すぎて、よく覚えている。

「そうか」

「うん」

　何とも中身のない会話だ。結衣がその包みを開けると、姿を現したのは弁当箱が二つ。

「これ、ヒッキーの分」

　結衣はやはり俺とは目を合わさないまま、すっと机の上で弁当箱を滑らせてくる。

　だから、気付いてしまった。

　結衣の左手。親指と人差し指に貼られた、絆創膏の存在に。

「まだパン買ってないでしょ？」

「そうだけど⋯⋯。いいのか？」

「うん。食べて貰うために作ってきたんだし」

　薄く頬を赤らめた結衣と、ようやく目があった。遠慮がちな視線がむず痒く、今度はこっちから目を逸らせてしまう。

「じゃあ、いただきます」

　手を合わせて弁当箱の蓋を開けると、そこに広がっていたのは色鮮やかなキャンバスだった。卵焼き、ブロッコリー、プチトマト、ケチャップソースのかかったハンバーグの下には少し元気を無くしたレタスが敷かれている。

　それぞれの料理は、弁当の定番中の定番だ。しかしそれぞれが手作りである事が、不揃いな見た目から分かる。昨日も遅くまで準備で残っていたはずなのに、これを早起きして作ってきてくれたのかと思うと、頭が下がる思いだった。

「⋯⋯すげぇな」

「い、いやー、あはは⋯⋯。結構ママに手伝って貰っちゃったけどね」

　ばさばさと手を振ると、結衣はそう言って先に弁当を食べ始める。

　俺もそれに続いて、まずはハンバーグを一口。流石に出来立てではないのでジューシーというわけにはいかないが、挽き肉に染み込んだ塩味とケチャップソースの酸味のバランスが絶妙だ。

「⋯⋯うまい」

「ほんと？」

　唇に箸をつけたまま、下から覗き込んでくる仕草が実年齢以上に幼く見える。ぎゅっと心臓を掴まれるような感覚は、しかし違和感へと変貌していく。

　何故結衣は、わざわざ弁当を作ってきてくれたのだろう。

　多分、考えなくても分かることだ。俺はあの花火大会で、はっきりと「雪乃が好きだ」と彼女に伝えた。それでも結衣は、諦めないという事だろう。あの時と、同じように。

「で、誰が作ったんだ？」

「や、焼いたのあたしだからっ。っていうかその顔むかつく！」

　薄っぺらな笑いを浮かべる俺に、結衣は肩をぶつけてくる。お陰でまるで恋人同士がれ合うみたいだなんて、余計な事を考えてしまう。

　誰かに見られやしていないだろうかと周囲を見回してみるが、注視してくるような目はどこにもない。誰もが祭りの熱に浮かされて、廊下は喧騒に満ちている。

「⋯⋯ねえ」

　僅かな沈黙の後に、結衣はくるりと表情を変えて訊いてくる。

「ゆきのんには、言った？」

「何を？」

　完全に主語を捨て去った問いに、俺はプチトマトを弁当箱の角に避けながら応える。プチがつこうが、トマトはダメだ。

「その⋯⋯。告白、したのかなって」

　余りに唐突で直裁な質問に、俺は思わず硬直してしまう。阿呆みたいにポカンと口を開けたまま、脳だけが賢明に働き続けていた。

「⋯⋯⋯⋯いや、してないけど」

「しないの？」

「今のところ、する予定はないな」

「なんで？」

「なんでって⋯⋯今言ったって、ダメだろ。多分だけど」

　矢継ぎ早な結衣の質問にできるだけ真摯に答えながら、俺は雪乃の姿を思い浮かべた。

　雪乃の俺に対する対応は、随分と柔らかくなったと思う。それこそこの時期にしては、俺の記憶にある時に比べてずっと良好だと言える。

　けれど、それだけだ。

　告白して付き合うだけではダメなのだ、きっと。

　何故なら俺はまだ誰も、“救えていない”のだから。

「⋯⋯そっか」

　俺の答えに、結衣はひっそりと安堵ともとれる息を吐いた。

　その桃色の吐息の行先を、俺はまだ知らない。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　文化祭二日目になると、校内の雰囲気はがらりと変わったように思える。

　文化祭本番ともいえる今日は一般公開日という事で学外の人々の姿が数多く見え、その分ホストである生徒側のやる気も上がるというもの。昨日よりも熱量の増した呼び込みの声に、それぞれの教室から聞こえてくる歓声や叫び声。そうやって周囲が盛り上がれば盛り上がるだけ、俺は冷静になっていく。いつでも熱狂の中に、トラブルの火種はあるのだ。

「仕事の進捗はいかがかしら。記録係りくん」

　背中に投げかけられたどこかうような声に、俺は振り返る。

　左腕に文化祭実行委員の腕章を巻いた雪乃は、腕組みの上でどこかおかしそうに笑みを浮かべていた。

「仕事なら概ね順調だ」

　俺はそう言ってパシャリと、肩から下げたカメラで笑みの残る雪乃の顔を撮る。

　よし、後でこっそりデータを持ち帰ろう。それで携帯の壁紙にしよう。⋯⋯ん？　でもうっかり誰かに見られたら相当気持ち悪がられるな。よし、じゃあ現像だ。現像して部屋に飾っておこう。

「ちょっと⋯⋯勝手に撮るのはマナー違反じゃないかしら？」

「人の名前を覚えないやつに言われたくないな」

　俺の皮肉に、やれやれとでも言うように雪乃はこめかみに手をやった。いいねその表情。もう一枚、いやあと百枚ぐらい撮りたい。データがいっぱいになるまで雪ノ下雪乃撮影会がしたい。なにそれ素敵。

「⋯⋯で、お前の仕事は？」

　うっかり人差し指がまたシャッターボタンを押してしまう前に、俺は分かりきった事を問い掛ける。

「私は見回りよ」

　そう言って歩き出した雪乃の隣を、いつかのように歩幅を合わせて歩く。その言葉の通りに、雪乃が教室を見る目はどこか優しいようでその奥には鋭さがあった。

「⋯⋯あのクラス、申請内容とやっている事が違うわ」

　そう言って見上げたサインプレートには、三年B組の文字。恐らくクラス名を見ただけで実際の出し物と頭の中のデータベースを照合し、その不一致に気付いたのだろう。普通に常人離れした事をやってのけるうちの奥さんがちょっと怖い。

「トロッコロッコね⋯⋯」

　見覚えのある看板を眺めていると、雪乃はすっと俺の横から離れて受付へと向かう。

「代表者の方はいらっしゃいますか。申請内容と異なっているようですが」

　雪乃がそう言った瞬間、受付の女子生徒たちが「やっば」「文実じゃん」「ばれちゃった！」とざわつき出す。後は知っての通り。勢いで誤魔化す為に俺と雪乃を無理矢理にトロッコに乗せようとする。

「ちょっ、ちょっと」

　雪乃は先輩方に両手を掴まれ背中を押され、助けを求めるように俺に視線を送ってくる。

　もちろんこの展開を知っていれば回避できる⋯⋯のだが、あえてしない。理由は言わずもがなだ。

　しかし知っているが故に、身体が変に構えてしまったのだろう。

「トロッコの旅へご案な〜い！」

「うおぉっ」

「きゃっ⋯⋯」

　先輩方に押し込まれた瞬間に、俺は雪乃とぶつかり合うのは何とか避ける事はできたが、接触は回避できなかった。というか、触っていた。俺の手が、雪乃の太ももを。ともすれば鼠径部にまで到達せんと、俺の手は雪乃のスカートに中に入っていた。

「す、すまん⋯⋯」

　咄嗟に手を引っ込め、深く首を下げて平謝り。別に初めて触るわけでもないのに、心臓は無秩序なまでに跳ねていた。

「⋯⋯⋯⋯っ」

　対する雪乃はというと当然そんな部分を異性に触れられるのは初めてなわけで。顔を紅潮させ目は潤み、口はパクパクと動くだけで言葉が出ない様子だった。なんだこの反応クソ可愛いな。

「えー、本日はコロッコロッコにご乗車頂きまして誠にありがとうございます。それでは世界の深淵、神秘の地中世界を存分にお楽しみ下さい」

　そんな俺たちの様子など知ってか知らずか、きな臭い口上の後にトロッコは動き始める。

　コースは机や鉄板、トタンを組み合わせた簡素なもの。それを人力で転がすだけなのだから、下手なジェットコースターよりも怖い。トロッコを押す黒子たちのミス一つで、それほど高さはないとはいえ机の上から落ちる可能性だってある。

「雪ノし⋯⋯」

　大丈夫かと問いかけようとした瞬間に、俺の手が温かい感触で包まれる。雪乃は前を見詰めたまま、縋るように俺の手を握ってきていた。

　こんな事、俺の知る世界線であっただろうか。あれば絶対に覚えているはずだ。

「⋯⋯」

　しかしまあ、そんな事はどうでもいい。

　俺は我ながら姑息だと思いながらも、慰撫するようにそっとその手を握り込んだ。

「それでは追加で変更の申請を出して下さい。それから利用者には説明の徹底を」

「えー、はい、まあそのぐらいなら⋯⋯」

　トロッコから降りると雪乃はおぼつかない足取りながら、しっかりと先輩方に釘を刺していた。その頬にはまだ赤みが差していて、いつもの有無を言わさぬような怜悧さが表情の影に隠れてしまっている。

　三年B組の責任者の生返事を聞き届けると、俺たちは再び廊下を歩き始めた。俺たちの間に会話は無く、代わりに先ほどまでよりも半歩ほど空いてしまったがあるだけだ。明らかに、距離を取られている。

「⋯⋯その、すまん」

　我ながらどの事を言っているのかよく分からない謝罪だ。対する雪乃は、こちらを見ようともしない。

「⋯⋯不可抗力による事故でしょう。謝る必要はないわ」

　雪乃の頭の中にある事象は、脚を触ってしまった事であるらしい。俺でなければ気づかないほど僅かに上擦った声が、初々しい反応だ。

「⋯⋯それでも、すまん」

「⋯⋯気にしなくていいわ」

　雪乃はそう言うが、嫁入り前の女の子の、しかも大事な部分にほど近い所を触ってしまったのだ。いくら将来的にお嫁さんになってもらうとは言え、いくら謝っても謝り足りない事案だろう。

「いやでも、本当申し訳ない⋯⋯」

「⋯⋯しつこい。謝らなくてもいいと言っているの」

　思い出してきて恥ずかしくなって来たのか、その横顔にはまた赤さを取り戻してきている。

「その⋯⋯私も、触ってしまったし。⋯⋯ごめんなさい」

「ああ⋯⋯」

　今度は手を握ってきた事を思い出しているのか、雪乃は俺の手を握り込んでいた左手を右手でさする。余りにもいじらしい仕草に、頭が沸騰しそうだった。

「それなら謝る必要ないぞ。別に嫌じゃなかったし」

　前言撤回。頭沸いてた。

「それなら、私もよ」

　しかしその発言に、俺の頭は沸いているどころか瞬時に蒸発した。驚愕の表情のまま、思わずじっと雪乃の顔を見てしまう。この子、言っている意味が分かっているんだろうか。

　異性に身体を触られて、嫌じゃなかったと言ってるんだぞ？　いつもみたいに両手で撫で回した上にペロペロくんかくんかしてもいいと、そう言っているんだぞ？　いやそこまでは言ってねぇな。

「⋯⋯⋯⋯っ！」

　脳内でめぐり先輩に「君、最低だね⋯⋯」と蔑まれながら雪乃の顔を見つめていると、ようやく彼女は自分の発言の意味に気付いたらしい。その頬の赤さたるや、トロッコに乗っていた時の比ではない。

「かっ、勘違いしないで欲しいのだけどっ。思っていたより嫌悪感がなかったというだけの話よ。変な意味でとらえないで貰えるかしら」

　早口で言うけど、あんまり言ってる意味変わってないんだよなぁ⋯⋯。

　一瞬俺を捉えた瞳は羞恥に揺れ、その相貌は常にないほど赤く染まったままだ。

「⋯⋯そろそろ行くか。地域賞とかの投票結果、もう分かってる頃だろ」

「そ、そうね⋯⋯」

　そう言った俺と雪乃の間には、さっきから変わらない空間が空いたまま。

　別にまあ今この時に限って言えば、こんな距離感もいいのかも知れない。

　俺はポリポリと頬をかくと、こちらにまでうつってしまったらしい頬の熱さに気付かない振りをした。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　体育館の舞台袖は、衣装や小道具、ギターやキーボードにと完全に楽屋状態だった。

　そんな雑多な空間も、雪乃が一歩足を踏み入れると空気が変わる。その僅かな変化は、舞台袖で取り巻きたちと談笑していた相模にも分かったのだろう。ちらりと彼女は、視線で雪乃の存在を認めた。

「相模さん。エンディングセレモニーの打ち合わせをしたいのだけど」

「あ、うん」

　声をかけられた相模は談笑の輪から片手を上げて外れると、雪乃の方に歩みを進めた。

「地域賞と優秀賞の結果はもう受け取った？」

「うん、ここに」

　そう言って相模はブレザーのポケットに手を突っ込み、しかしそこからは何も出てこない。

「あれ？」

「どうしたの？」

　実行委員長と副委員長の動きに気付いためぐり先輩がやってくると、相模にそう聞いた。相模はブレザーのポケットに何度も手を突っ込んだり中を開けて覗き込んだりしているが、そこに何もないのは明らかだった。

「その、地域賞と優秀賞の結果の紙をもらって、確かにここに⋯⋯」

　段々と相模の顔から、色が失われていく。

　⋯⋯マジかよこいつ。

　自分が失踪しなくなったと思ったら、紙だけ失踪させやがった。

「では投票用紙は？　まとめてあるのなら、数え直すだけで済むでしょう」

「それが⋯⋯集計が終わったので、もうゴミとしてまとめちゃってて⋯⋯」

　何事かと集まって来たいた文実メンバーの一人が、申し訳なさそうにそう言った。事実が一つ明らかになる度に、状況は更に悪くなってきている。

「再集計にかかる時間は？」

「まず投票用紙の入ったゴミ袋を見つけ出して、それを分別しながらだから⋯⋯一時間以上は」

「それだと間に合わないわね⋯⋯」

　沈痛な空気が流れ出し、誰もが口を噤む。

　非常にまずい状況だ。これではいくら相模がいたところで、折角順調に運んでいた文化祭運営に汚点を残す結果になる。

「⋯⋯探すしかないな」

「そうね」

　俺の呟きに頷きを返すと、雪乃は舞台袖の端にあったホワイトボードの前まで歩いていく。進行表の貼ってあったそれをひっくり返すと、簡単な校内マップを描いて俺たちを振り返る。

「相模さん。今日移動した範囲を教えてちょうだい」

「えっと⋯⋯」

　相模が指差すところを、雪乃は赤のマーカーペンでチェックしていく。文化祭実行委員長として、色んな所を見て回っていたのだろう。結果として校舎内のほとんど全てが、捜索対象となっていた。

「ブロック分けして、それぞれ散るか」

「ええ」

　俺が言い始めるのとほとんど同時に、雪乃は校内マップにアルファベットを割り振っていく。考える事は同じ、か。

　めぐり先輩が舞台袖にいた文実メンバーと生徒会メンバーに声をかけると、関係者が全員集まる格好になる。集まったメンバーに雪乃がテキパキと指示を出す間、相模はずっと沈黙したままだった。

「では、割り振られた範囲の捜索が終わっていなくても十五分後に集合して下さい。それで見つからなければ、もう一度未捜索範囲の捜索を」

「待て。雪ノ下は残った方がいいだろ」

　俺はホワイトボードに書かれたアルファベットと雪乃の名前を指差し、解散しそうな雰囲気を縫い留めた。

「⋯⋯何故？　私も探すわ」

「お前に体力がないからだよ。それに司令塔が残ってないと、いざ見つかった時や不測の事態が起きた時の判断者がいなくなる」

　俺の指摘は雪乃の痛いところを突いたらしく、明らかにむっとした表情になる。しかし、反論もないらしい。

「⋯⋯分かったわ。では皆さん、宜しくお願いします」

　雪乃の一言に、文実メンバーはそれぞれに散っていく。俺もそれに続きながら、舞台袖を去る間際に振り返った。雪乃は言外に「よろしく」と頷き、相模は拳を握ったまま床を見つめている。

　──分かってる。

　俺は目だけでそう言って、彼女たちに背を向けた。

　あっという間の十五分が経ち、手書きの校内マップは無情な赤に染まっていた。つまりは捜索範囲の九割方を消化しても、結果の書かれた紙は見つけられていない。

「芳しい状況ではないわね⋯⋯」

　ホワイトボードを見る雪乃の視線は鋭さを失い、諦念すら滲んできている。状況が状況だ。希望的観測から、現実路線で物事を考える必要がある。

「⋯⋯どうする？」

　俺はあえて自分の意見は挟まず、雪乃にそう問いかける。雪乃はホワイトボードを見たまま、マーカーペンを走らせた。

「リミットはあと十分ね。見つけられれば予定通り。もし見つからなければ」

　雪乃はホワイトボードにリミットの時刻を書き入れると、そこで相模を見た。最後は相模に決断させるつもりなのか、無言で彼女の答えを待つ。

　しかし、それも難しい話だ。相模の顔からは生気が消え失せ、ろくに頭がまわっていない様子だった。

「最悪はお詫びを入れて賞の発表は後日、だろうな」

　俺の提言に、相模の肩口が僅かに揺れた。いつかのように、賞をでっちあげるなんて提案はしない。この場合の責任を誰が取るかなんて、説明するまでもない話だ。

「それでいい？　相模さん」

「⋯⋯⋯⋯うん。うちももう一回、探す」

　雪乃の問いかけに、相模は息を吹き返したみたいに、その瞳に意思を取り戻す。

　エンディングセレモニーまであと少し。使える人員も限られている。結果の書かれた紙を見つけられる可能性の方が、低い。

　それでも──僅かでも可能性があるなら、持てる手は尽くそう。相模もまだ諦めていない。であれば、大丈夫だ。根拠も何もなく、ただそう思う。

「じゃあ、十分後だな」

「ええ」

　俺がそう言って雪乃を見ると、祈りを込めるような視線とぶつかる。

　その目に込められた想いをぐっと手のひらに握りしめて、俺は再び舞台袖を後にした。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　もう一度舞台袖に戻ってきた頃には、心拍数は上がり切っていた。

　脇腹は痛いし、肺は悲鳴でも上げるかのように大きな声で鳴いている。やはりたったの十分で体育館と校舎の往復は、相当に辛い。

「あ、ヒッキー⋯⋯」

　ホワイトボードの前には、雪乃の隣に結衣の姿もある。既に事情は聞いているのだろう。その目にはただ心配だけが浮かんでいた。

「どうだ？」

　俺の問いかけに、雪ノ下は無言でふるふると首を振った。そして俺の捜索範囲を斜線で塗りつぶすと、手書きの校舎マップは赤で埋め尽くされた。これでもう、心当たりのところは全て探し尽くした事になる。

「比企谷くん、相模さんを見なかった？」

「いや⋯⋯」

　そう言われて辺りを見回すが、当然その姿はない。

　視界に入ってきた葉山たちは、エンディングセレモニー直前のバンド演奏の準備をしている。さっきまでステージでタクトを振っていたであろう陽乃さんは、壁を背に腕を組んで俺たちの様子を見ていた。

「副委員長。プログラムの変更申請をしたい。もう一曲追加でやらせて貰えないか」

　葉山の提案に、雪乃はそんな事が可能なのかと問い返す。いつか見た、あの光景がリプレイされていく。

　これじゃ余りにも、あの時のままだ。いや、相模とあの紙がバラバラに失踪している分、より状況は悪い。

「⋯⋯比企谷くん」

　俺は黙り込んだまま、頷いて続きを促す。その先に続く台詞を、俺はもう知っている。

「あと十分、時間を作るわ。それで見つけられる？」

　雪乃の覚悟の込もった視線を受けて、俺は言葉よりも前に表情の変化で返事をする。まだ肩で息をしているせいで、片頬を吊り上げるだけの、何とも不恰好な笑みになっているだろう。

「任せとけ。絶対に見つける」

　その自信の根拠は、随分ずるいものだとは思う。紙の行方は皆目見当もつかないが、相模がどこにいるのかを、俺はもう知っている。

「⋯⋯時間稼ぎの方は、任せたからな」

「ええ、任せてちょうだい」

　そうやって取り交わす勝ち気な笑みの、なんと心強い事か。俺は踵を返すと、舞台袖を出る。目指す場所は一つ。特別棟のその上、相模がいるであろう屋上だ。

　体育館から校舎に続く通路を、人波に逆らって早足に進んで行く。

　大一番とも言える最後のステージを見ようと、生徒たちの姿は次々体育館に吸い込まれていっていた。反面人気のなくなった校舎は、さながら伽藍堂。

　段差を飛び越え、廊下を駆ける。階段を一段二段抜かしで駆け上がると、安心しかけていた心臓は再び尻を叩かれ早鐘を打ち出す。肺が軋むのも、額に浮かぶ汗も構わず真っ直ぐそこを目指した。

　屋上へと続く階段は、文化祭の間は荷物置き場になっているらしい。俺の行く手を阻むように置かれた備品たちを押し除け、やっとの事で鍵の壊れた扉を前にする。

　荒い呼吸を少しだけ整えて、その扉のノブに手をかけた。

　扉を開く。吹き抜けるは。見上げた空は蒼穹。果たしてそこに相模の姿は──。

「⋯⋯いない？」

　屋上に足を踏み入れ、辺りを見回す。相模どころか、人っ子一人いない。

　どういう事だ？

　背中に伝う汗に冷や汗が混じる。未だ息も思考も整わず、混乱だけがぽつねんとそこに在った。

　いやしかし、相模が屋上にいないのであればここに留まる必要はない。俺は校舎の中に戻りながら、記憶の中の心当たりを探っていく。

　あの時、俺はどうやって相模を見つけるに至ったのか。ヒントは材木座との会話だったが、もうその当ては外れている。だとすれば、何かきっかけがあるとすれば⋯⋯あそこしか残っていない。

　乳酸に苦しむ大腿に鞭を打って、廊下を駆けていく。やがて到達する、二年F組の教室の前。

　パイプ椅子に座るのは、青みがかった黒髪、ポニーテールの少女。川崎沙希はあの時と同じように、長い脚を組み窓越しの景色を眺めていた。

「川崎⋯⋯」

　俺の問いかけに、はっと川崎は顔を上げる。

「え⋯⋯あんた、なにぜーはー言ってんの？」

「相模、見なかったか？」

　川崎の質問には答えず、俺は不機嫌とも取れるほどぶっきらぼうにそう訊いた。もう残り時間は、それほど長くはない。

「いや、見てないけど⋯⋯」

「そうか⋯⋯」

　落胆に落とした肩が、乱れきった呼吸に上下する。

　これで、手詰まりなのか。

　相模は見つからず、結果の書かれた紙すらも見つからない。このままいけば、次長である雪乃が全生徒の前で各賞の発表を先延ばしにする事を謝罪しなければいけなくなる。それだけは、絶対に──。

「あ、そうだ」

　川崎の声に思考が中断される。ブレザーのポケットを漁った彼女の手の中にあるのは、頼りないほどよれよれになった一枚の紙。誰かに踏みつけられたのか、端の方には足跡までついている。

「これって、大事な物じゃないの？」

　川崎から受け取った紙を見て、俺は膝から崩れ落ちそうになる。

　──あった。

　俺たちが探し求めていた、各賞の結果の書かれた、あの紙だ。

「⋯⋯これ、どこに？」

「分かんないけど。一般のお客さんがここに届けてくれて、本部に届けようと思ってたんだけど、当番があったから⋯⋯」

　俺の表情から事の重要性を読み取ったのか、川崎はバツの悪そうな顔をする。何はともあれ、ありがたい。これで最悪の事態は回避できる。

「⋯⋯比企谷？」

　黙り込んでしまった俺を怪訝に思ったのか、川崎が下から俺の顔を覗き込んでくる。しかし返事をするより先に、俺の脚は動き出していた。

「サンキュー川崎！　愛してるぜ！」

　言い捨てて、また廊下を走り出す。

　階段を駆け降り出す瞬間、もの凄い絶叫が聞こえた気がするが、俺は構わず走り続けた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　体育館に向けて走りながら、俺は一つの思い違いに気付いていた。

　まったく俺は何故、相模が屋上にいるなどと盲信していたのだろう。

　あの時とは、違う。

　それは状況だけではなく、相模自身にも言える事だったのだ。俺はすっかりその事を取りこぼして、過去の経験を頼りにし過ぎていた。

　相模は雪乃のサポートを得ながらも、確実に文化祭実行委員長としての責務を努め、オープニングセレモニーの挨拶だって成功と言っていい出来だった。

　実行委員長として、自信と実感、責任感を持った相模は、今どこにいるか。自ずとその場所は限られてくる。

「────」

　体育館の扉を開き、中に入る。途端に包まれるのは歓声と熱狂の渦。スポットライトに照らされたステージの上で、彼女たちは燦然と輝いていた。

　腹の底をひっくり返すような重低音がリズミカルに鳴り響き、ディストーションの効いたギターサウンドと絡まり合う。跳ねそうになる結衣のメロディーラインを、雪乃は三度下の音で支えハーモニーを奏でる――。

　できる事ならば、彼女たちのその姿を目に焼き付けるほどに、そのステージを観ていたかった。しかし今の俺はオーディエンスでもプレイヤーでもなく、単なるホスト。最高のフィナーレを飾る為に、その脚を止める事はできない。

　壁際に立つ観客の前を、足早に横切っていく。やがて倉庫の前に立つと、俺はそっとその扉を開けて中に入った。

　ひゅっ、と息を飲む音がする。外側に面した窓から溢れる光の中で、俺はついに最後の探しものを見つける事ができた。

「相模⋯⋯」

　倉庫の扉を閉めると、煌びやかな音塊も狂騒に満ちた歓声もどこか遠くくぐもってしまう。俺に呼ばれた相模はマットの上で体育座りになったまま、目を見開いていた。

「⋯⋯なんで、ここに」

　その問いの答えは、至ってシンプルだ。実行委員長として失敗してしまうかも知れないという絶望と逃避。そしてその結末だけは知りたいという中途半端な責任感。相模がエンディングセレモニー会場の近くにいるであろうという事は、半ば必定だったように思う。

「結果の紙、あったぞ」

　俺は相模の問いには答えず、件の紙を差し出した。しかしそれを見た相模は、首を横に振って俯いてしまう。

「⋯⋯相模」

「⋯⋯うちに発表する資格なんてない。紙、無くして、みんなに迷惑かけて、逃げちゃった」

　最低、と呟いた声は扉越しの歓声でかき消される。相模の言っている事は、半分事実で、半分は欺瞞だ。他でもない、自分に向けた大嘘だ。

「けど見つかったぞ。エンディングセレモニーにも間に合った」

「⋯⋯⋯⋯」

「聴こえてるだろ。雪ノ下たちが時間を稼いでくれてる。文化祭を、ちゃんと終わらせてくれ」

　俺の言葉に、返ってくる声は無い。相模の肩は細かく震え、嗚咽混じりの吐息が時折り耳に届くだけ。

「⋯⋯相模」

　呼びかけても、その姿勢に変化は無い。焦燥感と苛立ちが、嫌な音を立てながら忍び寄ってくる。

「頼む」

　片膝をついて、紙を差し出す。しかし俯いたままの相模は、それに気付きもしない。

　──ふざけるなよ。

　この期に及んで逃げ続けるなんて、許さない。彼女たちの必死の努力を、真摯な想いを踏み躙ることなど、絶対に許しはしない。

「⋯⋯でも。うちにそんな資格⋯⋯」

　あるんだよ、資格じゃなくて責任が。最後はお前がやらなきゃ、どうにもならないぐらいの責任が。

　どうして人は、こんなに簡単に逃げるのか。できない、やれない、そんな資格がない。言い訳ばかり探して、被害者に擬態する。一番の加害者だというのに、声高に自分は被害者なのだと泣き咽ぶ。

　俺はそんな甘えを、許容しない。

「⋯⋯相模、立ってくれ」

　時間はもう、僅かばかりしか残されていない。立ち上がって手を差し出しても相模は見向きもせず、事態は一寸の進展もなかった。

「でも⋯⋯」

　か細い、否定の声。まだ逃げるという、ただの甘ったれた宣言。

「いい加減にしろ！」

　思わず俺は、叫ぶようにそう言っていた。

　余りにも大きな声で、言った自分ですらキンと耳鳴りがする。相模はびくっと顔を上げて、見開かれた目を瞬かせた瞬間に一筋の雫が落ちた。

　まったく、年端のいかない女の子に怒鳴るなんて大人気ないにも程があるし、その上泣かせるなんて非道の極みだ。善人ぶった悪人の有様に、我ながら嫌になる。

「分かってくれよ⋯⋯。雪ノ下たちが、どんな想いでお前を待ってるのか、考えてくれ」

　続いて出てくるのは、懇願するような情けない声だった。差し出していた手を引っ込めて、固く握り込む。

「頼む⋯⋯。相模実行委員長」

　その呼び方は以前彼女の覚悟を問い質した時と同じ。けれどその響きも意味も、今日は全て違う。

　そしてゆっくりと、相模は立ち上がった。

　すんとしゃくりあげ、真正面から俺を睨む。

「⋯⋯分かった」

　そう言って相模は俺から結果の書かれた紙をひったくるように取ると、体育館へと続く扉へ向かい歩いていく。泥のような疲れと脱力で、全身が弛緩していく。

「⋯⋯ごめん」

　相模がそう言って扉を閉めた瞬間、俺は膝を折りマットにへたり込んだ。

　──何だよ、いい顔すんじゃねぇか。

　ばたんとマットに倒れ、天井を見上げる。

　扉の向こうからは、最後のコーラスを歌い上げる彼女たちの声。その声は自らの叫びに痺れていた鼓膜を慰めるように、いつまでも耳の中を木霊していた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　エンディングセレモニーのあと。

　未だ片付けの終わらぬステージの前で、相模を中心とした輪を作った文実メンバーが時に笑い、時に泣きそうな表情を浮かべている。

「驚いたわ。あの短時間で、まさか両方とも見つけてくるなんて」

　雪乃は腕を組み、輪の中心にいる相模を見詰めていた。相模は周囲のメンバーと握手や抱擁を交わしながら、目には薄っすらと涙を浮かべている。

　その光景を映す目に母性すら滲ませて、雪乃はひたすらに柔らかく優しい視線を送っていた。

「うん⋯⋯。なんか、魔法でも使ったみたいだったね」

　結衣は雪乃に寄り添いながらそう言うと、そうねと彼女は頷く。

　事実、エンディングセレモニーでの相模の立ち振る舞いには目を見張るしかなかった。各賞の発表を情感豊かに終えると、その後の挨拶では感極まったのか最後の最後で零す涙。彼女を励ます声には、あの時よりも確かな熱量があったように思う。

　⋯⋯まあ、あの涙は俺が焚き付けた結果、悔しがって泣かせただけなのかも知れないけど。

「なんか全部、すごいよかった。あたしもゆきのんとステージ立てて、めっちゃ緊張したけど楽しかったし。もう一回ぐらいなら、やってもいいかな」

「⋯⋯私はごめん被りたいわね」

　結衣の提案に、雪乃は心底嫌そうな顔で肩をすくめた。まあこういうの苦手なのは知ってるけど、あんまりな反応じゃないですかね。

「⋯⋯俺はもう一回、見たいけどな」

　俺がそう言うと、雪乃も結衣も時を同じくして固まってしまう。なんだろう。何か変な事を言っただろうか。

「ヒッキー⋯⋯」

「⋯⋯見ていたの？」

「まあ、少しだけな」

　いやいや前も見てたんだしそんな驚かんでも⋯⋯とは口が裂けてもいないが、それにしたって驚き過ぎだろう。

　雪乃も結衣も俺から視線を逸らすとそれぞれの赤さで頬を染める。

　なんだこいつら⋯⋯。二人揃って可愛いの塊かよ。

「⋯⋯やっぱり、二度とごめんだわ」

「あたしも、やっぱ無理⋯⋯」

「えぇ⋯⋯」

　雪乃はともかく、結衣まで嫌なのかよ。自分でやりたいって、言ったくせに。

　でもまあ、それでもいいか。

　余分にもう一回、ほんの少しでも見られただけだ。

「さ、片付けて早く帰ろうぜ」

　できればもっと、青く暖かい彼女たちを見ていたいなんて、そんな思いに後ろ髪を引かれながら。

　俺はそう言い、歩き出す。今日は余りにも色々あり過ぎたし、走り回り過ぎた。

「あ⋯⋯ヒッキー、打ち上げは」

「いかん」

「答えるの早⁉︎　もうちょっと考えてよ！」

　結衣の非難に、クスリと小さな笑い声が相槌を打つ。

　このやり直しの文化祭が成功に終わったのか、否か。

　それは彼女たちの表情だけが、知っている。

　お読み下さりありがとうございました。  
　文化祭後編はいかがでしたでしょうか。今まで一番高いテンションの話になっていますし、書いていて非常に楽しいお話でした。  
　さて、この話からは週一ぐらいの更新になりそうです。ある程度先までは書いてストックしてあるのですが、投稿する前に何度も推敲した方が質は上がりますし、ストックがなくなると性格上次々早く書こうとしてミスが増えるので……。  
  
　前話ではたくさんの感想をありがとうございました。  
　今回も感想等反応を頂けると、嬉しいです。ではまた来週、修学旅行編でお会いしましょう！

その修学旅行は、青春ラブコメ的には正しい。

　晩秋の京都は、制服のブレザーを正しく着込んでいても少し冷える。

　いや少しの寒さで済んでいるのは、この土地柄かもしれない。かの有名な清水寺。その本堂へ、そして清水の舞台へと並ぶ生徒たちの列がなければ、きっともっと厳しい寒さに晒されていたと思う。

「おぉ〜」

　結衣は身を乗り出しそうな勢いで欄干に近寄ると、眼下の京都の町並みと紅葉に嘆声をもらした。

　まったく、何度目であっても見事なものだ。紅葉の季節は終わりかけてはいるが、だからこそより一層赤く燃えるようにその葉を染めている。

「ヒッキー、写真撮ろ！　写真！」

「お、おぉ⋯⋯」

　いつだったかもここで写真を撮ったな、なんて思い出していると、結衣は携帯のカメラをインカメラに切り替えて俺に寄り添いハイチーズ。やはり雪乃にセルフィーの撮り方を伝授したのは結衣だったか、と身を以て知る。⋯⋯っていうかガハマさん、ちょっと近くない？　絶対前より近いよね？

「あとで送っとくね」

「あぁ⋯⋯」

　妙な汗が出てきて、いったい何歳になったんだと我ながら呆れるしかない。

　写真を撮り終えると、そのまま人の流れにのって歩いて行く。その先にあるのは、恋占いの石がある地主神社だ。

「なんか、いい感じだね」

　そう言う結衣の視線の先にいるのは、海老名さんと戸部だ。俺と、俺たちの、それぞれの依頼人。

　ここ修学旅行に至るまでの奉仕部への依頼は、俺の知る青春時代をなぞっていた。葉山が戸部たちを引き連れ奉仕部を訪れ、戸部は海老名さんへの告白を手伝って欲しいと依頼する。

　何か違いがあったとすれば、戸部から「ヒキタニくんに相談はないわ〜」と言われず、結衣も怒ったりせずに済んだところぐらいだろう。文化祭の折り、相模にあの時ほど酷い事は言っていないし目撃者もいなかったお陰で、聞くに堪えないり言を耳にする事もなかった。

「やべー、これ全然分かんねぇわ。真っ直ぐでいいのこれ？」

　戸部は目を瞑った状態で、二つの岩の片方から歩き出した。およそ十メートル離れた岩へ、目を瞑ったまま辿り着ければ恋が叶う、というあれだ。

「そう、まっすぐまっすぐ」

「違う、ちょっと右」

「ちょー、右って俺から見て右？　どっち？」

　何でも人のアドバイスを受けて岩に到達した場合、人の助力があればその恋は成就するらしい。

　であれば、そのジンクスは正しいのかも知れない。

　俺の知る世界線では、社会人になってからようやく二人は付き合うようになった。想いを募らせながらも諦めなかった戸部と、海老名さんの心の変容によってそれは成就したのだ。

『あの時、比企谷くんがお願いをきいてくれたお陰だよ』

　久々にあった海老名さんの、まるで何年も砂漠を彷徨った旅人がようやくオアシスを見つけたようなあの表情を、俺は忘れる事ができない。だから俺の行動は、縛り付けられてしまう。

　この修学旅行の三日目の夜、俺はまた海老名さんに虚偽の告白をするだろう。たとえ違う世界線だとしても、俺にはわざと二人の将来を壊す事などできない。

　しかしそれは、また彼女たちを傷つけるという事だ。それを回避する手段をずっと考えて、堂々巡り。未だにこれという解決策は思い浮かばず、修学旅行の最中にあってもそれは変わらない。

「ちょ、マジどっち？」

「左！」

「右！」

　困惑する戸部の姿を、海老名さんは「あはは」と小さな笑みを浮かべて見守っている。

　恋占いの石。

　さて、そのジンクスは“正しいのかも知れない”と表現したのは。

「っとぉ！」

「危な⋯⋯」

　戸部が転倒しかけて、それを葉山が助けたからだ。はや×とべ的には美味しい展開だな。

　しかしせめて、岩までは辿り着いて欲しかったところだ。

　こっちは覚悟を、決めているのだから。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「知らない天井だ⋯⋯」

　見慣れない天井に、がばっと身を起こして周囲を見渡す。これが元いた世界線の病室であればよかったのだが、そんな事はない。俺はまだ誰も救えていないらしく、ここはホテルの一室だ。

「あ、八幡。やっと起きた？」

　どうやら俺はまた、宿について食事をとった後すぐに寝てしまっていたらしい。まあ清水寺から南禅寺に移動した後、銀閣寺までのそこそこ長い距離を歩いたのだ。朝も早かったし、寝落ちしてしまうのも致し方あるまい。

　葉山と戸部たちはジャラジャラと麻雀牌をかき混ぜ、まさに修学旅行の夜といった一幕だ。

「ああ⋯⋯。ちょっとコーヒー買ってくる」

　うん、と頷いて手を振り送り出してくれる戸塚を背に、俺は部屋を後にした。そう言えば、一日目の夜は材木座が部屋に突撃してきた気がするが、まあいいか。心優しい戸塚が相手をしてくれるだろう。

　一階に下りて、自販機の前に立つ。一応マッ缶を探すが、当然ラインナップにはなかった。認めたくない事だが、千葉以外でマッ缶は市民権を得ていないのだ。

　俺は仕方なしに、一番甘そうなカフェオレの缶を購入する。それを手にベンチを探していると、ふと見知った顔が視界に入った。雪乃と結衣が、肩を寄せ合いベンチに座っている。

「あ、ヒッキー⋯⋯」

「比企谷くん⋯⋯」

　なんなのその悪口言ってたら本人来ちゃったみたいな反応⋯⋯。

　それにしても、こんなシーンはあっただろうか。湯上がりなのか髪をアップにした雪乃の姿には見覚えがあるが、お団子頭をおろした結衣に会った覚えがない。

「⋯⋯珍しいもん飲んでんな」

　しかも二人とも、今しがた俺が買ったのと同じカフェオレの缶を握り込んでいる。こんな時間に飲んで寝れなくなっても知らねぇぞ。

「あはは⋯⋯うん」

　妙に意味深な雰囲気を醸し出しながら答えられてしまうと、これ以上訊くのも憚られる。俺はベンチの横に立って背を壁に預けると、ぷしゅっとプルタブを開けた。

「明日の相談か？」

「うーん、まあそんなところ」

　さっきから答えるの結衣ばっかりだな、と雪乃の顔をちらりと盗み見る。カフェオレの缶を握る彼女は、その表情にも動作にも強張りのようなものが感じられた。

　しばらく無言で缶を傾けていると、カツカツと音を鳴らしてまた別の人影が現れる。

　こんな夜更けだというのに、平塚先生はコートを羽織りサングラスをかけていた。

「な、何故君たちがここに⋯⋯」

　明らかに狼狽えた様子を見せる平塚先生は、記憶の通りならまた天一にラーメンでも食べに行くのだろう。いいな。久しぶりの天一のラーメン。

「いや、ただ飲み物を買いに」

「そうか⋯⋯。まあいい。口止め料を払うから、ついて来い」

　俺たちの顔を一人ひとり見た後に、平塚先生は颯爽と歩き出す。どこか開き直った様子に、思わず笑ってしまいそうになる。

「あの先生、どこに⋯⋯」

「まあ、ついて来れば分かる」

　雪乃の問いにまともに答えず、平塚先生はホテルの正面玄関から外に出た。俺たちもそれに続くと、そのまま通りの方まで歩いていく。

　平塚先生がさっと手を挙げると、すぐに一台のタクシーが路肩に停まった。

　ところでタクシーの席に座る順番というのをご存知だろうか。この場合一番目上にあたる平塚先生が運転席の後ろに座るべきだが、普通に助手席に座ってしまった。では上座から順番に俺たちが座ると、どうなるか。

「⋯⋯狭い」

　そうですね、一番下座の後部座席中央が俺の席で確定ですね。

「そんなに肩を縮こまらせるから狭く感じるのよ」

「別にそんなに避けなかったらいいだけなのに⋯⋯」

　普通に上座である運転席の後ろに座った雪乃が言い、左隣に座った結衣もそれに続く。が、お言葉に甘えられないのが俺なのだ。既に十分に近いし、風呂上がりのいい香りが鼻腔を満たして落ち着かない。

「一乗寺の天一まで」

　平塚先生がそう言うと、タクシーは滑るように走り始める。

「てんいち⋯⋯。てんかいち？」

「惜しいけど、絶対お前が思ってるのと違うぞ」

　結衣は頭の上にハテナを浮かべているが、むしろ天下一武闘会を思い浮かべるお前の方が不思議だという話だ。女の子でもドラゴンボールとか見るのだろうか。

　僅かばかりのナイトクルージングを終えると、俺たちはいつかの店の前に立つ。

「これが天下一品総本店⋯⋯」

　いや、ぶっちゃけ二回目なのだが、やはり久し振りに来ても感動する。そんな俺の感慨の理由など知る由もない雪乃と結衣は、気の抜けたような表情で看板を見上げていた。

「さあ、入るぞ」

　平塚先生に促され、店内に入る。こんな夜更けのラーメン屋に美少女二人とサングラス美女というアンマッチさは相当目立つらしく、テーブル席に座っていた男性客にジロジロと見られていた。まあ俺たちの様子じゃ、〆のラーメンって感じでもないし、この三人の見た目なら致し方ないだろう。でもやっぱ俺の奥さんジロジロ見んじゃねぇぶっ殺すぞ。

「さあ、口止め料だ。遠慮なく頼みたまえ」

　席に着くと、メニューを開きながら平塚先生はそう言った。とはいえ説明も無しにメニュー見せただけでは混乱するだろう。

「お前らはこっさりかあっさりぐらいがいいと思うぞ」

「いえ、何か見ているだけでお腹がいっぱいになるからいいわ」

「あはは⋯⋯あたしも」

　他のお客さんが食べているこってりを見た二人は、普通に引いていた。まあ、あの見た目じゃ頼むのにも勇気がいるだろう。

「ではあっさりを頼んで二人で分けて食べるといい。もし多くてもそこの育ち盛りが食べるだろう」

「⋯⋯残飯処理係の素敵な言い換えですね」

　というか普通に間接キスになり得ることを提案してくるとか、この当時の俺の自意識過剰っぷりを考えたら大分とぶっ込んだ提言だ。仮にも女性教師なのだから、もっと気にした方がいいと思いました。

　店員さんを呼んで注文を告げると、数分の後に着丼する。俺と平塚先生はこってり、雪乃と結衣はあっさりだ。

　いただきます、と言って食べ始めてしばらくしてから、平塚先生は麺リフトをしながら言う。

「順調に依頼をこなしているようだな」

　ちゅるる、とそう言った後に平塚先生は麺を啜る。一体それは、どの依頼の事を言っているのだろうか。

　戸部からの依頼をこの時点で知っているとは思えない。あるいは、雪乃から連絡が行くことになっているのかも知れないが。

「特に文化祭の依頼は、上手くいったな。相模も文化祭の件で、だいぶ自信をつけたようだ」

　その事か、と俺は僅かに身体に巡っていた緊張を解いた。

　文化祭以降の相模の様子を見ていると、確かに平塚先生の言うように以前のような卑屈さは感じず、自信さえ持っているように思える。文化祭を何とか成功させたお陰で、彼女の自己承認欲求と自尊心は正しく満たされたらしい。

「しかし雪ノ下。私の、彼に対しての依頼を覚えているか？」

　雪乃は平塚先生にそう問いかけられると、髪を耳にかけながらラーメンを食べようとしていた動作を止めた。すっと背筋を伸ばすと、平塚先生に向き直る。

「確か『彼の捻くれた孤独体質の更生』、でしたね」

「そうだ。自分では、どう感じている？」

　雪乃はチラと俺を見てから、顎に手をやり考える。結衣はそんな俺たちの様子を見て、食べる手を止めた。

「そんな依頼、あったんだ」

「ええ⋯⋯」

　俺の方をチラと窺う視線が、二人分に増える。そういう話、本人の前でするのやめてくれないかなぁ⋯⋯。

「⋯⋯正直、よく分かりません。依頼のこなし方は苛烈ですが、意外にまともというか⋯⋯」

　ごにょごにょ、とそこで言葉は尻すぼみになっていく。

　まとも、か。それは過大評価のように思える。千葉村での留美の件は、結局一度グループを破壊しているし、相模のサポートの件では誤判断を起こさない為に相当厳しい事を言って彼女の自尊心をズタズタにした。結果は良かったものの、まともと称するのは違和感がある。

「まあ、斜め上だよね。ヒッキーの考えること」

　結衣は雪乃の意見に同調するように、うんうんと縦に首を振った。

　その表現なら、少し納得できる。やはり結衣には、この時から色々なことが見えているのだと感心するしかない。

「では孤独体質についてはどうだ？」

　その問いに、今度は雪乃も結衣も黙りこくった。頭の中での検討が長引いているのか、二人とも僅かに首を傾げている。

「⋯⋯孤独体質というより、孤独であることをただ選んでいるだけのような気がします」

「うん⋯⋯。そんな気がする」

　そんな風に見えていたのか、と俺は自らの行いを回顧する。

　確かに基本的にはあの頃の再現をしなければ、と意図して孤独でいるようにしていた。高校生の彼ら彼女らともっとコミュニケーションを取ろうと思えば、きっとあの時よりもまともなやり取りはできていたのだろう。しかしそれでは周りから余りにも奇妙に見えるだろうし、関わる人は選ぶべきという考えは変わらない。

「そうだな。そうなのかも知れない。では、君たちとはどうだ？」

　平塚先生の言葉に、二人ははっと顔を上げた。その言葉の意味するところを反芻するのは、彼女たちには一瞬のことだったらしい。どこか居心地悪そうに、二人は視線を合わせると、そのまま小分けにされたラーメンに視線を落とした。

　⋯⋯一体なんなの、君たちの態度。

　平塚先生の言いたい事は分かってはいるが、気付かない振りをする事にした。平塚先生の伝え方はシンプルかつストレート過ぎるし、その言葉の持つ意味は陽乃さんが時折口にする真実めいた言葉と似て強い。

「⋯⋯ラーメン、冷めるぞ」

　俺はそう一言だけ言って、箸で掴んだまま冷めてしまった麺を啜った。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　修学旅行も二日目。本日最初に向かう先は、映画村だ。

　紅葉シーズンで大混雑のバスでぎゅうぎゅう詰めにされつつも、何とか目的地に到着する。時代劇の撮影にも使われる江戸時代の町並みを歩き見ながら入る事になったのは、いつぞやと同じお化け屋敷だ。

「うわぁ⋯⋯やっぱあたしこういうの苦手⋯⋯」

　まるで雪乃に寄り添う時みたいに近い距離で、結衣はそう言った。

　あれ行ってみようよ、と提案したのは君なんですが⋯⋯。まあ、戸部と海老名さんをくっつける為の作戦なんだろう、というのは俺も分かっているけど。

「い、今なにか変な声が⋯⋯」

　そして俺のブレザーの左側の裾を引っ張ってくるのは、川なんとかさんだ。さっきから戸部がビビり倒す声でこっちもビビるという負の連鎖を生み出している。貴女も十分近いので、自重して頂きたい。

「八幡は、平気そうだね」

　そう訊いてくるのは戸塚で、そういう彼女──いや彼は、まったく平気そうだった。

「まぁな⋯⋯」

　だって二回目だし⋯⋯。とはもちろん言えない。俺は息遣いさえ聞こえてくる彼女たちの近さにこそばゆさを感じながら、お化け屋敷の中を歩き続ける。

　しかしまあ、川なんとかさんが怖がるのは無理もない。お化け役は本物の役者が演じているし、セットの死体は生体から模って作ったリアリティのあるものだ。二度目でなければ、俺もそこそこビビっているだろう。

「戸塚は全然平気そうだな」

「うん。僕はこういうの結構好きだから」

　リアルな死体造形と死装束の演者が？　と思わず阿呆な事を考える。

　それにしたってこの二日目は、特に変化を与える予定のイベントもなく、気楽なものだ。明日の夜の事を考えると、こうやって楽しんでいられるのも今日までだろう。

　俺はちらりと、左隣の人物を窺い見た。かわ⋯⋯川⋯⋯思い出した。川崎沙希はさっきから普段の気怠げで威圧的な態度は鳴りを潜めさせ、年齢相応な少女然として怖がっている。

　それを見ていて、俺はふとひらめいた。そのフラッシュアイデアは、もし二日目に変化を与えてみるならこれしかないだろうという、確信めいたものに変わっていく。

「ね、ねぇ比企谷。さっき何か聞こえなかった？」

「ん？　いや、何も聞こえなかったけど⋯⋯」

　──嘘だ。

　俺は確かに気付いていた。今まさに俺たちを驚かそうと、僅かに動き出した人影に。

「ぶるぁっ！」

　死体に擬していた役者がそう叫び声を上げながら起き上がると、川崎はビクーン！　と背筋を伸ばし、直後に無言の全力ダッシュ。

　俺が変化を与えるのは、ここだ。

「うわあああぁぁぁぁ！！」

　俺は川崎の無言の叫びを代弁するかのように、絶叫を上げながらその背中を追いかけ走り始めた。

　その名も『川なんとかさんはいつも怖いから、こっちから怖がらせてみよう作戦』である。

「──！　ひっ、きっ──！」

　振り返った川崎は俺の姿を認めると、涙目になって走り続ける。もはや何を言っているのかも分からない。

　さほど広くもない板張りの通路を、青みがかった長髪に掴み掛からんと全力で走る。血飛沫の散った障子が、おどろおどろしい色に染められた欄間が、視界の両端へと流れていく。

「かぁぁわぁぁさぁぁきぃぃーーー！！」

「ひいぃっ！　ひ、ひきっ、比企谷がゾンビ化したぁぁぁぁーーー！！」

　大変失礼な事を絶叫しながら、やがて川崎は出口の扉まで到達する。

　彼女に扉を開けている時間などない。

　そして、俺を振り返り──。

「死ねぇぇ！」

　川崎の突き出した腕に首をひっかけられ、俺はかに後頭部を打ちつけたのだった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「本当、ありえない⋯⋯。マジでありえない⋯⋯」

「あはは⋯⋯。まああれは、全面的にヒッキーが悪いよね」

　お化け屋敷を出たところにあった軒下のベンチで、俺は川崎の恨み節を聞きながら垂木を見上げていた。

　川崎渾身のラリアット⋯⋯というか俺が走ってきた勢いをのせた自爆ラリアットで見事にぶっ倒れ、軽い脳震盪を起こして休憩中である。

「ヒッキー、まだクラクラする？」

　俺は結衣の膝枕をして貰いながら、額には濡れハンカチが置かれ完全に被介護状態。我ながら阿呆な事をしたものだが、結衣から話を聞いた戸部と海老名さんが爆笑してくれたのだけは良かったと思う。それで二人の仲が近付いたかどうかと問われると、答えを濁すしかないが。

「ああ⋯⋯まだちょっと⋯⋯」

　俺は結衣と目が合うと、そう言って目を閉じた。

　それにしても結衣の太もも──略して結衣もも⋯⋯。雪ももも素晴らしいが、結衣ももも味わい深いな⋯⋯。

　目を閉じるのに合わせて、結衣は俺の瞼の上にそっと手を置いた。まるで寝かしつけられる子供のようで、くすぐったい。

「あんれー。ヒキタニくん、まだダメなん？」

「あ、うん。まだっぽい」

　声に目を開くと、パッと覆い被さっていた結衣の手は外され、見下ろしてくる戸部と目が合った。という事は恐らく近くに葉山もいる事だろう。奴にこんな姿を見られるのも癪なので、まだ頭がふわふわするが起き上がる事にした。

「すまん、もう大丈夫だ」

　よっこいせ、と立ち上がってみても、目眩のような症状もない。首をぐるりと回してみるが、少し痛みが残っているぐらいで問題なさそうだ。

「ヒキタニくんも、茶目っ気あるんだねぇ。隼人くんにもしてみたらいいのに」

　、と笑うのは、戸部と一緒に近くに来ていたらしい海老名さんだ。その提案も中々楽しそうだが、奴の場合は素で返してきてこちらがダメージを受けそうだから、絶対やらない。

「もう大丈夫なのか？」

　三浦と土産物屋の方から歩いてきた葉山は、俺を上から下まで見てからそう言った。あんな阿呆なことをしてこいつに心配されるというのは、随分居心地が悪い。ならするなって話だが。

「ああ、すまん。時間ロスったな」

「いや、どうせ土産物は見たかったし。じゃあ、そろそろ行くか」

　葉山は皆に向けてそう言うと、口々に肯定の言葉が返ってくる。次の移動先はエリアだ。

　俺の提案で激混みバスを回避してタクシーに乗り込むと、次の目的地であるに到着した。かの有名な徒然草の第五十二段に出てくる、古典随筆オタク的には聖地にあたる寺だ。

　確かあの話は、とある法師についての一編だ。法師が石清水八幡宮を参拝し、極楽寺や高良神社に行ってよし全部まわったぞ、と思っていたらまだ他にも参拝すべきところがあって、だから些細な事にも案内役はいて欲しいよね、って話だ。現代ならちゃんとググってから行けカスと言われてしまう案件である。

　さてでは俺はというと、もちろん案内役など必要ない。これから向かうことになるで、たまたま雪乃と会ったのをよく覚えている。映画村での時間ロスはあったが、バスの待ち時間をカットしたから、大体あの時と同じスケジュールで事は進んでいるはずだ。

　拝観受付を済ませて敷地内に入ると、道に沿って歩き、石段を登っていく。やがて見えてくるのは、方丈と呼ばれるお堂だ。そこに入って見えるのは、テレビや何やらで有名な枯山水、龍安寺の石庭である。

　結衣たちは「うわぁ」と声を上げながら石庭を撮ったり、それをバックに写真を撮ったりとそれぞれに散って行く。

「⋯⋯⋯⋯」

　それじゃ雪乃さんはどこかなーと縁側を探すのだが、総武高校の制服姿はいくつか目につくものの彼女の姿はなかった。見落としているという事は、ありえない。俺のゆきのん限定千里眼はそこいらのレーダーよりも高精度なのだ。

　おいおいマジかよ。これはタイムマネジメントを失敗したか⋯⋯と絶望しかけていると、不意にトントンと肩を叩かれる。

「こんなところで奇遇ね。比企谷くん」

　振り返ると、探し人は僅かな微笑みを浮かべてそこに立っていた。真後ろにいられたら、流石に検知範囲外だ。

「なにをキョロキョロしていたの？」

「⋯⋯いや、どの角度から撮るのがいいかなと」

　お前を探してたんだよ、と言いたいところだが、勿論そんなことはしない。それにしたって予想通り会えただけで、うっきうきのルンルン気分が表情に出てしまいそうだ。京都の名所で見る雪乃の立ち姿は本当に絵になる。それある。

「そう」

　雪乃はそう言うと、周囲を見渡した。見知った顔が近くに居ないのを確認すると、雪乃は軽く俺の袖口を引っ張る。

「ちょっとこっちへ」

「へ？　お、おぅ⋯⋯」

　なんだこの記憶にない展開は⋯⋯と戸惑っていると、方丈の端の方へと連れて行かれる。そう言えば、あの時同行していた雪乃のクラスメイトたちはどこに行ったのだろうか。

「その⋯⋯写真を撮って欲しくて」

　携帯を取り出した雪乃を見て、あぁなるほどと俺は頷いた。これだけ見事な枯山水なのだ。それを背景に写真を撮って欲しいというのだろう。それこそクラスメイトを見つけて撮って貰えばいいと思うのだが、頼みづらいのかも知れない。はしゃいでいると思われたりするの、嫌がりそうだし。

「ああ、いいぞ」

　貸してみ、と携帯を受け取ろうと手を伸ばすが、何故か雪乃は携帯を手放さない。

　えぇ⋯⋯なにこれ。あなたに携帯を預けるわけがないでしょう自分ので撮って送るのよ、とか言われちゃうやつ？

「そ、そうじゃなくて」

　雪乃は携帯を操作すると、インカメラを起動した。頬には朱を、眉には不安をのせ、もじもじと非常に言いにくそうに言った。

「その⋯⋯一緒に、撮りたいのだけれど⋯⋯」

　あかん。

　これあかんやつや。

　可愛過ぎて死ぬ。可愛いが致死量超えて悶死する。

　思わず関西に来ているからといって方言がうつってしまいつつ、俺は平静を装うのに必死だった。恥ずかしがりながら一緒に写真を撮りたいとおねだりしてくるゆきのん可愛いのん♪　あ、これ全然平静じゃねぇや。

「きゅ、急にどうした」

　とりあえず二つ返事でオーケーするのもこの当時の俺らしくないかと思って、そう聞いてみる事にした。

「せっかく会えたのだし⋯⋯。それに由比ヶ浜さんとは撮ったのでしょう？」

　返ってきた答えに、思わず仰け反って反応してしまいそうになる。マジっすか君たち。そんな事まで情報共有済みとか、仲良すぎでは？

「あー⋯⋯まあ、いいけど」

　俺がそう答えると、雪乃はを開く。

　言葉ではそう言うが、むしろ撮りたい。撮らせて下さいって土下座でお願いするレベルだ。JK時代の奥さんと晩秋の京都でツーショットとか最高過ぎる。

「じゃ、じゃあ」

「ああ⋯⋯」

　会話になってないな、と思いながらも俺は石庭を背に雪乃の隣に並んだ。肩同士に握り拳三つほど間を空けて、雪乃は携帯を構える。

「⋯⋯比企谷くん、もうちょっとこっちに」

「お、おぅ⋯⋯」

　別に俺からしたら初めての事でもないのに、妙に緊張してしまう。それもこれも、雪乃が自撮りに慣れていないせいだ。

　俺の記憶のある限り、雪乃はかなり慣れた様子でツーショットの写真を撮っていた。おそらくそういう機会が多くなり、慣れてきた来たのはもう少し先。たぶん一色いろはが奉仕部に入り浸るようになってからとか、そのぐらいの事なのだろう。という事は指南役はいろはか？　まあ辿々しい手つきで頑張って自撮りしようとする雪乃が可愛いから、もうどっちでもいいか。

「まだ見切れてるわ」

「あ、はい⋯⋯」

　完全に肩はくっつき、枝毛の一つすらなさそうな黒髪が頬を撫でる程に近い。ふわりといつものサボンが香って、嗅ぎ慣れた匂いだというのに心臓は早鐘を打つ。

　カシャ、とシャッター音が鳴る。顔を赤くした雪乃と俺は、僅かにのぞく石庭と共に小さな画面の中に収まった。

「あ、ありがとう⋯⋯」

「おう⋯⋯」

　名残惜しさを感じながらも、肩を離して距離を取る。制服越しにも感じられた熱が、体内に染み入ってくるように熱く感じられた。

「じゃあ、戻るわ」

「⋯⋯ああ、またな」

　胸の前で小さく手を振り、まだ顔に赤さを残したまま雪乃は踵を返した。

　二歩、三歩と離れていく。半ば放心してその後ろ姿を見ていると、重大な事に気が付いた。写真を──さっき撮った写真を、送って貰わなければ。

「雪乃！」

　焦ってそう呼んだ瞬間、俺はしまったと口を押さえる。つい、地の呼び方が出てしまっていた。

　振り返った雪乃は想像もしていなかっただろう状況に瞠目し、身体ごとフリーズさせると、ぱちくりとその大きな目を瞬かせた。その頬には、また赤みが戻ってきている。

「な、なに⋯⋯？」

「その⋯⋯。後でいいから、さっき撮った写真、送っておいてくれ」

「え、ええ⋯⋯」

　そう言うと雪乃は再び背を向けて、その場を後にした。まるで逃げるように、さっきよりも早足に。

「はぁー⋯⋯」

　深く、深く息を吐き出す。何やってんだ、俺。

　方丈の端っこで、一人ぐしぐしと頭を掻きむしる。しかしどれだけ時間が経っても頬の熱さと後悔は、中々抜け落ちていかないのだった。

お読みいただきありがとうございました。  
サブタイトルの通り、今まで一番ラブコメらしい、ほのぼのした話になりました。  
さて次は修学旅行後編。八幡が憂鬱に感じているあの告白はどうなるのか。  
次回も読んで貰えたら嬉しいです。毎回書いてますが、感想を頂けると更に嬉しい。  
ではまた来週の土曜日にお会いしましょう。

しかし比企谷八幡は、またまちがえる。

　ホテルに戻って夕食をとったら、後は自由時間だ。

　昨晩はどこの部屋でも麻雀大会が開かれていたらしく、今晩は各部屋対抗の麻雀大会が行われるらしい。クラスの中心人物である葉山が泊まる客室がその麻雀大会の会場になってしまうのは、必然と言えるだろう。

　当然そんなやかましい空間に身を置いていられるわけもなく、俺は一階のロビーのベンチに腰掛けていた。

　さてどうしたものか、と俺は買ったばかりのカフェオレを傾けながら考える。

　以前の修学旅行では暇つぶしに外に出て、コンビニであーしさんこと三浦に遭遇。要らんことすんじゃねぇぞオラと釘を刺されたのだ。

　当然、そんな場面を繰り返すつもりはない。歳をとっても怖いものは怖いし、あそこで彼女と話す必要があるとも思えなかった。

　そうしてボケっと縁側の老人にでもなった気分でロビーを見ていると、見覚えのある顔がエレベーターの方から現れる。

　──相模南。

　直近でもっとも関わりを持った、赤の他人の名前だ。いやこの言い方は、矛盾しているか。

　先ほどまで風呂に入っていたのか、相模の髪はまだ僅かに湿っているように見える。ちらと一瞬目が合ったような気がするが、彼女はそのまま自販機の方まで歩いて行った。

　相模と俺の関係性は、今を以てしても良好とは言えない。例え教室で目があっても挨拶はしないし、体育祭では実行委員をやる事もなかったからそこでの絡みもなかったのだ。

　まあ、どうでもいい事だ。多分これから先、彼女と関わり合う事もない。

　そんなことをぼんやり考えていると、不意に人影が俺の目の前を通り過ぎた。相模南はわざわざ俺のすぐ目の前を通り、一人分席を空けて、俺の座るベンチに腰掛けたのだ。

「ん」

　相模はそう言うと、それぞれの手に持っていたペットボトルのうちの一本を俺の隣に置いた。オレンジ色の蓋をした、ホットのミルクティーだ。

「⋯⋯なに、これ」

「あげる」

「いや、もう飲み物あるんだけど⋯⋯」

「持って帰って、後から飲めばいいじゃん」

　相模は相変わらず俺と目を合わそうとせず、自らの手に残っているペットボトルの蓋を開けた。ちびりとそれを一口飲むと、暫しの沈黙の後にと喋り始める。

「⋯⋯あのさ。文化祭でのこと、ありがと」

「⋯⋯おう」

　思いもよらなかった言葉に、俺はそんな曖昧な返事しかできなかった。まさかこいつにお礼を言われる日がくるなんて、意外すぎて理解が追い付かない。

「終わってみて考えたらさ、⋯⋯全部あんたの言った通りだった」

　ちらりと俺の方に向けられた視線は、しかし俺のそれとかち合う前に戻される。俺は「あぁ」とかまた曖昧な答えで、相模の言葉の続きを待つ。

「だから、ちゃんとお礼を言っとかないとって。それは、その気持ち」

　相模はそう言って、視線だけでミルクティーのペットボトルを指した。暖かい方を選んでくれたのは、彼女なりの優しさだろうか。

　それっきり、深く長い沈黙が訪れる。もう喋る事もないはずなのに、相模は何度かペットボトルを傾け、立ち去る様子もない。

　そんな珍しいシチュエーションに、俺はふと訊いてみたくなってしまった。もうほとんど答えを聞いているというのに、答え合わせをしたくなってしまったのだ。

「なあ、相模」

　呼びかけ、今度ははっきりと相模の方を見る。ようやく彼女と目が合うと、今度はお互いに目を逸らさない。

「文化祭の実行委員長、やってよかったと思うか？」

　俺の質問に相模は呆気にとられたみたいに目を開くと、ふっと破顔した。

「あったりまえじゃん」

　そう言った相模の表情は、本当に晴れ晴れとしていて。

　俺は後になってから、初めて相模の笑顔が向けられた事に気が付いた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　修学旅行も早いもので、もう三日目の朝である。

　俺たちはいつかと同じように、雪乃チョイスの有名コーヒーショップでモーニングをいただいていた。

「由比ヶ浜さん。今日のコースは伝えておいて貰えた？」

　雪乃は一口コーヒーを飲むと、結衣に向けてそう訊いた。

　修学旅行三日目は、完全に自由行動の日である。故に奉仕部が揃って戸部の告白に向けてバックアップできるのは今日だけ。彼らを誘導する為のおすすめコースを、雪乃は考えてくれていたのだ。

「うん、ばっちり。多分、教えた通りのコースを行くと思うよ」

　おそらくいつかと同じように、結衣から戸部にコースは伝えられ、そのままおすすめされた通りに行動するだろう。まあもし何かの変化でそうならなくても、今日に限って言えば問題ない。

　肝心なのは夜の、あの告白のシチュエーションだ。それさえあの時と違いなく再現できれば、俺への依頼は達成できる。しかしその事を考えると⋯⋯今から気が重い。

「あ、ねえ。ゆきのんが飲んでるコーヒー、あたしも飲んでみたい」

「そう？　では交換しましょうか」

　しかし俺の心中など推し量れるはずもない彼女たちは、俺の記憶以上に仲がいい。この光景とその事実は、このやり直しの中での功績だと、少しは胸を張ってもいいのではないかと思う。

「⋯⋯仲いいよな、お前ら」

　その一言に雪乃と結衣の視線が俺に集まり、すぐに二人は顔を見合わせる。

「それは⋯⋯」

「ね？」

　内緒話でもするみたいに結衣は微笑み、雪乃は表情を見せまいと顔を伏せた。なんだこいつら超可愛いな。尊いの塊か？

　俺は思わず緩んできそうな頬を押さえつけながら、雪乃に向けて問いかける。

「で、今からどこ行くんだ？」

「まずは伏見稲荷。それから東福寺、その次に北野天満宮ね」

「⋯⋯すまんな」

　俺たちのやり取りに、結衣は額の上に疑問符を浮かべながら首を傾げている。まあ、よほど歴史に詳しくなければ伝わらないだろう。

「北野天満宮ってのはあれだ、学問の神さまを祀ってるんだよ」

「詳しく言うと、菅原道真公、通称天神さまね」

「あ〜、小町ちゃん受験だもんね」

　ユキぺディア情報がどこまでインプットされたかは甚だ疑問だが、その説明で小町の為ということは理解してくれたらしい。結衣は暗記系の勉強こそ苦手だが、頭の回転は早いし地頭はいいのだ。

「それから最後に嵐山ね」

　嵐山──。この修学旅行での、ターニングポイントだ。

　そのキーワードに反応してしまわないように、俺は表情筋を力ませる。白く品の良いカップに注がれたコーヒーからは、もう湯気は消えている。

「あー、なんか全部楽しみだなぁ」

　俺は努めて無表情に、無感情に。

　段々と温くなってくるコーヒーを一口飲むと、意識を逸らすように外をみやるのだった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　伏見稲荷大社と言えば、その名を聞いた事がない人の方が少ないだろうと思う。

　到着当初こそ人が多かったものの、かの有名な千本鳥居を進むほどに人影はまばらになっていく。緩やかと言い切っていいか微妙な斜度を持つ坂道を歩きながら時折雪乃の方を見ると、僅かに息が上がっているようだった。

「大丈夫か？」

「このぐらい、平気よ」

　しかしその一言ですら一息で言い切れないぐらいには、心拍数も上がっているらしい。俺が歩を緩めると、先行していた結衣の背中が少しだけ遠のく。

「戸部くんたちの様子はどう？」

「え？　ああ⋯⋯まぁ、特に変わったことはない、かな。ちょっと二人でいる時間が増えたぐらいだ」

　戸部たちの様子ならとっくに結衣からも聞いていると思うが、俺の口から聞きたかったという事だろうか。

　戸部と海老名さんの様子は、雪乃に伝えた通りに進展といえるものはない。当然と言えば当然だ。いくら修学旅行とは言え、急に意識しだすことなんてまずない。それ以前に、海老名さんが自分自身に折り合いをつけられなければ、事の起こりようがないのだ。

「告白、上手くいくと思う？」

　その問い掛けに、俺は一瞬言葉に詰まる。答えなんてもう出ていて、だからこそ即答するのを戸惑ってしまう。

「⋯⋯たぶん、無理だな」

「それでも、依頼は断らないのね」

　横顔に視線を浴びながら、俺は苦笑するしかない。以前の俺なら「仕事だからな」とだけ言って、煙に巻いたことだろう。

「諦めさせるのも仕事のうちだからな」

　それを聞き届けて呆れ混じりに笑みを溢したのを、俺は視界の端で捉える。雪乃も結衣も海老名さんの告白を阻止して欲しいという暗号めいた依頼には気付いていないようだが、だとしても嘘はついていない。

「うわぁ⋯⋯。すっご。ゆきのん、ヒッキー！　早くはやく！」

　先に四ツ辻まで着いた結衣は、振り返って俺たちを手招きする。何だか子どもみたいだと思って笑みを溢すと、一陣の風が吹いた。

　真っ赤な落葉で視界が彩られ、穏やかな微笑みを浮かべた雪乃と目が合う。その表情と、我が子を初めて抱いた時の雪乃の表情が重なって、思わず胸の内が狭くなる。

「比企谷くん？」

　そう声をかけられて、思わず足を止めてしまっていた事に気付いた。

　しっかりしなければ。感傷になど浸っている場合ではないのだ。今はこの修学旅行で、彼と彼女の未来を“救う”ことが先決だ。

「すまん。ぼーっとしてた」

　そう言って俺は、止まっていた一歩を踏み出す。結衣の隣に立つと、眼下には紅葉に彩られた京都の町並みが広がっていた。

　背中にはじっとりと汗が滲んできていたが、なるほどここまで歩いてきた甲斐がある景色だ。登山を趣味にしている人の気持ちが、少し分かった気がする。

「すげぇな」

　素直にそう言う俺の隣で、雪乃は町並みではなくキョロキョロと辺りを見回していた。

「どしたの、ゆきのん」

「いえ⋯⋯。この近くに、滝行が出来る場所がある、と書いてあったから」

　滝行ねぇ⋯⋯。テレビで見かけることはよくあるが、実際に滝行しているところや、出来る場所を見た事はない。こういう霊験あらたかな場所であれば、滝行ができる場所があっても不思議ではなかった。

「滝行、やってみたいのか？」

　白装束を着て滝に打たれる雪乃の姿──は、見てみたい気もするが、相当にシュールな光景だ。そもそも滝の勢いに負けてへたり込んじゃわないかしら、この子。

「⋯⋯どんな場所なのか、少し興味があっただけよ。あなたがやってみたら？」

　俺の阿呆な想像が漏れ伝わったかのように、雪乃は少し呆れた様子でそう言った。

　滝にでも打たれれば、俺のも葛藤もどこかへ行ってくれるのだろうか。もしそうならば、雪乃の軽口も存外悪くない。

「いい提案だな。着替えを持ってきてたらチャレンジしていたところだ」

　同じ質量の軽口を返すと、俺ははっと短く息を吐いた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　伏見稲荷の次に向かった東福寺は、通天橋で有名な紅葉の名所だ。

　俺の記憶が確かであれば、ここで葉山たちと遭遇したはずだが──。

「すっげー人だな⋯⋯」

　流石は京都を代表する名所だけあって、シーズン終了間際と言えどもの凄い人だ。こんな人出の中で彼らの姿を探す事など、到底無理な話に思える。

「ほんと、凄い人⋯⋯。あ、あそこ空いたよ」

　通天橋を歩いていると、欄干の近くにギリギリ三人入れるぐらいのスペースが空く。そこに滑り込むと、ようやく人の頭越しではなく視界いっぱいに、爆ぜそうなほど真っ赤に色付いた紅葉を見る事ができた。

「見事なものね」

　さっきまで人の多さにげっそりしていた雪乃も、その光景にそっと息を吐いた。紅葉と雪乃の横顔の組み合わせはあまりにもフォトジェニックで、まるで精巧緻密な絵画のようだ。

「あ、ねぇ。三人で撮ろうよ」

　結衣はそう言って携帯を取り出すと、インカメラを起動させた。自然とその立ち位置のまま撮る事になるので、俺が結衣と雪乃に挟まれる形になる。

「ゆきのん、もうちょっと寄って」

「え、ええ⋯⋯」

　一気に二人との距離が縮まって、それぞれの香りが微かに鼻腔に届く。近い。なんで昔のスマホって、こんなにインカメラの画角狭いんだろ⋯⋯。

　三人の顔が入ったと思ったら紅葉があまり写り込まず四苦八苦していると、不意に正面から声がする。

「貸してみそ」

　そう言われ、取り上げられた携帯の向こうに立っていたのは──。

「って、姫菜？　偶然じゃん！」

　そう言って、イエーイと片手でハイファイブ。自分から戸部に観覧ルートを伝えておきながら、このアドリブとは恐れ入る。

「じゃ、撮るよ」

　海老名さんは手慣れた様子でフロントカメラに切り替えると、はいチーズと言って何枚か写真を撮ってくれる。もうそんなに寄る必要はないというのに、彼女たちはさっきまでの距離感のままカメラのレンズを見詰めていた。

　ふと、強烈な既視感を感じる。ここで三人で撮った記憶は、もちろんない。こうやって三人で写真を撮ったのは、いつの事だっただろうか。

「ありがとー。助かった〜」

　結衣に携帯を返した海老名さんと、引き寄せられるように目が合った。時間にしたら一秒か二秒といった短い時間。それでも彼女が言外に何を言っているか、俺にはよく分かっている。

「そっちはどんな感じ？」

「んー、もうちょっとしたら色々寄り道しながら嵐山に行く予定だよ」

　そう言って海老名さんは同行している三人を視線で指した。見れば戸部と三浦が、何やらかしましく盛り上がっている。その二人を苦笑を浮かべて見ていた葉山がこちらに気付くと、ジッと俺の方を見た。

　なんだこいつ⋯⋯。またどっちつかずは良くないとか言いたそうな顔をして。

「そうなんだ。あたしたちもちょっと寄り道しながら、嵐山に行くつもり」

「そっか、じゃあまた後で会えるかもね」

　結衣と海老名さんの会話に視線を戻すと、二人は目で会話の終了を伝えあっていた。

　それから結衣は葉山たちのところに行って一言二言話すと、すぐに俺たちの方に戻ってくる。

「もういいのか？」

「うん。向こうは東寺に寄ってから嵐山に向かうみたい」

　東寺、と言えばかの有名な五重塔のある寺だったか。歴史ジャンルはさほど情報量のないヒキペディアを検索していると、雪乃が欄干から離れる。

「ではそろそろ行きましょうか」

　それを合図に、俺たちは順路を再び歩き出した。次の目的地は、北野天満宮だ。

　北野天満宮の祭神は、天満天神さまこと菅原道真公だ。

　ユキペディア情報によると、菅原道真公は貴族の生まれで幼少の頃から学業優秀、歳をとってからは漢詩に政治に才能を発揮するという相当なチートキャラであったらしい。身近な人間で例えるなら、葉山のようなタイプの人間だろう。一気に参拝する気が失せてきた。

　とは言え世界の妹・小町の総武高校合格の祈願の為だ。俺は絵馬を書く間だけ二人と分かれ、単独で行動させてもらうことにした。絵馬になんて書くかを見られていては、な事が書けないだろう。

　俺は学業のお守りと絵馬を買うと、あの時はなんて書いたんだっけと思い出しながら、ペンを走らせる。

『小町と同じ高校に通えますように』

　多分、こんな感じの事を書いたのではないかと思う。まあ小町が総武高校に合格するのはもう決まっている事だが、絵馬を奉納しなかったが為に神様にヘソを曲げられても困る。俺は奉納所に絵馬をかけると、雪乃たちの待つ参道へと歩き出した。

　ここ北野天満宮も紅葉の名所であるらしく、人出は凄いしそれを当てにした出店まで並んでいる。

　さて雪乃たちは、と辺りを見回しながら参道を歩いていくと、すぐにその姿を見つける事ができた。見目麗しい女の子が二人も揃っていると、無意識に視線を引き寄せられてしまう。

「すまん、待たせた」

「あ、思ったより早かったね」

　そう言う結衣の手には、食べかけの肉まん。珍しい事に、雪乃も買い食いしていたのか、やや大ぶりなコロッケをその手に持っている。他にも空のパックを持っているところを見ると、二人で腹ごしらえでもしていたらしい。朝しっかり食べたからあまり気にならなかったが、昼ご飯を食べ損ねていたのだ。

「⋯⋯そんなに食って大丈夫か。晩飯入らなくなるぞ」

「大丈夫よ、このぐらい」

　どっかで聞いたことのある台詞だなと思いながら言うが、雪乃は取り合う様子もない。

　元々食が細いのに大丈夫かしら⋯⋯と心配しながら二人が食べ終わるのを待っていると、雪乃はコロッケを半分ぐらい食べたところで急に口に運ぶペースが遅くなり、チラチラとこちらを見てくる。

　⋯⋯分かる。分かるぞ俺には。彼女が次に何を言うのか。

「⋯⋯確かに、少し多かったみたいね」

　と、そこまでは言うが、そこから先の言葉が出てこない。まあ、雪乃の性格からしたら、残りを食べてくれとは言い出し難いのだろう。

「もしあれなら、育ち盛りという名の残飯処理係がここにいるが」

「⋯⋯そう？　では処理をお願いできるかしら」

　ちょっと安心したような表情をして、雪乃は残る半分を俺に渡してくる。そしてもしゃもしゃペロリとそれを平らげている間、じっとこちらを見詰めてくる一対のお目々。

「あたしも、ちょっと多いかも⋯⋯」

　そう言うと結衣も「はい」と食べかけの肉まんを渡して来た。

　やはりこうなるか⋯⋯と思いながら、二人に見られながら肉まんも平らげる。食べ始めてみると胃が動き出したのか、意外とお腹が空いていた事に気付いた。

「ふふっ」

　不意に聞こえた笑い声に、雪乃の方を見る。思わずといった調子で溢れた笑みは柔らかく、雪乃と目が合った結衣も同じくクスリと笑った。

　あー⋯⋯また餌付けられてしまったか。なんだかむず痒いが、まあたまになら、こういうのも悪くない。

「⋯⋯ぼちぼち行くか、嵐山」

　笑みまじりの答えが二つ揃って、俺はポリポリと頭をかくことしか出来なかった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　あれから予定通り嵐山に行くと、俺たちは戸部の告白の舞台──いつかと同じ、竹林の道に目星をつけた。

　ホテルに戻り夕食をとりつつ戸部たちに話をつけると、いよいよ彼は落ち着きをなくしてくる。

「っべーわー。マジで緊張するわ⋯⋯。吐きそう」

「大丈夫だろ」

「っかー。ついに戸部も彼女持ちかよ」

　夕食を終えてホテルの部屋に戻ってくるなり、戸部はウロチョロと歩き回り、大岡と大和は彼の背中を叩く。

　彼らの言葉自体は友を思っての事なのだろうが、なんの根拠もないしいっそ空々しく感じてしまう。結末を知っているが故に、どうしてもそう思ってしまうのだ。

　いっそこの場で告白をやめさせられたら俺も気持ちが楽なのだが、そういう訳にはいかない。ちゃんと戸部を──覚悟を決めた彼を、彼女の目の前に送り届けないと。そうしなければ、その未来は変わってしまうだろう。

「戸部」

　凛とした声が、彼を呼ぶ。その声の主を、俺は部屋の端から見ていた。

「なに？　隼人くん、俺今マジテンパってるから」

「⋯⋯いや。頑張れって言おうと思ったけど、やっぱりやめておく」

「ひどくね⁉︎　あーでもなんか落ち着いてきたかも」

　側から見ていても全くそんな事はないのだが、戸部は自分に言い聞かせるように「緊張とけてきたわー」と繰り返す。

　対する葉山は、その表情を隠してそっと部屋を出て行った。俺はその背中を追って、騒々しい部屋を出る。

　ホテルを出て、川べりの道を歩いていく。まだまだ見頃と言っても良さそうな紅葉が川面に揺れ、寒いぐらいの風が頬を撫でつけていた。

「告白、上手くいくと思うか」

「⋯⋯さあ」

　俺が後ろからついて来ていることなど見なくても分かっているのだろう、葉山は振り向かずに肩をすくめた。

「質問を変える。上手くいって欲しいか？」

「上手くいくものなら、もちろんそう思うさ」

　振り返って俺を見る葉山の表情は、沈鬱と言っていい程に仄暗い。こいつと一緒というのも癪だが、葉山にだってもう結末は見えているのだろう。近くで彼と彼女を見ているからこそ、洞察する事ができてしまう。

「その言い方だと、失敗するのが決まってるみたいに聞こえるぞ」

「⋯⋯そうだよ。十中八九、上手くいかない。今の姫菜が、戸部に心を開くとは思えないからな」

　葉山は河原の石を拾い上げると、遣る方無いとでも言うかのようにそれを川に投げる。紅葉を映す川面に三つ波紋が広がり、やがて何事もなかったかのように元の姿を取り戻す。

「何度か諦めるようには言ったんだ。今じゃないって。結局耳を貸してくれなかったけど」

　俺は葉山の言葉の続きを促すように、なるべくな石を拾い上げて、川面に滑らせるように投げた。一度だけ跳ねたそれは、すぐに元気を失って川底に沈む。久しぶり過ぎると、上手くいかないものだ。

「俺は今の状態が気に入ってるんだ。戸部も、姫菜も、みんなでいる時間が好きなんだよ」

　その言葉に俺はどう答えたのか、よく覚えている。

『それで壊れる関係なら、元々その程度のもんなんじゃねぇの』

　俺はそう言い、葉山の価値観を否定した。けれどその先の未来を知っている俺は、もう同じ事は言えない。壊さずに大切にした関係性が、やがて本物へと至る姿を見てしまったら、言えるわけがない。

「つまりお前は、何も変えたくないって事だな」

「⋯⋯ああ、そうだ」

　俺はそれだけ聞き届けると、この先の出来事を心の中に描いた。海老名さんに取り付けた約束の時間まで、もうそんなに長くはない。

「分かった。じゃあな」

　踵を返すと、ホテルに向けて歩き出す。葉山の気持ちを確認できたら、もうここに用はない。

「すまない⋯⋯」

「謝んじゃねぇよ。貸し一だからな」

　俺はそう言って、ヒラヒラと背中に回した手を振った。どうせ彼は、見てもいないだろうが。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　竹林の道に、晩秋の風が吹き抜ける。

　さわさわと鳴るその中で、ぽつりぽつりと灯籠が灯っていく。

「っべーわ。うわ、マジで緊張する」

　戸部は告白の直前になっても未だ落ち着く事を知らず、その周りで葉山と大岡、大和が何も言うまいと彼を見守り続けていた。

「なんか、こっちまで緊張するね」

「なんでだよ⋯⋯」

　結衣はハラハラドキドキとでも言うように、竹林の道の先を窺い続けている。対する雪乃は、冷静沈着。興味が全くないのではと思うぐらいに、その顔に表情がない。

「そろそろ時間ね」

「ああ」

　俺は雪乃にそう答えると、そっと二人の元を離れた。一応、これだけは確認しておかないといけない。

「戸部」

　俺が呼びかけると、戸部は緊張と期待と不安が入り混じった、何とも情けない笑顔を向けてくる。

「ヒキタニくん⋯⋯。あー、やべ、ヒキタニくんの顔見たらまた緊張してきた」

　いやなんでだよ⋯⋯と思いながらも、面倒だから突っ込むのはやめておいた。それよりも俺には、訊いておかなければならない事がある。

「お前、振られたらどうするんだ？」

「また振られるの前提⁉︎　ひでーわヒキタニくん。また覚悟試してる感じ？」

「いいから早く答えろ」

　俺は目に力を込めて言うと、その真剣さに戸部は一瞬たじろぐ。しかしその答えは、すぐに返ってきた。

「⋯⋯そりゃ、諦めらんないっしょ」

「分かった」

　頷き、そっと半歩だけ後ろに下がる。戸部の全身を視界の真ん中に置いて、他の三人が聞いているのも構わず俺は言う。

「絶対に、諦めるなよ。絶対にだ」

「お、おお⋯⋯。モチっしょ、そんなの」

　一瞬俺の気迫に押されたようだったが、戸部はすぐにキリッと無駄にいい顔をして返事をした。ここまで伝えれば、もう十分だろう。

「⋯⋯ヒッキー」

「珍しい事もあったものね」

　雪乃たちの方に戻ると、二人は柔らかな表情で俺を迎えてくれた。しかしそんな表情も、これからの事を考えると胸が詰まる。

「いや、多分振られるから言っただけだ」

　そう、間違いなく振られる。“俺ごと”振られるのだ、今から。

　青々とした竹林の向こうを見ると、見慣れた制服が目についた。俺たちの待ち人──海老名姫菜は、灯籠に照られた道をゆっくりとこちらに向けて歩いてくる。

　これから先の事は、同じ事の繰り返し。

　けれど、それだけではダメな事は分かっている。虚偽の告白は避けられないにしても、俺にはまだ足掻く余地はあるはずだ。

　結局色々考えても、最善と呼べる手を考えつく事はできなかったし、これでいいかどうかも分からない。けれど間違いなく言えるのは、雪乃は俺の知る過去よりもずっと分かりやすく、俺に好意を滲ませているという事だ。昔の俺なら敢えてその心の機微に気付かない振りをしていたかも知れないが、今の俺からしたらそれは確定的だった。

　だからせめて、お互いの気持ちが分からない状態に陥ることだけは避けなければならない。

「雪ノ下」

　そう呼ぶと、竹林の向こうを見ていた二人の視線が俺に向けられる。

　まったく、こんな事を言うのには最悪のタイミングだろう。それでも、言わなければ。一か八かでも、可能性があるなら変えなくてはいけない。

「俺は、お前の事が好きだ」

　あまりに唐突に、取り違えようのない直裁な言葉で。俺は確かに、それを伝えた。

　雪乃の目は驚きに見開かれ、その隣で結衣の顔は伏せられる。結衣の前でそれを伝える事は正しい事とは思えなかったが、もうこれを逃せばタイミングはない。

「俺が今からする事を、誤解しないで欲しいから、今伝えておく」

　竹林の道の真ん中を見ると、海老名さんは立ち止まり、その真正面には緊張で身をガチガチにした戸部の姿がある。

　と語り出す戸部に、海老名さんは切って貼ったような無機質な笑顔を浮かべていた。そろそろ、頃合いだ。

「⋯⋯すまん」

　俺はそれだけ言って、彼女たちに背を向けた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　全てが終わって、俺は晴れない気持ちで竹林の道を引き返す。

　そりゃないわーと落胆と安堵の混じった静かに盛り上がる声も、竹林のさわさわと揺れる音すらもどこか遠くに聞こえる。

「⋯⋯比企谷くん」

　その冷たい声音に視線を上げると、問責するような目が俺を捉えていた。

　ぞくりとするほどそのの温度は低く、宝珠のような瞳には僅かな澱みが浮かんでいた。

「さっきのは、いったい何？　あなたは何がしたいの？」

　何がしたいかなんて分かりきっている事で、しかし言葉にする事はできないからこそ胸が締め付けられる。

　雪乃の冷たく鋭い視線は、あの頃よりも切れ味が増しているような気がした。それはきっと気のせいではなくて、悲しみさえ孕んだその声が俺の心の奥底まで毒のように回り込んでくる。

　一か八かの、俺の賭け。

　それに俺は負けたのだ。雪乃の反応が、その隣で沈痛な表情を浮かべる結衣の表情が、それを俺に知らしめる。

　不透明な感情というディスコミュニケーションを避ければ、分かってくれるかも知れない──という俺の考えは、見事に当てが外れたのだ。

「どうして、あなたが⋯⋯」

　雪乃は両手を握り込むと、そこまで言って言葉を途切れさせた。

　結局、彼女に分かってもらう事はできなかった。当然と言えば当然だ。海老名さんの依頼の内容を理解できていない以上、俺の行動は彼らの表面的な馴れ合いを肯定したようにしか見えないだろう。

　雪乃の憤る理由は──その感情の根底にあるものは、本来喜ぶべきものだ。俺の事を大切に思う気持ちがあるからこそ、誰かの為に傷つくのを彼女は許せない。

　だから彼女は、その先の言葉を言えないのだろう。どうして彼らの為に俺が傷つく必要があったのかと。そして『あなたのやり方は嫌い』だと、その直情を向ける事すら出来ない。その言葉の刃を自らに向けているかのように、雪乃の顔は痛苦に染められていく。

「⋯⋯先に戻るわ」

　そう言って雪乃は、俺たちに背を向けて歩き出した。この場に留まる辛さを表すかのようにその歩調は速く、俺はその背中が小さくなっていくのを見ている事しかできなかった。

「⋯⋯ヒッキー」

　結衣の声に、俺はそっとその背中から視線を外した。さっきまでの沈痛な面持ちを気力のない笑みで覆い隠して、結衣は俺を見ていた。

「あたしたちも、戻ろっか」

「ああ⋯⋯」

　そう返事をして、ゆっくりと歩き出す。

　こんな時にもその優しさを見せる結衣に、また救われているのだ、俺は。いほどに現実を突き付けた俺に、救われる価値などないというのに。

「ねぇ⋯⋯」

　灯籠に照らされた道を歩きながら、結衣は俺を見ずにそう言った。その瞬間、思わず身震いするほど冷たい風が竹林を吹き抜け、その葉は雨でも降っているみたいにサァサァと音を立てた。

「ヒッキーは色々考えて、ああしたんだよね」

　それは質問というよりも確かめるかのような響きで、わんわんと俺の頭の中を木霊する。

　──そう、考えていた。そのはずだった。

　しかしそれは考える振りをして、結局善人ぶった生温い判断に身を委ねただけでないのかと問い質されれば、俺に弁明の余地などない。

「⋯⋯でもさ」

　小道に落とされた結衣の視線には、あの頃のように縋るような、いっそ子どもじみているとすら感じるほどのさはどこにもない。

　俺の行動の結果が彼女の、まだ内包していてもいいはずの素直さまでも押し殺してしまった。また彼女は、哀しいで大人にならざるを得ないのだ。

「あの方法しか、無かったのかな⋯⋯」

　結衣のその質問の答えは、今を以てしても分からない。

　やり直していたって、分からないのだ。多分俺には、何度やり直しても分からないのだろう。

　竹林を抜け、俺は答えを探すように天を仰いだ。淡く青い光を降らせる月はまるで彼女のようだと、俺はそんな事を考えた。

お読みいただきありがとうございました。修学旅行編、後編でした。  
敢えて結末を変えなかった事が、おそらく意外に思われるでしょう。  
大人だって悩み、まちがえるのはままある事で、むしろまちがえる事が多くなっているのではと思う程です。  
物語ももう終盤。このまちがいが、彼ら彼女らにどんな変化を与えるのか。  
最後まで見守って頂けたら幸いです。

一色いろはは、何度もそう言っている。

　修学旅行から帰ってきて、土日を挟んでの月曜日。

　まったくこの二日の休日というのは、酷い有り様だった。食事の時以外は部屋に引きこもり、延々と正答があるかどうかも分からない正解探し。

　あの竹林の、青白い夜のことを何度も頭の中でリプレイさせては自分にダメ出しして、替わりの台詞を言わせてみてもしっくり来ない。

　しかしもう、月曜日。

　俺は学校に行かなければ、そして放課後に奉仕部の部室に行かなくてはならない。いくら自分を責めたところでその時はやってくるし、彼女たちと関わらないなんて選択肢はないのだ。

「あ、おはよ。お兄ちゃん」

　しっかりと顔を洗ってからリビングに入ると、小町は朝食を用意してくれているところだった。温かいご飯と味噌汁の香りが鼻腔を満たし、少しだけ陰鬱な気持ちがやわらいだ気がした。

「おはよ」

　俺がそう言って椅子に腰掛けると、朝食の準備を終えた小町は俺の目の前に座る。いただきます、と手を合わせると、箸を手に取るわけでもなくじっと俺の目を覗き込んでくる。

「⋯⋯うん。だいぶ顔色マシになったね」

「⋯⋯そんなに酷かったか、俺」

「酷かったよー。目なんて死んでるどころか火葬まで終わってたもん」

　そうですか、そんなに灰色に濁った目をしてましたか。愛妹にも心配されるぐらいに、俺はダメダメであったらしい。

　俺はその視線から逃れるようにお椀を上げて味噌汁を啜ると、おっかなびっくりといった調子で、小町はいつかと同じ台詞を言う。

「ねぇ⋯⋯。なんかあった？」

「⋯⋯あった」

「それって、雪乃さんと結衣さんも関係ある？」

「ある。⋯⋯そんでもって全部俺が悪い」

　そう言い切って小町を見ると、はえーっと気の抜けたような表情が目の前にある。

「珍しい⋯⋯。絶対はぐらかしてくると思ったのに」

　確かに以前の俺なら、間違いなくそうしていただろう。しかしそうしたところで何の意味もないし、この時の兄妹喧嘩は随分長引いてしまった事をよく覚えている。こんなところで同じを踏む必要もない。

「なぁ⋯⋯」

　俺は箸を置いて居住まいを正すと、真正面に小町を見据えた。こんな事を実の妹に訊くのは兄としてどうなんだとは思うが、残念ながら適切な相談相手は小町以外に思い付かなかった。

「自分がちょっと傷つく事で、大切なものが守れるとしたら、どうする？」

「えぇ⋯⋯。抽象的すぎるんだけど⋯⋯」

　そうは言いながらも質問をしてくるわけでもなく、小町はしかつめらしい表情で腕を組んだ。うーむ、と唸ること暫し。パッと目を開けると、小町は実に軽い口調で言った。

「まあ、ちょっとぐらいなら守る、かな」

　その答えに、やはり兄妹だなと俺は少しだけ相好を崩す。だが俺の質問の本番は、これからだ。

「じゃあ、そうする事で他の誰かが傷つくとしたら？」

「これまた抽象的な⋯⋯。そんなの簡単でしょ」

　小町は箸を手に取るとピッと俺にその先を向ける。お行儀が悪い。

「守れるものか傷ついちゃう人、どっちが大切か考えて選ぶ」

　そう言って卵焼きを口に放り込んだ小町を、俺は身じろぎ一つせずに見ていた。

　そう、なんだよな。

　小町の言う通りだ。至ってシンプルで、簡単な問いかけだったはずなのだ、これは。

　俺がまちがえたのは、その選択だ。誰も彼もを救えると、その慢心がまた彼女たちを傷つける結果になってしまった。

「⋯⋯ありがとな」

「⋯⋯？　なんでお礼言うの？」

　俺は小町の質問には答えずに、かぶりを振った。

　もう答えは決まった。次の選択は、まちがえない。今度こそ、絶対に。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　登校してから放課後になるまで、俺はひたすらに沈黙を守り教室内を静観していた。

　誰も彼もが修学旅行の熱を残しつつも、いつも通り。葉山たちグループにもそれは当てはまり、別段変わった様子は見られない。というかそうでなければ、困る。

　ひとつ気になると言えば結衣の視線がこちらに向く事が多かったことぐらいだが、それ自体は以前と同じだ。互いの様子が気になるのは、必然だろう。

　ふらりと教室を抜け出すと、俺は特別棟には向かわず、一階の自販機コーナーへ足を運んだ。温かいマッ缶を買うと暫く手の中で転がして、その熱を奪う。

　プルタブを開けて、一口、二口と舌に絡みつく甘さを嚥下していく。そろそろ結衣も、奉仕部の部室に向かった頃だろうか。

　マッ缶が残り半分になると、俺は一息にそれを飲み干して空き缶をゴミ箱に放り込んだ。いつもと違う道を通りながら、部室へ向けて足を繰り出していく。

　部室の前まで来ると、中から密やかな声が聴こえてくる。もう彼女たちは、部室の中にいるらしい。

「⋯⋯⋯⋯」

　俺は努めていつも通りに、その扉を開ける。

　瞬間、止まる会話。廊下にまで染み出した沈黙。

「⋯⋯うす」

「⋯⋯こんにちは」

「ヒッキー⋯⋯」

　机の上にはティーコゼーの被せられたポットと、二つのティーカップ。焼き菓子と紅茶の香りがどこか懐かしく感じられる。

　扉を閉め、俺がいつもの席に座っても会話が再開する気配はない。それもまあ、無理はない事かと思う。

　いっそのこと彼女たちの真正面に立ち、俺のと慢心を詫びようかとも考えた。しかしそうする事で満たされるのは自分だけで、彼女たちにとってみれば何にもならないだろう。それにこの後の来訪者の事を考えたら、あまりイレギュラーな事を起こさない方がいいように思う。

「今日はもう、来ないかと思っていたわ」

「ああ、ちょっと寄り道しててな」

　そう言いながら、俺は何でもないとでも言うように鞄から文庫本を取り出して、読み止しのページを開いた。

　それきり、会話は生まれてこなかった。結衣も沈黙をかき消す為に話の端くれを見つけようとしなかったし、それは雪乃も一緒だった。

　ただページを繰る音と、時折カップがソーサーに置かれる音だけが部屋に響く。

　これが、俺の選択の結果なのだろう。以前よりなお沈鬱で、批難すら向けられる事のない程の隔絶。だが俺がするのは、後悔ではない。その選択を、誤らないことに集中しなければならない。

　──コンコン、と。

　あまりにも部屋の中が静かだったから、その音はよく響いた。

「どうぞ」

　雪乃が僅かに固い声でそう言うと、ガラリと扉が開いて冷たい風が吹き込んでくる。

「邪魔するぞ」

　そう言って入ってきたのは平塚先生で、風に弄ばれる長い髪を疎ましそうに撫でつけている。

「少し頼みたい事があるんだが⋯⋯。都合が悪かったか？」

　俺たちの間に流れる沈黙に気付いたのだろう。平塚先生はそう言うと俺たちの顔を順番に見ていく。

「いや、何もないですけど」

　俺がそう言うと、平塚先生はふむと顎に手をやり頷いた。

　その質問には、俺が答えるしかない。雪乃は嘘をつけないから、その代わりを務めるのは俺の役目だろう。

「改めた方がいいか？」

　雪乃も結衣も何も言わない違和感に、やはり気付いたのだろう。平塚先生はそう言うが、俺は顔を横に振った。

「いえ、大丈夫です」

　そう言って雪乃と結衣の方を見ると、彼女たちもこくりと小さく頷いた。まあ、そうさせたようなものだが、今日のタイミングを逃されてもあまりよろしくない。

「入って来ていいぞ」

　平塚先生がそう声をかけると、廊下から姿を現したのは現生徒会長であるめぐり先輩で。

「ちょっと、相談したい事があって⋯⋯」

　そう言った彼女の後ろから一歩前に出てきたのは、亜麻色のセミロングの髪を風に揺らした、一人の女子生徒──一色いろはだ。

　エアリーな髪型にくりっと大きな目。俺と目が合うと⋯⋯おそらくは以前もそうしたのだろうが、ふわりと微笑みを向けて見せる。

　校内で見かけてもかなり遠巻きに眺める事しかなかったから、改めて近くで見ると懐かしさが込み上げてくる。あざとさ全開、甘さもスパイスもマシマシの高校一年生のいろはは、眩しい程にその魅力を全身から滲み出させていた。

「あ、いろはちゃん」

「結衣先輩、こんにちは〜」

　小さく手を振り合う彼女たちを見て、俺は人知れずほっと胸を撫で下ろしていた。よかった。ここまでは、ほとんどあの頃のままだ。

　万に一つも無いとは思うが、俺は今までの行動に様々な変容を与えてきた。バタフライ効果でこのイベントが発生しないとなると、かなり困る事になるところだった。

「もうすぐ生徒会選挙があるのは知ってる？」

　めぐり先輩のその一言から始まった奉仕部への依頼内容は、あの頃と何も変わっていない。

　遅れに遅れた生徒会選挙。会計以外の立候補も出ており、後は信任投票を待つだけだが、いろはの意図しないところで生徒会長に推されたこと。なんとかして生徒会長当選を回避したいというその依頼の中身は、あの時と寸分の違いもない。

「一年生だから生徒会長にはなれない、って事にはならないのかな？」

「ならないわ」

「規約には、会長は二年生に限る、みたいな事は書かれてないんだよ」

　結衣の質問に雪乃は即答し、めぐり先輩が補足する。

　思えばこの会話からでも、雪乃の気持ちを推し量ることは出来たように思う。生徒会の選挙規則まで把握してるとは流石ユキペディアさん、とかそんな話ではなかったのだ、これは。

　曰く記憶というのは、定着するかどうかは興味や刺激があるかによるものらしい。読んだものをそのまま覚えておくなんて、いわゆるギフテッドと呼ばれる特殊な人間以外にできる芸当じゃない。故にこの時の雪乃の発言は、生徒会に興味があるという証左に他ならなかった。

「つまりは信任投票で不信任になるか、新たな候補を擁立するしかないということね」

　状況を取りまとめた雪乃の発言に、その場の誰もが押し黙る。

　俺はもう、落選するだけなら出来るなどと大口を叩く事はしなかった。そんな事をいってを生むのはもうこりごりだったし、これから先の出来事になんの意味もない。

「不信任の線は、正直厳しいだろうな」

　そう言って俺は、ちらりといろはの方を見た。

　誰もが見て分かる通り、いろはとても可愛い女の子だ。応援演説が酷かろうが、選挙演説がグダグダだろうがまず信任されるだろう。当て馬候補をぶつけたところで、中途半端な人間では勝負にならない。

　仮に演説の中身や選挙公約が互角の中身だとしたら、多くの人間がこう判断するはずだ。生徒会長として“視界に入れて心地よい”のはどちらなのか？

　そんな残酷な判断基準を、誰しも心に秘めている。

「じゃあ、他に誰かやってもいいって人を探す、とか⋯⋯」

「そんな奴がいたら、とっくにもう立候補してるだろうな」

　結衣の提案を、俺はやんわりと否定する。それは結衣も分かっているのか、机に視線を落とした。雪乃は何か言いたそうに俺を見たが、開きかけた唇は元の形に戻っていく。

「何とかなりませんかね〜」

　当事者であるはずのいろはは、まるで部外者みたいに間延びした声でそう言った。その態度はこの重苦しい空気を払拭せんが為に作られたものだというのは、今の俺ならば分かる。

「正直、さっぱり良い手が思い浮かばないな」

　俺はお手上げ、とでも言うように頭の後ろで手を組んだ。それを見たいろはは貼り付けた笑顔のまま俺を見てくるが、気付かない振りをした。

「結論は出なさそうだな」

　それきり黙ってしまった俺たちを見て、平塚先生は寄りかかっていた壁から身を起こしながらそう言った。

「一色さん。また明日、改めてもらってもいいかしら」

「あ、はい」

　雪乃の凛とした声に、いろはは思わずといった様子で居住まいを正した。今日のところは、これでお開きだ。

「じゃあまた明日、よろしくお願いします」

　いろはは椅子から立ち上がると、雪乃の方を向いてにお辞儀をした。まだ雪乃に対して慣れていない感じが、酷く懐かしい。

　平塚先生がめぐり先輩といろはを連れて部室を後にすると、再び俺たちの間に音の無い時間が訪れる。その沈黙には先ほどまでの会話の流れで、黙考という名前を与えてもいいのだろう。しかしそんな気休めは、今の俺には必要ない。

「⋯⋯そろそろ帰るわ」

「あ⋯⋯うん」

　俺はそう言うと立ち上がり、鞄を背負った。二人からすれば完全下校時間前に自ら率先して帰ろうとするなど、奇異に映るかも知れない。あるいはこの雰囲気に耐えられなくなって帰ろうとしていると思われてしまうかも知れないが、この機会を逃すわけにはいかない。

　俺は彼女たちを振り返ることなく──敢えて雪乃の表情を見ないようにして、奉仕部の部室を後にした。廊下に出ると、冬の気配をむき出しの頬に感じながら、早足で歩いていく。

　階段を降り、ちょうど空中廊下へと繋がる分岐に差し掛かると、誰かに手を振るいろはの姿が見えてくる。その仕草から察するに、めぐり先輩と分かれたところらしい。

「一色」

　早足で追いつくと、俺はその背中に向かって声をかけた。瞬間ビクッと天敵を察知した小動物のように身体を跳ねさせ、いろはは俺の方を振り返る。

　そういえば、彼女からしてみたら俺から名前を呼ばれるのは初めてだろう。しかもいきなり背後から呼び止められたら、驚いても無理はない。

「あ、はい⋯⋯。なんですか、先輩」

　いろはは振り返った直後こそ警戒心を露わにしたものの、俺だと分かるとすぐに急造の笑顔を装着した。

「明日、また話しに来るだろ。終わった後、時間くれるか」

「はぁ⋯⋯分かりましたけど⋯⋯」

　まだ続きそうな語尾が気になって待っていると、笑顔を引っ込めて神妙な顔付きになる。

「それって、結衣先輩たちには話せないような内容、ってことですか？」

「ああ、そうだ」

　俺は包み隠さずそう言うと、いろははうーんと廊下の壁をめ付けるように視線を外した。だがそんな反応も数瞬の事で、次に目が合った時には可憐な女の子に戻っている。

「分かりました。じゃあ、明日よろしくお願いしますね」

「ああ」

　そう言って俺は踵を返すが、廊下に響く足音は一つ。

　背中を刺すような視線にはやはり気付かない振りをして、俺は歩き続けるのだった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　翌日の放課後。

　奉仕部の部室の中で、また俺たちはそれぞれの距離感で椅子を並べ、車座になっていた。

「では、改めてお話を伺いましょうか」

　雪乃がそう言うと、いろはは「はいっ」と元気に返事をした。⋯⋯が、部室の中にはその声が僅かに響いた後、静寂に満たされる。

「あ、えっと⋯⋯。わたしは生徒会長とかやるつもりがないので、落選したい、っていう話なんですけど」

　いろはは話の端緒が渡された事に気付くと、背筋を伸ばして話し始める。

「信任投票で不信任よりも、理想は決戦投票ですね！　この人には誰も勝てないよーってぐらい、凄い人に負けるのが一番いいんですけど」

　その難しさを、恐らくいろはは想像し切れていないのだろう。溌剌とした声が、プレッシャーとなって俺たちにのしかかる。

「決戦投票、ね⋯⋯」

「やっぱり立候補して、やってもいいって言ってくれる人を探すか、説得？　かなぁ」

　雪乃は腕を組んで瞑目し、その隣で結衣は誰に言うでもなくそう呟いた。俺も仰々しく溜息を吐くと、殊更に気難しい顔を作る。

「もしいたとしても、そこから推薦人三十人の署名、それに選挙公約と選挙活動か⋯⋯」

　その実現性の低さを強調するように、重苦しい声でそう言った。その言葉に雪乃はかの反応も見せず、結衣だけがそっと視線を落とした。

「やっぱり難しい感じですかねー⋯⋯」

　俺たちの反応に同調するように、いろはもすっかり肩を落とした。その難しさは、やり直しの中であっても変わらない。

「どんな手段を取るにしても、一色さんには演壇に立ってもらう必要があるわ」

「まあ、それは大丈夫ですけど⋯⋯」

　雪乃は少しの間閉じられていた目を開けると、憂いを帯びた瞳に冷めかけた紅茶を映していた。しかしいろはの方に視線を向けると、そんな態度など最初からなかったかのように、小さな灯火をその目に浮かべた。

「どちらにしても必要だと思ったから、一色さんの公約と演説内容を考えておいたわ」

「え、すご⋯⋯。雪ノ下先輩、仕事早いですね⋯⋯」

　自分の為にしてくれた事だというのに、いろははちょっと引いていた。そういうとこだぞ、いろはす。

「けど、二つだけですか？」

　雪乃から選挙公約の書かれた紙を受け取ると、内容をめたいろはは怪訝そうな表情を浮かべる。

「いやー、あたしも少ないんじゃないって思ったんだけど」

「この場合、数が多ければいいという話ではないわ。何よりあなたは、落選したいわけでしょう？」

「それは⋯⋯はい。そうですね」

　雪乃の冷静沈着な言葉に、いろははふむふむと顎に手をやりわざとらしく反応を返す。

　俺はそんないろはの様子を、注意深く観察していた。今一状況に対して緊張感がないが、彼女は本当に生徒会長をやりたくないのだろうか。ふとそんな可能性を考えてしまって、俺はそのやり取りを静観していた。

「⋯⋯先輩は何か、いい案はないんですか？」

　すると流石に俺の視線が気になったのか、目が合うなりふわりと微笑んでそう聞いてくる。俺の腐眼で見詰められてなお笑顔で返すとは、やはり一色いろは、恐ろしい子⋯⋯。

「いや、全然だな。昨日から考えてみたが、これと言った手がない」

　その問いには、そう返すしかない。そうしなければいけない理由が、俺にはあった。

　俺がそう答えたっきり、会話は途絶え沈黙はその深さを増していく。溜息を吐く事すら億劫になるほどの重苦しい静けさに、いろはの顔にも深刻さが差してくる。

「と、とりあえずあたしは、やってくれそうな人がいないか、声をかけてみるよ」

「そうね⋯⋯。解決策を考えるのと同時並行でそちらも進めていきましょう」

　結衣の提案に雪乃がひっそりとそう言うと、ほんの数グラムだけ空気は軽くなった気がした。今日のところはこれで、お開きだろう。

「一色さん。解決策は引き続きこちらで考えてみるけれど、応援演説を誰に頼むかはお願いしていいかしら」

「あ、はい。適当な男子に頼めばやってくれるかと」

　さらりと言うけど友達の女の子、とか言わないところが闇の深いところなんだよなぁ⋯⋯。まあそれも、いろはの魅力と言っていいだろう。

「じゃあ、よろしくお願いします」

　いろはは椅子から立ち上がると、ぺこりと頭を下げる。事の進展の無さも、その所作一つとってみても、昨日から何も変わっていない。

　いろはが辞去すると、再び部室の中を静寂が支配する。会話は生まれない。すなわち何も案がないという俺の言葉を信じている、という理解でいいだろう。

「⋯⋯俺も帰るわ」

「ヒッキー⋯⋯」

　まるで昨日のリプレイのような光景に、やはり何か言いたい事はあるのだろう。結衣はそう声をかけてくるが、上手く言葉にできない様子だった。

「俺も俺で、考えてみる」

「うん⋯⋯。お願い」

　結衣にそう声をかけながら、ちらりと雪乃の方を見る。の間だけ目が合うが、顔を伏せるように俯いて彼女は瞑目した。

　思えばあの時のように互いのやり方を批判し合わないだけ、マシなのかも知れない。あるいはその逆で、言い争うというコミュニケーションすら成立していないだけかも知れないが。

　俺は部室の扉を閉めると、はぁと彼女たちに聞こえないように溜息を一つ吐くと、いろはの姿を探して廊下を歩き始めた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

「それで、話ってなんですか？」

　昨日と同じく空中廊下への分かれ道で落ち合った俺たちは、特別棟一階の外、保健室の隣の階段に座り込んでいた。

　テニスコートからはポーンポーンとボールが跳ねる音が聞こえ、聞き慣れたそれはどこか牧歌的にすら感じられる。

「ああ、それなんだが⋯⋯。まずは連絡先を教えといてもらっていいか？」

「は？」

　いろはは一瞬素になると、すっと腰をずらして人ひとり分の間を取った。

「⋯⋯いやー、二人がいるところではちょっとってそういう意味でしたか。うーん、単に連絡先知りたいだけとかなら今好きな人がいるのでごめんなさ」

「ちげぇよ⋯⋯。生徒会長選挙の為だ」

　いろはの言葉をそう遮ると、俺は隠す事もなく嘆息した。いつもの早口が出てこないところをみると、まだまだ距離感が詰められていないようだが、それはさて置き。

「さっき解決策はないって言ったけど、一つだけある」

「はぁ⋯⋯」

　いろはは全力で訝しむような目線を送りつけてくるが、それも無理はないと思う。彼女から見たら俺の行動は意味不明すぎるし、ヤバイ人認定まであと一歩ってところだろう。

「それと連絡先の交換と、なんの関係があるんです？」

「ある、としか言えない。解決策の内容はまだ一色にも言えないからな」

　あり得ないとは思うが、いろはから雪乃と結衣に伝わってしまう可能性が少しでもあるなら今は伝えない方がいい。しかしその進め方に納得しているのは俺だけで、いろははいよいよ俺を信用できる人リストから除外しようとしていた。いや、そもそもそのリストに俺の名前が載った事があるかどうかも疑問だけど。

「具体的には、言えないと⋯⋯。夜中に変なメールとかしません？」

「しねぇっての⋯⋯」

　雪乃といい、いろはといい、俺にどんな印象を持っているのか。まあ人がいうところの犯罪者の目を持つ俺が信頼を勝ち取るには、これからの行動にかかっているという事だろう。

「一つ具体的な事が言えるとしたら、一色にも手伝ってもらう必要がある。だから連絡先を交換しておきたい」

「はぁ⋯⋯それはまぁ、生徒会長やらなくていいならいいんですけど」

　渋々と言った様子で、いろはは携帯を取り出した。

　連絡先の交換が終わると、俺はいろはの顔をじっと覗き込んだ。彼女のその意思を、本気を確かめる為に。

「一色」

　わざと硬質な声でそう呼ぶと、その声の異質さに気付いたのかいろはは居住まいを正す。くりっとした目に真剣さを灯して、いろははしっかりと俺と目を合わせていた。

「本当に、生徒会長になりたくないんだよな？」

　その質問は、どう考えても、どこから見ても、俺の為の問いだった。

　俺のこの生徒会長選挙に於いて、大きく選択を変える。理由は単純だ。これから先の事を知っている通りになぞったとしても、誰も救えない。このまま元の世界線に戻れないなんて未来は、受け入れられない。

　それにこの世界線に於いては、俺と雪乃の奉仕部における“勝負”が存在していない。故にあの頃の出来事を再現したとしても、必ずどこかで躓く。そんな不安定な未来よりも、俺は大きく様相を変えた未来の方がまだ明るいと、そう信じている。

「はい。やりたくないって、昨日から言ってるんですけど⋯⋯」

　今更何を訊くんだとでも言うような顔で、いろはは肩から背中にかけて張り巡らせていた緊張を解いた。

　これで、俺の腹も決まった。

　一色いろはは、もう生徒会長にはならない。つまりいろはの人生から高校一年生にして生徒会長という貴重な経験は抜け落ちてしまうし、元の世界線ほど俺たちと深い関わりは持たないだろう。それに関しては何とか手の打ちようはあるが、関係性が続くかどうかはいろは次第になる。

　だが今が選択の時で、間違うわけにはいかなかった。小町に言われた通りだ。“どっちが大切か選ぶ”という、その残酷で単純な行動原理によって、この世界線のいろはの学校生活は、人生は変わっていくだろう。

「分かった。後は任せてくれ。準備ができたら連絡する」

　俺はそう言って立ち上がると、鞄を背負って空を見上げる。

　茜色の空の中で鳥影が雁行している様子をひと睨みすると、俺は踵を返した。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　翌日から俺は、奉仕部に顔を出す事をやめた。

　一応雪乃と結衣には「解決案を一人で考えたい」とだけ連絡して、結局その週は一度も部活に参加しなかった。

　彼女の決断を促すには、そうする必要があった。俺があの部屋にいては、少なからず俺の意見が彼女たちの考えに影響を与えてしまうだろう。

　土日が明けて、月曜日。

　いつかと同じように、上の空で午前の授業を聞き流していた。四限目は現代文で、平塚先生が担当する授業だ。

　カツカツとチョークが黒板を叩く音を聞きながら、ただひたすらに板書を写す。それが終わるとちょうどチャイムが鳴り、めいめいが教科書やノートを片付けていく。

　それでも俺は黒板の方を見続けていると、必然かのように平塚先生と目が合った。

「比企谷」

「⋯⋯はい」

　平塚先生は深い溜息を吐くと、静かに言った。

「この後、職員室に来るように」

　それだけ言って、平塚先生は教壇を降りると教室を出ていく。俺は授業道具一式を机にしまうと、教室を出て平塚先生の背中を追いかけた。昼休みの廊下は行き交う生徒たちで、いつも通りにかしましい。

　職員室に入ると、奥に設けられている応接スペースに入った。ガラス天板のテーブルと、黒い革張りのソファは、俺の中だけで郷愁を湛えてそこに存在していた。

「⋯⋯今朝、雪ノ下が話をしに来たよ」

　向かい合ってソファに座ると、平塚先生は紫煙をくゆらせた後にそう言った。

「生徒会長戦に、立候補するそうだ」

「そうですか」

　その言葉を聞いて、俺はいつの間にか肩に込められていた力を抜いた。やはりこの世界線でもその決断は変わらないぐらいに、雪乃にとって生徒会長という職は重要なのだろう。

「なんだ、驚かないな。彼女から聞いていたのか？」

「いえ。ただ雪ノ下なら、そう言い出してもおかしくないなと思って」

　おかしくない、どころか必定だったのだと、今では思う。

　雪乃は陽乃さんという存在を追い越したい。それが叶わなくてもする存在である事を、証明したいのだ。雪ノ下家に、何より自分自身に。

　彼女のその選択は、陽乃さんから見れば後を追ってくる、いつまでも変わらない妹に見えるだろう。しかし雪乃の本当の目的は、陽乃さんになる事ではない。彼女の目的は幼い頃からの夢を追う事であって、陽乃さんの背中を追っていたのではないと、今なら分かる。

「応援演説は、葉山がするようだな」

　俺は平塚先生の言葉に返すことはせず、俺の知る世界線での出来事を反芻した。

　いろはが初めて奉仕部の部室に来た日の帰り、俺はたまたま時間潰しに入ったドーナツショップで陽乃さんと居合せた。そこに折本が加わり、葉山が呼び出されたたりと登場人物が増えていき、いつの間にかその週の金曜日にWデートっぽい事をする運びになってしまったのだ。その最中で会った雪乃と結衣の表情は、今でも忘れることが出来ない。

　当然そんなイベントを看過するはずもなく、俺はあの日の陽乃さんとの邂逅を回避していた。無用に彼女たちを傷つける必要など、どこにもなかった。

　しかしその変化は雪乃の考えに影響はなかったようで、葉山という一番手堅い、最強のカードを既に手中に収めている。葉山が雪乃の自陣に引き入れられてしまうのは少し都合が悪いが⋯⋯まあ、何とかなるだろう。無理矢理にでも、するしかない。

「それで、君はどうする？」

　タバコの火を灰皿で揉み消すと、平塚先生は俺を真っ直ぐに見た。それに対する答えは、俺の決断はもう決まっている。

「決まってます。雪ノ下の意思を尊重して、応援します」

　俺の頭の中で再生されるのは、いつかのディスティニーランドでのこと。スプライドマウンテンに乗った後に休憩しながら、彼女は『あなたも姉さんも持っていないものが欲しくなった』と言った。

　きっと彼女も、まちがえていたのだと思う。目的と手段をあべこべにしていたのだ。それでも俺は、雪乃の決断を尊重する。

『それがあれば、救えると思ったから』

　直後に彼女が言ったその救うべき誰かは、訊いてもはぐらかされてしまった。けれどそれは、きっと彼女自身のはずで、彼女を救う唯一の方法だ。

「⋯⋯そうか」

　そう言って平塚先生は、深い慈愛に満ちた目を俺に向けた。酷くしい光景だ。うっすらと残るタールの香りも、その透き通るような瞳も、ずっと手放したくないと思ってしまう。

「けど、それだけじゃダメなんです」

　俺は手のひらの汗をズボンで拭うと、膝の上で握り込んだ。

「俺からも平塚先生に話⋯⋯というか、お願いがあります」

　これから俺が言う事にその光景が歪められてしまうのは、とても堪えられないことだった。

　それでも俺は、言わなくてはならない。ブレザーのポケットに入ったままの、あの紙に書かれた、たったの二文字。

『救え』

　その指令に、真に応える時がきた。

　俺の一番大切な人を、救う為に。平塚先生の目を真っ直ぐ見つめて、俺は言った。

「奉仕部を、廃部にさせて下さい」

ここまでお読み下さりありがとうございました。  
早いもので、次のお話で最終話になります。  
今回も感想を頂けると嬉しいのですが、ついつい返信に訊かれてもない事まで答えるクセがありまして……。  
最後までネタバレなしで楽しんで頂きたいので、感想には完結後に返信させて頂きます。ご了承下さい。  
それでは次回、最終話でお会いしましょう。

さようなら、奉仕部。

「⋯⋯すまない、もう一度言ってくれるか？」

「奉仕部を、廃部にしたいと言ったんです」

　驚きに目を見開きそうになるのをどうにか押さえつけている平塚先生に、俺は努めて冷静にそう言った。

　随分説明不足だとは思うが、話というのは結論が先に来たほうが伝わり易い。視線で続きを促してくる平塚先生に、俺は話を続けた。

「雪ノ下なら、選挙に問題なく勝って生徒会長になると思います。けど生徒会選挙に出るのは雪ノ下だけじゃなくて、俺も由比ヶ浜も出ます」

「⋯⋯そういう事か」

　俺の考えを読み取ったのか、やれやれと平塚先生はいつも雪乃がそうするように頭痛を抑えるようなポーズを取った。

　やはり平塚先生は、“俺たちの先生”だと思う。多くを語らなくても、俺の意図する事はもう全て分かってくれていると、そう盲信できる。

「奉仕部は無くなりますが、俺たちのやる事は変わりません。平塚先生には、もし相談事や依頼があったら生徒会に来るように斡旋して欲しいんです」

「それは構わないが⋯⋯」

　平塚先生はそこまで言って口を噤むと、タバコをもう一本取り出して火をつけた。その言葉の続きは、俺にも分かっているつもりだ。

　何故、奉仕部を無くすまでの事をするのか。

　奉仕部創設の経緯を聞いたことはないが、平塚先生にとっても奉仕部は特別な場所であったはずだ。俺の考えを理解するのと、奉仕部にかけた想いに折り合いをつけるのとでは、話が違う。

　しかしそれでも俺は、奉仕部は廃部にすべきだと思っている。俺たちが生徒会に入れば、奉仕部部員であるという前に生徒会役員という肩書きが、そして責任がついてくる。そうなれば生徒会の事を最優先にすることになり、実質的に奉仕部は中途半端な存在──無くなったも同然になるだろう。俺も彼女も、そんな状態に上手く馴染める自信がなかった。

「彼女たちは、知っているのか？」

「いえ⋯⋯。雪ノ下が会長に立候補すると言い出すことを想定して、考えていただけです」

「そうか。なら急いだ方がいい。立候補の締め切りが近いからな」

「ええ、そうします」

　俺は立ち上がって歩き出すと、応接スペースを出る直前に振り返る。ソファに座ったまま紫煙を吐く平塚先生に向かって、俺は深く頭を下げた。

「勝手なこと言って、すいません」

「なに、謝ることじゃないさ。⋯⋯それに私からの君に関しての依頼は、どうやら無事に達成できたようだしな」

　平塚先生はつけたばかりのタバコの火を灰皿で消すと、立ち上がって正面に俺を捉えた。平塚先生の瞳は冬の朝のように澄んでいて、だから情けない顔をした俺まで鮮鋭に映されてしまう。

「比企谷。ちゃんと君の口から聞かせてくれ。君は今、孤独を感じているか？」

　平塚先生の瞳の中の男は、その問い掛けに苦笑を浮かべていた。

　先生らしくない愚問だ。答えなんてもう、決まりきっている。けれどその問いに素直に答えられないぐらい俺は歪んでいて、想いだけが真っ直ぐだった。

「これで孤独だなんて言ったら、あいつらに怒られますね」

「⋯⋯それが聞けたのなら、私に思い残すところはないよ」

　平塚先生は俺の両肩に、そっとその両手を置いた。次の瞬間ぐるんと俺の身体を百八十度回すと、トンと背中を押す。

「行きたまえ。彼女たちなら部室にいるだろう。昼休みの時間は限られているぞ」

「はい」

　平塚先生が今どんな顔をしているか知りたい気持ちはあったが、振り返る勇気はなかった。

　背中を押された勢いをそのままに、少しだけ早足で職員室を出る。廊下に出てもまだ平塚先生の眼差しが向けられているような気がして、俺は背中を真っ直ぐに正すと、その歩みを速くさせた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　奉仕部の部室の前まで来ると、俺は少しだけ上がった息を整えた。

　顔を上げて、真っ白のサインプレートを見る。俺はあと何回この光景を目にする事ができるのだろうかと考えて、やめた。感傷に浸っている暇などない。

「⋯⋯⋯⋯」

　扉に手をかけて一気に開けると、箸を手にしたままの雪乃と結衣がポカンとこちらを見ていた。

　机の上には、小さな弁当箱が二つ。今日も彼女たちは、ここで一緒に昼食をとっていたらしい。

「雪ノ下」

　俺はいつもの椅子を掴むと、雪乃の目の前──本来なら依頼者が座るべき位置に、その椅子を置いて座る。

「さっき平塚先生から聞いた。生徒会長に立候補するんだってな」

「えっ⋯⋯」

　俺がそう言うと雪乃は目を伏せ、結衣は小さく驚きの声をもらした。やはり雪乃は、まだ結衣に立候補の事を話していなかったらしい。

「それを受けて、俺から提案がある。それと雪ノ下と由比ヶ浜、それぞれに依頼も」

　はっきりとした口調でそう言い、雪乃の目を正視する。長いまつ毛が起き上がり、その瞳が俺を捉えると、彼女は箸を置いてから口を開く。

「⋯⋯話を伺いましょう」

「まずは提案からだ」

　俺はそう言うと雪乃から視線を外して、結衣を見た。いつの間にか結衣も箸から手を離していて、いつもより背筋が伸びている。

「俺も、生徒会選挙に出る」

「え⋯⋯。ちょ、ちょっと待って。ヒッキーも生徒会長に立候補するってこと？」

「違う、そうじゃない。ここからは依頼なんだが⋯⋯」

　俺は椅子に座り直すと、今度は結衣を正面に捉える。ポカンと開けられた口と目は、次の発言を聞いたら更に開かれることだろう。

「由比ヶ浜には、副会長として立候補して欲しい。俺は書記として立候補する。全員が当選したら奉仕部は廃部にして、その活動は生徒会に移管する」

　理解が追いついていない様子の結衣は、目をパチクリさせて頭の中をフル回転させていた。

「⋯⋯待って。何故あなたたちまで生徒会に入る必要があるの？　一色さんの依頼は、生徒会長になることの回避よ。私がなれば、それは──」

「それだけじゃダメだろ」

　雪乃の言葉を遮ると、俺は真っ直ぐに彼女を見詰める。俺を見返す目に、蝋燭大の火が灯った気がした。

「奉仕部はどうなる。お前なしで奉仕部なんて名乗れるか？」

「それは⋯⋯大丈夫よ。生徒会の仕事は理解しているつもりだし、この部活だって続けられる」

「無理だな。雪ノ下は一つのことに集中するタイプだし、生徒会が忙しい時はそっちに集中して、手隙の時だけ奉仕部に参加するつもりか？　それで俺たちが何も思わないとでも思ってるのかよ」

　雪乃の瞳の中の炎は揺れ、すっと長いまつ毛が再び伏せられる。

　自分でも、随分ずるい言い方をしていると思う。それでもこの場で彼女を説き伏せなければ、先はない。

「そんな事になるぐらいなら、生徒会に一本化した方が何かと都合がいい。そういう提案だ」

「⋯⋯だとしても、私の独断にあなたたちを巻き込むわけには」

「それは違うよ」

　不意にそう言ったのは、さっきまで沈黙を守っていた結衣だった。

　結衣は椅子の上で雪乃に向き直ると、今まで見たことも無いぐらい強い視線を彼女に送る。

「巻き込んでいいんだよ。今までだって、そうしてきたじゃん。あたしも、ヒッキーも、ゆきのんの側に居たいんだよ。そんな理由だけじゃ、ダメ？」

　思いも寄らなかった助力の言葉に、俺はぐっと胸が詰まった。

　思い返してみれば、結衣の言葉はいつも本質を突いていた。そしてそうであるが故に、その言葉は反論を許さない程に強い。本当にいつも、俺は彼女に助けて貰ってばっかりだ。どうすれば返せるか、見当もつかないぐらいに。

「ヒッキー」

　結衣は俺の方に向き直ると、同じ強さのままの視線がこちらに向けられる。その目は言外に、既に覚悟は決まったと言っていた。

「ヒッキーの提案に、あたしはのるよ。でも依頼は断るね」

「⋯⋯は？」

「副会長は、ヒッキーがなって」

　呆気に取られる俺に、結衣は続ける。

「だって⋯⋯言い出しっぺはヒッキーでしょ？　それにヒッキーじゃなきゃダメだと思う」

　何故、と聞きたかったが、目に込められた力を抜いた結衣はその続きを言うつもりはなさそうだった。

　結衣は雪乃の目を見ながらその手を取ると、まるでうかのように、落ち着いた声音で言う。

「それでいい？　ゆきのん」

　結衣のその手は、握り返されたのかどうか。側から見ているだけでは分からない。

「⋯⋯本気なの？」

「本気だよ。ダメって言われても、勝手に立候補しちゃうぐらい」

　さらりと言ってのける結衣に、雪乃ははっと短く息を吐く。彼女の瞳の中の炎は、もうすっかり消え去っていた。

「分かったわ。⋯⋯ごめんなさい」

「ううん、それも違うよ。こういう時は、ありがとうでいいの」

　ね、と結衣が微笑みかけると、雪乃は引き結んでいた口を解いた。

「そう、ね⋯⋯。ありがとう」

　雪乃はそう言って、右手を握ってくる結衣の手に左手を重ねた。彼女のその小さな所作が確かな雪解けを思わせて、俺はその眩しい光景に思わず目を細める。

「比企谷くん」

　俺に向き直ると、雪乃は迷いの消えた目で俺を正視した。

「あなたから私への、依頼の内容を聞かせて貰うわ」

「ああ、それなんだが⋯⋯」

　正直、この空気の中では物凄く言い出しにくい。これ、めっちゃ情けないお願いだしなぁ⋯⋯。

「葉山に応援演説を頼んだらしいけど、悪いが断ってくれ。あいつには俺の応援演説を頼みたい」

「それは構わないけれど⋯⋯。何故？」

「ぶっちゃけ、雪ノ下や由比ヶ浜なら誰が応援演説しても選挙に勝てるだろうが、俺はそうもいかない。お前らと違って無名もいいところだからな。推薦人集めも一色と葉山に手伝ってもらうつもりだ」

　なるほど、と二人は頷いてくれるが、それもそれで実に情けない話だった。しかし背に腹は代えられまい。俺だけ落選とか、本気で洒落にならない。

「⋯⋯急いだ方が良さそうね。私たち三人で、九十人分の推薦人を集めないといけないのだし」

「うん⋯⋯。でもきっと大丈夫だよ」

　結衣はそう言って、雪乃の両手で握られた左手の上に、右手を重ねる。

「今まで全部、なんとかなってきたもん。あたしも頑張るから、きっと大丈夫」

　子どもを諭すような優しい声音に、俺まですっかり安心してしまう。

　これでようやく、奉仕部としての方針は決まった。

　余程のイレギュラーがなければ、奉仕部はもうなくなる。一度なくなって、小町がまた始めてくれたような、そんな復活はあり得ない。今度こそ完全に、奉仕部は失われるのだ。

「⋯⋯じゃあ後の詳しい話は、放課後に詰めるか」

　時計を見れば、もう昼休みは十分と残されていない。すっかり昼飯を食いそびれてしまったが、不思議と空腹は感じなかった。

「ええ。ではまた後で」

「うん⋯⋯」

　俺はどこか安心したような表情を浮かべる彼女たちに頷きを返すと、立ち上がり部室を後にする。

　廊下に出て扉をピシャリと閉めると、思わず大きく息を吐いた。するとその息に重なるように、大仰な溜め息が耳に届く。

「⋯⋯いつからそこにいた」

「⋯⋯君が部屋に入った、少し後からだよ」

　壁に背を預けた葉山隼人は、俺を見ずにそう言った。

「すまない。聞くつもりはなかったんだけど、扉が少し開いていたから」

　つまりは全部が全部、葉山は聞いていたという事だろう。

　確か俺の知る世界線では廊下ですれ違うだけだったが、本来葉山は打ち合わせの為に部室へと呼ばれていたのだ。

「別にいい。説明する手間が省けたからな」

　俺が歩き出すと、葉山も歩調を合わせて歩き出す。もう彼が奉仕部の部室を訪れる理由は、何もない。

「俺へのを返してくれ。葉山」

「随分高くつく貸しだな」

　はっ、と喉から抜ける息の音で苦笑すると、葉山は廊下の真ん中で歩みを止める。俺も足を止めると、彼を振り返った。

「協力するのは別に構わない。ただ一つ教えてくれ」

　その目は常にないほど厳しく、ともすれば青白い炎さえも灯すほどに研ぎ澄まされていた。俺が身体ごと向き直るのを認めると、葉山は重苦しい声で問い掛ける。

「結局君は、どっちなんだ？」

　またその質問かよ、と俺は思わず天井を仰いだ。

　だが葉山の気持ちも、俺には分かる。彼には彼なりの向き合い方で、彼女たちを大切にしているのだ。であればできる限り真摯に向き合うのが、礼儀というものだろう。

「俺が好きなのは雪ノ下だ。雪ノ下の為なら、何だってする。だから生徒会選挙にも出る」

　俺が言い切ると、葉山はその勢いに気圧されたように目をった。しかしその目は瞬きの後に、違う感情へと支配されていく。

「なら結衣は⋯⋯。結衣の気持ちはどうなる？　君だって、気づいてるんだろ」

　葉山は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、細められた目は俺を睨みつけていると言っていいほどに険しい。

　その顔を見て俺は、場違いな程に安堵していた。

　結衣のまわりには、沢山の人がいる。その中に本気で彼女の事を慮ってくれる人がいてくれる事は、何よりもありがたい事だった。

「それでも、答えは変わらない。雪ノ下に必要だから、由比ヶ浜も生徒会に入ってもらう」

「それで結衣が傷つく事になるとしてもか？」

　その葉山の一言に、俺の脳裏に遥か昔の出来事が浮かぶ。東京湾へと続く河口に架かる橋の上、タバコをふかしながら、彼女は言った。

『誰かを大切に思うという事は、その人を傷つける覚悟をする事だよ』

　まるで今の俺に言い訳を与える為の言葉みたいだ。それでもその言葉は真理を突いていたし、まちがっていないと信じている。

「⋯⋯それでも俺は由比ヶ浜には、雪ノ下のそばにいて欲しい。それにこの状況で由比ヶ浜だけ生徒会に入らないって方が、傷つくだろ」

　葉山はその言葉を聞き届けると、ふと眼力を弱めた。ようやく、俺の本気は伝わったらしい。

「比企谷の気持ちは分かった。⋯⋯余計なお世話かも知れないけど、中途半端な事はしないでくれよ」

「はっ⋯⋯。お前にだけは言われたくねぇな」

　思わず鼻で笑ってしまった俺を、葉山はジロリと睨みつけてくる。その反応は図星だと言っているようなもので、を誇る彼にしては珍しい反応だった。

「まったく、人に物を頼む態度とは思えないな」

「別に頼んでねぇよ。ただ貸しを返せと言ってるだけだ」

「本当にいい性格してるな、君は」

　キンコン、と予鈴が鳴る。急がなければ、五限目の授業に遅れてしまうだろう。

　俺と彼にしては、随分長く話し込んでしまったようだ。俺たちは再び歩きだすと、それっきり言葉を交わす事はなかった。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　放課後になり奉仕部の部室へ向かう──前に、俺には行くべき場所がある。

　数日前と同じ、特別の一階の外。保健室の隣にポツンと三段だけある階段に座り込んで、俺は今か今かと約束した人物を待っていた。

「お疲れ様でーす」

　軽やかにそう言って現れたのは、奉仕部への依頼人である一色いろはだ。

　いろはスカートの端を膝の内に折り込みながら、俺の横に腰かける。

「解決策、教えて貰えるんですよね？」

「ああ」

　一瞬だけいろはと視線を合わせると、小さく息を吐いてアスファルトの地面を見詰めた。そして今日の昼休みの出来事を、出来るだけ分かりやすく説明する。

　雪乃が生徒会長になる事で、いろはからの依頼を達成する事。俺と結衣も生徒会に入り、奉仕部の機能は生徒会に移管する事。この解決案に対して平塚先生の了承も得ているという話を進めるたびに、いろはの目は見開かれていく。

「え⋯⋯。それ、本気ですか？　わたしが生徒会長にならないようにする為に、そこまでやるんですか？」

「そうだ。それに雪ノ下も、やっても構わないと思っている。⋯⋯というか、やりたかったんだと思う。じゃなきゃ生徒会選挙の規約なんて、覚えてるわけないだろ」

　俺の答えに、いろはは何を思っているのか気の抜けたような表情をしている。いろはにしてみれば、随分と荒技的な解決策だと思えるだろう。

「それならいいんですけど⋯⋯。生徒会と奉仕部の活動の両立なんて、出来るんですかね？」

「そこは大丈夫だろ。元々暇な部活だからな」

　それにいろはが奉仕部に入り浸るようになってからというもの、ほとんど生徒会関係の仕事ばかりになったのだ。だからとしてそれは大丈夫だと、言い切る事ができる。

「はぁ⋯⋯。ただ一つ、疑問なんですけど」

　いろははそこで言葉を切ると、俺の目を覗き込んできた。仕草や表情からも真意を見逃すまいと、瞬き一つすらせずに見詰め続けてくる。

「どうして空いている会計じゃなくて、書記に立候補するんです？　全員当選しても、一人不足するんですよ？」

　いろはの疑問はもっともで、そして実に答えにくい質問でもあった。

　小町が総武高校に入学した時には、もう奉仕部は廃部になっているだろう。元の世界線で小町が守って欲しいと願ったあの場所は、失われてしまうのだ。だからその代わりのポジションとして、席は一つ空けておきたい。

　しかしそんな想いを話せるはずもなく、俺はもう一つの理由の方だけ話す事にした。

「確かに人数が少ないのは痛手だが⋯⋯。それでも俺は、奉仕部の三人でやりたい。俺たち以外の不純物は要らないんだよ」

　そう言い切ると、いろははポカンとした表情で俺を見続けていた。

「⋯⋯なんだよ」

「いえ、⋯⋯なんでもないです」

　どう見たってなんでもなく無いのだが、これ以上追及するのはやめておいた。おそらく墓穴を掘る結果にしかならないだろう。

　いろははすっと立ち上がると、何を思ったのか俺の真正面に立つ。そして綺麗に腰を折り曲げ頭を下げると、その状態のまま言った。

「先輩たちを巻き込んじゃって、すいません。それから、ありがとうございます」

「やめてくれ」

　俺がそう制すると、いろははゆっくり頭を上げた。その目は真剣そのもので、彼女のそんな表情は随分久しぶりに見た気がする。

「なにもタダでそんな役目を引き受けるなんて言ってないぞ」

「はい⋯⋯？」

　俺の一言で、深刻ですらあったその顔は「何言い出すんだコイツ」とでも言うように訝しげな表情を浮かべていく。

「一つ約束してくれ。生徒会で困ってる時とか、人出が足りない時は手を貸して欲しい」

「⋯⋯はい。それは構いませんけど」

「本当だな？」

「ええ、もちろん。私のお願いの為に生徒会を引き受けて貰うんですから、そのぐらいはします」

「本当に本当だな？」

「いやしつこいな⋯⋯。やりますってば。先輩たちのこと、超手伝いますから！」

「よし」

　俺はそこまで聞くと立ち上がり、いろはの目の前に携帯をかざした。

　画面の中の再生ボタンを押すと、たった数十秒前の会話が再生される。いろはが俺たちの事を手伝うと、超手伝うと、小さな筐体の中からそう証言していた。

「これで言質は取ったからな。しっかり手伝ってもらうぞ、一色」

「は⋯⋯？　え、マジかこの人⋯⋯えげつな⋯⋯」

　ドン引きしているいろはに向かって、俺は口角を引き上げる。

　これが俺からいろはに贈る、俺たちと関わりあう為の口実だ。もちろん理由を与えたとしても、一緒に居てくれるかどうかは彼女次第だが。

「それじゃ段取りの方は、葉山と相談しながら進めてくれ。頼んだぞ」

「はーい⋯⋯」

　肩を落として溜め息を吐くいろはの姿に俺は頬を緩めると、踵を返した。

　根は真面目ないろはの事だ。きっとあの頃のように──今度は生徒会室に入り浸ってくれるだろう。今はそう信じるしかない。

　俺は校舎に入る前に、部室のある辺りの窓を見上げた。

　さあ、今からは彼女たちに会って、選挙に向けての打ち合わせをする時間だ。そしてあの部室の光景を、俺たち三人の時間を、心に刻み込まなければ。

　俺があの部室で過ごす時間は、もうそれほど残されていないのだから。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　それからは生徒会選挙に向けて、慌ただしい日々が続いた。

　生徒会選挙に向けて推薦人集めと、応援演説者の確保、それぞれの選挙公約決めに、演説の台本。万が一を防ぐための生徒会選挙規約の熟読まで、僅かな瑕疵一つ見落とさないほどの集中力と覚悟で俺たちは選挙の準備を進めてきた。

　そして十二月になり、ついに生徒会選挙当日。

　今日は三、四限目の授業の代わりに全生徒が体育館に集められ、生徒会選挙の演説が行われる。集まった投票用紙は即日開票され、放課後には全ての結果が明らかになっているだろう。

　俺と結衣は立候補者の待機場になっているステージ袖の前室に通され、椅子に座って出番を待っていた。プロムのプロモーション撮影の際に、着替えに使ったあの部屋だ。

　向かいの席には副会長と書記ちゃん──というのはこの世界線では語弊があるが、残念ながら本名を覚えていない二人は緊張した面持ちで同じく出番を待っていた。

　その隣に座るいろはも含めて、彼女たちの学校生活は本来送るべき日々とはまた違った日々が訪れる。俺の与えた変化によって副会長と書記ちゃんは付き合う事もなくなってしまうだろうと考えると、一番の被害者は彼らなのではないかと思うが⋯⋯それも生徒会のイベントか何かで強引に引き合わせれば何とかなるかも知れない。随分無責任だとは思うが、俺はもうこれ以上まちがい続けるわけにはいかなかった。

「ゆきのん、遅いね」

　結衣の問いに、俺は「ああ」と短く返事をした。たしかに、珍しい事のように思える。こういう時彼女は、一番にここにいそうなものなのに。

　そう考えていた所に、出入り口の扉がコンコンとノックされる。返事をすべきかどうか迷っていると、ノックから数秒の後に扉は開かれた。

「え⋯⋯」

　部屋に入ってきたのが一瞬誰か、分からなかった。

　そこに立つのさっきまで話題に上がっていた雪ノ下雪乃のはずなのに、見慣れた彼女の姿ではなかったからだ。

「ゆきのん、髪⋯⋯」

「ええ」

　強烈な違和感の正体は、彼女の髪の長さだった。雪乃のトレードマークであるはずの長い髪は肩口でばっさりと切り落とされ、赤い小さなリボンも付けていない。陽乃さんの髪の長さとよく似ているが彼女ほど髪をいていないのか、その印象はずっと落ち着いている。

「切ったのよ」

　雪乃は髪を一房摘むと、はらりとそれを遊ばせた。事もなげに見れば分かることを言う彼女は、まるでこちらが大仰に受け止め過ぎているとでも言うかのようだった。

「その⋯⋯似合わない、かしら」

　しかし雪乃は、俺たちの反応を否定と捉えたのか、途端に自信を失ったかのような表情になる。

　似合うか似合わないかで言えば、どうしようもなく似合っている。どちらかと言えば自信なげなその表情こそが、彼女には似合わない。

「あの⋯⋯」

　さっきまで口をパクパクさせていたいろはは腰を上げようとし──俺はそれを手をして制した。雪乃が髪を切った真意は、今この時点で正解を知る由もない。しかしいろはが何か思うところがあるとすれば、それは絶対に違うと言い切れる。

　雪乃が髪を切ったその理由は、間違いなく俺の決断によるものなのだから。

「えっ、と⋯⋯。どう、して？」

　俺が聞かずにいようとした事を、結衣は混乱を残しながらもそう訊いた。多分それは彼女しか訊けない事だと、本能で理解したように。

「⋯⋯決意表明、と言ったところかしら」

　雪乃がそう言ってしまえば、それはきっと取り違えようもない真実なのだと思う。

　雪ノ下雪乃は虚言を──嘘を吐かない。彼女が自らに課した不文律は、俺の知る限り消え失せる事はないはずだから。

　それっきり場を満たした沈黙を打ち破るように、コンコンと低いノックの音がする。返事を待たずに入ってきたのは、平塚先生だった。

「そろそろ出番だ。舞台袖にいくぞ」

　俺たちはそれぞれに返事をすると、椅子から立ち上がり真っ直ぐに出入り口の扉へと歩いていく。

　さあ、これが本当の大一番。

　新しい未来は、これから作られる。俺は自らを鼓舞するように、強く体育館の床を踏み締めた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　生徒会選挙の結果は午後より開票され、放課後一時間もしない内にその結果は確定される。

　俺たちは訪れた生徒会室の中、ホワイトボートに大きく書かれた立候補者の名前を見ていた。

　総武高校生徒会選挙結果──。

　会長・雪ノ下雪乃。

　副会長・比企谷八幡。

　書記・由比ヶ浜結衣。

　それぞれの名前の上には、当選を示す薔薇の代わりに大きく花丸が描かれていた。

「嬉しいっ。今私、すっごく嬉しいよ！」

　さっきからめぐり先輩は同じ事を繰り返し言っては、困惑する雪乃を抱き締め続けていた。放っておけば頬擦りでもしそうな勢いに、俺も結衣も苦笑するしかない。

「あの⋯⋯城廻先輩、そろそろ⋯⋯」

「あ、うん⋯⋯そうだね」

　ようやくめぐり先輩は抱擁を解くと、雪乃と一緒に俺たちを見た。きっとこれから、生徒会長として膨大な量の引き継ぎを受けるのだろう。

「先に帰って貰って、構わないから」

「うん」

　めぐり先輩が開けた扉の前で、振り返って雪乃はそう言った。結衣は柔和に微笑むと、バイバイと胸の前で手を振る。

　カチャンと扉が閉まると、瞬く間に生徒会室は無音に包まれた。

　過去に何度も、いろはの手伝いで訪れた生徒会室。これから奉仕部のあの部屋の代わりに俺たちはここへと集まり、また紅茶の香りが漂うのだろう。

　これでもう俺の知る世界線は、完全に途絶えた。これから先の事は、全く何も想像できないし、分からない事だらけだ。

「ねぇ、ヒッキー」

　結衣は暫く室内を眺め回していたかと思うと、パイプ椅子に腰掛け足をプラプラさせながら言う。

「⋯⋯ありがとね」

「⋯⋯なにが」

　彼女が言わんとしている事は何となく分かるのに、俺ははぐらかすようにそう言った。

「あたしたちの場所、守ってくれて」

　真っ直ぐに向けられたその微笑みは、俺には優し過ぎるように思う。

　結局俺がとった選択は、自分が後悔しないようにしたと言われたらそれまでの事だった。彼女の為だと、自分自身にいていたのかも知れない。

「⋯⋯でも奉仕部はなくなるぞ」

「部活はね。でもあたしたちの場所は、なくならないよ」

　結衣の視線が眩し過ぎて、俺は思わず目を逸らした。

　きっと結衣なりに、奉仕部をなくす決断を肯定しようとしてくれているのだと思う。けれど奉仕部と永訣する事に違いはないし、小町がまた始める理由も可能性もない。

　あののんべんだらりとした、どこか牧歌的な光景は消失する。その事を思うと俺は自分で決めた事なのに、胸を抉り取られたかのような痛みを覚えていた。

「⋯⋯んっ」

　結衣は両手を上げて伸びをすると、何も言わないまま立ち上がる。

「ね、散歩しない？」

　結衣はどこかすっきりした顔で、俺を見下ろしながら言った。雪乃は待たなくていいと言ったけれど、結衣は彼女の帰りを待つつもりであるらしい。

「⋯⋯いいけど」

　どうせやる事もないし、俺はそう返事をするとパイプ椅子から立ち上がった。

　生徒会室を出ると、結衣はどこか行く当てがあるかのように、すたすたと先行する。特別棟の廊下を歩き、階段を登り、やがて校舎と特別棟を繋ぐ空中廊下に出た。四階の廊下には屋根がなく、よく風が通るそこは屋上に近い雰囲気を持っている。

　もう失ってしまったこの世界線の先では起こり得ない事だが──いつかの夕焼けの中、結衣と雪乃が涙と抱擁を交わした、あの場所だ。

「やっぱり外は気持ちいいねー」

　さらさらと髪を風に遊ばせながら、結衣は手すりに手をついて空を仰ぐ。夕陽は真っ赤な光を撒き散らしながら、体育館の屋根の向こうへと消え行こうとしていた。俺も手すりに手を置くと、それに寄りかかり黙ってその景色を眺め続ける。

　この場所で、こんな気持ちでいる事が不思議だった。選挙が上手くいって安心しているのに、先の分からない不安が僅かに混じる。けれどどちらかと言えば希望の方がずっと強く在って、まるで新たなフィールドに立った物語の主人公のような気分だ。

　ふと隣を見ると、結衣はその瞳に茜色の雲と夕陽を閉じ込めて、静かに佇んでいた。俺の視線に気付いたのか、結衣はゆっくりとこちらを向くと──。

「⋯⋯好き」

　──彼女は何の聞き間違いもないようにはっきりと、まるで犬や猫が好きだとでも言うように何気なく、俺にその言葉を届けた。

「あたし、ヒッキーのこと、好きだよ」

　それから彼女はもう何も取り違えないように、真っ直ぐ俺だけを見てそう言った。

　その声は常の彼女よりもいくらか低く落ち着いていて、その目は公園で遊ぶ子どもでも見守っているかのように優しい。

　まるでノーモーションからのストレートだ。花火大会の時のように予見する事も何も出来ずに、俺はその剥き出しで無防備な言葉の前に動けずにいた。

「なん、で⋯⋯」

　無理矢理ひねくり出した声も、その言葉も、およそ考えうる限り酷いものだった。その質問は、なんの意味もなさない。

「ヒッキーがゆきのんの事が好きなのは、分かってるよ。でも分かったからって、もうどうにもなんないし」

　夕陽が完全に、体育館の向こうへと消えた。

　撒き散らされた残照だけが、ぼんやりと彼女の顔を照らしている。

「諦めようって、思ったよ。でも無理だった。だってヒッキー、かっこいいんだもん」

　えへへ、とまるで恥じらうように、場違いなほど明るく彼女は笑った。俺は手すりから身を離し結衣に向き合うと、お互いを正視する。

「だから、ちゃんと言うね」

　俺の全身を視界の中に収めようとするかのように、ゆっくりと一歩だけ、結衣は後ろに下がった。

「比企谷八幡くん。⋯⋯あなたが好きです。お付き合いしてもらえませんか」

　結衣のその言葉に、ぐっと胸の内側が狭くなる。声音も、浮かべられた微笑みも、風の無い海のように穏やかだった。

　結衣の瞳の中で、鮮やかなグラデーションを描く空が、刻一刻と色を変えていく。その表情には僅かな憂愁も哀切もなく、きっとそれは──。

「⋯⋯すまない。俺は由比ヶ浜の気持ちに、応える事はできない」

　きっとそれは、俺の答えをもう、彼女は知っていたから。だからそんな風に、笑っていられたのだと思う。

「うん⋯⋯。ちゃんと答えてくれて、ありがと」

　結衣はそう言って、肩に込めた力を抜いた。ありがとうなんて言葉を受け取る資格なんて、俺にはなかった。

「すまん⋯⋯」

　いつかこうなる事は、分かっていたのに。俺は雪乃を──いつも自分の選択ばかりを優先していた。

　結衣が気持ちを止められないだろうという事も、全部分かっていた。それで傷つく事になろうとも、俺はそれですら肯定して今までやり直してきたのだ。

「どうして謝るの？」

　口元には笑みを浮かべたまま、しかし芯のある目で結衣は俺に問いかける。責めるわけでもなく、新緑を揺らすそよ風のように優しい声が、微かに鼓膜を震わせた。

「だって俺は⋯⋯。由比ヶ浜のこと、傷つけて⋯⋯」

「傷なんてどこにあるの？」

　結衣は腕を開くと、小さく首を傾げた。

「ヒッキー、たぶん勘違いしてるよ。だってあたしを傷つけられるのは、あたしだけだもん」

　当たり前でしょ、とでも言うように笑みは消えることなく俺に注がれ続けている。その表情は俺の呪縛を解こうと、祈りに満たされているかのように思えた。

「ヒッキーはゆきのんに告白して振られたとしたら、それで傷つく？」

「それは⋯⋯」

　思いも寄らなかった質問に、俺は何も答えられなかった。行き場の失った言葉の端くれが、藍色の空へと溶けていく。

「上手くいかなくて、あたしなんてダメなんだーって思うから、傷つくんだよ。でもあたしは、ダメだなんて思わない。ヒッキーのこと好きになってよかったって、本気でそう思うから」

　結衣の言葉にのった感情は、どこまでも深く俺の心の中に染み入ってくる。結衣の瞳が僅かに潤いを帯び、茜雲が形を変える。

　一体、どうして。

　結衣はどうして、そこまで強くあれるのだろう。きっとその理由を作ったのは俺で、救われるのもまた俺だった。俺は結衣のことを、一つも救えていないというのに。

「あたし、本当に本気で誰かを好きになったの、初めてだったんだ。すごく⋯⋯すごく好きで、ヒッキーのこと考えてるだけで、なんか感動して泣けてきちゃうぐらい」

　結衣の一言ひとことが俺の心の根っこの方を掴んで、彼女の目から一時足りとも目が離せない。さっきより少しだけ開かれた目は、もう見間違えようもなく濡れていた。

「あなたのことを好きになれて、本当によかった。だから、謝らないで」

　結衣が瞬きをした瞬間に、宝石のように煌めく涙が、一筋彼女の頬を伝う。

　どこまでも尊く、息を呑むほど美しい落涙。それが俺に一つの事実を、情け容赦もなく突きつける。

　──なぜ俺は、勘違いしていたのだろう。

　結衣と俺がこうして絆を紡いでいくのがまちがいだなんて、どうして思ったのだろうか。

　噛み締め過ぎた奥歯が、ぎりりと軋む。

　嗚呼、まただ。

　どんな時も選択をたない彼女に、また教えられてしまった。

「ね⋯⋯。すごく性格の悪いこと聞いていい？」

「⋯⋯なんだ？」

　少しだけ口調を砕けさせると、結衣はじっと俺の目を見詰めながら問いかける。

「もしも⋯⋯ゆきのんがいなかったら、ヒッキーはあたしのことを好きになってくれてたのかな？」

　祈りの込められたその問いの答えを、俺はもう持っている。とても簡単で、どうしたってまちがえようもない事実を、俺は知っていた。

「当たり前だろ。きっと⋯⋯いや、絶対好きになってた」

「⋯⋯そっか」

　安心したかのように、すっと結衣はその瞼を閉じた。俺もそれにつられるように、いつの間にかこもっていた力を目から抜いて、そっと目を瞑る。

　だから俺は、見逃してしまった。

　結衣が一歩、こちらに詰め寄ったのを。ブレザーの裾を掴む、震える手を。隠しようもない熱を持った、唇を──。

「────」

　唇に伝わった柔らかさと熱さに、俺ははっと目を見開く。

　結衣はあどけないぐらい無垢な笑顔で、俺を見ていた。

「まだ付き合ってないんだし、これぐらいいいよね」

　とん、と結衣は俺の肩口に額を押し付ける。熱い吐息が、触れ合ったそこから伝わる熱が、今はっきりと一つの真実を暴き出す。

　俺はまちがいなく結衣を──由比ヶ浜結衣という女の子を、愛していた。

　理屈や理性や思考ですら消え失せる心のずっと奥底で、それは確かにり、今まで静かに閉じ込められていた。そっと仕舞い込まれていたそれは、彼女の熱によって無理矢理に取り出され、あり得ないほどに俺をかき乱す。

　本当はずっと、気付かない振りをしていた。その気持ちの大きさに気付いてしまえば取り返しがつかなくて、どうしようも無くなるのは分かっていたから。その想いを、その感情を幸せな形に昇華させるのはとても難しくて、そうするには俺も彼女も不器用過ぎたから──。

「あたし、先に帰るね」

　何も言えないまま固まっている俺にそう言うと、結衣は踵を返した。小走りで遠ざかっていく背中を呆けた表情のまま見ていると、結衣は開け放たれた扉の前で振り返る。

「ヒッキー！　これからもよろしくねーっ！」

　ぶんぶんと大きく両手を振って、元気のいいが耳に届く。

　結衣は扉の向こうに消えるその一瞬前に、口に手を添え、一際大きな声で言った。

「ありがとー！　大好きーっ！」

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　生徒会室に戻ると、そこに結衣の荷物はなかった。さっきそう言った通りに、彼女は先に帰ったらしい。

　パイプ椅子にどっかと座り込むと、大仰にため息を吐いた。目を閉じると脳裏にはさっきまでの光景が映しだされ、最初から最後まで流れる度にまた最初に戻る。

　そうやって何回も何回も記憶の中の映像を巻き戻していると、カチャリと入口の扉が開いた。

「あら、まだいたの」

　生徒会室に入ってきた雪乃は、そう言って僅かに微笑んだ。ようやくめぐり先輩からの引き継ぎが終わったらしい。

「先に帰ってもいいって、言ったのに」

「いや⋯⋯。まあ待つのは、部活で慣れてるからな」

　よっ、と椅子から立ち上がると、床に置いたままだった鞄を背負う。

「もう帰れるんだろ？」

「ええ」

　雪乃も鞄を肩にかけると、部屋の照明を消した。生徒会室を出ると、雪乃は静かに扉に鍵をかける。

　今日から彼女が手にするのは、奉仕部の部室の鍵ではなく、生徒会室の鍵だ。そんな小さな変化すら、変えてしまった事の大きさを俺に知らしめる。

　職員室に寄って鍵を返すと、昇降口から外に出た。一緒に帰ろう、とは一言も言っていなかったが、俺が自転車を取ってくる間、雪乃は何も言わずにに待っていてくれた。

「お待たせ」

　こくりと雪乃は小さく頷くと、自転車を押す俺の隣を歩き出す。置かれている環境は大分と違うが、合同プロムをやると言い切ったあの日と状況はよく似ていた。

　海浜公園通りをひたすら真っ直ぐ歩いて、京葉線の高架をくぐる。学校を出てからただの一言も喋りはせず、自転車から聞こえる微かなラチェット音だけが時折聞こえてくる。

「⋯⋯本当は」

　なんの前置きもなく、ポツリと雪乃はそう言った。促すように彼女の横顔を見ると、雪乃は静かに言葉を紡いでいく。

「あなたたちを、巻き込みたくなかった。私一人、生徒会に入ればいいと思っていたの」

　その言葉の意味を俺は何度も咀嚼して、そして理解する。

　きっと雪乃は、俺や結衣の力を借りることなく、本当に自分の力で事を成したかったのだと思う。やはり俺は結局のところ、本当の意味で彼女の願いを叶えてなどいないのだろう。雪乃を絶対に一人にしないなんて、俺のエゴもいいところだ。

「あなたと一緒に居るのは、とても怖いことだから」

　しかしその俺の導き出した答えはまるで違うのだと言うように、雪乃は思いも寄らなかった事を口にする。

「あなたの考えていることが、まるで分からないの。またあなたが自分を傷つけてしまうのかも知れないと思うと、本当に怖かった」

　陸橋の坂に差し掛かると、一際ゆっくりとその坂を登っていく。一歩一歩、その言葉を噛み締めるように。

「何より分からなかったのは、私の方だけど。⋯⋯あなたと一緒にいると、本当に自分が分からなくなるの」

　坂を登り切る。俺は思わず、立ち止まる。雪乃の背中が遠ざかって行くのを見ながら、自転車を停めて再び歩き出す。

「なぁ」

　俺がそう声をかけると、雪乃は立ち止まった。こちらを振り返ることはせず、ただ沈黙のまま次の言葉を促していた。

「修学旅行の夜、お前に言ったことを覚えてるか」

　別にここに来たから、と言うわけじゃない。本当はずっと前から、聞きたかった。彼女の言葉を、彼女の答えを、ずっと俺は欲していたのだ。

「⋯⋯ええ」

「俺の気持ちはあの時から、何も変わってない」

　俺がそう言っても、雪乃は振り返る事をしなかった。それでも構わない。正しく伝えられるのなら、そうする事はまちがっていないと言い切れるから、彼女に届いていてさえいれば構わない。

「俺は雪ノ下のことが、好きだ。ずっと前から、誰にも負けないぐらい、自分でも笑っちまうぐらい、好きだ」

　国道を走る車のタイヤノイズが、引いては返す波のように耳朶を撫でていく。雪乃の表情は、未だに分からない。それでも俺は、語りかけるのをやめない。

「俺のこと、ちゃんと分かるように伝えるから。怖いって言うんなら、安心できるまで側にいる。自分が分からないって言うなら、ちゃんと理解できるまで付き合うから」

　あまりに拙くて、直情的で、何の捻りのない言葉たち。それでも彼女に伝わりさえすれば、なんだってよかった。分かりやすければその分だけ、ちゃんと全部伝えられると思うから。

「だから俺は、雪ノ下を一人にはしない。俺の勝手かも知れないけど、それでも絶対に一人にしない」

　見詰め続ける背中が、微かにいた。

　流れるのはヘッドライトの光と、深い沈黙。後にできることは、もう何も残されていない。狂おしいほどの愛情も、張り裂けそうな胸の叫びも、どんな言葉でも足りないから、正しく伝わるのを祈るだけ。それだけしかもう、できない。

「比企谷くん」

　ゆっくりと。

　雪乃は振り返り、正面から俺を視界に捉える。

　改めて、彼女を美しいと思った。透き通るような白い肌も、一つの瑕疵もない細面も、鈴を転がしたような声も、どんな賛美の言葉を尽くしても正しく彼女を形容できない。

　血色のいい唇が形を変え、努めて冷静でなんの感情も灯さない声が、一つの問いを俺に投げかける。

「それは私と付き合いたい、ということでいいのかしら？」

　真っ直ぐな瞳の中で、赤いテールライトが瞬いた。

　思ってもなかった角度からの問いかけに一瞬戸惑いながら、俺は頷いた。

「ああ、そういう事になるな」

「そう⋯⋯」

　ふっ、と。どこか諦めるかのように、雪乃は口元を緩めた。

「ならその告白は、断るわ」

　その言葉の意味がストンと俺の胸に落ちた瞬間、俺も真似をするように力なく笑う。俺たちの間を吹き抜けた風が、雪乃の短くなった髪を揺らした。

「生徒会長と副会長が付き合っているだなんで、適切ではないでしょうし。それに⋯⋯」

　雪乃の言葉に、俺は思わず短く息を吐いた。

　こうなる事は、もうほとんどもう分かっていた。雪乃ならそう言うかも知れないと、心の片隅で想像していた。

　見詰め続ける瞳が、不意に揺れる。その事実を確かめるように、俺は一歩だけ彼女に近寄った。

「きっとあなたに、頼りきりになってしまうから。⋯⋯だからっ」

　毅然としていたはずのその声は、頼りなげに震えている。に溜まっていく雫が見えてしまって、俺は彼女に向けてもう一歩を踏み出す。

「だからあなたとは、付き合えない」

　手を伸ばせば届くほど近くにいるのに、俺は雪乃に触れる事を許されていない。それでも俺を満たすのは、絶望や諦念などでもなく、確かな温かさだった。

　雪乃なら、きっと大丈夫だ。

　大丈夫になった彼女を、俺はもう知っているから。自分の足で立ち、歩み、そしていつかその隣に俺が居ることを許してくれるだろうと、そう言い切れる。

「けど⋯⋯」

　雪乃は一歩俺に詰めると、袖が触れ合うほど近くなる。瞳の中に映し出された俺は、自分でも見たことがないぐらい、安堵に満たされた表情をしていた。

「⋯⋯一年、待ってほしいの。とてもずるいお願いだと思うけれど」

　その言葉に、俺はかぶりを振って応えた。ずるくても、何も構わない。

「全部終わったら、ちゃんと言うわ。私から、あなたに、ちゃんと」

　雪乃の額が、俺の肩口に押し付けられる。ブレザーの前裾が握り込まれ、俺はようやく彼女に触れる事を許されたのだと分かった。

「ああ⋯⋯それでいい。何年でも、待つから」

　彼女の腰に腕を回すと、そっとその華奢な身体を抱き寄せた。余りに細いその身体が折れてしまわないように。慈しむように、ゆっくりと力をかけていく。

「⋯⋯だからもう少しだけ、こうさせてくれ」

　すんと雪乃は鼻を鳴らし、肩口につけられた額を強く押し付けた。

　触れたところから伝わってくる熱の名前を、俺はもう知っている。

　だからその熱を少しも溢さないように、俺は彼女を抱き締め続けた──。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　──夢を見ていた。

　奉仕部の部室で、雪乃に笑顔を向ける結衣。

　──彼女の顔が、悲しみと傷心で濡れていく。

　火の粉を舞わせるキャンプファイヤーの灯りに照らされ、泣き笑いの表情を浮かべる留美。

　──彼女の顔が、諦念と孤独に沈んでいく。

　文化祭のエンディングセレモニーの後、ステージの前で人の輪に囲まれて笑う相模。

　──彼女の顔が、心無い言葉で歪んでいく。

　陸橋の上で、夜風に吹かれながら眦に雫を溜めた雪乃。

　──彼女の顔が、喪失と空虚に淀んでいく。

　そんな夢を、俺は見ていた。

　　　　　　　＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

　目を開けるとそこには、見慣れない天井が広がっていた。

　カーテン越し柔らかな光が部屋を満たし、どこか懐かしい甘い香りが漂う。起き上がって辺りを見回すと、すぐに俺以外の人の姿を見つけることが出来た。

「やっと起きたの。随分ぐっすりと眠っていたわね」

　雪乃は俺と目が合うと、柔らかく微笑んだ。

　その肩には縦抱きにされた我が子の頬があてられ、細く白い手がトントンと優しくその背中を叩いていた。けぷっ、と小さなゲップの音がすると、彼女はその腕の中へと抱き直す。

「この子が大きな声で泣いていても起きないんだもの。ちょっと心配したわ」

　少しだけ大人びた声を酷く懐かしく感じながら、かけていたブランケットをめくる。その瞬間、ひらりひらりと一枚の紙が床に落ちた。拾い上げてそれを見た瞬間、どくんと心臓が跳ねる。

『やればできるじゃないか』

　殴り書きのような、見間違えのないあの特徴的な文字。それでようやく、俺は完全に理解する。

　──戻ってきた。

　やっと。やっと俺は、彼女の元に帰ってこられたのだ。

「あぁ⋯⋯」

　返事とも呻きともつかない言葉を吐き出すと、俺はフラフラとソファーベッドから立ち上がり、思わず雪乃の腰に縋りついた。

　その腰の細さも、その匂いも、その温もりも、ずっと俺が求めていたものだった。堪らなく愛しい、命を賭してでも守り抜かなければいけない存在が──俺の全てが、そこに在った。

「ちょっと、急にどうしたの？」

　戸惑う雪乃に、俺は語る言葉を持たなかった。

　ただ今は、彼女の存在を感じていたい。俺の中を全て、彼女で満たしていたかった。

「⋯⋯なあ、この子の名前は？」

「本当にどうしたの？　それを今日、訊きに行くのでしょう」

　雪乃の答えを聞いて安堵の息を吐くと、俺はそっと彼女の元を離れてソファーベッドに座る。

　ようやく、本当に長い時間をかけて、戻ってこられた。

　だが俺のさっき見た夢は、一体何だったのか。そもそも俺の過ごしたあのやり直しの時間は、どうなった？

　胸の内が騒がしくて、どうにもならない。それを知るのは、恐ろしい。けれど俺は、彼女に訊かなくてはならなかった。

「なあ。⋯⋯俺たちが高校二年の時に生徒会長になったのは、誰だった？」

「何を言い出すのかと思ったら⋯⋯。大丈夫？　悪い夢でも見た？」

　雪乃の問いかけに、俺は「いいから」と手を向けて首を振る。これだけは、ちゃんと確かめなくては。

「──一色いろは。あなたのよく知っている名前でしょう？」

　その名前を聞いた瞬間、天地がひっくり返ったような衝撃に見舞われる。

　この世界線は、あのやり直しの日々の延長線上にあるものではなかった。それが本来の姿であるはずなのに、身体がバラバラになりそうなほどの絶望に打ちひしがれる。

　俺は自らの心の均衡を保つ為に結衣を傷つけ、留美には孤独を押し付けた。相模には消えない心の傷を与え、俺の周りの人々は時に怒り、時に呆れ、時に俺を軽蔑した。そして雪乃には──たくさんの失望と失意を、与えてしまったのだ。

「⋯⋯すまん。本当に、すまない」

　がくりと項垂れるように、雪乃に向かって頭を下げた。謝っても失ったものは戻らないと分かっていても、そうしなければどうにかなってしまいそうだった。

「一体何に対して謝っているの？」

「⋯⋯夢を、見ていたんだ。高校二年の時の⋯⋯。それで色々、思い出した」

　何度もまちがって、苦しんで、苦しませて。彼女たちに与えてしまった失望や辛さは、一体どれだけのものだったのだろう。想像し切れないぐらいの事を、俺は繰り返して来たのだと思う。

「お前のこと、苦しませたなって。きっと雪乃以外も⋯⋯沢山まちがえて、すげぇ傷つけたなって⋯⋯今更だけど」

「八幡」

　気付けば雪乃は俺の目の前に立っていて、そう呼ぶなり俺の腕に我が子を抱かせた。未だ名前すらも与えられていない新しい命は、すぅすぅと微かな寝息を立てている。

「この子を見て」

　雪乃は膝立ちになると、俺の腕の中の、まだ生え揃っていない柔らかな黒髪を撫でる。

「この子は、私たちの幸せよ」

　まるで子供に言い聞かすようにゆっくりと優しい口調で言うと、雪乃は髪を撫でていた手を俺の手に重ね合わせた。

「を見て」

　そう言われて俺は思わず、雪乃の目を覗き込んだ。その瞳の中には、今にも泣き出しそうな、情けない顔をした男がいた。

「あなたは私の幸せなの。今も昔も、きっと未来も、それは変わらない」

　ふわりと、まるで桜が綻び咲くように、雪乃は笑った。まるで彼女の顔にだけ日差しが差し込んだかのように眩しくて、思わず目を細める。

「あなたの周りの人を、思い出してみて。あなたの所為で泣いている人はいる？　私はそんな人、知らないわ」

　重ね合わされた手が、ぎゅっと俺の手の甲を握り込む。彼女の確信を、伝えるように。今から語る事は、全て真実なのだと言うように。

「あなたがここに居てくれるなら、きっと何もまちがってなんていなかったのよ。人を傷つけたり、悲しませたりせずに生きるなんて、不可能だから」

　視界が淡く、滲んでいく。もう何も見えていないのに、それでも俺は雪乃を見詰め続けていた。

「──だから、そんな顔をしないで。私があなたから受け取ったものは、全部宝物なの。どんな言葉も、どんな痛みでも」

　瞬きをした瞬間、ポロポロと大粒の涙を落としていた。ベビー服にいくつも滲みが広がり、止めどない嗚咽が漏れる。

　まったく、酷い父親だと思う。この子が生まれ落ちた瞬間にだって、こんなにも泣きはしなかった。

「今日のあなたは、随分と泣き虫なのね」

　の涙を流す俺の目元を、雪乃は優しく拭ってくれる。それは夏休みのあの日、泣き笑いを浮かべる留美を見て零した涙を拭ってくれた時と全く同じ優しさで──だから俺は、全てを理解した。理論も理屈も全て飛び越えた純然たる魂ともいえる場所で、俺は確信する。

　あのやり直しの日々は、決して夢なんかじゃなかった。

　今も俺と触れ合った彼女たちは、そして彼らは未来を歩き続けている。

　きっと笑顔で、時に泣きながら、時に孤独を抱えて、今も生き続けている。

　嗚呼、やっと。

　やっと俺は、そう言える。

　俺の青春に、なにもまちがいなんてなかったと。

　十二年も経って、やり直して、彼女が教えてくれて、ようやくそう言える。

　雪乃は俺の腕の中から、そっと小さな命を抱き上げる。

　彼女の腕の中で安らかな寝顔を浮かべる我が子の頭を撫でると、その温もりは俺の心の奥底まで、見えないところまで染み渡っていく。

「さあ、あなた。もう行かないと」

「あぁ⋯⋯」

　俺は受け取った温もりを胸に湛え、ゆっくりと立ち上がる。

　そして彼女は微笑むと、真っ直ぐに俺を見て言った。

「この子に名前をあげましょう」

Fin.

あとがき  
  
  
　最後までお読み下さり、誠にありがとうございました。  
　この長い物語も、無事完結を迎えることが出来ました。  
  
　この話を書き始めるきっかけは、Twitterでのタイムリープ物に関する二次創作作家仲間のツイートでした。  
　タイムリープという言葉から、まるで天から何か降って来たかのように一気にこの物語が構築され、気付けばプロットを叩いていました。  
　例えどれだけ読んでくれる人が少なくても、これは絶対に完結まで書かなければと、毎話全身全霊で書き連ねました。結果から言うと毎話何千人という方にこの物語を届ける事ができて、本当に驚いています。  
  
　私がこの物語を通じて伝えたかった事は、あとがきであけすけに言うのも憚れますが、ラストの雪乃の台詞に込められています。  
  
　こういった二次創作も含めて、小説は表現する事によって成り立っています。そして表現は受け取り手がいて、初めて成り立つものだと個人的に思っています。  
　だから私にとって、読んでくれたあなたが幸せそのものです。時間というリソースを使い、文庫本一冊分にもなるこの物語を最後まで読んで下さった事は、私にとってこの上ない幸せなのです。だから誰が何と言おうと、あなたがここに至るまでの経緯は何もまちがっていないと、そう言い切れます。この物語は俺ガイルという素晴らしい作品と登場人物たちに向けた愛であり、そして他でもないあなたに向けた愛なのです。  
  
  
  
　はてさて、少し問いかけさせてください。  
  
　この物語を通じて救われたのは、一体誰だったのでしょうか。  
　救え、というメッセージを送ったのは、一体誰だったのでしょうか。  
  
  
  
  
　もしよろしければ、感想や評価などでフィードバックをお願い致します。  
　創作されている方なら同意して頂けると思いますが、読み手からの反応は書き手にとっての生きる糧でありますので。  
  
　これからは過去作を加筆修正して投稿しつつ、新しいお話も投稿していく予定です。  
　それではまた、新しい物語でお会いしましょう。

附：机翻

再一次度过错误的青春。

作者：[滝](https://syosetu.org/user/342316/)

这是人生中最能感受到奇迹的日子。

一觉醒来，不知何时的作文摆在我面前。

——这是雪乃非常喜欢的八幡，错误的青春重新来过的故事。

※虽然是时间穿越物，但不是反和隔离。倒不如说是对原作的礼赞。

21/6/26完结了。

再一次，第一次遇见了雪之下雪乃。

那只太小的手，满满地握着我的小指。

就在刚才，她的脸和身体都红彤彤的，简直就像另一种生物，在雪乃的臂膀里，雪白的肌肤映衬着她的肌肤，她呼呼大睡。

“你睡得真舒服。”

雪乃穿着印有妇产科标志的长袍，看着她安详的睡脸，对我微微一笑。

几个小时前呱呱坠地的生命，带着真切的热度一直握着我的手指。虽然知道那是反射，但从刚才开始就被那种感觉感动得胸中满是。

“结衣什么时候来?”

“明天，他说要请假来。”

雪乃抚摸着蓬松的头发，平静地回答。从刚才开始，微笑就源源不断地投向他的睡脸。

“明天……也许会和我走错。”

“没关系的。结衣好不容易请了假来，也想见你吧。我会留住你的。”

“嗯，就这么办吧。”

明天，我一大早就得去取这个孩子的名字。

从我们想出的几十种名字中，找出最适合出生日期的名字。雪乃达请求，想听听姓名判断鉴定师给孩子起名的意见。

因为出生那天下着雪，所以取名为“雪乃”，是她有什么想法，还是只是想给这个孩子取一个最好的名字，我没有问。

既然她这么希望，我就有义务和责任实现她的愿望。这是我和雪之下雪乃结婚时，从未向任何人宣布过的誓言之一。

“差不多该寄存了。”

“哦。”我应了一声，雪乃温柔地松开握着我的手，离开了病房。刚出生不久的婴儿应该待在新生儿室。虽然舍不得，但也没办法。

“差不多该睡了吧。现在闭上眼睛就能睡着了。”

“啊，真是累坏了。”

雪乃回到房间后，听了我的回答，关了房间的灯。

真的是辛苦了，头都抬不起来了。

不管过了多少年，雪乃的体力还是一如既往地虚弱，所以我直到看到自己孩子的哭声和雪乃安心的脸为止，一直忐忑不安。

“雪乃。”

坐在沙发床上，目不转睛地盯着一脸疲惫的雪乃。

把孩子生下来的辛苦，在一旁看着才会明白。几度昏倒的雪乃生完孩子后，脸上流露出的疲惫是无法用憔悴来形容的。

在雪乃的注视下，我深深地叹了口气，深深地吸了一口气。

“真的很谢谢你。”

“……你说什么奇怪的话?我可没做什么需要感谢的事。”

我差点脱口而出“那是不可能的”，但还是决定不说出来。时间可能会变长，现在应该优先让雪乃休息。

“晚安。”

“嗯，晚安。”

仰望着陌生的天花板，只是闭上眼睛。

没过几分钟，耳边就传来了鼾声，我仿佛在祈祷般放下了意识。

\* \* \*

令人怀念的景色。

油毡地板、印刷的摩擦声、淡淡焦油的气味。

回过神来，发现报告纸已经摆在我面前。

“比企谷，你这篇拙劣的作文是怎么回事?我先听听你的借口。”

锐利的视线，刺骨而又令人怀念的声音。在我的记忆中，平冢医生的表情很严肃，似乎在回避我的乡愁。

摆在我眼前的那张纸上，写着“青春是谎言，是邪恶”之类的。

这一天的事，我记得很清楚。那是我和雪乃第一次见面，不可能忘记。即使现在这样做梦，在我的记忆中依然散发着鲜艳的色彩，感觉就像现实一样。

“不，这家伙到底在写什么呢?”

如果这是几年内写的一篇带有色情色彩的作文，我一定会羞愧不已吧。但毕竟是连生肖都绕了一圈的过去的事，也只能笑了。

“嗯……明知故犯，难道是信誓旦旦吗?这就更可恶了。”

平冢医生沉思片刻后，锐利地瞪了我一眼。哎……好哇。就连不知道什么是可怕的高中时代都觉得可怕，现在知道了可怕的东西更可怕了。不，是我太胆怯了。

“在这么忙的时候做出这种恶意的行为，无论有什么理由都不能放过。所以我命令你去做公益活动。”

听着这句既定路线的台词，我忍不住笑了出来。我知道接下来的内容。我被带到服务部的活动室，被强制加入。

“哦。”

“跟我来。”

这句不容分说的话，让我在走廊上踩了很久的靴子。那声音和凛冽的空气，一切都令人怀念。

“你没有参加社团活动吧?”

“嗯。”

我一边走进特别大楼，一边简短地回答。离令人怀念的志愿部活动室还有一点距离。

没有名字，雪白的签名牌。我抬头望着，心中充满了心痛的怀念。在总武高中度过的每一天，似乎都深刻地刻在他的记忆里，以至于梦境如此逼真。这种真实感只能说是记忆的重温。

“到了。”

说着，平冢老师打开了那扇门。那一瞬间，好像有一阵风吹过。

被推到教室后面的桌椅。黑板似乎暂时没有使用过。从窗户射进来的斜阳，给她完美的造型投下了更深的阴影。

在微微泛红的世界中，她伫立在那里，视线落在书本上。那光景就像一幅画，让人怀疑世界末日后她一定还会这样这样。

——我知道她的名字。

雪之下雪乃。

她是我将来的妻子，即使我忘记自己的名字也不会忘记的名字。

“…………”

……不，即便如此。

高中生的妻子，是不是太可爱了?不，快三十岁的雪乃和大人的妖艳一样，是个不折不扣的美人，可爱到极点，是啊。实际上，看到十几岁的她，我只觉得她可爱得可怜。

“平冢医生，你进来的时候不是要求敲门吗?”

那个声音比耳熟的声音稍微高一点。连声音都很可爱呢，我太太。这个梦真的是最棒的……

“就算敲门，你也没试过回答啊。”

“因为在回答之前，老师会进来。”

那种带刺的语气和放弃的眼神，好久没看到了。我感慨万千地看着她，突然和雪乃四目相对。

“那么，那个腐烂的眼睛里面闪闪发光的人呢?”

啊，不行。虽说是在做梦，但我似乎过于肆无忌惮地盯着她看了。

“他是比企谷，希望加入。”

“……我是二年级F班比企谷八幡。请多关照。”

我这么回答后，平冢医生惊讶地皱起眉头。

他的表情让我想起了当时的事情。我记得我当时很抗拒加入社团是什么。

“作为某种惩罚，我命令他在这里做公益活动。你看他的眼睛就知道，他的本性相当坏。如果他能学会与人相处，多少会好些。你能让他留下来吗?”我的任务就是重新改造他扭曲的孤独体质。”

“……我拒绝。因为那个男人觊觎猎物的眼神，让我感到危险。”

唉……你要拒绝吗?比企谷八幡加入志愿部失败。什么坏结局啊。不，这么说来，原来她是这样拒绝我的。

“别这么说。他看起来不是傻瓜，他知道如果做了不好的事情会有什么后果。”

总觉得事情的发展不太平稳，让人心情很不好。

要是有人一进房间就用闪闪发光的眼睛看我，我误以为他一定是冲着我来的。从这个时候开始，雪乃就已经意识到自己容貌出众。

“……即便如此，我还是不能相信你。”

“这也难怪。小事也没关系。如果有什么事就告诉我，我会把你踢出学校的。”

不，这是什么?因为雪乃的告发就退学了吗?

我忍不住想插进去，但终究只是梦。如果当时是这样度过的话，也许真的会被这样说。

“那……嗯…………我明白了。”

雪乃不情愿地轻轻点了点头。你真的很讨厌啊，雪乃小姐。我和高中时代的你再次相遇，感到非常幸福。丸。

“那之后的事就拜托你了。”

说完，平冢老师一头长发飘飘，潇洒地离开了服务部。那是我和雪乃在义工部的二人时光。

长桌也好，椅子也好，一切都和那时一样。“来吧!”我一坐到自己的座位上，雪乃立刻投来了惊讶的目光。

“……没有得到入座许可就坐下，简直没有教养。”

嗯……是许可制吗?这种时候，我是怎么回她的呢?

“你不叫我坐下，我就不能坐下吗?”

“如果你能理解“坐下”这个词的意思，我就帮你做吧，如果你的智力和狗差不多的话。”

这是第一次见面，感觉很强烈。被人俯视到这种程度的我也是我，可雪乃的态度岂止是居高临下，简直就是居高临下。

“你随便坐也行吧，我们是社员。”

“……你知道这个社团做什么吗?”

“义工部。在接到委托之前一直很闲的社团。不是吗?”

我轻飘飘地回答，雪乃不由自主地抱住自己的身体。

“……比企谷，我不知道你是怎么巴结平冢医生的，但你怎么知道得这么清楚?如果你想找我，能马上让我离开吗?”

嗯，会有这种反应吧。对雪乃来说，知道这么多，跟被跟踪没什么两样。

“为什么会这样?你是在来这里的路上问平冢医生的?”

我从包里拿出文库本，想要告诉他我没有害处。哗啦一声卷起来的瞬间，不知从哪里飘来一张纸，掉在地上。

“救我!”

我捡起一张纸，上面只写着这句话。那是几次挥动直线写出的字迹，给人一种威胁的感觉。

我不由自主地看向雪乃，她已经不再看我了，视线落在手边的文库本上。

这到底是怎么回事?

在我所知道的事情中，只有这件事不一样，太不一样了。

在漫长的沉默中，他假装在看文库本，绞尽脑汁。难道只是我忘了吗?还是这个空教室里有以前的使用者，恶作剧的纸张不知什么时候掉了下来?

虽然是在梦中，头脑却异常清醒，正当我思考的时候，入口的门发出了毫不客气的声音，打开了。

“雪下，打扰你了。”

“……老师，敲门!”

“不好意思，我是来看看情况的……”

“嗯。”平冢医生抱着胳膊，低头看着我们。平冢医生……也不是故意的。意义和动机都太多了。

“是不是在雪下突然放弃了?”

“……我很怀疑能不能和那个男人继续对话。”

那个男人……是你将来的丈夫吗?不，从来没有人叫过老爷。下次也有这样的比赛……。

“但是，对话是一切的开始，没有对话，就无法增进彼此的理解。”

“我既不想理解也不想亲近。”

“是吗?那也没关系。不过，你还记得我的委托吗?”

“这……是……”

雪乃看着我，脸上夹杂着放弃和后悔的表情。这个表情真好啊。不信任感暴露到这种地步，索性神清气爽，转了一圈也觉得新鲜。雪乃无论表情如何都很美。

“那就拜托你了。”

平冢医生大概是觉得自己待在那里无法开始对话，早早地离开了活动室。

门咔嚓一声关上，雪乃“啊”了一声，放弃似的叹了口气，把正在读的书放在桌上，面对着她。

那张纸片上写的意思还不清楚。但这是梦。那么现在呢?

“自我介绍还没开始呢。我是二年级J班，雪之下雪乃。欢迎来到义工部，比企谷……三幡君?”

“八幡，还不够五幡呢。”

——既然如此，那就尽全力享受那时和雪乃的对话吧。

\* \* \*

第二天早上，我双手撑在餐桌上，抱着头。

对，第二天早上。

虽然是在梦中，我却睡着了，然后又醒了。原本以为只要在梦中睡着就会完全清醒，但到现在还没有从如同烧过的世界中醒来的迹象。

这成了一件非常棘手的事情。我得早点醒过来，给刚出生的孩子取个名字。现在不是玩这种穿越游戏的时候。

“……怎么了，哥哥?”

小町不知什么时候走进客厅，从旁边窥视着我的脸。昨天晚上也见过面，十二年前的小町哇……不，完全不觉得现在的小町变老了，只是忍不住盯着看。

“不，没什么。”

“嗯……”

小町用完全不相信我说的话的语气开始烤吐司。

不管怎么说，和以前的她们分手是很可惜的，但我必须回到原来的现实世界。为此的启示，一定在那张纸上吧。

“救我!”

那是一张被打得乱七八糟的纸。只有那个和我的记忆不同，带来了强烈的暗示。

到底要救谁呢?

回想起来，我的高中生活充满了后悔。如果做得再好一点，就不会造成不必要的伤害。也有打算帮助，却变成无可救药的事态的事。因为需要救助的对象太多，所以只能束手无策。

“面包烤了。”

“……谢谢。”

我抬起头，小町把烤好的吐司放到盘子上。香浓的气味，让我快要沉郁的心也多少轻松了一些。

“我吃了。”

我双手合十说道，小町用讶异的眼神看着我。这么说来，每次吃饭前都这样礼貌地说“我要吃”，也许是和雪乃一起生活以后的事了。

“哥哥，今天还是有点奇怪。”

是的，我变了。

十二年的岁月，与我相关的人，还有我自己——都无可挽回地改变了。

所以，如果我再一次度过那错误的青春的话。

这次不能再犯错了。

\* \* \*

“比企谷，社团活动时间到了。”

结束班会走出教室，等着我的是平冢老师。

“不，不用特意来接……”

“你是说要好好去参加社团活动吗?光说不练。”

看来当时的平冢医生根本不相信我。实际上，如果没有人接我，那时的我应该会正常回家的。

但是我有要做的事。所以我真的打算去参加社团活动，现在的我根本就没有不去见雪乃的选择。

“我的信用是零。”

“那是当然。故意让人厌烦的人，还有什么可信任的?”

两人并肩向特别大楼走去。今天我说的话，她会怎么回答呢?必然会得到不乐观的回答。

“对了，比企谷，在你那腐烂的眼睛里，雪之下雪乃是什么样子?”

平冢医生唐突地问道。我当时是怎么回答的呢?

不，老实说JK幸乃最真的太可爱了想要抱紧之类的蠢事老实回答的话，马上游戏就结束了。……真的不能抱吗?不行啊。

“怎么说呢……是自我意识和对人的不信任的集合。”

“是吗……你不觉得这是在说自己吗?”

我真的是这么想的。我想，如果是现在的国家的教师，应该有个说法吧。

确实，正因为有如此相似的部分，共享常识才更容易吧。因此，我随意地期待，却被随意地背叛了。我和她都觉得受到了无谓的伤害。

“你们一定是在某个地方失去平衡，发疯了吧?”

平冢老师的鞋跟敲在地板上的声音，让我陷入了沉默。

“意外的是，如果是两人三脚的话，说不定你们还能走得很好呢。”

“……我只能看到一个华丽地摔倒的未来。”

“那也没关系。摔倒的时候两个人一起的话，应该也能一起站起来。”

平冢医生的这番话，仿佛对未来的一切都了如指掌，我不禁感叹。真是独具慧眼。事实上，自从我们成为名副其实的伴侣以来，就是这样生活的。

“好了，到了，走吧。”

刚走到服务部活动室的入口，就被人拍了一下后背。平冢医生似乎不想跟我进去，他轻轻挥了挥手，转身就走。

他把手放在门把手上，为了不惊动她，慢慢地打开了门。

“很淡。”

“…………你好。”

已经在活动室里的雪乃，花了很长时间听我说了一句连招呼都算不上的话，这样回答。她手里的书打开着，朝这边看了一会儿后说道。

“我还以为你不会再来了呢。一般来说，你这么一说，我应该就不想再去了。”

“不巧，我脸皮很厚，那种程度根本算不上什么。”

昨天虽然发生了相当辛辣、恶毒的言语交锋，但我反而觉得很怀念，很享受。说着，我坐在椅子上，雪乃毫无顾忌地讶异起来。

“是吗?……难道你喜欢我?”

“……是?”

至于喜不喜欢雪乃的问题，那种喜欢太过喜欢，甚至到了爱的地步。甚至恨不得现在就抱紧。不，请让我抱紧你。

这样说的话，就会被罚红牌……所以，只能用当时的我可能会说的话来联系。

“你的脑子里怎么会有这种花圃般的想法?你是在阿尔卑斯山出生长大的吗?真名不是灰二吗?”

“不是吗?那就放心了。”

呵呵呵，他无视我说的话，嘴角露出笑容，眼睛却没有笑。这是生气的时候的东西。我知道八幡。

“嗯，你放心吧。”

但是按照这个流程，要达成今天的目标难度很高。但越往后说，就越觉得说出来的事本身就不自然，不符合逻辑。

我“嗯”地清了清嗓子，站起身来，把椅子拿到雪乃面前。坐在那里相对，是相当少见的情形。

“雪下。”

我叫了一声，雪乃靠在椅背上仰着身子，和我保持着距离。不，不用那么警惕……

“联系方式，告诉我。”

“绝对不要。”

我把手机“砰”的一声放在桌子上，雪乃立刻拒绝了我。到这里为止都和预想的一样，没有问题。

“为什么?”

“你问我为什么?你总想顺着这个话题问我联系方式吧?果然还是喜欢我吗?”

“为什么会这样呢?毕竟都参加了同一个社团，不知道联系方式不方便吗?”

回想起来，应该早点问她的联系方式才对。如果那样的话，不必要的不安和不信任也许就不会降临了。

如果生活在另一条世界线上的话。

虽然很想早点回到原来的地方，但也必须考虑最坏的情况。因为我言行的改变，这个世界已经开始发生变化了。为了控制状况，应该先弄到雪乃的联络方式。

“除了业务联络以外，我不会再联络。如果是不合适的联络，我可以告诉平冢老师。有什么问题吗?”

“……真的没有联系我吧?有没有考虑过以业务联络为借口发邮件联系?”

“所以说不做……如果你有这种感觉，就无视我好了。”

“……这也是没办法的事。”

雪乃也拿出手机，一副不情不愿的样子。

雪乃好像还不习惯交换联系方式，我也回想起以前的手机操作方法，花了一些时间，总算交换了彼此的电话号码和邮箱地址。

“可以试着发个邮件吗?”

“没关系…………要注意不要被当成性骚扰。”

这家伙到底是怎么想我的……我一边泄气一边在新发的邮件里输入极短的文章。

“请多关照。”

画面中的纸飞机一飞过去，雪乃的手机就响了。她对邮件的内容毫无兴趣地看着。

现在这样就可以了。

即使这个世界继续下去，我的目标也不会改变。

我一定要和雪乃在一起。因为只有这样的未来是绝对不能改变的。

感谢您的阅读。

我觉得这样设定的时间跨度很少见。

和用八雪这个标签想象的故事会有一番风味吧。

如果能陪我到最后就太好了。

不放弃由比浜结衣。

服务部的活动室里还没有红茶的香气。

她是什么时候把茶具拿到这里来的呢?

“…………”

漫长的寂静中，只有翻书页的声音偶尔隐约传来。

今天发生的事，我记得很清楚。志愿部实行两名体制后的第一次委托。这个委托看似简单，实则暗藏伏笔。

咚咚，一阵微弱的敲门声穿过活动室，如果没有这沉默，几乎听不见。

“请进。”

雪乃把书签夹在垂下视线的书里，用平静而凛然的声音告诉门外的访客。

“我、失礼了……”

掩饰不住紧张，声音有些激动。第一次来这个房间的她，一上来就说“好吧!”不可能这么有精神地打招呼。

我和雪乃的第一个委托人。——由比滨结衣和以前一样，在服务部的活动室里东张西望。

今天早上也在教室里看到了那个身影，不过，像这样近距离地，并且交换了视线的事总算再次见面了的实感。

十几岁的结衣，怎么看都是可爱可爱的女孩子。淡粉色的茶色头发，穿坏了的制服。看到他那平常梳着丸子头的样子，我因为自己也不太清楚的安心感，不由自主地露出了笑容。

“什、为什么希基会在这里?︎”

和我四目相对，结衣突然慌张起来。回想起来，从他的反应应该可以推测出各种可能性。

“不，我是这里的社员。”

一边回想着过去的事情，一边尽可能地追踪当时的言行。

我劝她坐到椅子上，雪乃说出她的全名。一切都和那天一样。

雪乃的态度既不像是在开玩笑，也不像是在开玩笑，今天又来了一位客人，两人继续交谈着。

这里的对话一字不差。如果因为什么失误和当时发生了分歧，我想知道的事情就永远没有办法知道了。

“虽然不一定能实现你的愿望，但我会尽我所能帮助你的。”

雪乃的这句话，就是结衣委托的触发要素。进入正题后，结衣突然慌了，飞快地说。

“啊，那个……曲奇……”

结衣突然想起什么似的看着我，说不下去了。回想起来，这是最初也是最大的提示。这个答案，不从她口中听到是不可能知道的。

“比企谷。”

“……我去买点饮料。”

在雪乃的催促下，我站起来走到走廊上。在“砰”的一声关门的轻微声响之后，我留出了一个能听到室内声音的缝隙。

真是的，偷听这种行为很没品位，也是最差劲的行为之一。但是在这里得到的事实对我来说非常重要。

我背靠着走廊的墙壁，侧耳倾听室内的声音。

“那么，有什么条件吗?”

“嗯…………有人想送曲奇。”

回过神来，我发现每次听到结衣的声音，心脏都会加速跳动。虽然无法窥探她们的表情，但从她们的声音中可以感觉到她们的认真。

“那个，我是刚才在那里的希基。”

“……是比企谷?为什么?”

“这个……应该说我有点在意…………嗯，就是那种感觉……”

“由比滨，我是为了你才这么说的，你还是培养看人的眼光比较好吧?”

“咦?︎，为什么?希基，很好吗?”

“……是正常的吗?完全无法理解的价值观。”

雪乃说得很难听，但听她说到这里已经足够了。这样我今天的目的就达到了。

我离开走廊的墙壁，蹑手蹑脚地往前走。稍微慢一点。这样一来，她们的对话就又结束了。

\* \* \*

家庭科教室里充满了香草精的香味。……是几十分钟前发生的事情。

现在放在这里，甜腻的气味中混杂着焦味，不仅不能勾起食欲，反而弥漫着衰减的香味。

“什、为什么……?”

结衣愕然的样子，对现在的她来说是难以想象的。我认识的结衣，不知何时开始对做点心产生了兴趣，现在的手艺已经可以和雪乃媲美了。一开始是这样的……这样一想，就能清楚地感觉到时间的流逝。

“喂，这真的要吃吗?”

我勉强打开模糊记忆的抽屉，重复着当时我想说的话。

从她们刚才的对话中，我知道结衣从第一次来服务部开始，就对我怀有一颗恋慕之心。雪乃从一开始就知道结衣想给我饼干，想和我成为好朋友的想法。

正因为如此，高二那年的冬天，雪乃才会一再对结衣有所顾忌。不，客气这种词是不够的。因为我的决断不够果断，所以才会强迫她们承受过剩的懊恼。

并不是所有的事情都充满了后悔。

我不可能认为一切都是错误的。

只是觉得自己本可以做得更好。

“因为没有使用不能吃的原材料，所以没有问题。而且我也吃，所以没关系。”

雪乃悄悄在我耳边说着，我不由得背朝她背了过去。在疏忽大意的情况下进入私人空间，即使是熟悉的距离，也会不由自主地做出反应。

这个周而复始的世界的生活方式，在我心中几乎是固定的。

我最终会和雪乃在一起。那个目的不会变。而且我也不想放弃雪乃和结衣的关系。

结衣的恋爱没有结果而受伤，在这个阶段我向雪乃表明心意，虽然不能说是回避，但至少可以把她的伤害降到最低吧。

但是，这样是不行的。

只要我表明心意，结衣就会瞬间和雪乃拉开距离，无法培养羁绊。对雪乃而言，结衣……对结衣而言，雪乃是一生中能否遇见一个人的挚友，是无可替代的存在。

要说两个人的感情有多深，那就是明明说好了看完电影的广告之后再去看，如果结衣邀请我，我也会毫不犹豫地去看的程度。一旦我邀请他去看电影，他就会事后报告说:“那部电影我已经和结衣去看了。”不，这只是我被草率对待了……

“……不会死吗?”

雪乃看着我，刚才还盯着饼干看的眼睛里渗出不安。

总之，我能做的就是不妨碍她们培养友情。基本上，只要有记忆，就会照着原来的世界线发生的事。在此基础上，适当修正错误。

在这个过程中，结衣对我的恋慕之心越来越强烈，我很清楚会被说成是自作多情。不管怎么说，那个时候我也表现出了相当难堪的样子，做了很过分的事情，但最终结衣还是被我吸引了。

所以结衣不受伤，不放弃和雪乃的友情也是不成立的。所以，这也许是我过于自我中心的选择。对那张带有暗示意味的纸上写的“拯救”这个词的回答，也有可能是错的。

尽管如此，我在这个选择上毫不犹豫。她确信结衣和雪乃对彼此来说都是不可或缺的存在。

“我没听……”

看着焦黑的曲奇饼，还没吃就觉得苦味在口中扩散。

啊，对了。想起那时候的事，又痛苦又难过。

所以，哪怕只有一点点，我也要去除那种苦味。

\* \* \*

之后的日子，令人目不暇接。

与其说是雪乃救了在班上被三浦诘问的结衣，不如说是留下了长久的祸根，材木座的品质一如既往。关于材木座的委托，我比那时更严厉地贬低了他，不过无所谓。

在接下来的网球对决中，户冢是天使。现在三十岁的户冢比我早结婚生子。请想象一下，当我看到留着胡子拉碴的帅哥户冢时，我的绝望和即将打开新大门的样子。不用了。

在这样周而复始的日子里，有一件事是刻意赋予变化的。

那个，关于事故的故事。

关于这个话题，我一直回避着。因为那次事故结衣对我有所亏欠，所以才会对我费心，我欺骗了自己，也严重伤害了结衣。我擅自认定雪乃不会说谎，也擅自感到失望。

想起来，连既是加害者又是受害者的感觉都很滑稽。因为我受伤了，所以我才被当作被害者对待，不管理由如何，我所做的事情就是妨碍自行车这一小型车辆前进中的道路。如果是物损事故，我很有可能是加害者。

那么，这种变化的结果会怎样呢?

“我想去这家店看看。”

一条短信之后。那时我在公司见习的时候，对结衣说“没必要为事故的事费心”，受了伤的她就不来义工部了。

在没有这么做的这条世界线上，结衣不参加社团活动这件事本身就不存在了，我所不知道的状况开始了。

“是吗，待会儿见。”

“啊，这不是拒绝的时候的家伙吗?”

和睦是美好的吧。但茫然的不安和焦躁总是缠绕着我。

我到底什么时候才能回到原来的世界线呢?如果时间的流量是共享的，回来的时候已经过去好几天了呢?

我知道着急也没有用。但是，每天晚上一想起自己的孩子，想起生孩子后憔悴的雪乃，想见她的心情就一天比一天强烈。

“喂，希基。”

突然有人叫我，我把视线转向声音传来的方向。

结衣用力拉住雪乃的上臂，不让她挣脱。

“幸乃带不上，有什么好办法吗?”

……这不是在本人面前问的事。

不过，能看到他毫无防备地嬉戏，是来到这条世界线后唯一的救赎。从来没有因为我对我说的谎言而受到伤害的结衣，竟然能如此天真地和她嬉戏。

“我怎么可能知道……”

“是啊，由比滨。如果比企谷有这样的沟通能力，就不会在这里了。”

“我说过是这样的地方……不过，你可别小看我啊。在劝诱传销和引诱堕落方面，没有人能比得过我。”

“是啊，他好像很喜欢拖别人后腿和给别人带来不幸。”

一边回想着我以前的思路，一边和雪乃展开了对答。结衣稍稍有些畏缩地看着这样的对话，总觉得有些怀念。

但雪乃的这句话，让我感到一丝不安。

“如果比企谷有这样的沟通能力的话。”

如果有的话，能邀请雪乃出去玩吗?

答案是否定的。即使发出邀请，也一定会被拒绝。看他现在对待我的态度就知道了。万一发生什么情况，那可就麻烦了。

“总之就是那个吧，强行合掌下跪，用三种神器努力。”

“我不喜欢下跪……”

“也有很厉害的神器……”

面对责难的目光，我抱着胳膊，大方地点了点头。

如果是结衣的话，只要硬塞就能轻易攻陷雪乃。这一点，结衣无论过多久都无法实现。

“走吧，走吧?什么时候走?”

“由比滨，请不要恢复对话，我不是说不去吧?”

你看，按照这个对话流程，再过五分钟就够了。

……真好啊，和JK雪乃约会……。

\* \* \*

所谓的不安和杞人忧天，基本上只有中签和中签两种。

以这次的案例来看，可以说是大获成功。

周末的星期六。

我和小町去了东京猫咪秀，在会场遇到了雪乃。在这里我给他的变化是，同行的时候避免了和结衣的失误。

那时的结衣好像误以为我和雪乃在约会，想避免刺激好不容易建立起来的关系。

对我来说的错误，纠正的结果。

为了让结衣回到服务部，和雪乃一起去买生日礼物的活动也消失了。这也就意味着要避免和雪下阳乃的初次邂逅。那天，我第一次见到了现在已经是我嫂子的阳乃。

我无论如何都想避免这种不知道见面方式的状况。读懂阳乃的行动实在是太困难了，状况也变得更加难以控制。而且最重要的是想和女高中生雪乃约会。想做，想做。

“……你怎么这么严肃?”

看到我坐在沙发上紧握着手机低垂着头，小町担心地问道。可能是在《猫之秀》里走累了，他坐在我旁边的动作比平时乱了，身体微微摇晃。

“嗯，有点……”

他不可能坦率地说，“为了邀请未来的妻子，不知道该发什么样的短信”。

也许，如果不巧妙地发送邮件，我的邮件就不会被当作业务联络来处理，而是服务部的告别途径吧。不，她并不认为事情会立刻变成那样，但对雪乃来说，她是为了自己才加入服务部的。在现在这种状况下，这是事实。

“什么?给结衣发短信?”

“……不是。”

为什么在那里结衣呢?不过，站在一旁的人，如果以为我和雪乃没有交换联系方式，那也没办法。

我提议:“我想去给结衣买生日礼物，你愿意陪我吗?”这也是一种方法。但这样一来，雪乃会觉得我对结衣有意思。而且情况也不太好。

没想到给自己的妻子发邮件这么难。那家伙是不是太闹别扭了……。不，我也是吗?

“好了好了，要修改邮件就交给我吧，我来判定你是不是恶心。”

“判定项目很奇怪……”

为了不让人看到空白的邮件，我按下休眠键，关掉了屏幕。在画面消失的瞬间，弹出通知横幅。看到寄信人的名字，我不由得看了两遍屏幕。

“咦，莫非已经在发短信了?”

“不，没有，是亚马逊寄来的。”

我把手机放进口袋，假装去厕所，走出客厅。进了厕所的瞬间，打开邮件的画面，眼睛紧紧地盯着里面的文字。

“请告诉我明天比企谷和小町的安排。”

没有啊没有!就算有也会全部取消，所以完全免费!

我不由自主地想要投入进去，但现在必须冷静下来。我一边一遍遍确认寄信人的名字是“雪之下雪乃”，一边深呼吸，平复心情。

如果是当时的我，会怎么回答呢?因为是自己的事，所以才写了这么多无可奈何的事吧。

“明天要在家休息一整天。”

我用颤抖的指尖按下纸飞机的图标，电子信件发出不可靠的声音飞走了。为什么给老婆发短信都这么紧张呢?

话虽如此，为什么雪乃不直接去小町呢?我还以为是受川崎大志委托处理川南克的问题时，交换了联系方式呢。

想着想着，屏幕上又出现了邮件通知的横幅。

“明天上午十点在千叶站集合，你一定要把小町也带来。”

不容分说的短信内容，让人不禁笑了出来。本来我和雪乃交换联系方式是很久以后的事了，所以现在和雪乃发短信会变成这样吗?这种沉闷的文字也很新鲜……

正当我沉浸在这样的感慨中时，也许是觉得这封邮件太过片面了吧，很快又收到了另一封邮件。

“我想让小町小姐和我一起给由比浜选礼物。”

对于这样的短信往来，当时的我会怎么回复呢?一定是怕麻烦，想尽各种办法逃跑。

不过，现在的我知道，这样做是徒劳的。

“知道了，部长。”

所以我只写了这些就发给他，然后悄悄地把手机收进了口袋。

\* \* \*

第二天，星期天。

和雪乃会合后，我和小町坐着电车向南船桥站走去。到达目的地后，小町便失踪了。当时的我不知道该怎么做，现在的我可以坦率地说出来了。谢谢你，小町。赠送八万积分。

“小町不在的话，真伤脑筋……”

走在鳞次栉比的店铺之间，雪乃烦恼地叹了口气。

女人味十足的喇叭裙搭配开襟毛衣，一身轻松的大小姐打扮。再加上梳着双马尾，俨然美少女的雪乃，简直太耀眼了……特别是这个发型，结婚以来一次都没见过，好久不见了。我想拍照。想作为手机的壁纸看一辈子。

“这种说法听起来好像我完全没有战斗力……”

“这种说法听起来好像自己是个有用的人。”

面对他那瞧不起人的说法和目光，我只能苦笑。真希望你不要瞧不起我。每年都要为挑选雪乃的生日礼物烦恼到呕吐的我，不可能没有战斗力吧。

“总之就是杂货店，放着各种各样的东西，一边看一边想象对方的生活方式，找到可能会喜欢的种类。”

“……你竟然能说出这么正经的话。”

打从心底感到意外的视线越过了不舒服，反而更舒服了。当时的我到底是怎么想的……

走进手边的杂货店，雪乃没有拿商品，只是目不转睛地看着各式各样的商品。可是，雪乃送给结衣的礼物就算了，我送给结衣的礼物该怎么办呢?

那时候在《猫之秀》上见到结衣的时候，因为她戴着的项圈坏了，所以送了她项圈，但这次这个契机本身就不存在。

“由比滨过着怎样的生活……”

这句话让我想起了过去的事。那时，雪乃和结衣的关系还不算深。彼此的家也还很长一段时间。我虽然知道一些事情，但也不可能详细地说出来。

“嗯，就是那种蓬松的少女，让人感觉头脑有点松弛的生活方式吧。”

“你的说法让人觉得有恶意……”

说得确实有些过分，但并没有说错。用室内香氛享受香气，或者只是为了点缀那个空间而装饰装饰品，都是好的意思。如果头脑僵硬，身边就只有实用的小物品，这是常有的事。甚至有人开始说“不舍”，然后开始断舍离。

回想起我所知道的结衣的生活，出乎意料地很快就想到了要送给她的礼物。不，也许说他看到了才是正确的。

“我要这个。”

说着，他拿起一个印有变形狗的耐热碗。无论做点心还是做菜，碗都是必需品。

“这难道不会让人觉得你是在瞎猜吗?”

“你才是怎么看待由比浜的……”

雪乃有些退缩，我只能用略带苦味的笑容回应她。

但她不知道，这也是没办法的事。结衣一定会一直用这个碗，直到狗的印花磨破为止。那个时候，诞生了技艺高超的西点。

“剩下的就是你了。”

“嗯……还挺难的。”

手捧脸颊偏着头的样子十分可爱。一不留神就会吻上，希望你能自重。

我看着认真烦恼的雪乃的侧脸，想象着她会选择的礼物。她一定会选择围裙作为送给结衣的礼物。

我所认识的结衣，一次都没有系过不同的围裙。

\* \* \*

走在拉拉坡长长的通道上，我开始打起精神。

从这里开始，和阳乃算帐的可能性就大大提高了。我大致记得第一次见到阳乃小姐的地点，但时间分配和去的店都和那时有所不同。说不定今天不会遇到。

既然如此，那也没办法。从一开始就没想过什么都能控制。

我和雪乃随便看了看服装店的商品，又像以前一样走进厨房杂货店。不知是不是从我要送给结衣的礼物中得到了灵感，雪乃盯着比刚才那家店更正式的阵容。

“比企谷。”

我也若无其事地边走边看商品，突然被人搭话。当时，雪乃系着围裙。

“这样怎么样?”

回头一看，递到我面前的，是长着猫耳朵的手套。雪乃张大猫嘴，观察着我。

…………太尊贵了，差点儿尊死。什么都不一样，原来也有可能发生这样的个人惊喜。

但是到了这里，就想看看JK雪乃穿围裙的样子!贪心也是没办法的事。

“……缝纫机不是已经在家里了吗?如果是围裙怎么样?”

“的确如此。”

走到卖围裙的地方，雪乃毫不犹豫地拿起一条黑色薄围裙。不需要我催促，雪乃飞快地披上了猫脚印的图案。

“怎么样?”

“很好，很适合你，很可爱。”

真的，可爱得让人窒息。希望你能夸奖我，只是我没说出来而已。

一秒都不允许的回答，让雪乃一脸茫然。我记得当时应该夸奖过他，但他的反应可能有点夸张。

“……不过，要说配不适合由比浜，那就微妙了。”

“是、是啊……”

雪乃的脸颊微微泛红，她迅速脱下围裙，整齐地叠好。和以前一样，不会放回商品架上。

我对那个稍微放心了。直到这条围裙已经很旧了，我送她一条新的，她都很珍惜地用着。但是，我太太被我夸奖了就马上买，是不是太可爱了?史上最强傲娇加上素直属性之类的太过混乱了，连它都快要死了。

“不如想象一下更适合由比浜的颜色和图案，比如平时会穿的衣服。”

“……比企谷，你已经习惯了。”

这意味深长的说法，让人觉得莫名其妙。不，这个技巧是我在给你挑选礼物时培养出来的……

“嗯，有妹妹的话。”

我这么搪塞过去，雪乃轻轻点了点头，仿佛在说“是啊”。最后拿在手里的，是一条似曾相识的粉色围裙。

“我觉得这个不错。”

“哦……并不坏。”

尽量不做出夸张的反应，静静地表示同意。看到我的反应，雪乃露出稍微放心的表情，把两条围裙抱在胸前走向收银台。

看着他的背影，我突然想到。但为时已晚。

粉红色的围裙也应该试穿一下才对……

\* \* \*

“啊?雪乃?啊，果然是雪乃。”

和以前一样去了游戏厅之后。

完全没有要和阳乃见面的意思，我想着差不多该回去了，在通道上走着走着，突然听到了那个声音。

“阿姐……”

虽然相遇的场所有微妙的不同，但这样就完成了预设调和。阳乃跟同行的朋友们打了声招呼，兴高采烈地走了过来。

“在这种地方——啊，约会啊。是约会吧?雪乃，你这个……”

“…………”

用胳膊肘轻轻顶着雪乃的阳乃，和浮现出冷淡表情的她。当时觉得很不自在，但现在却感到安心了。

阳乃小姐毫不在意雪乃的情绪，连珠炮似的继续说。

“喂，这孩子是雪乃的男朋友吗?是男朋友吧?”

“……不是，只是同学而已。”

不，是将来的丈夫。

我只是在心里说……我会一直注视着阳乃和雪乃的对话。雪乃依然很不高兴，甚至有些生气，而阳乃却露出虐心的笑容，看起来很开心。

“我是雪乃的姐姐阳乃，你要好好对待她哦。”

“……你好，我是比企谷。”

“比企谷……”

看到他的表情，我忍不住闭上了嘴。

和那时一模一样的表情。他的视线仿佛在确认我的全身。

如果这个视线的意思是为了确认事故是否有后遗症呢?

脑子里的谜题高速地拼凑起来。

暑假马上就要来了。雪乃几乎处于软禁状态，和结衣几乎无法正常发短信，也没有答应过她玩的邀请。

阳乃小姐大概是通过这样的对话认识到了在事故中受伤的是我。我和雪乃在一起的事情传到了雪之下家，难道不能认为她断绝了与外界的接触吗?

雪乃应该对入学典礼当天的事故受到了不小的打击。出于事故的考虑，想要回避接触，这是可以理解的。

“比企谷。嗯，拜托了。”

他对我温和地笑了笑，我意识到自己错了。

因为是结衣亲口告诉她的，所以不太清楚，但雪乃联系不上应该是在她从千叶村回来之后。回到总武高中后，出现在我们面前的，就是那辆出租车。如果事故发生时就没换过司机的话，那很有可能是那个叫都筑的司机告诉他的。

“阿姐，行了吗?没事的话我们就走了。”

“嗯，有事当然有了吧?我还想知道你男朋友的事呢。”

被说到这里，我才意识到自己并没有否定。

“…………不，不是男朋友之类的。”

“嗯?不过脸上写着已经在交往了。”

每次被阳乃逼到跟前，胃里就会有一种异物感。很奇怪。那时的我，应该没有被这样质问过。本来就不懂行动的阳乃，即使放在这条反复的世界线上也完全看不懂未来。

“不，我真的没有交往……”

因为我已经结婚了。但正因为如此，我的态度对雪乃来说太熟悉了。阳乃惊讶地追击着，不知该如何是好。

“再见了。然后呢?你们是从什么时候开始交往的?”

他不断把身体压在我身上的样子，和以前的光景一模一样。但是这次，从阳乃的身上可以看到确信的东西。

“姐姐，你太啰唆了，听我说。”

“嗯。刚交往的时候，会觉得很不好意思，所以想要否定。不过，我是雪乃的姐姐。考虑到将来，我不建议说谎。”

试探的口吻，充满愉悦的声音，不稳定地在耳边回响。……果然还是这个人不好对付。虽然现在多少稳定下来了一些，但我觉得那段时间的她是最棘手的。

“我说，我们去喝杯茶吧，姐姐，你怎么还想知道比企谷的事?”

“适可而止!”

身体受到沉重的冲击，仿佛远处发生了爆炸。

刚才的到底是谁的声音?就在我们无法相信眼前说出的话的时候，附近路过的人也不知发生了什么事，纷纷朝我们这边看过来。过于漂亮的她们，如果被黏糊糊的视线投过来，马上就会失去兴趣似的剥落下去。

就连说话的人雪乃也被她的声音吓了一跳，赶紧捂住了嘴。对于只会平静地表达愤怒的她来说，这可以说是彻底的感情流露。

就连在一起十二年的我，也是第一次看到这样的雪乃。到底是什么让雪乃产生了这样的感情呢?刚才的对话应该也和上次的对话没有太大区别。

“啊…………对不起。姐姐，是不是有点纠缠你了?”

阳乃一定也是第一次看到雪乃吧。在我的记忆中，还是第一次看到阳乃这么狼狈。原来的世界线只是略带歉意地道歉，现在的道歉是真心的。

感觉有什么在一点点改变。对于伴随着负面情绪出现的事实，感到莫名的不安。

“那我们走吧。比企谷，等你真的和雪乃交往了，我们喝茶吧。”

阳乃小姐好像一下子就把刚才的得意态度推到哪里去了似的，开朗地挥挥手说着“再见”。

茶…………别说和阳乃小姐喝茶了，就连盂兰盆节、正月等日子，对她来说，这都是轻而易举的邀约。

“……”

不由得同时叹了口气，互相看着对方。对视的目光立刻被移开，雪乃摇着头，按住太阳穴。

“对不起，突然这么大声说话……”

“不……”

气氛变得很微妙，我们只是盯着地板。

我知道接下来该说什么。

“你姐姐真厉害。”

我说这话的时候比那时更有真实感。

\* \* \*

第二天星期一。

放学后，我早早地走向活动室，雪乃和结衣两个人理所当然地先到了，正等着我。今天是她的生日。

本想在给结衣送生日礼物时给她一个惊喜，但现在的雪乃似乎无法很好地配合，只好作罢。原来的世界线每年都有太多惊喜，最终今年也会有什么吧?，所以也想看看结衣新鲜的反应。

“好吧!”

结衣精神饱满地打开门，今天也像嚎叫一样在活动室里回荡着神秘的问候声。真是令人欣慰的景象。

“很淡。”

“你好。”

把结衣的“干哈洛”用十的话就是三的音量来回答，结衣似乎心情很好地坐到了自己的座位上。说不定是在教室里收到的礼物。

那时结衣还提心吊胆地在活动室外面窥视屋里，这次却没有。露出开朗表情的结衣，在某种意义上是我的救赎。

“由比滨。”

雪乃把书签夹在读着的书里，格外郑重地放在桌上。雪乃从包里取出包装得很干净的东西，清了清嗓子，把它递到结衣面前。

“那个……生日……礼物…………我感觉你一直在照顾我……但我也觉得你在照顾我。”

“雪农……”

她一边辩解着，一边把礼物递过来，结衣紧紧地抱在胸前。虽然没有任何标新造异的卖法，但光是雪乃送礼物这件事就已经足够让她感到惊喜了。

我叹了口气，站了起来，取出藏在后面桌子堆里的礼物。碗这么大的东西到底不能拿到教室去，所以早上就把它藏起来了。

“好，恭喜你。”

“……希基也?”

结衣大概没想过我也会送她吧，她来回看着我和雪乃，两眼一黑。

“你就不能再说句机灵点的话吗?”

“你说的这句话，岂止是机灵，只是泄气而已……”

虽然被雪乃说得一无是处，但结衣还是坚定地接受了我的礼物。结衣实在抱不动了，把那两件礼物放在桌上，就像圣诞节收到玩具的孩子一样两眼放光。

“可以打开吗?”

“请进。”

揭开雪乃送的礼物的包装后，结衣“哦”了一声，当她知道我送的礼物是什么时候，又“哦”了一声，反应更加夸张。

结衣说着穿上了围裙，果然那条粉色的围裙很适合她。

“明天我马上去做点什么!”

“不，等一下，我会在我的管理和监督下进行。”

“嗯……”

面对秒回的雪乃，结衣狠狠地抽了回去。不过，以现在的说明，结衣是无法理解的。

“我借了家政科教室的钥匙，还有做蛋糕的材料也准备好了。”

“……?”

“自己给自己做生日蛋糕也很奇怪……这个碗，你能马上用一下吗?”

“嗯、嗯!”

说完，结衣猛地抱住雪乃，感动得热泪盈眶，笑着对她说。这个复杂的提案，对结衣来说是想都没想过的惊喜。

……很遗憾，我知道这是不可能的。

渐渐的!焦急的敲门声响彻活动室。从活动室外面传来的只有野兽般的嘶鸣声，几乎不像是人类发出的。

“……请。”

雪乃努力冷静地催促他进去，门战战兢兢地打开了，下一瞬间那只野兽冲了过来。

“哇——!八爱蒙!”

真是个不叫人来的好地方。这家伙察言观色，在最佳时机登场，一次都没有。

“你能回去吗?”

变的东西，不变的东西。

如果能一一挑选出来，该有多好啊。

我一边抱着这种不可能的愿望，一边叹了一口气。

感谢您的阅读。

故事有点长，第二集怎么样呢?

随着细微或巨大的变化，他和她的反应也会随之改变。

一边确认与原作的差异一边阅读也是一种乐趣，但我觉得那样会很麻烦，所以我打算单独写，让读者乐在其中。

如果能得到感想和评价(即使是不好的)也会成为鼓励，所以请一定要多多关照!

为了救鹤见留美。上

山滴是俳句中夏天的季语。

很快就放暑假了。我们像上次一样在千叶村的停车场下车，大口呼吸着高原的空气。

“嗯，心情很好。”

结衣尽情地伸了个懒腰，发自内心地说道。

包括今天在内，我将在千叶村度过三天，也就是三天两夜。作为志愿部的活动，这是少有的伴随着住宿的活动，我的感慨也格外强烈。

虽然还没有回到原来的世界线的迹象，但关键很可能在于如何处理千叶村的事情。

“哇，好凉快啊，八幡。”

“哦……是吗?”

乘着高原凉爽的风，新绿的香气扑鼻而来。我学着户冢的样子伸了个懒腰，全身都能感受到清爽的风，仿佛下界的暑热都是假的。

“……肩膀好酸啊。”

“要说对不起…………”

“啊，回去的时候要换座位吗?小町借你肩膀!”

去千叶村的路上，被结衣当作枕头的雪乃怄气了，小町插话附和她。当然，要在千叶村生活，演员还没到齐。

“好了，从这里开始步行，把行李放下来。”

我们在平冢老师的催促下从车上拿东西，一辆面包车带着胎噪开进了停车场。

那辆面包车在我们坐的车附近停了下来，一个熟悉的面孔从里面走了下来。

“啊，引谷。”

“……叶山。”

然后是三浦和海老名，顺便是户部。看来即使放在这个世界线上，这个面子也不会变。如果不是这样的话，那可就麻烦了。

“所有人都到齐了，我们走吧。”

大家跟着精神抖擞地走起来的平冢老师，七嘴八舌地问:“今天为什么聚在一起?”“野营?”“是要留宿的志愿者活动吧?”诸如此类的困惑。

“喂喂……振作点!今后我会让你们在林间学校做后勤工作的。”

“哼，不是可以免费露营吗?”

“我也是听优美子这么说的。”

“从户部到营……是户部?”

“喂……我不是一开始就说明过了吗?”

“……是我干的，…………”

雪乃不理会热闹的四个人，悄悄问走在最前面的平冢医生。

“那个，为什么叶山他们……”

“嗯，因为人手不够，所以我在学校的公告栏上发布了招聘启事，结果他们报出了名字。”

听到这个回答，雪乃的表情并不乐观。这是理所当然的反应。此时对雪乃来说，叶山是因缘际会的对象。

“这也是个好机会，你们最好也学会和其他团体合作。”

对平冢老师的提议，我只能点头。今后很长一段时间，我们都要和麻烦的人纠缠在一起。

走在沉默不语的雪乃身旁，我想起那些熟悉的面孔，一个人沉浸在乡愁中。

\* \* \*

小学生们全体集合的集会结束后，在详细说明之后开始定向运动。

我们在森林中前进，准备在终点送便当和饮料。对我来说，第二次的千叶村终于开始了。

“加油!”

“我在终点等你!”

叶山他们就像善解人意的高中生哥哥姐姐一样，一只手拿着地图给东奔西走的小学生们加油鼓劲。

偶尔沐浴着阳光透过树影，漫步在不像盛夏的舒适道路上。曲线陡峭的道路前方，出现了以前的景象。

“…………”

在小学生集团中也特别显眼的女子五人组。

只有一个少女——鹤见留美脱离了这个森严的圈子，在我的记忆中，她背负着孤独前行。

“请问，这里怎么走才好呢?”

和以前一样，那个小组的女孩子们积极地和叶山搭话。我们一起边走边聊电视、艺人，还有中学的事，和擅长沟通的孩子们聊得很起劲。

“…………”

看到留美比那群人晚了两步，完全不说话，雪乃轻轻地叹了口气。不知道那叹息是针对现在，还是针对过去的自己。

留美一言不发，剩下的四个人也毫不在意。如果介意的话，也只有偶尔回头看她，发出刺耳的窃笑的时候。

我在千叶村要达成的目标大致有三个。其中最重要的是拯救鹤见留美。说什么拯救，连我自己都觉得太傲慢了。

“找到检查点了吗?”

叶山对留美说话的语气比我的记忆温柔得多，也残酷得多。不用说，这是公平性的恶毒手段。

“……不是。”

“这样啊，那大家一起去找吧。名字呢?”

“鹤见、留美……”

“留美吗?我是叶山隼人，请多关照。”

虽然只是这么简单的对话，但四个人的对话完全停止了。

身处集团之中却又排斥他人，这种绝妙的平衡被打破，让人感到不安和紧张。而且是刚才还在尽情聊天的帅哥哥哥带来的。

“……那个，你怎么想?”

我跟叶山他们保持一定距离，走在后面，问走在旁边的雪乃。

“……这是每个小学都有的事吧?”

从一脸痛苦的雪乃的声音里，甚至可以听出一丝厌恶。

“真无聊。”

察言观色，认同或隶属于对方的意见，通过贬低某人来巩固自己的地位，获得短暂的安心感，对扭曲集团的归属感。

其中即使是社会生活中不可缺少的要素，雪乃也毫不在意地说“无聊”。这才是当时的雪乃。

“啊，真无聊。”

我深深点头，表示赞同。

我仰望着天空，走着走着，阳光从树上滴落下来，灼伤了我的眼睛。

“雪下。”

我叫她，雪乃没有回答，而是讶异地看着我的脸。我回头看了看，发现两人之间有一段距离，如果小声说话就听不清对话，于是我把嘴凑到雪乃耳边说。

“帮我吧。”

\* \* \*

到达定向越野的终点后，我们立刻按照分配的工作向各个方向展开工作。

暂时我的工作，或者说男手的主要工作是准备便当。把装在纸箱里的便当一个个从后备箱里拿了下来。但是，这样的工作很快就结束了。

“喂，叶山。”

我瞅准叶山一个人的时候，对他说。也许是我主动跟他打招呼太少见了，他微微挑了挑眉毛，露出爽朗的笑容。

“怎么了?”

“你来这里的时候碰到的那些孩子，不是都在吗?”

“嗯。”

叶山点点头，一副不知道我想说什么的表情。但他似乎从我的表情看出这不是什么好话题。

“休息一下，我听你说。”

说着，叶山用拇指指了指厨房的一端。确实，在这种不知谁会听到的地方，即使比平地凉快，也不是在盛夏的太阳下说的话。

我们走到厨房尽头，在那里的木椅上坐下。用毛巾擦去湿漉漉的汗水，闻到了夏天的气息。

“不是有一个孩子被排除在外了吗?”

“……啊。”

因为是叶山的事，所以才会被排除者这个词所迷惑吧。他稍稍停顿了一下，小心翼翼地点了点头。

“还是不要再跟那孩子说话了。”

“为什么你会这么想?”

叶山努力用平静的声音问我。面对我明确的否定，他竟然没有表现出不耐烦的样子，不得不说这果然是流石叶山。

“北风和太阳。”

即使我拐弯抹角的说法，叶山似乎也有了某种程度的理解。他饶有兴趣地催促我继续说下去。

“我觉得从那种状态跟留美说，只会适得其反。比起这个，你更应该关心剩下的四个人。”

“只是关心你吗?我更……”

“不，你只是想跟留美打声招呼就好了。等他们知道上高中的哥哥姐姐也在关心自己，说不定他们也会顾及面子，和留美正常说话了。这是对自净作用的期待。”

“……确实如此。”

我用叶山喜欢的关键词进行了说明，结果他比我想象的还要顺利地接受了我的意见。这种时候脑子转得快的家伙就得救了。

对我来说，在千叶村留美这件事，心里一直盘了盘。

那时我把反派角色推给叶山他们，让留美周围的人际关系崩溃。结果，留美就这样走在了孤独之路的正中间。

我无法忘记圣诞节活动时看到的留美的样子。虽然最终通过活动融入了周围，但一直以来的孤独并没有消失。

事到如今，我无意说孤独是坏事。能做出这种决定的，只有感到孤独的本人。

但我还是哪里出错了。

\* \* \*

说到露营就不得不提咖喱。说到咖喱，就是香料咖喱。

追求的是姜黄、香菜、小茴香的黄金比例。小豆蔻是必不可少的，茴香也可以多放一些。但是丁香，那家伙不行。那家伙的香味很强烈，而且很有个性……

雪乃很想向大家展示自己在怀孕期间掌握的香料咖喱知识和秘传菜谱，但说到野营的咖喱，基本都是咖喱。

“怎么样，进展顺利吗?”

就是那个五名女子的班。她们正在做晚饭的咖喱，叶山按照我的提议开口了。

四个人顿时沸腾起来，还有一个少女一脸清醒。锅已经上了火，看起来很无聊。

“……就是那种感觉。能行吗?”

我对在一旁看着的雪乃说。如果叶山先开口，应该多少会有参考价值。

“怎么说呢……我没什么自信。”

雪乃一改平时自信满满的态度，看着小学生们的反应，一脸忧郁。这也难怪。叶山离开后，轮到雪乃出场了。那么热闹的集体，即使面对的是小学生，也会产生畏难情绪吧。

但是，这在我这次的作战中具有非常重要的意义。即使不是角色，也必须实行。

“拜托你了。”

过了一会儿，叶山说完了话，离开了那里，四个人叽叽喳喳地聊了一会儿，看向留美。两人窃窃私语，交换着夹杂着轻蔑的微笑。

雪乃“哈”了一声，轻轻叹了口气，向她们走去。雪乃开始行动的同时，我向稍微上坡的地方移动。一是为了看看情况，二是为了等留美。

“有什么困扰的事吗?”

听到雪乃的声音，四个人瞬间停止了交谈，迷迷糊糊地看着她。这也难怪。被帅哥哥哥搭话聊得正起劲，这次又被美女姐姐搭话，简直就像从杂志上出来的模特一样。

其实雪乃在大学的时候，就被经纪公司看中了……拒绝三家事务所的人，我除了雪乃就不认识了。还是我老婆太漂亮了吧?超级喜欢。

“那个，我一直在想要不要加些秘制味的东西。”

解冻后，四个人开始七嘴八舌地和雪乃商量料理的事。

这样一来，她们小组的地位就稳固了。帅哥美女的高中生们也会对你刮目相看，种姓top集团完成了。事实上，其他小组的小学生们也不时地窥视着雪乃他们。

在这热闹的圈子里，有一个人影悄悄溜了出来。和以前一样，留美在离我很近的地方停了下来，把背靠在垃圾堆积场的栅栏上。

“开心吗?”

可能是被我突然这么说吓了一跳，留美瞪大眼睛看了我一眼，马上把视线移回地面。

“你看起来开心吗?”

“不，看不见。”

留美反问道，声音里带着一丝轻视的意味。不可能什么都认真听。只要是能贴近留美内心的对话，什么都可以。

“比企谷八幡。”

我报上姓名后，留美露出和我说话时一样惊讶的表情。一直等着，留美好像也知道对方想要什么。

“……鹤见留美。”

“这就是由比浜。”

结衣看到我和留美在说话，不知发生了什么事，便朝我介绍了她的名字。

“我是由比滨结衣。请多关照，留美。”

“……”

留美静静地点点头，对话就此消失。结衣正想说些什么，我摇了摇头，阻止了她，再次问留美。

“你喜欢一个人吗?”

“没有……但我觉得一个人待着也是没办法的事。”

留美说着，结衣蹲在她旁边。也不是对着留美，只是茫然地看着她的方向。

“能告诉我是怎么回事吗?”

连视线都没有交换就这么说的结衣，以他的态度表明自己并没有要问出来的意图。结衣果然是从这个时候开始结衣的。开朗，有时毫不客气，而且比谁都成熟。

“……之前，我曾经以某个人为中心，不说话。后来，我开始好好说话了，然后又以另一个人为目标。”

说到这里，留美不像小学生，重重地叹了口气。

孤独是好是坏，是由感到孤独的人自己决定的。留美会选择哪一个，这是不用问的。

“我和那个被当作中心的孩子说了很多话，反正就像一股很快就会结束的热潮。……然后就轮到我了，仅此而已。”

仅此而已。如果真的只是这样，她又何必摆出如此悲叹的表情呢?

厨房里传来喧闹的声音，点缀着日常生活。她的声音像巨浪一样变小，结衣小声嘀咕道。

“留美真温柔。”

结衣正确地看着她，微笑着。

那充满哀切的表情，我似乎忘不掉。

\* \* \*

夜幕降临后不久。

我们吃完自己做的咖喱，喝着小町泡的红茶。不用别人说，小町就带头泡红茶，果然是世界的妹妹。

“现在，你们在聊修学旅行那晚的话题吗?”

可能是想起了白天热闹非凡的小学生们吧，叶山像是在讲述一件遥远的事情。

“不要紧吧……”

结衣像是在继承这句话似的，小声地说。我想那应该是针对我的，但对此做出反应的却是平冢医生。

“嗯，有什么心事吗?”

“嗯…………因为有一个学生被孤立了。”

“好可怜啊。”

三浦虽然这么说，但到底有几分是真心还是无法估量。也许她本来就是个母亲，所以也会有一些担心，但她会简单地说，既然已经被抛弃了，那就再去交个新朋友吧。看起来并没有那么重视。

“那么，你们看了之后想怎么做?”

听到平冢医生的问题，大家都陷入了沉默。

在这种场合，会有多少人愿意积极参与留美的问题呢?

那个行动伴随着责任，即便如此也下定决心要救她的人。有如此强烈意愿的人，在这个场合恐怕只有一个。

“我想帮你。”

他那饱含坚定意志的表态，让所有人都看着我。用担心的眼神，或者是在说什么的眼神。

“……”

只有平冢老师对我投来了平静的目光。他抱着胳膊，只是像个老师一样凝神注视。

“你为什么这么想?”

“因为我跟那个学生……鹤见留美说了话，问了她一个人的理由。”

“是吗?……如果不介意的话，能让我听听吗?”

因为这涉及到留美个人的事情，所以让所有人都有一些犹豫。但是，也确实需要在场的人帮忙。

我直截了当地说明了留美现在的处境，大家都噤口不言。想必每个人都在哪里见过，或者有过亲身经历吧。

“那么，那个学生向你求助了吗?”

平冢医生重新抱起胳膊，直直地盯着我。坐在旁边的户冢从旁投来担心的目光。

“不，不过他好像很后悔。”

“……嗯。留美好像有点放弃了。所以她本人也不能要求她帮忙吧……”

结衣补充道，现场再次陷入沉默。只有高原绿色沙沙摩擦的声音，淹没了寂静。

“有人反对比企谷的结论吗?”

平冢医生环视着在场所有人的脸，看他们的反应。幸运的是，似乎没有人对我说的话持否定态度。不，应该说现在的气氛不是很好。

“好，那你们讨论一下应该怎么做。我要睡了。”

平冢医生打了个哈欠，然后离开了。剩下的我们之间再次陷入沉默，小町担心地说。

“哥哥……你说要帮助他，具体考虑什么了吗?”

“嗯。”

我立刻回答，围着桌子的所有人的目光都集中在我身上。我停顿了一下，说明了那个作战计划。

“我跟雪下和叶山说了几句话……我希望你能关心一下留美以外的四个孩子。即使看起来有些偏心也没关系。”

“那有什么效果呢?”

户冢歪着头，坦率地提出疑问。我的解释和对叶山说的一样。

“她们认识到上高中的哥哥姐姐特别关心她们，必然会受到周围人的关注，所以意识到一定要好好做。也许会自然而然地和留美说话。”

“不，不可能的。”

立刻扔掉的是亚西，也就是三浦。嗯，如果是她的话应该会这么说吧。

“觉得这样就可以了，就得意忘形了。”

“嗯……也许会被这么认为。”

“是啊，期待不大吧?”

户部立刻接到三浦的海老名。户部还是户部。

“也许是……不过就算不行，我也有自己的计划。”

当然，他从一开始就没想过用这种小伎俩就能解决问题。在她们所拘泥的状况下，自净作用已经不存在了吧。

“作战计划?”

结衣催促我继续说下去，我闭上了嘴。

“……那是不行的话。上限是明天傍晚。如果还是没有什么改变的话，到时候我再告诉你，希望你能配合我。”

说着，我把手放在膝盖上，深深地鞠了一躬，几乎要靠在桌子上。抬头一看，大家都露出了惊讶的表情。

“我可以问你一个问题吗?”

短暂的沉默之后，出乎意料的是，开口的是海老名。

“引谷你为什么要这么做?”

海老名有疑问是理所当然的。为什么要对刚见面的少女干涉到这种程度，站在一旁看的话，你一定不明白吧。

“因为救了那孩子，就等于救了我。”

在这里，恐怕没有人能想象出我回答的真正含义。他们随意地把我平时的样子和过去和现在联系在一起，露出了各自理解的表情。

“……差不多该回房间了吧?有点冷了。”

叶山似乎忍受不了反复出现的沉默，开口说道。

大家小声地表示同意后，开始收拾桌子。

我为什么要这么做呢?我觉得动机很严重。

一切都是为了自己。只要能消除我的后悔，回到雪乃和我的孩子所等待的那条世界线的可能性微乎其微，我什么都愿意做。

仅此而已。

\* \* \*

回到为了放行李顺路去的平房，我们轮流洗了澡。

换衣服的时候又被户冢看见了，不过那无所谓。

“洗澡水真不错。”

最后洗完澡的户冢一回来就这么说着，一屁股坐在铺好的被褥上。

用毛巾把还有些湿的头发彻底擦干，开始用吹风机吹干头发。洗完澡的户冢，好香啊……

“我已经没事了……”

“啊，那差不多该睡了。”

户冢吹干头发后说道，叶山回答道。被子已经拉好了，稍微收拾一下身边的东西，就可以做好睡觉的准备了。

“啪”的一声关上了老旧的电灯开关，光秃秃的电灯泡陷入了沉默。

“哎呀呀，这好像修学旅行的夜晚吧?”

“啊，也许吧。”

对于户部的兴奋之言，叶山毫不掩饰睡意，敷衍地回答。

“……说说喜欢的人吧。”

“我不要。”

哎呀呀，我轻轻地叹了口气，谁也听不见。果然在这条世界线上，也会成为这个话题吗?只要户部还是户部，就无法改变。

户冢回答说没有，户部也透露了对海老名的在意之后，必然就轮到叶山了。

“隼人呢?”

“我……不，不要这样。”

“啊，那可不行，我都说过了。”

刚才那只是你想说而说的……我一边在心里吐槽，一边等待叶山的回答。一旁的户冢也屏住呼吸，保持沉默。

“不说。”

“不不不，这可不像隼人君的风格，太不公平了。”

“…………”

“只写首字母就行了!”

面对紧咬不放的户部，叶山故意叹了口气。过了一会儿，他平静地说。

“……Y”

“啊? Y……真的?”

“够了吧，睡吧。”

“不不不，引谷你还没听说呢。”

“……是?”

等等……。在我的记忆中，应该没有这样的下坡。

“有吗?我喜欢的孩子。”

“……有点兴趣。”

户部的一句话让叶山乘虚而入，与昏暗中朝这边看过来的户冢四目相对。不，即使被这样看待……

“写首字母就行。”

户部用和刚才一样的劝诱语，想办法引出答案。就算当场说出来，也不会有什么大问题。要是不赶紧睡，我就麻烦了。

“首字母是……Y”

“什么?”

户部惊呼一声，放眼望去，户冢睁大了眼睛。嗯，应该是这样的反应吧。

“难道……是同一个对象?”

“没有。”

“没有。”

我和叶山几乎同时否定了户部的推测。

虽然叶山那边不知道我的情况，但我知道叶山的回答。虽然不知道叶山是用什么立刻否定的，但我可以断言。

“嗯，有很多首字母是Y的。”

户部这么说着，我想起了她们的名字。雪之下雪乃、由比浜结衣、三浦优美子、雪之阳乃——。

还有Yoshiteru Zaimokuza之类的名字，不过说这种话只有海老名会高兴，还是算了。不，连海老名也不高兴……

“好，我说过了。该睡了吧。”

“是啊，真困。”

叶山同意了我的提议，安静的时间终于到来了。

不知道是不是太累了，没过多久，几声鼾声就重叠在了一起。

我当然醒得睡不着，也不打算睡。如果记得那天晚上发生的事，就不可能睡得着。

“…………”

我蹑手蹑脚地走出平房，生怕吵醒正在睡觉的户冢他们。

目标是树林的方向。只要去那里，就能见到和那时一样无处容身的她。

可是到了我记忆中的地方，却不见雪乃的身影。

我以为是我记错了，在周围转了一圈又一圈，却始终找不到那个身影。

喂喂，真的假的……好不容易有了和雪乃独处的机会。而且是集训的晚上，稀有中的稀有。

我不死心，漫无目的地走在养老院的院内。高原的夜晚寒冷刺骨，仿佛季节提前了一个季节。走了很长一段路之后，他才想道，应该把上衣也带来。

不久，占据大部分视线的树木变得稀稀拉拉，传来潺潺的流水声。来到开阔的地方，可以看到河流。还有坐在旁边的两个少女。

原来如此，我自言自语道。

因为我改变了言行，晚饭后三浦和雪乃的争吵没有发生。正因为有了这种变化，回到平房后，他才没有和三浦发生口角。

“……”

“嗯…………啊，希基。”

“比企谷……”

为了不惊动她，我故意发出脚步声靠近她，两人同时回头。

反射着月光的河面上，雪乃和结衣的脸散发出一种静谧之美，让人无法相信这是属于这个世界的东西。那是一种神秘的、难以用任何东西来替代的景象，以至于我觉得破坏了她们的空间的自己是大罪人。

“……这个时间你在干什么?”

“希基，你怎么了?”

“总觉得睡不着……”

找到合适的石头，我也按照她们视线的高度坐下。

“我们也是。”

“是吗?”结衣看着她，雪乃轻轻点头。

“你们在说什么?”

“……恋爱?”

结衣的这句话让我的心脏猛地一跳。听到这句话的雪乃也没有否认。

“男生的房间说了些什么?”

“啊…………差不多吧。”

对于我的回答，结衣只是“嗯”了一声，并没有追问。如果听了能回答的话，这次也不得不说自己的事，也许是理所当然的。

对话就此中断，耳边只有潺潺的流水声。河面在月光的照射下闪闪发光，宛如天上流动的银河。

“比企谷。”

打破长时间沉默的，意外是雪乃。她和我四目相对，确认声音传来后，看着泛着青白色光芒的河面开始说话。

“你真的认为你的方法能解决问题吗?”

“……唉，希望不大啊。”

“那为什么……”

雪乃的声音变得严厉起来，她似乎察觉到了这一点，把话咽了回去。结衣担心地看着他。

“……雪农，以前发生过什么事吗?”

面对小心翼翼的声音，现在的雪乃会怎么回答呢?我咽了一口唾沫，看着她，她结结巴巴地说。

“……以前，发生过一件类似的事。”

雪乃窥视着结衣的眼睛，似乎在确认自己是否可以这么说。她缓慢地摇了摇头，催促我继续说下去。

“那个时候，有人想要帮我，……但是……不行。我更闹别扭了，事情变得莫名其妙地复杂，我什么都做不了。”

对雪乃来说，说出这样的话一定很痛苦。越是想起来就越像是旧伤打开，即使是朋友也不应该希望对方主动去了解。如果对方是结衣的话，尤其。

尽管如此，雪乃还是想用自己的语言，直截了当地告诉结衣。他想把心的一部分让给结衣。

“……对不起。我不想听这种话。”

“不，没那回事。”

结衣用力摇了摇头，用明确的语气说道。他露出的微笑充满了倾慕之情，似乎很开心。

“幸乃能好好跟我说话，我很高兴。怎么，太好了。”

只听“嗖”的一声，结衣的眼睛微微湿润。这光景让我无比安心。她们的友情已经有了确切的形式。

“为了留美，能做的就做吧。而且就算不行，希基也有他的绝招吧?”

“……啊。”

看到我点头，结衣微微歪着头说了声“嗯”，握住了雪乃的手。

“嗯，如果我们能做到的话。”

看到雪乃回握结衣的手，我深深地叹了口气，不让两人听见。

一定没问题了。

看着她们在苍白的月光下互相微笑，我强烈地这么想。

感谢您的阅读。

千叶村篇前篇怎么样?

面向后篇的准备会变成怎样的料理呢?如果能期待的话这就是万幸了。

我把收到的感想一字不漏地读了。谢谢。

为了救鹤见留美。下

来到千叶村的第二天早上。

以前的我总是睡过头，这次当然不可能这么做。几乎是在户冢他们起床的同时醒来，早早地去了客人屋。

一进食堂，令人头痛的声音让人忍不住想捂住耳朵。虽然是大清早，但小学生们的情绪已经接近顶点。今天晚上试胆之前都是自由活动，应该是在商量这个计划吧。

“早餐好像是对方要的。”

走在附近的户冢指着吧台说。早饭是在食堂吃的，所以没有特别分配给我们的工作。

我排着队等着送餐，环视了一圈食堂。雪乃和结衣的身影立刻映入眼帘。她本来就长得很漂亮，很容易被人发现，再加上在小学生群里更容易被发现。

“怎么了，八幡?”

“不……”

我因为太在意雪乃他们而停下脚步，户冢歪着头，脸上浮现出问号。

雪乃和结衣按照约定，和那四个女孩聊了些什么，从她们的笑容中可以看出他们聊得很起劲。雪乃的笑容还有些尴尬，但留美也在那里，看来这也是没办法的事。

正因为了解留美的心情，所以拜托雪乃的事在某种意义上有残酷的一面。即使这是我设定的情节所必需的，我的心还是隐隐作痛。

“八幡，没事吧?”

“嗯……啊，不好意思，我太糊涂了。”

突然向前一看，队伍已经往前走了很久。回过神来才发现，户冢对我的问话，我的回答都是轻浮的。

“睡眠不足吗?”

跟在我后面的叶山爽朗地问道，连一丝睡意都没有。

“嗯，有点。”

“……昨天晚上你去了哪里?”

叶山用户冢听不到的小声音问我。这家伙，我一直在想会不会发生……。

“没什么，因为睡不着，所以去散步了。”

“你散步了好长时间啊。”

我看着叶山的眼睛，他的视线正等着我，想要看穿我的眼睛深处。

“……你想说什么?”

“没什么，只是感想而已。”

呼出一口气，轻轻摇了摇头，和叶山野的对话就此结束。

虽然后来和这家伙有了很长一段时间的交往，但这部分还是无法消除。

像你这种人，一辈子都被阳乃牵着鼻子走吧，笨蛋。

我在心里骂了一句只有我才能理解的脏话，接过装早餐的托盘。

\* \* \*

吃完早饭后，我们的工作全是体力劳动。

为了准备篝火，砍下柴火，堆在平铺上。结束的时候汗流浃背。所以当然要流汗。

“…………”

结衣和小町兴致勃勃地玩水，欢声雷动，水花四溅。我站在昨晚到访的河边，仁王地眺望着这一景象。

我在千叶村要达成的目标大致有三个。其中的第二个。

真想和女高中生雪乃一起玩水!(咚!)

就算不愿意，也不会再看到JK雪乃穿泳装的样子了吧?因为我过去在千叶村生活的时候没有带泳衣，所以根本就没有这个选择。这不是后悔，那还有什么后悔呢?

“咦，大哥哥?”

“哦。”

在小町的招呼下，我穿上换好的凉鞋哗啦哗啦地走进河里。

“你什么时候带泳衣来的?小町准备的时候……”

“不，碰巧放在包里。”

当然，我已经做好了充分的准备，但只要我知道就好了。有一个视线稍稍有些畏缩地看着我。

“……希基，你不适合穿泳衣。”

“多管闲事。”

这么说的结衣……既不是恭维，也不是别的什么，那件泳衣很适合她。

她穿着蓝色比基尼，散发着和那时一样的光芒，瞬间夺去了视线和意识。无论过去还是现在都一样的出众身材，无论过多久都不会习惯。

“…………希基，你看多了。”

说完，结衣藏起身体，转过身去，已经没有任何借口了。由比滨结衣是个很有魅力的女孩，这一点不用多说谁都知道。

我毫不客气地将视线投向河面，轻轻地闭上了眼睛。如果是我的记忆的话，已经差不多了。夹杂在潺潺的流水声中，传来逆水而行的水声。

“比企谷，你忘了和平冢医生的约定了吗?”

听到这个声音，我回头一看，眼前的景象让我倒吸了一口气。

白皙透亮，肌肤娇嫩，溅起水花。平时隐藏在尼海的细长腿暴露在阳光下，看起来比河面还要闪闪发光。突显腰部优美曲线的连体泳衣，比那时更加鲜艳地衬托出她的魅力。

“根据我的建议，你的学校生活的结束时间会被决定吗?”

她那乌黑深邃的长发，在盛夏的阳光下清晰地映照出天使的光环。她争强好胜，就连带着轻蔑的温柔眯起的眼睛也很美。每当血色的嘴唇编织出话语时，那甜美的声音就仿佛融化了我的耳膜。

保守地说。

我太太(JK)的泳装造型，是史上最棒的。

“…………你沉默什么?”

“我什么都不说了……”

我好不容易从穿着泳衣的雪乃身上抬起视线，仰天望去，已经沉醉于完全胜利。从刚才开始就被关在蚊帐外的小町发出“哇”的一声，抽身而退。

在一片不知所云的沉默中，两个人的脚步声向我走来。换上泳装的三浦和海老名一边说着什么，一边从我们所在的河边走过。

“嗬，我赢了……”

和以前一样，三浦在与雪乃擦肩而过时，望着她的胸口，露出得意的笑容。对此，雪乃的脸上还是浮现出问号。

“……你在说什么?”

当时我还安慰她说:“因为你姐姐是那样的。”但是，我知道未来会发生什么事，所以不能说些不负责任的话，让人抱有这样的梦想。

结果还是没怎么长大……我也开心地说:“来个大杯!来个大杯!”我也非常配合，但杯数刚升了一个就停止了。反正我有自信，只要是雪乳，什么样的雪乳都能爱，所以什么问题都没有。雪乳最棒。

“……真的完全没有必要在意。外貌特征并不能决定优劣，如果要决定胜负的话，应该进行相对评价，整体的平衡才是评价对象。应该，所以没有任何问题。”

“………………虽然被贬低得很厉害，但也有一种安慰的感觉。”

雪乃一脸不满，我看向她的视线，或许包含着同情。

嗯，那倒是。这个是这个。

时机到了，演员都到齐了。这样的话，剩下的就是实现我的目标了。

“是吗?”

伴随着一阵傻瓜般的喊叫，我捞起河水往雪乃身上泼水。

“…………”

雪乃的黑发不停地抖动着，眼中闪着火焰。……好啊，雪乃。这种不服输的毅力，我要亲眼见证。

“……做了啊。”

砰的一声，夺去了我的视线。看着从刘海滴落下来的水滴，我露出无畏的笑容宣布战线。

“太天真了，你以为这点小事就会吓到我吗?”

这次用双手撩起水，直接打在雪乃的脸上。一看到从她下巴滴落下来的水珠，我就真切地感到自己的目标之一实现了。

“太棒了!”

随着背后传来的声音，瓢泼大雨倾盆而下。回头一看，结衣脸上浮现出确信会赢的笑容，双手叉腰挺起胸膛。太棒了。

“呵呵呵，希基，你知道现在的情况吗?”

“我虽是兄长，但也不能毫无计策地杀入敌阵……”

小町追随着吐出戏剧台词的结衣。好吧，我来帮你……

“八幡!”

当我摆好战斗阵势，激动的声音传到耳边。正想回头的瞬间，背后突然传来轻微的冲击。

“助你一臂之力。”

回头一看，一个好胜的笑容正对着我。

“结成男子队了吧?”

“户、户冢……”

户冢一定是带着这么漂亮的笑容，带领着网球队的成员们前进的吧。可爱的男孩子，从来没有像今天这样值得信赖过。

“不要!”

感动得快要哭出来的时候，被人从头上泼了一盆水。结衣好像和户冢一起泼了水。

“就算有小彩在，我也不会手软的。”

“后背空空的。”

就在她转向结衣的瞬间，身后传来冷冷的声音，并泼了一盆水。就在她转向雪乃的瞬间，小町一脚踢向河面，脑袋又湿透了。

“哇!”

“呵呵，大哥哥，家丑必须家丑。”

“我什么时候变得丢脸了?”

嗯，小町小姐，开玩笑可厉害啦~

我不停地挥动双手，把沉入河里的双手交叉起来，向雪乃和小町泼水。

“啊……”

雪乃好像没有想到会朝自己这边来，发出了可爱的惨叫。他的眼睛里浮着一团水浇不熄的火焰。

“这……”

“哈哈哈哈，来吧，雪下，我愿意陪你。”

然后视线又被飞沫挡住，开始了吆喝声和冷水的交锋。

再谨慎地说一次吧。

和JK雪乃一起玩水最棒!

\* \* \*

“……”

我淋了将近一个小时的水，身体已经凉了，我才爬到河边。

在挂好衬衫的树下，他发现了不知何时来过的留美。

“八幡，真有人气。”

“哦……”

刚伸手去拿衬衫，就遭到了严厉的指责。是啊，你这么说我也没办法。但是快三十岁的时候被小学生这么一说，就有什么可忍耐的了……

“留美也一起玩吗?”

“没关系，我又没带泳衣。”

留美看着河的方向，轻轻摇了摇头。即使是显而易见的回答，也必须先听一听。

“其他人呢?”

“……吃完早饭回到房间，在我准备出门的时候被丢下了。”

“是吗?”她默默地点头。还是老样子，做些下流的事。人一旦融入集体，就会变得残酷。

“……很痛苦吧?”

“八幡不知道吧?”

留美的声音很冷淡，像是要把她推开。

因为刚才大家还在吵吵闹闹的样子被人看到了，所以被这么说也是没办法的事。

“不，我知道。小学、初中、高中我都是一个人。我可是个孤身一人。”

我半开玩笑地说着，留美终于看了我一眼。那表情当然是连缺口都不相信。

“不过，刚才大家还在一起玩呢。”

“嗯，就像是社团的合宿……在教室里我总是一个人。”

留美的眼睛里还在看着我，但她似乎从我的语气中感觉到我不是在开玩笑。看起来比刚才更认真地听了。

“而且，并不是人多就不会孤独。”

穿上衬衫，把从头发滴落下来的水珠吸进毛巾里。

孤独不仅仅是一种状况，而是一种感受。当然，我现在并没有感觉到，对留美来说，这个解释可能有些难懂。

“……八幡现在是孤独的吗?”

“就现在这个时候来说，好像不太对。”

“我不太明白，太不会解释了。”

“哦……”

这又是一次惨痛的指责。我只是想贴近人们的心情，表达自己的想法，却怎么也传达不出来。

“唉，活着就有孤独的时候，也有不孤独的时候。”

我一边想着自己变得像个谈论人生的大叔，一边继续对留美说。留美的眼里还没有浮现出接受的神色。

“……会有这种时候吗?”

终于听到了发自内心的话，我短暂地叹了口气。

“这是选择的问题。”

是选择孤独，还是选择孤独?其实很单纯，正因为如此，人生这个系统才冷酷无情。

无论什么情况，都是自己选择的结果。

那家伙怎么样啦，发生了这样的事啦，什么借口都没有。这只是选择附带的结果，而不是原因。鹤见留美的状况，无论有怎样的想法，都是她选择的结果。

“留美你喜欢哪个?”

所以再问一次吧。

她明白的回答。

“孤独……还是不要为好。”

现在，鹤见留美做出了选择。

那么，后面跟着的就是结果了。即使前方的等待是残酷的。

\* \* \*

在河边玩水结束后，我们利用晚上之前的时间做试胆的准备。

我、户冢和小町事先勘察并规划了晚上试胆的路线，雪乃和结衣找到了那四个人并取得了联系。这是我的作战计划中重要的角色。

已经超过了我提出的“傍晚”极限，作战计划的内容我已经向包括叶山在内的所有人做了说明。大家的反应依然不太好，但比上次多少好了一些。

“路线已经确认好了，我们已经准备好了。”

“嗯。”

听了叶山的报告，我点了点头，抬头看着已经变成漆黑的天空。时间是晚上七点多。差不多到了试胆的时间了。

这次我拜托叶山他们做完全的幕后工作。作为妖怪角色一边让小学生们吃惊，一边对包括鹤见留美在内的小组进行路线的改变。小町决定出发的顺序，留美他们的小组排在最后，这和以前一样。

“可是，这个策略真的能成功吗?”

“我不是说过了吗?只能期待‘那些孩子的良心’。”

我又用叶山喜欢的关键词搪塞过去，叶山抱着胳膊沉默不语。一副欲言又止的表情，但他并没有多问。

“……那我就回到岗位上去。这边的事情交给我吧。”

“啊，拜托了。”

叶山点了点头，我也像鹦鹉一样深深地点了点头。叶山消失在森林中，起跑会场传来小町的声音。可能是用了扩音器吧，他的声音太有精神了，有点裂开。

“比企谷。”

我侧耳倾听远处传来的悲鸣和笑声，突然有人搭话。回头一看，是换上雪女服装的雪乃。

因为是雪乃，所以是雪女。虽然很便宜，但穿着和服的雪乃也不错。好厉害。

“看来是万事俱备了。”

“嗯……”

雪乃肯定地回答，声音却比平时更没有精神。配上忧郁的表情，仿佛真的雪女就在那里。

“……不安吗?”

“怎么可能?”

听到我担心的话语，他立刻否定，一改往日的好胜表情。有这样女演员的资质，应该没问题吧。

“比和她们正常说话轻松多了。”

“……那又如何?”

我稍微拉了一下，有人在背后叫了一声:“喂!”回头一看，结衣还穿着平时穿的衣服，一边挥手一边朝这边走来。

“嗯，从远处看也很适合。”

“这是在夸我吗?”

雪乃把手放在脸颊上，疑惑地歪着头，结衣肯定地“嗯嗯”地点了点头。

虽然不能看到结衣穿小恶魔服装的样子很遗憾，但这次没办法。如果化装可能会影响作战计划，最好先消除不安因素。

“希基，还有一半就完了。”

“嗯，差不多该准备了。”

“嗯。”

雪乃和结衣配合着呼吸，几乎同时点了点头，以我开始行动为信号，开始往前走。

进入森林后走了一会儿，就到了岔路口。这里是我和结衣的岗位，是第一个关卡。

“再见，幸乃，加油。”

“嗯。”

雪乃点点头，消失在充满黑色的森林深处。在夜色中若隐若现的背影，宛如幽灵般令人毛骨悚然。如果把这种事告诉他本人，他又会噘起嘴来吧。

“终于……”

“……啊。”

结衣的语气里少了往日的开朗。如果知道了今天的作战计划，大概会有这样的反应吧。

口袋里的手机震动了一下，我立刻确认了通知的内容。小町发来了简短的短信:“最后一班出发。”

“留美他们好像已经出发了。”

“嗯。”

互相打了个暗号，交换了一下视线，我沿着原来的路稍微往回走，躲在草丛里。现在叶山他们应该已经改变路线布局，把她们引到这边来了吧。

屏住呼吸等待着，不久，熟悉的声音靠近了。也许是试胆这一非常规的原因，她们的声音都比平时大。所以我很清楚她们离我有多近，有没有从我身边经过。

“留美，这边。”

结衣小声叫了一声，比四个人晚走几步的留美突然抬起头来。结衣和留美四目相对，“嘘”了一声，用食指抵住嘴唇。

“…………”

“过来这边。”

留美惊讶地看着这么说的结衣，一言不发地朝我藏身的草丛走去。

这个任务还是只有结衣能完成。如果我在黑暗中突然跟留美说话，她会尖叫，整个计划就泡汤了……

“……什么?”

来到我身边，留美像是要把心中的违和感倾吐出来，小声问我。但这个问题的答案连我都不知道。

“你看着吧。”

不一会儿，四个人按照叶山他们的路线，走进了死胡同。明明是按照路线来的，却走到了尽头，她们大声地说着既不像是抱怨也不像是骂人的话，仿佛要掩盖心中的不安。

在她们面前，一个人影像幻影一样飘忽不定，仿佛要堵住她们回家的路似的出现。雪乃的表情像雪女一样冰冷，向她们投去冰冷的视线。

“什么嘛，不是雪乃吗?”

“嗯，出场的方式很朴素。再好好吓唬吓唬他吧。”

不知什么时候，她们已经叫她“雪乃”了。但这是她对雪乃敞开心扉的证据。在我的作战计划中，有着非常重要的作用。

我在千叶村要达成的目标大致有三个。其中的第三个。

那就是通过雪乃之手拯救鹤见留美。用她自己的手去拯救她的过去。

“你们到底有什么打算?”

明明是盛夏，零下的声音却凛然响起。她们用两只耳朵听着，仿佛连呼吸都忘记了，说不出话来。

为了拯救鹤见留美，我的作战计划，爱也一如既往地是一还是八。而且概念没有任何改变。我要破坏她们的关系。没有自净作用，腐败的关系只能打破一次。

“留美去哪儿了?”

“……”

雪乃这么一说，她们才注意到。我环视四周，也找不到躲起来的她。

“你为什么排斥她?”

“…………”

太直截了当的问题，没有人能马上回答。

在她们看来，雪乃的言行实在太可怕了。来自憧憬、交心的存在的严厉谴责。一个哑然，一个呆若木鸟，一个因违和感抱着身体，一个眼中浮现出恐惧。

“这么做有什么用?”

没有一个人回答雪乃的问题。

你知道我们什么?

为了不让她们这么说，雪乃从刚来千叶村的时候就开始接触她们。他认识到了被集团排斥的留美，让人觉得他默认了这种状况，但却在背后关注着问题。

“如果留美离开你们的集团，你们当中就会有人成为目标。”

雪乃把残酷的事实推给了她们。对她们来说，这是已经知道的、应该害怕的事情。但我还是无法理解，为什么要继续这样做。

“重复这种事，还能称得上朋友吗?”

“…………”

刺耳的寂静和紧张的空气。

我的做法，终究会随着岁月的流逝而改变。甚至斜下方的方法变成了斜上方。

留美目不转睛地盯着这一连串的对话。被紧握的手在颤抖。我轻轻地把手放在留美的肩膀上，她的颤抖好像稍微平息了一些。

“看看彼此的脸，你们当中有真正称得上朋友的人吗?”

在雪乃的催促下，她们小心翼翼地交换了视线。其中只有一个少女一动不动地盯着地面。

“不是……”

“由香……”

被称为由香的少女望着地面，挤出了声音。留美握着拳头，力气大得几乎要发抖。一直保持沉默的结衣，像我刚才那样把手放在留美的肩膀上。

“没有的事!不是这样的……”

那沉静而强烈的呐喊，究竟是从哪里涌出来的呢?说不定她也像现在的留美一样有过被排斥的经历。

“是、是啊，我们是好朋友。”

“嗯，是这样……是吧?”

她们似乎和由香一致，但其实并没有理解由香的意图。只是因为想要逃避充满压力的现状，所以才会接受这种否定。

由香想说的并不是我们是朋友。她想要否定的是这个扭曲的集团及其心理。

“我去找找。”

“咦…………由香……”

由香跑出去，从雪乃身边穿过，朝原路跑去。之后的事交给叶山他们就好了。我已经拜托他们，如果有孩子脱离小组，就把他引导到终点。

“……你们不去吗?”

由香跑过去的时候，雪乃一直用冷冷的眼神看着她们，现在她的声音更冷了。

“好，走吧。”

“……嗯。”

一个人说完，剩下的两个人也点点头快步离开了。剩下的，只有在夏夜以忧伤的眼神仰望夜色的雪女。

留美对雪乃有什么感觉呢?看似只关心四个人，实际上是拯救自己的救世主，还是可怕的判罪者?

至此，鹤见留美的人际关系开始瓦解。与以前不同的是，那里是否有重新构筑的余地。

“走吧。”

“……”

留美默默点头，结衣靠在她身边，走了出去。

好了，到对答案的时间了。

我下意识地松开握紧的拳头，开始在她们身后两步。

\* \* \*

一次也不相同形状的火焰在广场中心熊熊燃烧。

小学生们围着篝火围成一圈，一个接一个地换着对象，第二天的活动即将落下帷幕。

叉子舞是自由参加的，我看见了坐在圈外说话的留美和由香。剩下的三个人，虽然转了一圈脖子，但还是不见踪影。

“顺利吗?”

“嗯，大概吧。”

雪乃和结衣也不断向她们送去温暖的目光。

在巨大火焰的照射下，由香的表情一会儿像哭，一会儿又像哭又像笑。留美面带微笑点了几下头，编织了一些我根本听不到的话。

——是否顺利?

如果仅凭现在的场面来判断的话，结果应该说是不错的。也不认为所有人都能重新建立起比原来更融洽的关系。

重要的是从现在开始。我们所做的，不过是为了看看能不能成为好朋友而已。

“嗯，不是挺好的吗?”

剩下的三个人也有重新来过的可能性。这种关系的崩溃已经开始了，能不能阻止，不负责任，就看她们了。当然，前提是她们有意。

留美和由香真的能成为朋友吗?我已经只能祈祷了。

但愿能像雪乃和结衣那样。

希望他们是无论过了多少年都无法割舍的羁绊，偶尔碰撞，互相扶持，互相补充，终其一生的挚友。只有这样，我和她才能说得到了救赎。

由香说了句什么，留美又点了点头，握住她的手。

那光景在篝火的火焰照耀下，就像用高键切下的照片一样。

所以一定是太耀眼了。

就在我眨了眨眼的同时，滚烫的水滴从脸颊滚落下来。

“比企谷，你在哭吗?”

“啊……”

我慌忙想用衬衫袖子擦眼泪，雪乃一把抓住我的手臂，用充满意志的强硬制止了我。他从口袋里掏出手帕，像轻轻擦拭伤口一样，温柔地擦拭我的眼泪。

“吓了一跳……你莫非是个好人?”

“哈哈……我也以为是这样。”

“……你发现得太迟了。”

我小声说了声“谢谢”，不由得移开了脸。真是的，这样的部分即使想改变也改变不了。

“也许吧。”

在火红火焰的照耀下，雪乃的脸上浮现出慈爱的微笑。这是我坐上这条世界线以来最温柔的表情，别说不小心，我就彻底爱上了她。

“如果比企谷和我上同一所小学，一定会有很多不同吧。”

“你太看得起我了。”

就算真的变成那样，我也救不了她。肯定不会和她有任何交集，就算认识了，也只是可望而不可及的华彩和路旁的石头，不会发生什么。

“因为是现在的我，所以做到了。”

如果这样就能救鹤见留美的话。

那是因为遇见了你。

我在心里这么嘀咕着，仿佛要把雪乃的微笑印在眼睛里一样，轻轻地闭上了眼睛。

感谢您的阅读。

千叶村编后篇怎么样呢?如果有人能预料到这样的展开，我会很沮丧。

最终毁坏的地方是八幡，在那里留下救济余地的也许是大人的缘故。

下一个故事会是哪个故事呢，请期待等待。

所以比企谷八幡盯着她说。

我家有两只宠物。

比企谷家的爱猫镰仓和由比浜家的爱犬sabre。

从千叶村回来后不久。暑假刚过一半，结衣就把沙袋交给他了。

这本身就经历过一次，过了这么久，怎么也不习惯有沙雷的生活。或者说，每天都有人蹭我的脚，我心里根本没有休息的时间。

对了，这家伙的狗种是什么来着?是迷你腊肠犬吗?……不，是查尔斯国王骑士队吗?绝对不是。

“你每天都不会厌倦的。”

我对吐着舌头坐在我脚边的萨布雷说，他当然没有任何反应。

从千叶村回来后，我的生活和那个夏天几乎一模一样。也就是说，从那以后就没见过雪乃。

和雪乃有这么长时间不见面，那应该是高二夏天以来的第一次吧。所以只有和雪乃见面才能补充的维生素Y不足。再这样下去，我可能会因为维生素Y不足而死。幸乃:我想见你……

我正想着这种娘娘腔的事，突然传来了收到短信的声音。

“还有五分钟就到。”

寄信人上显示的名字是“☆★yui★☆”，正文上写的很短。她马上就要来领萨布雷了。

在平淡无奇的暑假中，有一件事发生了些许变化。邮件记录里有几张结衣旅行时拍的照片，还有几条无聊的留言。

这在我所知道的世界线里是不存在的。虽然也发过几次简短的短信，但没有像这样距离感很近、关系很好的朋友那样互发短信。

正茫然地思考着这到底是怎么回事，门铃叮咚地响了。看来结衣已经到了。

看到屏幕上正在整理发型的结衣，我下到一楼。咔嚓一声把门打开，传来一个爽朗的声音。

“啊呀!希基!”

“……”

听他这么有精神地打招呼，完全不像是刚旅行回来的人，我只是在心里回了一句“哈哈哈”。

“好了，你上来吧。”

“嗯，打扰了。”

这是他第二次来我家……不，好像事故之后他也来过，是第三次吧。大概多少习惯了吧，我觉得他对进家门也不那么抗拒了。

回到起居室，也许是敏锐地嗅到了主人的气味，一开门，sub rey就扑向结衣。

“哦，好久不见~ ~”

萨巴莱哇哇地狂吠着，仿佛在诉说逗留期间发生的事。我一边看着他一边准备麦茶，突然意识到。小町去了哪里?

现在回想起来，好像是在玄关站着说了几句话。虽然不知道是什么契机，但好像和那时有点不一样了。

“啊，这是礼物。”

“哦，谢谢。”

“是。”她连纸袋一起递给我，里面装着好几种礼物。看包装，好像是当地版的经典点心。

“你把我交给你的时候，有没有遇到什么麻烦?”

“唉，要说给你添麻烦的话，应该是镰仓吧。”

萨博来我家，对我影响最大的还是镰仓吧。一见面就会被追来追去，本来应该会搭理我的小町也被抢走了，吃尽了苦头。

我把这事概括地告诉结衣，她哈哈苦笑。

“希基呢?”

“嗯?没什么，我只是觉得出去散步很痛苦而已。”

“比起散步，我更讨厌外出……”

结衣双手拿着装有麦茶的杯子，稍微拉了拉。不，这是理所当然的……在这么热的天气里出去，这不是自杀行为吗?

“不好意思，可能打乱了我的计划。”

“没什么，没什么特别的计划。”

事实上，我暑假没有任何安排。成为社会人之后曾经那么羡慕的一个月以上的长假，一旦被安排了，就会觉得太长了。真是奢侈的烦恼。

“嗯，没有计划……”

结衣的视线落在麦茶的水面上，自言自语道。从她的气氛中，我不由得想象出她接下来要说的话。

“那下次烟花大会，我们一起去吧。”

啊，果然是这样啊。我接受着结衣客气的视线，寻找接下来该说的话。

“我刚才说过，出门很痛苦……”

“就算放暑假，也不能过这种生活。偶尔不晒晒太阳，眼睛真的会坏掉的。”

不，烟花大会是在晚上，所以与太阳光无关……但是，说这种话，只会让那张脸不高兴吧。

“……如果被人看到我们在一起，可能会被议论。”

“你怎么这么说?真恶心。”

我试着用女生的口吻说，却被他爽快地挂断了。如果真的去烟花大会的话，可能会给相模和阳乃小姐加钱，所以那个活动本身就很麻烦。

“就算不喜欢，也觉得人多吧?”

他继续辩解，结衣盯着他，沉默了。责备似的视线慢慢地变了颜色，最后渗出了沮丧的东西。

“……希基不愿意和我一起去?”

被这样问的话，不可能回答“不喜欢”。这种时候结衣的刚强，或者说是女孩子气，无论如何也敌不过她。

“……这是不可能的。”

“嗯……好，那就这么定了。”

结衣站起身，麻利地开始准备带sub - ray回家。结果在这条世界线上，和结衣好像也要去烟花大会。

“那我再联系你。”

“哦。”

送到玄关后，结衣朝空着的那只手挥了挥手。

也许是意识到了离别的时刻吧，我举起一只手目送着“哇”的叫声。

\* \* \*

那天从上午开始，“砰砰”的声音就像空炮一样响个不停。那应该是号炮烟花吧。

到了我和结衣约定的车站，我环视了一下周围。从打扮上看应该和我们是同一个目的地的人们在大厅里快速地来来往往。

“让你久等了。”

伴随着兴奋的声音，身穿浴衣的结衣进入了视野。

结衣穿着和以前一样的淡粉色浴衣，头发也不是平时的丸子头，而是扎成一束。十二年未见的身影让我感慨万千，不由得从上到下仔细端详。

“……你要是看到了，就说点什么吧。”

“……茶色头发和浴衣不合适啊。”

“啊!你怎么能说这么不体贴的话呢?”

结衣似乎对我的回答非常不满，挥舞着手中的红色手提袋，打在我的双手上。手提的不是morningstar。

“啊……”

虽然不怎么疼，但不疼也太无礼了。即使装出双手按住手臂的样子，结衣鼓起的脸颊也丝毫没有萎缩。

“希基，你再不用心一点，就不受女孩子欢迎了。”

“我也不想受欢迎。”

只要有一个人受欢迎就好了。她没有说出自己的真实想法，坐上了发出巨大声响的电车。

车厢里挤满了拿着休闲座椅和遮阳伞的人，拥挤不堪。我们乘坐的电车开始缓缓行驶，结衣突然问道。

“对了，你和希基有联系吗?”

“不……从千叶村回来后，我还问他暑假里还有没有社团活动呢。”

遗憾的是，非常遗憾的是，这是事实，我和雪乃只往来过这一封。而且回信只有“没有”三个字。之后我握紧手机一个小时，也没有收到后续消息，我哭了一下。

不过，结衣似乎对我的回答有想法，手撑着下巴，表情有些严峻。

“是吗……我也发过几次短信，但电话总是接不上，短信也回复得很慢。”

实际上，他和我的邮件回复也花了一天多的时间。

如果有什么能想到的，那就是雪下之家的隔离。或者，真的因为家里的事情很忙。一般来说应该是后者，但有可能是前者，这正是雪之下家的可怕之处。

“嗯，家里有很多事吧。”

从千叶村回来的那天，雪乃和那时一样，坐着家里的出租汽车被带走。虽然很想远离结衣，却无法控制到那种程度。

“嗯……”

结衣回答后，轻轻叹了口气。

看到那辆车，结衣在想什么呢?结衣一言不发，就算偷看他的侧脸，也不可能发现。

电车滑进目的地车站后，和人潮一起下到月台。就这样随着队伍往前走，不一会儿就到了烟花大会的会场。每当与使用其他交通工具的人汇合时，人口密度就会上升。

“好多人啊。”

平时走路时觉得很宽敞的人行道，现在这么拥挤，连走路都困难。走在旁边的结衣，被逐渐增多的各色摊位吸引住了目光。

离烟花开始还有一个多小时。看来又要像那时一样逛路边摊打发时间了。

“还有时间，怎么办?”

“……要不要去看看路边摊?”

“嗯，是啊。”

虽然现在也有占地方的选择，但不吃人饭就无法生存。这次虽然没有买小町想要的东西回家的任务，但不吃不喝也很严格吧。

“啊，你看，那个棉花糖……”

“由比浜。”

但不可能什么都一样。再这样下去，恐怕会遇到相模南，结衣又会成为不礼貌的嘲笑对象。无论如何都想避免那个。

“不好意思，我想从这边看，可以吗?”

“啊，嗯……好啊。”

结衣指了指正对着他看的那排摊子，他似乎没有什么异议，很爽快地接受了。他的表情似乎还残留着些许疑问，但即使有些牵强，也是不得已的吧。

“喂，吃什么?”

“首先是脱模。”

“不是食物?”

“不，那也是要吃的。”

这种漫不经心的对话，结衣似乎也很开心。

但愿她能一直这样笑着。

但那是无法实现的愿望。这一点我最清楚、最清楚。

\* \* \*

开始在路边摊转了一段时间后。

我和结衣在路边咕嘟咕嘟地吃着苹果糖，耳边传来熟悉的嘶哑声音。

“啊!不是结衣和引谷吗?喂!”

说着举手的是户部，旁边还有叶山。他一只手拿着一个塑料袋，好像是在路边摊买的，应该和我一样，正在准备放烟花前的食物。

“啊，别……隼人君。在这种地方真巧啊。哎!”

结衣和户部互相击掌致意，叶山眯起眼睛，仿佛看到了令人欣慰的景象。她的视线一下子移向我，眼前浮现的东西瞬间从慈爱变成了兴趣。

“呀!”

“……”

原来如此，他心中自言自语道。不去见相模，也就意味着有可能遇到当时未曾见过的人。

“只有户部和我两个人，真是少见啊。”

“不，大冈和大和也在，他们帮我占地方。”

说着，叶山轻轻拿起塑料袋。包括他们的部分在内，好像正在采购中。

“你在约会吗?”

“不是这样的。”

我立刻否定了，不过怎么看都是约会吧。但即使这种否定没有意义，也必须先用语言表达出来。

不过，这种状况或许是个难得的机会。我发现结衣和户部的话题聊得正起兴，便换了话题跟叶山。

“对了，我有件事想问你……”

我压低声音说，叶山用怀疑的眼神看着我。

“你知道雪下在暑假期间都做些什么吗?”

面对我直截了当又唐突的问题，叶山像是说不出话似的眨了眨眼。但那只是一瞬间的事，得到的回答很冷淡。

“如果是这样的话，直接问他本人不就好了吗?”

“真不巧，私人联系是被禁止的。”

“……到底怎样才能变成那样?”

我来问吧。用谁也听不见的声音喃喃自语。这类话题过于敏感、多用途，叶山的反应不太好。

“我可能听雪下小姐说了，我也不是经常联系的关系，所以最近发生的事我完全不知道。”

“过去的事你知道吗?往年怎么样?”

“就算知道也不能说，因为是私事。”

“……是这样啊。”

“那当然了。”他耸了耸肩，再问下去就没有意义了。

我看了看结衣，好像和户部的谈话也刚刚结束。

“差不多该走了。”

“啊……”

叶山这么回答，手撑着下巴，一脸沉思。就这样放着也不舒服，就等着他继续说下去，结衣用听不见的微弱声音说。

“我觉得两者缺一不可是不好的。”

“……所以我才说不是这样的吧?”

哪一个是，那已经决定了。

已经到了无可救药、无法挽回的地步。

\* \* \*

距离烟花燃放还有很长一段时间，观赏区已经人山人海。

这里当然没有空长椅，最显眼的地方已经铺上了休闲座椅和大型蓝色座椅，没有两个人可以滑进去的空间。

“那怎么办呢?”

结衣穿着浴衣，直接坐在草坪上不太好。话虽如此，想站着看，可观赏区的通道却连停留都很难。

但是，这种事是明摆着的。

“也许没留下什么好地方，但我带了休闲座椅。”

我指着挂在挂衣架上的小皮包，结衣一脸茫然。

“意外……啊，没有。我一直觉得希基这个人很值得依赖。”

“……谢谢你这么微妙的关心。”

这也好，那也好，都是因为知道会变成这样，所以做好了准备。更重要的是，就这样摇摇晃晃地接近收费观赏区，碰到阳乃小姐也不舒服。回去的时候又会看到雪下家的车，触及一直回避的事故话题吧。

“这里可以吗?”

“嗯。”

在草坪区星星点点的树下找了个空着的地方，铺上了总算能坐两个人的小小的休闲座椅。不凑巧的是，抬头仰望天空，枝叶似乎有点妨碍烟火，不过能坐就好了。

我们坐下没多久，会场开始播放烟花大会开始的广播。然后，当火球在天空中划出一条细线时，光芒就会炸裂。在欢呼声中，又一颗，又一颗，烟花接连不断地燃放。

“哦~ ~”

结衣也小心翼翼地欢呼着，在胸前轻轻拍了拍手。结衣真的是，每一个动作都像个女孩子。

光环越变越大，会场的欢呼声越响，远处传来一声跑调的“太棒了”。

她的眼睛里映出五颜六色的烟花，侧脸美妙极了。

如果，我喜欢的是结衣的话。

我和她会迎来怎样的未来呢?我想我一定会依赖她的温柔，让她痛苦和伤害。也可能是我为了她而努力改变，才能一直看到她的笑容。

但这种想象毫无意义。我可以根据感情选择谁，但不能选择喜欢谁。

“喂，希基。”

或许是看得入神，连眨眼都忘了，结衣湿润的眼睛里闭着烟花说道。

“谢谢你救了我。”

听到这句话，我连呼吸都忘了，盯着结衣的脸。

结果，说这个话题是不可避免的吗?那么回避的事故的话题，被结衣说了也无法回避。

“入学典礼那天，你不是为了救狗而受伤了吗?那只狗就是sabret。”

“……啊。”

“啊，我还是听小町说过不惊讶的。”

看到我点了点头，结衣又抬头看烟花。噼里啪啦、噼里啪啦，光线和声音倾泻而下。

“所以从那时候开始，我就知道希基的事了。”

事情并不遥远，结衣的声音却像是在怀念遥远的过去。从他的表情可以看出，他花了那么长时间才跟我说这件事。

“没去探病真是抱歉。要是问一下小町的住院地址就好了……她说不用这么做，我就没去。”

看到结衣正对着我低头行礼的样子，不知为何甚至有一种罪恶感。如果不是我拙劣地回避事故的话题，应该也没必要这样。

“不……这没什么好道歉的。这是我自作主张的。”

事实上那是我自作主张做的事，没必要向任何人道歉。明明没想过要是不救她就好了，但被结衣这么一说，她感到很憋闷。

“嗯…………不过，因为她住院了，所以在最重要的时期都不在学校吧?希基总是一个人，是我的错吗?我还是想道歉。”

也有当时离开领子的是自己的悔恨吧。结衣的表情还没有放晴，不知何时已经不再抬头看烟花，而是低着头。

“你在在意什么?……我之所以这么孤独，就是因为我的性格。如果我本来就有社交能力，上二年级的时候应该就能交到朋友了。”

这是不知何时的重复。如果他执意要登门拜访，或许这是必要的沟通。

至少结衣心里一直有一种疙瘩，吐露出来是必要的过程吧。明明是为了不伤害她才这么做的，不知何时却因此而痛苦不堪。这么一想，我就觉得自己是个彻头彻脑的伪善者。

“希基真温柔。”

配合着天空洒落下来的稀疏光线，柔和的声音在耳畔震颤。

不知何时，我低下了头，当我抬起头时，看到我的视线仿佛要将我的内心深处拨开。

“所以呢?”

我知道她的表情。

他的声音里充满了热情，有些焦躁。每次编织语言时，嘴唇就会紧闭。

“希基，我啊。”

忽明忽暗的天空无数次照亮结衣的脸。一不留神就会被吸进去的那双眼睛，让我的心颤抖。

“我……”

不行。

我强烈地这样想。即使这是残酷的欺骗，也不能让她说下去。

“由比浜。”

为了打断结衣的话，我叫了他的名字。她的肩膀微微晃了一下。

“嗯……是什么?”

“我也有件事必须跟你说。”

真是的，竟然在这种时候说。谈不上体贴，这是最差劲的时机。

尽管如此，总有一天还是得说出来。无论我重复多少次青春时代，都是不变的感情。随之而来的是残酷的请求。

“我喜欢雪下的事。”

我用一不留神就会移开的视线看着结衣，只是明确地说。

结衣睁大眼睛的表情是纯粹的惊讶，那么接下来又会浮现出怎样的表情呢?

说实话，一想到又会伤害我，我就不想看。尽管如此，我还是盯着结衣，像是在告诫自己。

“我并不是想要你支持我……只是想让你知道吗?”

“嗯……”

“从那以后，我可能很难再和那家伙取得联系…………等新学期开始的时候，我希望你能和我在一起。因为我觉得雪下需要由比浜。”

“……这是什么?就算你不拜托我，我也会和你在一起的。”

结衣说着，脸上贴着的微笑下是悲壮还是哀伤。看着他的表情，我的心脏就像被针扎了一样痛。

我又对她的温柔撒娇了。连悲伤都要隐藏的她的坚强，拯救了我。

“谢谢。”

所以我盯着结衣的眼睛说。

不久前在千叶村的那个晚上。我想起她们在河边交谈的样子。

我带着确信和祈祷，慢慢低下头，相信她们一定没问题。

\* \* \*

暑假结束的第一天。

好久没走在上学路上了，学校越近，几个人结伴而行的小团体就越显眼。大家都在谈论暑假期间发生的事情吧。那声音比暑假前还要响亮。

在原来的世界线上，我是怀着怎样的心情看到这样的景象的呢?暑假结束后的绝望感和倦怠感让我驼着背去上学。

“早上好!”

在电梯门口换鞋时，上臂感到轻微的冲击。顺着声音传来的方向看去，结衣肩上的包轻轻地撞了过来。

“哦，早上好。”

她说话的方式、声音和表情都和往常一样，令人扫兴。明明可以变得更尴尬，或者躲避也不奇怪。

“不知道为什么，虽然不是好久不见，却感觉好久不见了。”

“……是这样啊。”

自从烟花大会那天以来，结衣几乎每天都来，但他再也没有发过一条短信。

在这种状况下，她很懊恼该以怎样的表情和结衣见面，但她很干脆地突破了这个问题。结衣果然是我所知道的结衣。像我这样的人，作为一个人博大，他的怀抱深深的温暖。

“喂，今天开始有社团活动吗?”

“这个嘛，直接问问就知道了。”

说着，我和结衣比邻而行。不久，我走上通往教室的楼梯，和以前一样抬头望着他的身影。

大玻璃窗透进来的阳光还残留着夏日的凛冽。在阳光的照射下，雪之下雪乃的身体里弥漫着一种任何人都无法靠近的空气。

“哎呀，好久不见。”

走到楼梯平台时，她似乎在视野的尽头发现了我们。背负着光环般的阳光，脸上浮现出稍不留神就会被迷住的微笑。或者说，完全看得入迷了。

“雪野~ !”

还没等我说什么，结衣就飞快地爬上楼梯，顺势抱住了雪乃。我被眼前的景象吓得浑身僵硬，一步一步坚定地走上楼梯。

“…………请不要在这种地方抱我。”

“可是，真是的!”

或许是见到雪乃太高兴了吧，她的责难也丝毫没有影响，结衣抱着她不肯离开。那景象十分耀眼。

“……今天开始吗?社团活动?”

“嗯……我是这么打算的。”

“知道了，回头见。”

“喂，希基，不要放着我!”

我超过雪乃他们开始爬楼梯，结衣一边抱怨一边追了上来。

“雪乃，放学后见。”

“嗯，待会儿再……”

转身走开的我，不可能知道她在说这句话的同时露出了怎样的表情。

回头一看，一定能看见吧。但我没有回头。

为了不后悔决定性地改变了的事。只为了面向前方，面对她们。

感谢您的阅读。

烟花大会篇，或者说结衣篇怎么样呢?

对结衣的态度是对是错，恐怕连八幡都是迷惘的答案，我想这是一个没有正确答案的问题。

我所在的原作中，结衣也是重要的登场人物，这个故事也一样。

我想不仅是雪乃的态度，结衣的反应的变化也请注视的话会更享受。

那么，下一话见。有什么感想等着您。

已经不需要雪之下雪乃的悲壮了。上

九月是台风的季节。

千叶也不例外，昨晚遭受了猛烈的风雨。也许是暴雨冲刷了空气中的尘埃，从教室的窗户望出去的天空真是秋高气爽。

但现在连天空的蓝都令人生厌。整晚卷帘门都在哆哆嗦嗦地晃动，导致睡眠严重不足。

“八幡，你好像很困。”

我打了个哈欠，户冢苦笑着说。说实话，我很困。困得想直接去保健室装病睡觉。

但这是不可能的。不管怎么说，下一个漫长的班会，是决定文化节的工作。由谁来担任执行委员，由此决定。

“啊，台风的声音太吵了。”

“确实很厉害。”

为了打断这种无聊的对话，门铃响了。以此为信号，七零八落的同学们就像玩益智游戏一样，纷纷回到了各自的位置。

“好，现在开始长时间的聚会。今天的内容是决定文化节的工作。”

戴眼镜的课长等教室里的吵闹声平息后，客气地说了起来。教室里完全被静寂包围，在他看来，这是相当难以隔断的空气。从现在开始，大家就会用各自的手段把麻烦的任务推给对方，这也难怪。

“首先是文化节执行委员，有人说可以做吗?”

没有一个人回答他的问题。这也是理所当然的。

一旦成为执行委员，在班上的角色就会被免除，但也就很难再参与那个节目了。也就是说，在高中时代最受欢迎的文化节时期，要离开班级。越是想歌颂青春的人，越想回避这个角色吧。

“咦?有人吗?”

是的，一般人都想避开这条路。但也有人从中发现了好处。恐怕这里面只有一个人。

我挺直腰杆，默默地举起右手。

“啊，那就和比企谷。”

班长在黑板上写下“文化节执行委员男子比企谷”的同时，教室里的视线都集中到了我身上。不认识我的他们漠不关心，认识我的她们和他们则满脸惊讶。

“还有其他候选人吗?”

我觉得这样的行为完全不像自己。尽管如此，我还是相信为了实现应该实现的目的是必要的。

成为文化祭执行委员，通过这个活动和雪乃有了关系。这是迎接文化节最重要的任务。

“那么，好像谁都不在，文化节执行委员的男生就叫比企谷，可以吗?”

没有人回答。房间长理解了他的沉默，在黑板上写的“男子”旁边写了“女子”。

接下来是女执行委员的选举，接下来是我所知道的事情。

结衣问他那份工作辛苦不辛苦，三浦以他打算叫自己来挽留他。叶山推举的相模以非常郁闷的态度，担任了执行委员。

如果说有什么不同的话，那就是对执行委员的工作感兴趣的结衣没有被相模揶揄。好像是避开了烟花大会上的遭遇，奏效了。

只要确定了谁都不喜欢的角色，接下来就快了。看着板书上一个接一个的名字，我畅想着即将展开的未来。

\* \* \*

“希基，那是怎么回事?”

“那就不知道了，是一时说不出话来的叔叔阿姨吗?”

放学后，结衣难得地在教室里跟我说话。嗯，对结衣来说可能是莫名其妙，所以这么说也是理所当然的。

“真是的!执行委员的话你懂了吧?”

“啊……嗯，就是那个。留在班里也没有立足之地。”

我说了为了被质问时准备好的借口，但结衣还没有接受。应该说，他脸上写着‘不满意’，而且毫不掩饰。

“我倒觉得没那回事。”

她那别扭的态度和现在的结衣实在是太般配了。这是我和雪乃经常用的表情。

“……要去社团活动吗?我马上就要去执行委员会了，我去那里。”

“没有。幸乃说今天因为文化节的事来不了，所以没有社团活动。”

“是吗?”

既然如此，能不能联系我一下呢?我知道你的联系方式…………正这样想着，口袋里的手机震动了。

打开画面一看，是雪乃发来的短信，上面只写着“因为有文化节相关的聚会，所以今天的社团活动中止”。这是临时的业务联络。不过结婚后，她也曾寄来过“今天晚饭要吃咖喱，所以中午不要吃咖喱”之类的话，也许是比较单纯的文字吧。即便如此，午饭吃咖喱的话，晚饭也会变成咖喱的比例也是异常的。

“那我差不多该走了。”

“啊，嗯，加油。”

结衣在胸前轻轻挥手，我点了点头，离开了教室。去的地方是文化节执行委员会的召开场所——会议室。

这里平时似乎是职员会议的场所，接近这里的学生并不多。在走廊上汇合的稀稀拉拉的人流，就这样被吸进了会议室。

一走进会议室，就看到了相模的身影。她和以前一样，像是遇到了原来的熟人，聊得很起劲。

我随便找了个座位坐下，呆呆地望着门。她差不多该来了。

“…………”

就这样一直看着门，一个少女走进了会议室。那一瞬间，嘈杂的对话完全停止了。

雪之下雪乃环视了一圈会议室，和我四目相对的时候，把手放在脸颊上，微微歪着头。他的表情好像在问比企谷为什么会在这里。

那个可爱的动作和视线的前方涌上的是男生们。“你刚才看到我了吗?”多么期待的心情让我怦然心动。不，怎么想都是我吧。话说回来，你可别老是盯着人家的老婆看啊，我知道你很可爱。

雪乃完全无视这种缠绕的视线和气氛，坐在了手边的座位上。以此为信号，会议室内又开始了一波又一波的对话。

果然在这么多人在场的场合，雪乃的异质或者说是特别还是很明显的。在毫无条理的混乱中，雪乃从外表到气氛都显得过于整齐，无论从好的方面还是不好的方面来说，都很引人注目。

“好，现在开始举行文化节执行委员会。”

发出这句话的，是几乎准时到来的学生会长城巡。向学生会成员发出信号后，有几个学生开始分发教材，比她们晚一步进来的平冢老师和体育老师厚木挽着胳膊静观其变。

不，即便如此，好久没和前辈见面了。前辈毕业后，我们几乎没有见过面，比起“哇……”的感想，怀念的感情更强烈。

呜呼……还想再来一次。还想被人轻蔑地说:“你真是差生……”

我一边想着这种蠢事，一边眼睁睁地看着反复出现的景象。

\* \* \*

距离文化节还有一个月。

今天放学后还有执行委员会，下午四点开始。为了打发这段时间，两人来到活动室，聊起文化节准备期间的社团活动时，有人敲了敲门。如果按照记忆的发展，我知道今天客人的名字。

“请进。”

雪乃用和往常一样冷静的声音，允许来访者进入。咔嚓一声，拉门被打开了。

“失礼了。”

打开门的学生名叫相模南。

另外，作为执行委员的两个女学生也和那时一样。一番客套话后，相模立刻进入正题。

“雪下你也在，我想你应该知道，我们是执行委员长吧?说实话，我也不知道该做什么，希望你能帮帮我。”

她面带轻佻的笑容，轻率地说。

当然，相模南没有任何变化。被吹捧着当上了执行委员，还就任了执行委员长。

如果可能的话，我想让雪乃担任执行委员长。也许在阳乃看来，雪乃是在追着姐姐的背影走，但作为执行负责人，雪乃能够运用人力、物力、财力等资源来运营文化祭这一事业，作为经验来说是无比珍贵的。既可以帮助她得到婆婆——雪乃的母亲的认可，也不用为相模的失败善后。

“也就是说，我只要辅佐你就行了吗?”

“对对。”

但现实并非如此简单。几句对话后，雪乃这样问相模。

在那个实行委员会的场合，推举雪乃为实行委员长实在是太没有可行性了。即使体育老师厚木劝雪乃当执行委员长，她也坚决拒绝。遗憾的是，现在的事文化节上的事还在继续走规定的路线。

“那就没关系了。我也是执行委员，只要不脱离这个范畴，我就会帮忙。

“真的?︎谢谢你，帮了我大忙。”

我半睁着眼睛看着高兴得放手的相模。

再这样下去，她会犯下严重的判断失误，导致雪乃因过度疲劳而病倒。在正式比赛中，很多人都会因为令人瞠目结舌的失败和随之而来的行动而卷入其中。

绝对不会让他这么做。

那时我支持雪乃的孤高。我觉得他有同感，甚至很憧憬。但是，这个结果却让雪乃知道了自己体力的极限。

这种错误已经不需要了。我知道，在她们不知道的未来，雪乃被好邻居眷顾，在他们的中心笑着。即使她凭借自己的才能达到那个地步，也不能忽视她的错误。

“那就拜托了。”

说完，相模带着不知道该不该说是朋友的两个人，离开了服务部的活动室。

剩下的是满面笑容的相模，与他截然相反的结衣和看起来有些疲惫的雪乃。只有顺便变成地藏的我。

“……社团活动不是要中断吗?”

追问的语气和声音里没有任何颜色。雪乃注意到结衣一反常态的语气，猛地抬起头，她也模仿结衣的表情，浮现出一种冷漠的表情。

“这是我个人的事，和社团活动无关。”

“不，不是的。因为沙加民是在这个活动室来的，他们是来委托服务部的。”

结衣紧紧咬住不放，我感到强烈的违和感和恐惧。

并不觉得她不像结衣。不过据我所知，结衣会有这样的自我主张，还要再往后。那应该是在关系闹僵之后。

“所以，我也来帮忙。”

“……由比滨同学也有班里的责任吧?我一个人就足够了。”

“如果是班上的人就没问题了，不会一直挂在我身上的。而且，我做得还不够。”

结衣语气变弱，眼神柔和起来。她的表情没有了刚才的刺骨，就像被夜露浸湿的花朵般静静地微笑着。

“绝对不可能一个人就够了。”

带着哲学意味的话语，让雪乃的表情发生了变化。不知不觉间，雪乃的表情也不再那么严肃了。

“……我明白了。不过请优先班上的人。我只在有空的时候帮你。这样可以吗?”

“……嗯!”

说着，结衣猛地抱住了雪乃。

看着这样的两个人，我终于想到了。

烟花大会那天，我和结衣的约定。结衣的言行，不就是我“希望你和雪乃在一起”的请求吗?

“差不多该走了，文实。”

真是的，不管什么时候，不管在哪里，结衣总是照顾我。我一边听着背后重复的回答，一边打开通往走廊的门。

“那我回班级了，有空的话联系你。”

“嗯，不过最近也没有什么需要我帮忙的。如果有什么需要我帮忙的地方，我会主动联系你。”

“我知道了，再见。”

结衣向她挥手道别后，她和雪乃两人向会议室走去。

“对吧?”

我的视线依然在前方，雪乃在视野的一端惊讶地歪着头。说这种话，肯定会被疏远，但必须说出来。

“你可别太靠前了。相模虽然不是那种能干的人，但他毕竟是委员长。”

“哎呀，你在对谁说呢?”

说着，她脸上浮现出好胜的笑容，和雪乃很相称。

不是给他抓鱼，而是教他抓鱼的方法。这应该是服务部的基本理念。

“比企谷。”

快到会议室时，雪乃突然停下脚步。那张脸上已经没有了刚才争强好胜的笑容，取而代之的是一丝不安。

“那个……比企谷也是吗?”

“什么?”

不明白提问的意图，不由得傻乎乎地回答。这孩子到底想说什么呢?

“比企谷也会帮忙吗?”

“啊……”

她红着脸，不仔细看根本看不出来，也许是不好意思，她抬眼看着问道。久违的稚气和让人庇护欲全开的可爱让人头晕目眩。

说实话，我很想抱紧她。直到她抱怨“好难受”为止，我都想抱着她，使劲地嗅着她的脖颈，让她的嗅觉和触觉都充满雪乃……

不能做吗?不行啊。嗯，我知道。

“嗯，尽量吧。”

想到这里，我的脑海中就浮现出了开除校外学生的愿望，但我还是决定这么回答。

\* \* \*

雪之下雪乃就任副执行委员一事，是几天后的事了。

之后又召开了几次执行委员会，每次都增加了雪乃的存在感。一开始，雪乃就按照我的忠告，想让相模当委员长，但没能如愿。因为相模南没有领导的才能。

这件事本身就很清楚。大多数人都不想当领导，也有很多人没有这种才能。相模也是其中之一。

所以我并没有抱太大的期待，但确实，火种已经开始燃烧了。相模想要满足被认可的欲望、找回自尊心的想法，在这条世界线上也摇摇欲坠。

和上次一样。

大家一起跳着谁也救不了、谁也救不了的舞蹈。

“发生什么事了吗?”

说这话的是叶山，接话的是站在会议室前面偷窥里面情况的一个女学生。

叶山说要去取志愿团体的报名表，他和叶山一起去的前方，有几个学生堵住了入口，往里面窥视。

“嗯……”

她含糊不清地说着话，没有条理，只知道自己不太明白。当然，我并不想听他说完。如果错过了干涉的时机，就无法挽回了。

“对不起。”

我一边用手划着刀，一边走进围在门口的学生们，砰的一声，门打开了。

在事件现场的会议室中央，雪乃、学长和阳乃的身影。这三个人……更重要的是雪乃和阳乃的缠绵缠绵，让人感到一种电般麻痹的紧张感，所有人都默默地注视着事态的发展。

“姐姐，你来干什么?”

“讨厌啊!我可是收到了志愿者团体的邀请呢!”

“五、对不起。是我叫你的。上次在街上巧遇……”

面对雪乃的诘问，阳乃小姐干脆地用愤怒来形容。前辈的跟进话语，雪乃也几乎听不进去。

“啊，是比企谷。哈哈!”

“……”

“啊，隼人也在。”

阳乃把我们叫了过来，我们一边回答一边走进会议室。总算赶上了。

我只是静静地看着之后发生的事情。

阳乃说，作为有志团体，将管弦乐团OG集合在一起演出。她用试探的视线和语言牵制了姗姗来迟的相模，然后成功地引进了他。只要演员凑齐了，就能演出这么精彩的节目，完全按照记忆展开。

“各位，可以过来一下吗?”

雪下姐妹的争执结束后，会议室恢复了往日的景象，相模叫了起来。站起身来的她，引来无数目光。

“我想了一下，文实也应该好好享受文化节才对。”

这种说法好像在哪里听过，我一个人感到扫兴。

文化祭上的错误就在这里。

相模南做出了决定性的误判。疏忽大意和天真的想法导致文化节执行委员会崩溃。

从这一天开始，执行委员就陷入人员不足的困境，负担都落在剩下的成员身上。其中一个倒下了，但还是想站起来。但是支持那种悲壮和孤高的我，已经不在了。

“我觉得要好好享受文化节，班级也很重要。日程也提前了很多，稍微放慢工作节奏，怎么样?”

就在雪乃开口回答相模的提议之前。我提高声音，明确地说了一句话。

“我反对。”

原本安静的会议室被刺耳的沉默所包围。寂静得连用笔的声音都听得见。为了掩盖这一切，我继续说道。

“如果提前的话，就应该直接跑到正式演出为止吧。这种活动中途会有意外或者横刀闯入而迟到，很辛苦的。所以在活动开始之前就说这个没有那个没有，手忙脚乱。为了防止这种情况，应该保持现在的进展。”

也许是来自意想不到的地方的反对意见，不只是相模，连雪乃和阳乃都瞪大了眼睛。

当时的我并不知道相模误判的原因。不，好像连想都没想过。虽说因为阳乃小姐的喜欢而放松了警惕，但在不自然的状况下的错误认识和错误判断。

从目的论来说，这样做对相模来说是有目的的。也就是说，以提前进行为理由，让自己参加班级的节目。这是在文化节实行委员会上取得共识这一冠冕堂皇的理由。

太愚蠢了。雪乃就是因为那些东西才倒下的吗?

“可是，大家也都想参加班里的……”

“你当上执行委员的时候就已经知道很难在班级里露脸了。如果想为班级做贡献，在文实课开始之前就可以了，文实课也不是每天都有。”

越是意志薄弱的人，越会听从相模的花言巧语。而且还会接受那些高声主张的人的意见。在松懈和私欲扩散到会议室之前，应该彻底消灭这种愚蠢的想法。

“然后……然后……”

对于这种带有暴力色彩的正论，相模的反驳实在是太弱了。如果是在辩论场上，我已经是死于非命了，但我没有放松的选择。

不好意思，相模。

我对你没有怨恨，但为了保护雪乃，我什么都愿意做。错误已经不能放过了。

“如果委员长的权限是这样判断的话，那就随他的便吧。但是如果还是出现了延误和问题的话，他会负起责任的，这样可以吗?相模实行委员长?”

面对我正面的提问，相模这次彻底沉默了。

我觉得太严厉了。不过，话都说到这份儿上了，应该不会再坚持自己的意见了吧。

“………………请各自回去工作。”

长时间的沉默之后，相模挤出微弱的声音。似乎是耐不住紧张感，会议室内又开始嘈杂起来。

——什么说法。

——还有个说法吧。

相模身边的两个人似乎听到了什么，不知道她们有没有注意到。相模的想法是错误的。

那么，我也工作吧，把视线移回桌子的刹那，和不稳定的视线相遇了。

也不知道从什么时候开始的，阳乃小姐即使和我四目相对也不移开，像在说悄悄话一样把手放在一边的脸颊上。

“好、好、好。”

用嘴唇勾勒出这三个字，她愉快地笑了。

\* \* \*

从会议室那件事到今天大约三周，距离文化节不到一周。

现在文实的办公室会议室里几乎所有成员都到齐了，原本进展顺利的日程不仅没有继续，甚至还提前了。托他的福，现在连开场仪式和结尾仪式的彩排都做好了。

人数就是力量。因为我的发言，大家都形成了不轻易偷懒的氛围，每次几乎全员都来了。

“相模，确认一下这份文件。”

“嗯，谢谢。”

相模的话，文实当然每次都出席。他可能已经忘了自己的发言，似乎对进展过于顺利的情况很有自信。随着时间的推移，原本作为委员长的工作也从雪乃转移到了相模身上。

当然，我和相模的关系不能说是很好，彼此都没有看对方的眼神，现在也没有听到对方说一句话。我认为决定性的是，它摧毁了后来被人挑剔的山寨广告词。

多亏了那个，现在没有那时那么忙。如果没有我在重新讨论宣传口号时的讽刺发言，说我坏话的声音也很少。嗯，虽然有人说“比起班级，文实优先啊~”之类的敷衍话。主要是围绕在相模身边。

“幸乃，志愿团体的最终名单出来了。”

“谢谢，我去确认一下。”

准备顺利的背景中，结衣的活跃功不可没。趁着外部人员增多的时机，他爽快地接受了志愿者团体的统一工作。按照约定帮了雪乃的忙，结衣似乎也很满足。

但是，外部人员出入频繁，说明这个人出现在会议室的次数也增加了。

“哈哈，比企谷青年，你还挺顺利的。”

只要背后有人叫她，她就会不由自主地发抖。他的声音越是愉快，就越是感到恐惧。

他坐在我旁边的空位上，一只胳膊肘支在桌子上，凝视着我的侧脸。

“你来干什么?”

“哎呀，你说得真像雪乃，还是在交往吗?”

“为什么会这样呢?”

我挠着头，无奈地停下了手中的工作。我看向阳乃的眼睛，果然流露出毫不掩饰的好奇。

“你的计划好像很顺利。”

他用手轻轻捂住我的耳朵，揶揄的声音不安地震动着我的耳膜。她的话里充满了确信，仿佛她什么都知道。

“……你在说什么?”

“不知道，你在说什么呢?”

轻飘飘地离开我，露出好笑的笑容。

说实话，我不想和这个人说话……此时的阳乃太过冷眼相待，也太过聪慧。就连超过她年龄的我都无法应付。

“喂，你知道我做的事是什么意思吗?”

唇彩艳丽的双唇弯出月牙。你看，她又是这样的表情。

“只是逃避考验是不行的。”

盯着我的眼睛明明在笑，那眼神却很认真。不知不觉间，背上淌着汗水。

这种事我知道。你知道我和雪乃一起生活了多少年吗?

“过不了多久，雪乃就全靠你了。我不认为这是好事。”

她说得太准确了，我觉得她们毕竟是姐妹。

雪之下雪乃很优秀。以丰富的知识和辣手来实际运营这个文化节，目前只能说很顺利。

但那是因为有阳乃。因为她知道作为文化祭的正确答案。

雪乃可以处理有答案的问题，但一谈到友情和恋爱这种没有正确答案的人际关系，她就不知道该怎么办。所以要模仿。然后依赖。

这是坏习惯。虽然这是雪乃没办法的事，但她还是这么想。总有一天，她会靠自己的力量克服这些困难，但一想到我为此连必要的过程都排除掉了，她就会感到莫名的焦躁。

“要是你能照顾雪乃到最后，那就好了。”

听了这话，阳乃小姐挥挥手说了声“再见”，就离开了会议室。

如果嫌麻烦的话，那我就花一辈子试试。问题不是这个。

被留在后面的我，把抱着头的手勉强按在桌子上，回到着手中的工作。

无论哭也好，笑也好，这是高二的最后一次文化节了，就此结束。因为不可能有第三次机会。

感谢您的阅读。并且一直有很多的喜爱和感想，非常感谢。

错字漏字报告也帮了大忙。不管确认多少次都还残留着……

文化祭篇前篇大家享受了吗?后篇也有文化祭正式演出的事，情绪提高去哟!

因为设定了不登录也能收到感想，所以只要收到一句话，我就会很高兴(然后执笔)。

整体来说，这是折返点。如果能陪我到完结就太好了。

已经不需要雪之下雪乃的悲壮了。下

“你们俩!有文化吗?”

“喔喔喔!”

“千叶著名的舞蹈?”︎

“节日快乐!”

“如果都是傻瓜的话……”

“辛格索——!”

曾经见过的情景，让我不由得心头一热。

那是我所知道的，轮回的前辈最辉煌的时刻。我确认戴在头上的麦克风是关着的，举起拳头大声叫道。轮回前辈果然太画了。

“比企谷?你在做什么?”

耳塞里传来一阵噪音，雪乃冷静的声音传到耳膜。啊，你看到了吗?但是没办法。如果亲身感受了画中的画，那就只能委身于这种情绪了。

“没什么。”

我只按了一下麦克风的开关，然后抬头望向舞台。

这是宣告总武高中文化祭召开的庆祝仪式。

在前辈的电话铃声后面跟着的是大音量的舞曲和穿着华丽服装的舞女们。带着当时的热情和狂热，华丽地开始了。

“PA。马上就要开唱了。”

“知道了。相模委员长，准备好了。”

听了雪乃的话，我闭上了嘴。明明不是自己说话，却莫名地紧张起来。

那个时候的相模，真的很没用。把坎佩淘汰了，就算看着坎佩也没法好好说话，我不知道还有比那更严厉的问候方式。

因为那次失败，相模放弃了结束仪式，我只好在校内跑来跑去。副产品是能听到雪乃他们的乐队演奏，现在想来真是太好了。

如果这个寒暄顺利的话，就看不到舞台上闪耀的她们了。虽然觉得有点寂寞，但我为了不让相模失败，才把日程提前进行。这种个人愿望应该悄悄地藏起来吧。

“接下来由文化节执行委员长致词。”

在担任主持人的围绕前辈的播报下，相模走向舞台。表情没有余裕，眼神十分认真。不过，他看上去并非单纯的紧张，而是带着一种气魄。

在被过度装饰得闪闪发光的舞台的正中央。

超过一千名学生的视线集中在他身上，相模握着无线麦克风的手在颤抖。

连吸了一口气的声音都捡起了麦克风，从扬声器里溢了出来。

——拜托了，真的。

我怀着祈祷的心情，继续看着相模。

“我是文化节执行委员长相模南，今年的口号是——”

看到他滔滔不绝，我不禁“哈”地长长地叹了口气。

什么嘛。只要做就能做到吧。应该说之前没做太过分了。

多亏了排练，从一开始说话就让人哼哼的低级错误也没有。因为雪乃让她反复练习了好几次，所以她几乎没有咬人，也没有堵塞，打招呼就进行下去了。

“——致辞马上就要结束了，接下来按工作时间进行。”

明白了。

我放心地松了一口气，用嘴唇的形状对不知在哪里看着的她说。

\* \* \*

文化节的第一天只在校内举行。

如果把第二天的公众开放日当作主要活动的话，今天可以说是正式环境下的试运转日。

“我不能和你玩，因为我没有被驯服。”

我坐在教室外的接待处，背靠在折叠椅上，专心听着舞台上的台词。

和以前一样，我能协助班级演出的只有今天。从明天开始就有合立文实的工作在等着他。突然来到这里，只能做接待的工作。

“辛苦了!”

耳边传来熟悉的声音。我抬头一看，结衣叫了一声却移开了视线，手里拿着一个小包。

“哦哦，辛苦了。”

结衣坐在我旁边的折叠椅上，“咚”的一声，静静地放下那个包裹。就在我和结衣的正中间。

是备品什么的吗?但是海老名先生监修的音乐剧现在还在进行中，不知道要放在桌子上。

“……这是什么?”

“……便当。”

等了一会儿，结衣什么也没说，我问。结衣面映思轻飘飘地说。

法……便当……但在我的记忆中，当时招待的应该是被称为“蜂蜜吐司”的生奶油面包。那个品质太冲击了，记得很清楚。

“是吗?”

“嗯。”

都是些空洞无物的对话。结衣打开包裹，出现在眼前的是两个便当盒。

“这是希基的份。”

结衣还是没有看我，把便当盒从桌子上滑了过来。

所以，我注意到了。

结衣的左手。拇指和食指上贴着创可贴。

“还没买面包吧?”

“是这样……可以吗?”

“嗯，我是为了让你吃才做的。”

终于和脸颊微微发红的结衣对上了眼睛。小心翼翼的视线痒了，这次把视线从这边移开了。

“那我就不客气了。”

我双手合十打开便当盒的盖子，摊开的是色彩鲜艳的画布。裹着煎鸡蛋、花椰菜、小番茄、番茄酱汁的汉堡下面铺着失去活力的生菜。

每种料理都是便当的经典中的经典。但是从不整齐的外观可以看出，它们都是手工制作的。昨天也因为准备工作到很晚才留下来的，一想到他早起为我做了这个，我就觉得很敬佩。

“……真了不起。”

“不、不、啊哈哈…………妈妈帮了我不少忙。”

结衣挥挥手，说着先开始吃便当。

我也跟着吃了一口汉堡。因为不是新鲜的，所以谈不上多汁，但肉糜里的咸味和番茄酱汁的酸味平衡得恰到好处。

“……很好。”

“真的?”

她嘴唇上插着筷子，从下面往下看，这个动作看起来比实际年龄还要稚嫩。心脏被紧紧抓住的感觉，变成了一种违和感。

结衣为什么要特意为我做便当呢?

大概不用想也知道。在那场烟花大会上，我明确地告诉她“我喜欢雪乃”。即便如此，结衣也不会放弃吧。和那时一样。

“那是谁做的?”

“不，因为是我烤的。你的脸真恶心!”

我脸上浮现出淡淡的笑容，结衣用肩膀撞了我一下。就像一对恋人在一起玩闹一样，想了很多多余的事情。

他环视了一下周围，想看看有没有人看见他，但没有任何注视他的眼睛。每个人都沉浸在节日的热情中，走廊里充满了喧嚣。

“……是吗?”

短暂的沉默后，结衣突然改变表情问道。

“你对幸乃说过吗?”

“什么?”

面对这个完全抛弃主语的问题，我把小西红柿从便当盒的一角躲开，回答道。小月亮也好，西红柿不行。

“那个……是不是告白了?”

这个问题太唐突了，我不由得僵住了。像傻瓜一样张着嘴，只有大脑在聪明地工作。

“…………不，我没有。”

“不做吗?”

“现在还没有打算。”

“为什么?”

“为什么……现在说也没用，大概是吧。”

我尽可能真挚地回答结衣连珠炮似的问题，脑海中浮现出雪乃的身影。

我觉得雪乃对待我的态度变得温和多了。这个时期比我记忆中的状态要好得多。

但是，仅此而已。

只告白和交往肯定是不行的。

因为我还没有“拯救”任何人。

“……是吗?”

听到我的回答，结衣悄悄松了口气。

我还不知道那桃红色气息的去向。

\* \* \*

到了文化节的第二天，校内的气氛好像完全变了。

可以说是文化祭正式开始的今天是一般公开的日子，所以能看到很多校外的人，因此作为牛郎的学生们的干劲也会高涨。呼唤声比昨天更热烈了，各个教室都传来了欢呼声和喊叫声。周围的气氛越热烈，我就越冷静。不管什么时候，在狂热中都有麻烦的火种。

“工作进展怎么样了?负责记录的。”

背后传来嘲讽的声音，我回过头。

雪乃的左臂上戴着文化节执行委员的袖章，抱着胳膊，脸上浮现出奇怪的笑容。

“工作还算顺利。”

我说着，用肩上的相机拍下了雪乃还带着笑容的脸。

好，待会儿偷偷把数据带回去吧。那就用手机壁纸吧。……?不过，要是不小心被谁看到了，可就相当恶心了。好，那就冲洗吧。冲洗出来装饰在房间里吧。

“…………随便拍不是违反礼仪吗?”

“不想被不记得人名的人说。”

对于我的讽刺，雪乃用手摸了摸太阳穴。那个表情真不错。还想再拍一张，不，还想再拍一百张。想在数据装满之前举行雪之下雪乃摄影会。那太好了。

“……你的工作是?”

在不小心食指又按下快门之前，我已经问得很清楚了。

“我负责巡视。”

雪乃说着走了起来，两人又像以前一样，一起走在她身边。就像她说的那样，雪乃看着教室的眼神看似温柔，背后却带着一丝锐利。

“……那个班的申请内容和做的事情不一样。”

说着抬头一看，签名牌上写着三年级B班。大概是只看了班级名，就把实际演出节目和脑海中的数据库对照了一下，发现了其中的不一致吧。我太太能做些平常的事，有点可怕。

“………………”

我看着眼熟的招牌，雪乃突然离开我，走向前台。

“有代表人吗?好像和申请的内容不一样。”

雪乃话音刚落，接待处的女学生们就说:“来吧!”“是文实!”“露底了!”骚动起来。之后如你所知。为了在气势上蒙混过关，强行让我和雪乃坐上火车。

“等、等一下。”

前辈们抓住雪乃的双手，推着她的后背，向我投来求助的目光。

当然，如果知道这样的展开……是可以回避的。理由不言而喻。

但正因为知道，身体才会摆出奇怪的姿势吧。

“请安排小火车旅行吧!”

“哇!”

“啊……”

被前辈们挤进去的瞬间，我想办法避免和雪乃碰撞，却无法避免接触。应该说，摸到了。我的手在雪乃的大腿上。一不小心还没到鼠蹊部，我的手就伸进了雪乃的裙子里。

“……对不起……”

她赶紧缩回手，深深地低下头道歉。虽然不是第一次摸，心脏却毫无秩序地跳动着。

“…………”

相对的，雪乃当然是第一次被异性接触。他的脸涨得通红，眼眶湿润，嘴巴不停地动，似乎说不出话来。这反应怎么这么可爱。

“嗯，非常感谢您今天乘坐滚地球。那么，请尽情享受世界的深渊，神秘的地下世界吧。”

不知道他是否知道我们的情况，在这番刺耳的话之后，火车开动了。

路线是用桌子、铁板、铁皮组合而成的简单的东西。只是靠人力将其滚动，比蹩脚的过山车还可怕。推火车的黑子们稍有失误，就有可能从桌子上掉下来。

“雪……”

就在我想问他没事吧的瞬间，我的手被温暖的触感包围了。雪乃凝视着前方，紧紧握住我的手。

这种事，是我所知道的世界线吗?如果有的话绝对记得。

“……”

不过，这些都无所谓。

我虽然觉得自己是在敷衍，但还是像安慰一样轻轻握住了他的手。

“那么请提交追加变更申请，然后向用户彻底说明。”

“嗯，这样的话……”

从火车上下来后，雪乃迈着摇摇晃晃的步伐，坚定地向前辈们叮嘱。脸颊上还泛着红晕，平时那种不容分说的伶俐被表情遮住了。

听到三年级B班负责人含糊不清的回答后，我们又开始在走廊上走动。我们之间没有对话，取而代之的是比刚才多出半步的空隙。很明显，被拉开了距离。

“……对不起。”

这道歉连我自己都不知道在说什么。相反，雪乃连看都不看我一眼。

“……是不可抗力造成的事故吧?没必要道歉。”

雪乃脑子里的事象是摸了脚的事。她的声音有些夸张，除非是我，否则我根本不会注意到她的反应。

“……即便如此，还是很抱歉。”

“……不用在意。”

雪乃虽然这么说，却摸到了出嫁前的女孩最重要的部位。虽说将来要娶媳妇，但无论怎么道歉都是不够的。

“虽然讨厌，但真的很抱歉……”

“……我是说不用道歉。”

可能是想起来觉得不好意思吧，他的侧脸又恢复了红润。

“那个……我也碰了……对不起。”

“啊……”

这次雪乃好像想起了握我的手，用右手摸了摸握着我的手的左手。这动作太可爱了，我的脑袋快要沸腾了。

“那就没必要道歉了，我也不讨厌。”

收回前言。脑袋沸腾了。

“那我也去。”

然而，听到这句话，我的头脑非但没有沸腾，反而瞬间蒸发了。她一脸惊愕地盯着雪乃的脸。这孩子明白我在说什么吗?

你是说你不讨厌异性碰你的身体吗?我是说，你也可以像平时那样用双手来回抚摸，然后慢慢地放大。不，我可没这么说。

“…………!”

“你真是差生……”前辈在她的脑海里不停地鄙视她，她注视着雪乃的脸，终于意识到自己的意思。那绯红的脸颊，和坐小火车时不可同日而语。

“你别误会，我只是说我没有想象中的厌恶感而已。你能不能别把我的意思理解成奇怪的?”

虽然说得很快，但意思没怎么变……

一瞬间捕捉到我的瞳孔因羞耻而摇晃，他的相貌也被染得通红。

“……差不多该走了吧。地区奖的投票结果都知道了吧?”

“是、是……”

这么说着的我和雪乃之间，就像刚才一样空着一个空间。

不过就现在这个时候来说，这种距离感或许也不错。

我挠了挠脸颊，假装没注意到脸颊的热度，好像连我也感染到了。

\* \* \*

体育馆的舞台侧翼，服装、小道具、吉他、键盘等完全处于后台状态。

即使是这样杂乱的空间，只要雪乃一踏进去，空气就会变。在舞台侧翼与围裙们谈笑风生的相模应该也察觉到了这细微的变化。她瞥了一眼雪乃。

“相模，我想和你商量一下结尾仪式的事。”

“啊，嗯。”

听到雪乃这么说，相模举起一只手，从谈笑间挣脱出来，朝雪乃走去。

“地区奖和优秀奖的结果都收到了吗?”

“嗯，在这里。”

说着，相模把手伸进西装口袋里，却什么也没从里面拿出来。

“咦?”

“怎么了?”

周围的前辈注意到了执行委员长和副委员长的举动，走过来问相模。相模好几次把手伸进西装的口袋里，打开里面看了看，很明显那里什么都没有。

“收到地域奖和优秀奖的结果，确实是在这里……”

相模的脸上渐渐失去了颜色。

……这家伙是真的吗?

以为自己不会失踪了，却让纸失踪了。

“那么选票呢?既然都集中在一起了，只要重新数一遍不就行了吗?”

“那个……已经统计完毕了，已经作为垃圾整理好了……”

一名文实成员不知道发生了什么事，一脸抱歉地说。每出现一个事实，情况就会变得更糟。

“重新统计需要多少时间?”

“首先要找出装选票的垃圾袋，然后再分类……至少要花一个小时以上。”

“那样的话就来不及了……”

沉痛的空气流了出来，所有人都噤口不语。

情况非常糟糕。这样一来，即使相模在场，好不容易顺利进行的文化节运营也会留下污点。

“……只能找了。”

“是啊。”

雪乃对我的低语点了点头，走到舞台侧翼的白板前。他把贴着进度表的纸翻转过来，画了一张简单的校内地图，回头看着我们。

“相模先生，请告诉我今天移动的范围。”

“嗯……”

雪乃用红色的记号笔照着相模手指的地方。作为文化祭的执行委员长，大概去过很多地方吧。结果校舍内几乎全部都成了搜查对象。

“要不要分块分散?”

“嗯。”

几乎就在我开口的同时，雪乃开始在校内地图上分配字母。思考的事情是一样的吗?

围绕前辈向站在舞台侧翼的文实成员和学生会成员打了声招呼，相关人员全部聚集在一起。雪乃利落地向聚集在一起的成员下达指示时，相模一直沉默着。

“那么，即使没有完成分配范围的搜索，也请在十五分钟后集合。如果还没有找到，就再进行一次未搜索范围的搜索。”

“等等，雪下还是留下来比较好吧。”

我指着白板上写的英文字母和雪乃的名字，营造出要解散的气氛。

“……为什么?我也要找。”

“因为你没有体力。而且如果没有司令塔，一旦被发现或发生不测事态时，就没有人可以判断了。”

我的指责似乎戳到了雪乃的痛处，她的表情明显不高兴起来。但是，似乎也没有人反驳。

“……我明白了。那么，请大家多多关照。”

听到雪乃的一句话，文实成员各自散去。我也跟在后面，在离开舞台侧翼的时候回过头来。雪乃点了点头，言外之意是“请多指教”，相模则握紧拳头盯着地板。

——我知道。

我用眼神说完，背对她们。

一转眼十五分钟过去了，手写的校内地图被无情地染成了红色。也就是说，就算搜索范围消化了九成，也没有找到写有结果的那张纸。

“这不是什么好状况……”

雪乃望着白板的视线失去了锐利，甚至流露出了放弃的念头。情况就是这样。有必要从希望性观测出发，走现实路线。

“……怎么办?”

我没有夹着自己的意见问雪乃。雪乃看着白板，用马克笔写着。

“还有十分钟就到极限了。如果能找到的话就按照计划，如果找不到的话。”

雪乃在白板上写下时间限制，看着相模。最后还是让相模来决定吧，默默地等着她的回答。

但这也很难。相模的脸上失去了生气，脑袋好像转不动了。

“最坏的情况是道歉之后再公布奖项吧。”

听到我的建议，相模的肩膀微微摇晃了一下。我不会像以前那样提出捏造奖项之类的提案。这种情况下，谁来承担责任，这是不用解释的。

“这样可以吗?相模先生?”

“…………嗯。我也再找一次。”

听到雪乃的问题，相模仿佛恢复了呼吸，从他的眼神中恢复了意志。

离结尾仪式还差一点点。能够使用的人员也很有限。找到写有结果的纸的可能性更低。

即便如此——只要有一点点可能性，就会想尽一切办法。相模也没有放弃。这样的话，就没问题了。没有任何根据，只是这么想。

“那就十分钟后吧。”

“嗯。”

我这么说着，看着雪乃，她的眼神充满了祈祷。

我把他眼中的想法紧紧握在手心，再次离开舞台侧翼。

\* \* \*

再次回到舞台侧翼时，心跳已经加速。

侧腹痛得厉害，肺也像悲鸣一样大声地叫着。仅仅十分钟，往返于体育馆和校舍，还是相当辛苦的。

“啊，希基……”

白板前，雪乃旁边还有结衣。应该已经听说了事情的经过吧。他的眼睛里只有担心。

“怎么样?”

对于我的问题，雪下默默地摇了摇头。然后用斜线涂满我的搜索范围，手写的校舍地图就被红色填满了。这样一来，能想到的地方已经全部找到了。

“比企谷，你看到相模了吗?”

“不……”

听他这么说，环顾四周，当然没有他的身影。

映入眼帘的叶山他们正在为结束仪式前的乐队演奏做准备。刚才还在舞台上挥动指挥棒的阳乃小姐，背靠着墙抱着胳膊看着我们。

“副委员长，我想申请更改节目单，能不能再加一首曲子?”

对于叶山的提议，雪乃反问道:“这可能吗?”曾经见过的那一幕再次上演。

这样的话，就太像那时了。不，相模和那张纸都失踪了，情况更糟。

“……比企谷。”

我沉默着，点了点头，催促他继续说下去。接下来的台词，我已经知道了。

“我再给你十分钟，你能找到吗?”

面对雪乃带着觉悟的视线，我用表情的变化回答道。因为肩膀还在喘气，他的笑容只能扬起半边脸颊，看起来很难看。

“交给我吧，我一定会找到的。”

我觉得这种自信的根据相当狡猾。虽然我完全不知道那张纸的去向，但我知道相模在哪里。

“……争取时间的工作已经交给你了。”

“嗯，交给我吧。”

这样交换着好胜的笑容，是多么令人安心啊。我转身走出舞台侧翼。目标只有一个。在特别大楼的上方，就是相模可能在的屋顶。

我逆着人潮快步走在从体育馆通往校舍的通道上。

学生们的身影一个接一个地被吸进了体育馆，想看这场堪称最精彩的演出。相反，失去人气的校舍犹如伽蓝堂。

越过台阶，跑过走廊。我一阶两阶飞快地跑上楼梯，刚放下心来的心脏又被屁股敲得急促起来。我不顾肺部的摩擦，也不顾额头上的汗珠，直奔那里。

通往屋顶的楼梯，在文化节期间好像是放行李的地方。我推开像是要挡住我的去路似的放置的物品，好不容易才把锁坏了的门放到面前。

稍微调整了一下粗重的呼吸，把手放在门把手上。

打开门。吹过的是爽籁。仰望的天空是苍穹。相模的身影果然出现在那里——。

“……没有?”

他踏上屋顶，环顾四周。别说相模了，连一个人都没有。

这是怎么回事?

背上的汗水夹杂着冷汗。呼吸和思考都还没有调整好，只有混乱孤零零地存在着。

不过，如果相模不在屋顶上，就没有必要留在这里。我一边回到校舍，一边寻找记忆中的线索。

当时我是怎么找到相模的呢?提示是和木材座的对话，但已经猜错了。如果有什么契机的话……就只剩下那里了。

我鞭打着被乳酸折磨的大腿，跑过走廊。终于到达了二年级F班的教室前。

坐在折叠椅上的是一个黑发泛青、扎着马尾辫的少女。川崎沙希和那时一样，跷着长腿眺望着窗外的景色。

“川崎……”

听到我的问题，川崎猛地抬起头。

“嗯……你在说什么?”

“相模，你看到了吗?”

我没有回答川崎的问题，很不高兴地问道。剩下的时间已经不多了。

“不，我没看见……”

“是吗……”

沮丧的肩膀随着紊乱的呼吸上下起伏。

这样就没有办法了吗?

没有找到相模，连写着结果的纸都没有。照这样下去，作为次长的雪乃就必须在全体学生面前为推迟发表各奖项而道歉了。只有这一点，绝对——。

“啊，对了。”

川崎的声音打断了我的思考。她翻了翻西装口袋，手里拿着一张皱巴巴的纸。不知道是不是被谁踩过，边上还留有脚印。

“这不是很重要的东西吗?”

看着从川崎那里拿到的那张纸，我的膝盖几乎要崩溃了。

——有了。

就是我们一直在寻找的、写着各奖项结果的那张纸。

“……这是在哪里?”

“我也不知道。一般客人送到这里，本来想送到总部的，因为有人值班……”

川崎似乎从我的表情中看出了事情的重要性，一脸尴尬。不管怎样，我很感激。这样就可以避免最坏的情况。

“……比企谷?”

也许是觉得沉默的我很奇怪，川崎从下面看着我的脸。但我还没回答，脚就已经动了起来。

“谢谢川崎!我爱你!”

说完，又在走廊上跑了起来。

跑下楼梯的瞬间，我仿佛听到了惨叫，但我毫不在意地继续跑。

\* \* \*

朝着体育馆跑去的时候，我发现了一个错误。

我为什么会盲目相信相模在屋顶上呢?

和那时不一样了。

不仅是状况，相模自己也是如此。我完全忽略了这件事，过度依赖过去的经验。

相模虽然得到了雪乃的支持，但作为文化节执行委员长，他确实尽了自己的责任和义务，就连开幕仪式的致辞也堪称成功。

作为执行委员长，拥有自信、实感和责任感的相模现在在哪里?那个地方自然就有限了。

“————”

他打开体育馆的门，走了进去。霎时，欢呼声和狂热的旋涡包围了他。在聚光灯照耀下的舞台上，她们闪闪发光。

仿佛掀翻腹部的重低音有节奏地响起，与失真的吉他声交织在一起。结衣的旋律几乎要跳起来，雪乃用下三次的音支撑起和声——。

如果可能的话，很想看那个舞台，把她们的身姿深深印在眼前。但现在的我既不是观众，也不是玩家，只是个男公关。为了装饰最高的终曲，不能停止那个脚步。

他快步从站在墙边的观众面前走过。过了一会儿，我站在仓库前，轻轻推开那扇门走了进去。

“咻”的一声屏住呼吸。从面向外侧的窗户溢出的阳光中，我终于找到了最后要找的东西。

“相模……”

一关上仓库的门，金碧辉煌的声音和狂乱的欢呼声都变得遥远而沉闷。相模被我叫了出来，他坐在垫子上，瞪大了眼睛。

“……为什么在这里?”

这个问题的答案非常简单。作为执行委员长可能会失败的绝望和逃避。还有只想知道结局的半吊子责任感。相模肯定会在结局仪式会场附近，我想这是一半肯定的。

“结果的纸有了。”

我没有回答相模的问题，把那张纸递给了他。但是相模看到了，摇了摇头，低下了头。

“……相模。”

“……根本没有发表的资格。把纸弄丢了，给大家添麻烦了，就逃走了。”

“太差劲了。”她小声嘀咕着，却被隔着门的欢呼声淹没了。相模说的一半是事实，一半是欺骗。不是别人，是对自己撒的弥天大谎。

“但是找到了，还赶上了结尾仪式。”

“…………”

“你们听到了吧?雪下们在为我们争取时间，让文化节好好地结束吧。”

对于我的话，没有回应的声音。相模的肩膀微微颤抖，夹杂着呜咽的呼吸声不时传入耳中。

“……相模。”

就算呼唤他，他的姿势也没有变化。焦躁感和焦躁伴随着令人讨厌的声响悄悄逼近。

“拜托了。”

他单膝跪地，递过纸。但是一直低着头的相模并没有注意到这一点。

——别开玩笑了。

事到如今还继续逃跑，我绝不允许。绝对不会允许把她们拼命的努力和真挚的感情践踏掉。

“………………我有这个资格……”

有的，不是资格，而是责任。最后的责任，如果你不去做，就做不了什么。

为什么人会这么轻易地逃走呢?做不到，做不到，没有这个资格。只会找借口，把自己拟态成被害者。明明是最大的加害者，却大声哭诉自己是被害者。

我不允许这种撒娇。

“……相模，站起来!”

时间所剩无几了。站起来伸出手，相模却连看都不看，事态丝毫没有进展。

“但是……”

否定的微弱声音。还在逃跑，只是撒娇的宣言。

“适可而止!”

我不禁大叫起来。

说得太大声了，连自己都感到一阵耳鸣。相模猛地抬起头，就在他眨了眨眼的瞬间，一滴水滴落了下来。

真是的，对一个年纪不大的女孩子大吼大叫，实在是太没人理了，还让她哭，真是太残忍了。装好人的坏人的样子，连我自己都讨厌。

“你要明白……请想一想，雪下的人们在以怎样的心情等待着你。”

接着出现的，是恳求般的无情声音。伸出去的手又缩回来，紧紧地握住。

“求你了……相模实行委员长。”

那个称呼和以前询问她的决心时一样。但是，今天的声音和意义都不同了。

然后，相模慢慢地站了起来。

她抽抽搭搭地从正面瞪着我。

“……明白了。”

说着，相模从我手里抢过写有结果的纸，朝通往体育馆的门走去。像泥巴一样的疲劳和无力让全身松弛下来。

“……对不起。”

相模说完关上门的瞬间，我弯下膝盖瘫坐在垫子上。

——什么嘛，这不是很好看嘛。

扑通一声倒在垫子上，抬头看着天花板。

门的另一头，是唱着最后合唱的她们的声音。那声音仿佛在抚慰被自己的呐喊麻痹的鼓膜，久久地在耳中回响。

\* \* \*

结尾仪式之后。

在还没有整理完的舞台前，以相模为中心围成一圈的文实成员露出时而笑，时而哭的表情。

“真让人吃惊，这么短的时间，竟然把两个都找到了。”

雪乃抱着胳膊，凝视着圈中心的相模。相模一边和周围的成员握手、拥抱，一边眼眶里浮现出淡淡的泪水。

雪乃看着眼前的景象，眼神中甚至流露出母性，她的眼神中充满了温柔。

“嗯……好像是使用了魔法。”

结衣靠在雪乃身边说道，她点了点头。

事实上，相模在结尾仪式上的举止让人瞠目结舌。在充满感情地结束了各奖项的发表后，在之后的致辞中，或许是太过激动了，在最后的最后落下了眼泪。鼓励她的声音里，似乎比那时更有激情。

……唉，那眼泪也许是我点燃的结果，让她因为不甘心而哭出来的。

“所有的一切都很棒。我和幸乃一起站在舞台上，虽然很紧张，但也很开心。再来一次也可以吗?”

“……我不想戴。”

对于结衣的提议，雪乃一脸发自内心的厌恶，耸了耸肩。我知道你不擅长做这种事，但你的反应不太好吧。

“……我还想再看一次。”

我这么一说，雪乃和结衣也同时僵住了。是什么呢?说了什么奇怪的话吗?

“希基……”

“……你看到了?”

“嗯，就一点点。”

不不不，我以前也看到过，用不着那么吃惊……虽然我并没有开口，但也太吃惊了吧。

雪乃和结衣把视线从我身上移开，各自的脸颊都被红色染红了。

这些家伙是怎么回事……两个人都很可爱吗?

“……还是不要再来了。”

“我也不行……”

“嗯……”

雪乃就不说了，连结衣都讨厌吗?明明说过想自己做的。

不过，这样也好。

只要能再多看一次，哪怕只是一点点，就已经是侥幸行为了。

“来，收拾好早点回去吧。”

如果可以的话，我真想再多看看那些又蓝又暖的女孩，这样的念头在我的脑海中挥之不去。

我说着走了出去。今天发生了太多事情，也跑得太多了。

“啊……希基，庆功宴呢?”

“不行。”

“回答的早?︎再考虑考虑!”

听到结衣的指责，有人小声地笑了起来。

这次重新举办的文化节是否成功?

这只有她们的表情知道。

感谢您的阅读。

文化节后篇怎么样呢?是到现在为止情绪最高的话题，写的时候非常开心。

那么，从这个故事开始大概是每周更新一次。虽然已经写到了一定的程度，但投稿前要反复推敲才能提高质量，如果没有了存量，性格上就会一个接一个地想快写，失误就会增加……。

感谢您在前一话中给了我很多的感想。

这次也能得到感想等反应的话，我很高兴。那么下周，修学旅行篇再见吧!

从青春爱情喜剧的角度来看，修学旅行是正确的。

晚秋的京都，即使穿着正确的制服西装，也会觉得有点冷。

不，稍微冷一点就过去了，这也许是当地的特点。那是有名的清水寺。如果没有学生们排着长队去正殿和清水的舞台，我想他们一定会被晒得更冷。

“哦~ ~”

结衣探出身子走近栏杆，对眼前的京都街景和枫叶发出感叹。

真是的，无论多少次都是精彩绝伦的。虽然枫叶的季节即将结束，但正因为如此，树叶才变得更加火红。

“希基，拍照!拍照!”

“你、你……”

我回想起自己是什么时候在这里拍的照片，结衣把手机的相机换成内相机，靠在我身边。她亲身体会到，原来是结衣把自拍的方法传授给了雪乃。……或者说，滨先生，是不是有点近?绝对比以前更近吧?

“待会儿我送你。”

“啊……”

冷汗莫名地冒了出来，连我自己都惊呆了，到底几岁了?

拍完照，就那样随着人流走了。再往前是地主神社，那里有占卜恋爱的石头。

“感觉真好啊。”

说着，结衣的视线落在了海老名和户部身上。我和我们各自的委托人。

到这里修学旅行为止，服务部的委托都是我所知道的青春时代。叶山带着户部等人来到服务部，希望户部能帮忙向海老名告白。

如果说有什么不同的话，大概就是户部没有说“没有和引谷商量”，结衣也没有生气就结束了吧。在文化节上，他没有对相模说过像那时那样过分的话，也没有目击者，所以也没有听到什么不堪入耳的诽谤。

“哎呀，这个我完全不知道。这个可以直着吗?”

户部闭着眼睛，从两块岩石中的一块出发。只要闭着眼睛到达十米开外的岩石，爱情就会实现。

“对，笔直笔直。”

“不对，右边有点。”

“啊，右?在我看来是右?哪边?”

不管什么都接受别人的建议到达岩石的情况下，如果有别人的帮助的话那个恋爱好像会成功。

那么，这个霉运也许是正确的。

据我所知，两人是在步入社会后才开始交往的。户部虽然心怀不满，却没有放弃，而海老名的心意改变，成就了这一切。

“多亏当时比企谷答应了我的请求。”

好久不见的海老名，那表情简直就像在沙漠中彷徨了好几年的旅人终于找到绿洲一样，我永远也忘不了。所以我的行动就被束缚住了。

修学旅行的第三天晚上，我又会对海老名做假告白吧。即使是不同的世界线，我也不能故意破坏两个人的将来。

但这又会伤害她们。一直在考虑回避的手段，兜圈子。到现在也想不出什么解决方法，即使在修学旅行的过程中也没有改变。

“真的、真的是哪一种?”

“左边!”

“右边!”

看着户部不知所措的样子，海老名露出“哈哈哈”的微笑。

恋爱占卜之石。

那么，用“也许是正确的”来形容这个霉运。

“哇!”

“危险……”

因为户部险些垮台，叶山出手相救。快× ×式的美味展开啊。

但是，至少希望他能到达岩石。

我已经做好了心理准备。

\* \* \*

“是不认识的天花板……”

看到陌生的天花板，她猛地站起身，环视四周。如果这是原来的世界线病房就好了，但并非如此。我好像还没救过任何人，这里是酒店的一个房间。

“啊，八幡。终于起来了?”

看来我在旅馆吃完饭马上就睡了。从清水寺转到南禅寺后，走了一段还算长的距离才到银阁寺。早上起得早，睡着也是没办法的事。

叶山和户部们哗啦哗啦地搅拌着麻将牌，就像修学旅行之夜的一幕。

“啊…………我去买杯咖啡。”

户冢“嗯”了一声，挥手送我出去，我背在他的背上，离开了房间。这么说来，第一天晚上感觉木材座突袭了房间，算了吧。会有心地善良的户冢来陪我吧。

下到一楼，站在自动售货机前。我先找了个罐头，当然不在阵容里。虽然不想承认，但在千叶以外的地方，麦易拉罐都没有获得公民权。

我只好买了一罐看起来最甜的牛奶咖啡。拿着那个找长椅的时候，突然一个熟悉的面孔进入了视野。雪乃和结衣肩并肩坐在长椅上。

“啊，希基……”

“比企谷……”

说了那个坏话本人就来了的反应……。

话说回来，有过这样的场景吗?可能是刚洗完澡吧，她记得雪乃梳着头发的样子，却不记得见过梳着丸子头的结衣。

“……你在喝稀奇的东西吗?”

而且两人手里都握着和我刚才买的一罐牛奶咖啡。这个时间喝到睡不着我也不知道。

“哈哈……嗯。”

他的回答营造出一种意味深长的气氛，让人不敢再问下去。我站在长椅旁边，把背靠在墙上，猛地拉开拉环。

“明天的事要商量吗?”

“嗯，差不多吧。”

从刚才开始回答的都是结衣啊，她偷偷看了雪乃一眼。她握着牛奶咖啡罐，表情和动作都很僵硬。

沉默地倾斜了一会儿罐子，发出咔嗒咔嗒的声音，又出现了另一个人影。

这么晚了，平冢医生还披着大衣，戴着墨镜。

“什、为什么你们会在这里……”

平冢老师明显表现出狼狈的样子，如果按照记忆，应该又去天一吃拉面了吧。好啊。久违的天一拉面。

“不，我只是去买饮料。”

“是吗……算了，我给你封口费，你跟我来。”

平冢医生看了我们几个人一眼，潇洒地走了起来。一副将错就错的样子，让人忍不住想笑。

“那位老师身在何处?”

“嗯，跟过来就知道了。”

平冢医生没有正面回答雪乃的问题，走出酒店正门。我们跟在后面，朝着马路走去。

平冢医生一举手，一辆出租车就停在了路边。

话说回来，你知道出租车的坐位顺序吗?在这种情况下，最上面的平冢医生应该坐在驾驶席后面，但我却正常地坐在了副驾驶席上。那么我们从上座开始按顺序坐的话会怎么样呢?

“……很狭窄。”

是啊，确定最下座的后座中央是我的座位。

“正因为肩膀缩得那么紧，才会觉得窄。”

“只要不刻意避开就好了……”

坐在驾驶席后面的雪乃说，坐在左边的结衣也跟在后面。但是，我是不会听从您的话的。已经很近了，刚洗完澡的香味充满鼻腔，让人无法平静。

“到一乘寺的天一。”

平冢医生说完，出租车开始滑行。

“天下一……?”

“虽然很可惜，但绝对和你想的不一样。”

结衣的头顶上挂着一颗箭，而你脑海中浮现出的天下第一武斗会更令人不可思议。女孩子也会看龙珠吗?

短暂的夜游结束后，我们站在某家店门前。

“这就是天下第一总店……”

不，说实话已经是第二次了，即使时隔很久再来，我还是很感动。雪乃和结衣不知道我感慨的理由，茫然地望着广告牌。

“好了，进去吧。”

在平冢老师的催促下，我们走进店内。在这种深夜的拉面馆里，两个美少女和一个戴墨镜的美女，看起来相当不般配，被坐在桌边的男客人盯着看。唉，看我们的样子，也不像缔的拉面，看这三个人的长相，也没办法吧。不过你还是盯着我老婆看，我打死你。

“好了，这是封口费，拜托你别客气。”

落座后，平冢医生一边打开菜单一边说。话虽如此，如果没有说明就给人看菜单的话，会造成混乱吧。

“我觉得你们最好干脆利落。”

“不，光是看什么东西肚子就饱了，不用了。”

“哈哈……我也是……”

两个人看到其他客人都在吃，就正常地拉了。不过，凭那副外表，想要拜托也需要勇气吧。

“那就点清淡点的，两个人分着吃吧。再多也只有那里长得正旺的人吃吧。”

“……这是处理剩饭剩菜的妙语。”

或者不如说，他提出了可以间接接吻之类的建议，考虑到当时我的自我意识过剩，这个建议实在是太夸张了。因为是女教师，所以我觉得应该更在意才对。

叫来服务员，告知点单，几分钟后就盖饭了。我和平冢医生很执着，雪乃和结衣很干脆。

我开吃了，过了一会儿，平冢医生一边抬面一边说。

“看来你的委托处理得很顺利啊。”

平冢医生说着，吃了一口面条。那到底是指哪项委托呢?

在这个时候，他不可能知道户部的委托。也可能是雪乃要联系她。

“特别是文化节的委托，做得很好。相模好像也因为文化节的事有了很大的自信。”

这件事啊，我稍稍缓解了身体上的紧张。

从文化节之后相模的表现来看，确实如平冢老师所说，他不再像以前那样自卑，甚至有些自信。多亏文化节的成功举办，她的自我认同需求和自尊心得到了正确的满足。

“可是雪下，你还记得我对他的委托吗?”

被平冢医生这么一问，雪乃停下了一边梳头发一边吃拉面的动作。我挺直腰背，面向平冢老师。

“好像是‘改造他扭曲的孤独体质’吧?”

“对，你自己感觉如何?”

雪乃瞥了我一眼，用手托着下巴思考。结衣看到我们的样子，停下了吃的手。

“有这样的委托。”

“嗯……”

窥视我的视线增加到了两个人。这种话，能不能不要在本人面前说?

“……说实话，我不太清楚。委托的处理方式虽然很残酷，但意外地还算正常……”

“哎呀呀，哎呀呀。”说到这里，这句话就没了下文。

正经吗?我觉得那个好像是高估了。在千叶村的留美的事情，曾经一度破坏了整个团队，在相模的支援问题上，为了不让人误判，说了相当严厉的话，挫伤了她的自尊心。虽然结果很好，但称其为“正经”总让人觉得别扭。

“嗯，是斜上方吧，希基的想法。”

结衣似乎赞同雪乃的意见，“嗯嗯”地点了点头。

这样的表现，我多少能接受。结衣果然从这个时候开始看到了很多事情，不得不佩服。

“那么，孤独体质怎么样呢?”

听到这个问题，雪乃和结衣都沉默了。不知道是不是脑子里的讨论拖了很久，两人都微微歪着头。

“……与其说是孤独体质，不如说只是选择了孤独而已。”

“嗯……我有这种感觉。”

我回想起自己的行为，原来是这样看的。

确实，基本上必须重现当时的情景，所以刻意保持孤独。如果想和高中生的他们多沟通的话，一定会比那时更正常的对话吧。但这样一来，周围的人可能会觉得太奇怪了，而且应该选择与之相关的人，这样的想法不会改变。

“是啊，也许是吧。那么，和你们怎么样?”

听到平冢医生的话，两人猛地抬起头来。对她们来说，回味这句话的意思似乎只是一瞬间的事。两人似乎有些不自在，视线交汇后，视线落在被分成小块的拉面上。

……你们的态度到底是什么?

我知道平冢老师想说什么，但决定装作没发现。平冢医生的表达方式过于简单直接，这句话的意思和阳乃小姐偶尔说的话很像。

“……拉面要冷了。”

我只这么说了一句，用筷子夹着已经凉了的面条吃了起来。

\* \* \*

修学旅行已经进入第二天。今天的第一站是太秦漩涡政电影村。

正值红叶季节，虽然挤在拥挤的巴士里，但总算到达了目的地。在时代剧的拍摄中也会使用的江户时代的街道上，我一边走一边走进了和上次一样的鬼屋。

“哇……我还是不擅长做这种事……”

结衣这么说，距离很近，简直就像贴近雪乃时一样。

是你提议去看看的……不过我也知道，这是为了让户部和海老名联手的策略。

“是、刚才有什么奇怪的声音……”

而拉着我西装左侧下摆的，是川某某。从刚才开始，户部就发出“胆战心惊”的声音，使我们也胆战心惊，产生了负面的连锁反应。因为离你也很近，所以希望你自重。

“八幡好像没事。”

户冢这么问，她——不，他似乎完全不在乎。

“嗯……”

因为是第二次……当然不能这么说。她们离得那么近，连呼吸声都听得见，我感到有些难为情，继续在鬼屋里走着。

不过，川某会害怕也是理所当然的。妖怪是由真正的演员扮演的，布景里的尸体是模仿活体制作的，很有真实感。如果不是第二次，我大概也会很害怕吧。

“户冢好像完全无所谓。”

“嗯，我很喜欢这种。”

逼真的尸体造型和寿衣的表演者?不由自主地想了件蠢事。

即便如此，这两天也没有什么特别的活动，很轻松。一想到明天晚上的事，这样开心的日子也只有今天了吧。

我瞥了一眼左边的人。河流……河流……我想起来了。川崎沙希从刚才开始就一直保持着慵懒威严的态度，像个与年龄相符的少女一样害怕。

看着这些，我突然灵光一闪。这个闪光的创意，让我确信，如果在第二天能给它带来变化的话，就只有这个了。

“喂，比企谷，你刚才听到什么了吗?”

“嗯?没有，我什么也没听见……”

——骗人。

我确实注意到了。刚才那个人影为了吓到我们而稍微动了一下。

“哇!”

扮演尸体的演员一边叫着一边爬起来，川崎吓了一跳!他挺直了身子，接着无言地全力冲刺。

我要改变的就是这里。

“哇啊啊啊啊啊啊! !”

我仿佛代表了川崎无言的呐喊，一边尖叫一边追着他的背影跑起来。

名字就叫《因为川某某总是很害怕，所以让他去害怕吧》。

“——!哈!切——!”

川崎回过头来，看到我的身影，流着泪继续奔跑。已经不知道在说什么了。

在并不宽敞的木板走廊上，他抓住泛青的长发，全力奔跑。溅着血沫的纸拉门和被染成吓人颜色的栏间，向视野的两端流动。

“哇哇哇哇哇! !”

“呸!呸!比企谷变成僵尸了! !”

川崎一边大声疾呼着非常失礼的事情，一边走到出口的门口。

她根本没有时间开门。

然后，回头看着我——。

“去死吧!”

川崎伸出的手臂勾住了我的脖子，我的后脑勺重重地撞了上去。

\* \* \*

“真的、不可能发生…………”

“哈哈……那完全是我的错。”

走出鬼屋后，我坐在屋檐下的长椅上，一边听着川崎的怨恨曲调，一边仰望着椽子。

川崎使出浑身解数……或者说我跑过来的气势汹汹的自爆式炸弹，让他彻底倒下，有轻微的脑震荡，正在休息。

“希奇，你还晕吗?”

我枕在结衣的膝盖上，额头上放着湿手帕，完全处于被护理状态。虽然我自己也做了傻事，但从结衣那里听到这件事的户部和海老名都大笑起来，这一点我觉得很好。至于两人的关系是否因此拉近，只能含糊其辞。

“啊……还是有点……”

我和结衣四目相对，说着闭上了眼睛。

即便如此，结衣的大腿——简称结衣……雪很美，结衣也很有韵味……

为了配合我闭上眼睛，结衣轻轻地把手放在我的眼皮上。简直就像个被哄睡的孩子，痒痒的。

“嗯，引谷，你还不行吗?”

“啊，嗯，还没有。”

听到声音睁开眼睛，结衣盖在头上的手被拉开，与俯视着的户部四目相对。这么说，附近大概也有叶山吧。被那家伙看到这个样子，我也很生气，虽然脑袋还有些发麻，但还是决定起身。

“对不起，我已经没事了。”

站起来一看，也没有头晕的症状。他试着转了转脖子，除了还有些疼痛之外，似乎没什么问题。

“引谷你也很爱开玩笑啊。要是让隼人也试试就好了。”

“呵呵呵”地笑着的是和户部一起来到附近的海老名。这个提议看起来很有趣，但如果是那家伙，他会直接回击，让我受到伤害，所以我绝对不会这么做。

“已经没事了吗?”

和三浦一起从土特产店走过来的叶山，从上到下看了看我，说道。做了那种蠢事让这家伙担心，心里很不舒服。那就别这么说了。

“啊，对不起，耽误你时间了。”

“不，反正我也想看看土特产。那差不多该走了。”

叶山对大家这么说，大家都表示肯定。下一个目的地是洛西萝西地区。

在我的建议下，他们避开拥挤的巴士，坐上出租车，来到下一个目的地仁和寺仁同寺。在著名的《徒然草》第五十二段中出现了一座古典随笔宅男心目中的圣地。

那是关于某位法师的一篇故事。法师参拜了石清水八幡宫，又去了极乐寺和高良神社，心想已经全部转遍了，没想到还有其他值得参拜的地方，所以即使是很小的事情，也希望有人来做向导。如果是在现代，这是一件很容易被说成是先好好收拾一下再去的事情。

至于我，当然不需要向导。我清楚地记得，在接下来要去的龙安寺灵堂，我偶然遇到了雪乃。在电影村的时间损失是有的，但因为省去了等巴士的时间，所以事情应该大体上以和那时一样的日程进行着。

办理完参观手续进入园区后，沿着道路走，登上石阶。终于看到了被称为方丈的佛堂。走进那里，看到的是电视上或什么地方有名的枯山水——龙安寺的石庭。

结衣他们一边“哇”地叫着一边拍石庭，或者以此为背景拍照，各自散去。

“…………”

雪乃只好在檐廊上找个地方，虽然有几人看见她穿着总武高中的制服，却没有她的身影。不可能看漏了。我的雪农限定千里眼比那里的雷达精度还要高。

喂喂，真的吗?这是不是时间管理失败了……正当我感到绝望的时候，突然有人拍了拍我的肩膀。

“在这种地方真巧啊，比企谷。”

回头一看，寻找的人带着一丝微笑站在那里。如果在正后方的话，绝对不在检测范围之内。

“你在东张西望什么?”

“……不，是从哪个角度拍比较好?”

我很想告诉他，我是在找你，但他当然不会这么做。即便如此，只要像预想的那样见到了面，她的脸上就会流露出喜气洋洋的心情。在京都的名胜中看到的雪乃的站姿真是一幅画。有那个。

“是吗?”

雪乃说完，环顾四周。确认附近没有熟悉的面孔后，雪乃轻轻拉了拉我的袖口。

“过来一下。”

“啊?哦…………”

这是怎么回事……我正不知所措时，被带到了方丈室的尽头。这么说来，当时和雪乃同行的同学们都去哪里了呢?

“那个……我想让你给我拍照。”

看到拿出手机的雪乃，我点了点头。是如此漂亮的枯山水。大概是想以此为背景拍照吧。要是能找到同学帮我拍就好了，也许是不好拜托。她不喜欢被人认为是在闹腾。

“啊，好啊。”

“借我看看。”她伸出手想要接过手机，但不知为何，她没有放下手机。

哎……这是什么?不可能把手机交给你吧，会被说“自己拍了再寄给你”的那种?

“不是，不是这个意思。”

雪乃打开手机，启动相机。他脸颊泛红，眉毛上挂着不安，含糊不清地说。

“那个……我想和你一起拍……”

不行。

这是不行的东西。

因为太可爱而死。虽然很可爱，但因为超过致死量而闷死。

我不由自主地说自己是来关西的，所以方言也听不懂，但还是拼命装出一副很平静的样子。一边害羞一边要求一起拍照的雪乃好可爱啊♪啊，这完全不能平静啊。

“突然，怎么了?”

我想，不管怎么说，马上答应不也很符合当时的我吗，于是决定这么问。

“好不容易见到你……而且你和由比浜先生拍过照片吧?”

听到他的回答，我不由得向后仰起了头。你们是真的吗?连这种事都能共享信息，关系是不是太好了?

“啊……嗯，没关系。”

我这么回答，雪乃舒展愁眉。

虽然嘴上这么说，但我更想拍。已经到了跪求让我拍的程度。和JK时代的太太在晚秋的京都拍两张照片，太棒了。

“再见，再见。”

“啊……”

我一边想着怎么能谈得上呢，一边背对石庭站在雪乃身旁。雪乃肩头隔着三个拳头，摆好了手机。

“……比企谷，你再过来一下。”

“你、你……”

对我来说也不是第一次，却莫名地紧张起来。这都怪雪乃还不习惯自拍。

在我的记忆中，雪乃是很熟练地拍了两张照片。这样的机会多了，习惯了是再往后的事。大概是一色伊吕波泡在服务部之后的事吧。这么说，向导是伊吕波吗?好啦，手好滑努力想要自拍的雪乃很可爱，怎么样都无所谓了。

“我还看得出来。”

“啊，是……”

肩膀完全贴在一起，几乎没有分叉的黑发抚摩着脸颊。平常的沙丁鱼香味轻飘飘的，虽然是闻惯了的味道，心脏却在不停地跳动。

咔嚓一声，快门声响起。红着脸的雪乃和我，和隐约可见的石庭一起被放进了小小的画面里。

“啊，谢谢……”

“……”

虽然有些依依不舍，但还是分开肩膀保持距离。隔着制服也能感觉到的热度，热得仿佛渗进了体内。

“那我回去了。”

“……啊，再见。”

雪乃在胸前轻轻挥了挥手，脸上还残留着红晕，转身走了。

两步、三步地离开。我半恍惚地看着他的背影，突然发现了一件大事。必须把照片——刚才拍的照片发给我。

“雪乃!”

就在我焦急地呼唤的瞬间，我忍不住捂住了嘴。不知不觉地说出了“地”的叫法。

雪乃回过头来，瞠目结舌地看着眼前的状况，整个人都僵住了，大眼睛眨个不停。她的脸颊又恢复了红润。

“什、什么……?”

“那个……待会儿可以，把刚才拍的照片发给我。”

“嗯、嗯……”

说完，雪乃再次转过身，离开了那里。就像逃跑一样，比刚才更快。

“…………”

深深地、深深地吐了一口气。我在干什么?

　在方丈室的一角，一个人挠着头。但是，不管过了多久，脸颊上的燥热和后悔都没有消失。

感谢您的阅读。

正如副标题所示，这是迄今为止最像爱情喜剧的温暖故事。

下面是修学旅行后篇。八幡感到忧郁的那个告白会怎样呢?

如果下次也能读的话我会很高兴的。每次都写，如果能收到感想就更高兴了。

那么下周星期六再见吧。

但是比企谷八幡又错了。

回到酒店吃完晚饭后，就是自由活动时间了。

昨晚好像每个房间都在举行麻将大赛，今晚好像要举行每个房间的麻将大赛。班上的核心人物叶山下榻的客房成为麻将大会的会场，可以说是必然的。

我当然无法置身于如此嘈杂的空间，只好坐在一楼大厅的长椅上。

该怎么办呢，我一边喝着刚买的牛奶咖啡一边思考。

以前的修学旅行是为了打发时间出去的，在便利店遇到了雅西和三浦。他对我说，不要做不必要的事。

当然，我不打算重复那样的场面。虽然上了年纪，但害怕就是害怕，也不觉得有必要在那里和她说话。

我像个呆呆地站在檐廊上的老人似的看着大堂，电梯那边出现了一张熟悉的面孔。

——相模南。

是最亲近、最不相干的人的名字。不，这种说法是不是矛盾?

可能是刚才泡过澡吧，相模的头发看起来还有些湿漉漉的。两个人对视了一下，她径直向自动售货机走去。

相模和我的关系，现在也不能说良好。即使在教室里和他眼神相遇，他也不会打招呼，在体育祭上，他也没有担任过执行委员，所以也不会和他有什么交集。

嗯，这无所谓。今后，我大概不会再和她有什么瓜葛了。

就在我心不在焉地想着这件事的时候，一个人影突然从我眼前走过。相模南特意从我面前走过，空出一个人的座位，坐在我坐的长椅上。

“嗯。”

相模说完，把手里拿着的一个塑料瓶放在了我身边。是盖着橘黄色盖子的热奶茶。

“……这是什么?”

“给你。”

“不，已经有饮料了……”

“拿回去，之后再喝不就行了?”

相模还是没有看我一眼，打开了自己手里的塑料瓶。小口喝了一口，沉默了一会儿，开始结结巴巴地说。

“……文化节上的事，谢谢你。”

“……”

对于这句意想不到的话，我只能含糊地回答。没想到这家伙有一天会向我道谢，我实在太意外了，无法理解。

“结束后我想想……一切都和你说的一样。”

她朝我瞥了一眼，但又回到了和我对峙之前。我“哦”了一声，含糊地回答着，等着相模继续说下去。

“所以你一定要好好道谢，那就是你的心意。”

相模说着，用手指了指那瓶奶茶。选择温暖的一方，是她特有的温柔吧。

之后，便是深深的、漫长的沉默。应该已经没什么话可说了，可相模还是不停地拧着瓶子，没有要离开的样子。

在这种罕见的情况下，我突然想问。明明已经听到了大部分答案，却还是想对答案。

“对吧，相模?”

他叫了一声，又看向相模。好不容易和她四目相对，这次彼此都没有移开视线。

“文化节的执行委员长，你觉得做得好吗?”

听到我的问题，相模吃惊地睁开眼睛，突然露出了笑容。

“那当然了。”

相模这么说的时候，表情真的很愉快。

过了一会儿，我才发现相模露出了笑容。

\* \* \*

修学旅行很早，已经是第三天早上了。

我们和以前一样，在雪乃选择的那家有名的咖啡店吃早餐。

“由比滨，今天的路线告诉我了吗?”

雪乃喝了一口咖啡，对结衣问道。

修学旅行的第三天是完全自由活动的日子。因此，服务部能集合到一起向户部的告白做后盾的只有今天。雪乃为他们准备了推荐的路线。

“嗯，很顺利。我想应该会按照我说的路线走。”

恐怕和以前一样，结衣会把路线传达给户部，按照推荐的行动吧。就算因为什么变化而没有变成那样，就今天来说也没有问题。

最重要的是晚上告白的场景。只要能重现当时的情景，对我的委托就完成了。但一想到这件事……就觉得心情沉重。

“啊，我也想喝幸乃喝的咖啡。”

“是吗?那我们交换吧。”

但她们根本无法揣测我内心的想法，却比我记忆中还要亲密。我想，这样的景象和事实，或许可以稍微自豪地说，这是重新来过的功绩。

“……你们关系很好吧?”

这句话把雪乃和结衣的视线都集中到了我身上，两人立刻面面相觑。

“这是……”

“是吧?”

结衣微笑着，仿佛在说悄悄话，雪乃则低着头，不露出任何表情。这家伙怎么超可爱啊。是尊贵的块儿?

我按着快要放松下来的脸颊，对雪乃问道。

“那你现在要去哪里?”

“首先是伏见稻荷，然后是东福寺，然后是北野天满宫。”

“……对不起。”

对于我们的对话，结衣歪着头，额头上浮现出问号。不过，如果对历史不太了解的话，是传不出去的。

“北野天满宫就是那个，供奉的是学问之神。”

“详细说来，菅原道真公，通称天神。”

“啊，小町要考试了。”

雪贝迪雅究竟得到了多少信息还是个疑问，不过听了她的说明，她似乎理解了这是为了小町。结衣不擅长背诵，但头脑转得很快，头脑也很灵活。

“最后是岚山。”

岚山——。这是这次修学旅行的转折点。

为了不让自己对这个关键词产生反应，我努力让表情肌发力。倒在白色高雅杯子里的咖啡已经没有了热气。

“啊，一切都好期待啊。”

我努力面无表情，毫无感情。

喝了一口渐渐变热的咖啡，他移开意识看向外面。

\* \* \*

说到伏见稻荷大社，我想没听过这个名字的人应该很少吧。

刚到的时候人还挺多的，但越往有名的千本鸟居走，人影就越稀疏。走在斜度可以说很平缓的坡道上，不时朝雪乃看一眼，她的呼吸似乎有些急促。

“没事吧?”

“这点小事，没关系的。”

不过，连这句话都无法一口气说完，他的心跳似乎也加快了。我放慢脚步，走在前面的结衣的背影稍稍远去。

“户部君他们的情况怎么样?”

“嗯?啊…………没什么特别的变化吧。只是两个人在一起的时间稍微增加了而已。”

我想他早就从结衣那里听说了户部他们的情况，难道他是想从我嘴里说出来吗?

户部和海老名的情况，和雪乃说的一样，没有任何进展。说理所当然也是理所当然的。虽说是修学旅行，但不可能突然意识到。在那之前，如果海老名不能向自己妥协，事情就不会发生。

“你觉得表白会顺利吗?”

这个问题让我一时语塞。答案什么的已经有了，正因为如此才会困惑于马上回答。

“……应该是不可能的。”

“即便如此，你也不会拒绝委托吗?”

看着他的侧脸，我只能苦笑。如果是以前的我，大概只会说“因为是工作”，然后就烟消云散了吧。

“让他放弃也是工作的一部分。”

我用视野的边缘捕捉到，他听到这句话，脸上夹杂着惊讶的笑容。雪乃和结衣似乎都没有注意到海老名阻止他们告白的暗号，但他们也没有说谎。

“哇…………太厉害了。幸乃，希基!快，快!”

先到四十字路口的结衣回头对我们招手。我觉得自己像个孩子，脸上洋溢着笑容，突然吹来一阵风。

鲜红的落叶点缀着我的视野，我和露出温和微笑的雪乃四目相对。她的表情和雪乃第一次抱着自己的孩子时的表情重叠在一起，不由得让我的内心变得狭窄起来。

“比企谷?”

听到这样的声音，我不由得停下了脚步。

一定要振作起来。现在不是沉浸在感伤的时候。现在的首要任务是在这次修学旅行中“拯救”他和她的未来。

“对不起，我一直在发呆。”

说着，我迈出了停止的一步。站在结衣旁边，眼前是被红叶染红的京都街景。

虽然背上渗出了汗珠，但景色确实值得走到这里。我好像稍微理解了把登山作为兴趣的人的心情。

“好厉害啊。”

我坦率地说着，雪乃站在我旁边，不是看着街道，而是东张西望。

“怎么了，幸乃?”

“不是……因为上面写着这附近有个可以瀑布的地方。”

瀑布行……。虽然经常在电视上看到，但实际去瀑布的地方、能去瀑布的地方都没见过。在这样灵验的地方，有可以进行瀑布旅行的地方也不足为奇。

“你想试试瀑布行吗?”

穿着白色装束被瀑布拍打的雪乃的样子——虽然很想看，但那是相当超现实的景象。这孩子会不会本来就被瀑布的气势冲垮了呢?

“……是什么样的地方?我只是有点兴趣而已。你去试试怎么样?”

雪乃像是听到了我愚蠢的想象，有点吃惊地说。

如果被瀑布击中，我的烦恼和矛盾就会消失吧。如果真是这样的话，雪乃的玩笑倒也不坏。

“这个提案真不错，我带着换洗衣服就去挑战了。”

我以同样的口吻回答，突然长长地叹了口气。

\* \* \*

伏见稻荷之后的东福寺以通天桥而闻名，是赏枫胜地。

如果我还记得的话，应该在这里遇到过叶山他们……。

“真是个了不起的人……”

不愧是京都最具代表性的名胜，虽说赛季即将结束，但他还是个了不起的人。在这样的人群中寻找他们的身影，实在是不可能的事。

“真是个了不起的人……啊，那里空着呢。”

走在通天桥上，栏杆附近有一个勉强能容纳三个人的空间。滑进那里，终于不是越过人头，而是在整个视野里，看到了红得快要炸开的枫叶。

“真漂亮。”

刚才还因为人多而有些沮丧的雪乃，看到眼前的景象，也轻轻叹了口气。红叶和雪乃的侧脸组合得太上镜了，简直就像一幅精致的画作。

“啊，我们三个拍一张吧。”

结衣说着掏出手机，启动里面的相机。因为自然就会照那个站着的位置拍摄，所以我就会夹在结衣和雪乃之间。

“幸乃，再靠近一点。”

“嗯、嗯……”

两人的距离一下子缩短了，各自的香气微微地传到鼻腔。很近。为什么以前的智能手机内摄像头的视角这么小?

正当我千辛万苦想把三个人的脸都拍进去，却怎么也拍不到枫叶的时候，突然从正面传来了声音。

“借给我吧!”

被这么一说，站在被拿起的手机对面的是——。

“姬菜?太巧了!”

说着，一只手“嗯”了一声，high - 5。自己已经把参观路线告诉了户部，这个即兴表演实在令人不敢当。

“那就拍吧。”

海老名熟练地切换到前置摄像头，说了声“好奶酪”，拍了几张照片。虽然已经没有必要这么靠近了，但她们还是保持着刚才的距离，凝视着相机镜头。

突然有种强烈的既视感。我当然不记得三个人在这里拍过照。像这样三人合影是什么时候的事呢?

“谢谢。得救了。”

我和把手机还给结衣的海老名四目相对。时间很短，只有一两秒。尽管如此，我很清楚她言外之意是什么。

“你觉得怎么样?”

“嗯，再过一会儿，我打算去岚山转转。”

说着，海老名用视线指向同行的三个人。仔细一看，户部和三浦似乎兴致勃勃。叶山苦笑着看着这两个人，发现我后，直直地看着我。

这是什么……。又摆出一副若即若离就不好的表情。

“是啊，我们也打算顺路去岚山。”

“这样啊，那以后说不定还能见面呢。”

视线回到结衣和海老名的对话上，两人用眼神传达着对话的结束。

结衣走到叶山他们身边说了一两句话，就马上回到我们身边。

“已经可以了吗?”

“嗯，那边先去东寺，然后再去岚山。”

东寺，就是那个有名的五重塔所在的寺庙吧。正当我搜索着没有多少历史题材信息量的引言时，雪乃离开了栏杆。

“那我们差不多该走了吧。”

以此为信号，我们再次顺路走了起来。下一个目的地是北野天满宫。

北野天满宫的祭神是天满天神菅原道真公。

根据yukipedia提供的信息，菅原道真公出生于贵族家庭，自幼学业优秀，上了年纪后在汉诗和政治上发挥才能，是一个相当聪明的角色。如果用身边的人来比喻的话，大概就是叶山这种类型的人吧。一下子失去了参拜的心情。

虽说是为了世界的妹妹·小町的总武高中合格的祈愿。我决定只在画绘马的时候和他们分开，单独行动。被人看在绘马上怎么写，是写不出好东西的吧。

我买了学业护身符和绘马，一边回想当时写了什么，一边奋笔疾书。

“希望你能和小町上同一所高中。”

我想大概是写了这样的事吧。小町考上总武高中是已经决定了的事，不过，如果因为没有供奉绘马而被神歪曲了肚脐的话就麻烦了。我在供奉所挂上绘马，向雪乃他们等待的参道走去。

这里的北野天满宫似乎也是赏红叶的名所，人多得不得了，甚至还有靠这个来摆摊的。

雪乃他们一边走在参道上，一边环视四周，很快就发现了他们的身影。两个漂亮的女孩子聚在一起，视线会不自觉地被吸引过来。

“对不起，让你久等了。”

“啊，比想象的要早。”

结衣说着，手里拿着吃了一半的肉包。难得的是，雪乃手里拿着一块略大的炸肉饼，好像也买了吃。看他还拿着其他的空袋子，两人好像在填饱肚子。因为早上吃得很好，所以没怎么在意，原来午饭没吃好。

“……吃那么多没关系吗?晚饭都吃不下去了。”

“没问题的，这点小事。”

这句话好像在哪里听过，雪乃说，但她并没有理睬。

本来吃饭就很瘦，到底有没有问题……我一边担心一边等着两人吃完，雪乃吃了一半炸肉饼后，送饭的速度突然变慢了，不时地朝我看过来。

……明白。我知道。她接下来会说什么呢?

“……确实有点多。”

虽然说到了这里，但接下来的话就说不出来了。不过，以雪乃的性格，恐怕很难开口让她吃剩下的。

“如果是这样的话，这里有个名叫‘成长时期’的处理剩饭的人。”

“……是吗?那能拜托你处理吗?”

雪乃露出稍微放心的表情，把剩下的一半递给我。然后，在我把它吃个精光的时候，一对眼睛一直盯着我看。

“我可能也有点多……”

说完，结衣也说了声“是”，把吃了一半的肉包递给他。

果然会变成这样……我一边想着，一边在两人的注视下吃完了肉包子。开始吃的时候，胃开始蠕动了，意外地发现肚子饿了。

“呵呵。”

听到突然传来的笑声，她看向雪乃。她不由自主地露出柔和的笑容，和雪乃四目相对的结衣也笑了。

啊……又被喂食了吗?总觉得有点痒，不过偶尔这样也不错。

“……要不要慢慢走?岚山?”

两个带着笑容的回答让我不禁挠头。

\* \* \*

从那以后，我们按计划来到岚山，在户部的告白舞台——和上次一样，在竹林的道路上找到了目标。

回到饭店边吃晚饭边和户部们说话，他越来越不冷静了。

“哇!真紧张……我要吐了。”

“没问题吧?”

“啊，户部终于也有女朋友了。”

吃完晚饭刚一回到宾馆房间，户部就慌慌张张地走来走去，大冈和大和拍拍他的背。

他们的话本身是为朋友着想的吧，但没有任何根据，甚至让人觉得很空洞。正因为知道结局，所以才会这么想。

如果当场就不告白的话，我心里也会好受一些，但这是不可能的。一定要把户部——下定决心的他送到她面前。如果不这样做，其未来将会改变。

“户部。”

一个凛然的声音呼唤着他。我从房间的一头看到了那个声音的主人。

“什么?隼人君，我现在很紧张。”

“……不，我想说加油，还是算了。”

“太过分了。︎啊——不过好像平静下来了。”

从侧面看完全没有那种事，但户部却像在说给自己听一样，反复说着“紧张缓解了”。

相对的叶山，藏起那个表情，悄悄地走出了房间。我追着他的背影，走出嘈杂的房间。

走出酒店，沿着河边的小路走去。还处于最佳观赏期的枫叶在河面上摇曳，寒冷的风吹拂着脸颊。

“你觉得表白会顺利吗?”

“……”

叶山耸了耸肩，头也不回地说，大概不用看也知道我跟在后面。

“我换个问题，你希望顺利吗?”

“如果顺利的话，我当然这么想。”

叶山回头看着我，表情阴郁得几乎可以用忧郁来形容。虽然和这家伙在一起很不爽，但叶山应该也已经知道结局了吧。正因为近距离地看着他和她，才能洞察到。

“你这么说，听起来好像注定会失败。”

“……是啊。十有八九不会顺利。因为我不认为现在的姬菜会向户部敞开心扉。”

叶山捡起河滩上的石头，无可奈何地扔进河里。映着红叶的河面上泛起三道波纹，不久又若无其事地恢复了原来的模样。

“我劝过他几次放弃，说不是现在。虽然最后他还是不听。”

我尽可能捡起一块平坦的石头，滑到河面上，催促叶山继续说下去。它只跳了一次，马上失去活力沉入河底。过了好久，事情就不顺利了。

“我很喜欢现在的状态，户部也好，姬菜也好，都喜欢和大家在一起的时间。”

我记得很清楚，这句话我是怎么回答的。

“如果因此而破裂的关系，本来不就是这种程度的吗?”

我这么说着，否定了叶山的价值观。但我知道未来的事，已经不能再说同样的话了。如果看到一直珍视而不破坏的关系最终成为现实，就不可能说出口。

“也就是说，你什么都不想改变。”

“……啊，是这样。”

我听完之后，在心中描绘了接下来发生的事情。距离和海老名约定的时间已经不长了。

“我知道了，再见。”

他转身朝酒店走去。只要确认了叶山的心情，这里就没什么事了。

“对不起……”

“不要道歉，因为我欠你一分。”

我说着，轻轻挥了挥手。反正他也没看见吧。

\* \* \*

晚秋的风吹过竹林的小路。

在哗啦哗啦的声响中，一个个灯笼渐渐亮了起来。

“哇，真是太紧张了。”

户部直到告白的前一刻还没有冷静下来，叶山、大冈和大和一直在周围注视着他，不让他说什么。

“我都紧张起来了。”

“为什么……”

结衣忐忑不安地窥视着竹林道路的前方。与此相对，雪乃则沉着冷静。他的脸上毫无表情，让人怀疑他是不是完全没有兴趣。

“时间差不多了。”

“嗯。”

我对雪乃这么回答后，悄悄地离开了两人。这一点必须先确认一下。

“户部。”

我一招呼，户部就面带紧张、期待和不安，面带难为情的笑容。

“拉谷君……啊，哎呀，一看到拉谷君的脸，我又紧张起来了。”

我很讨厌……虽然这么想，但因为太麻烦了，所以还是放弃了。比起那个，我有件事必须要问你。

“你要是被甩了怎么办?”

“再次被甩的前提?”︎希代瓦拉谷君。感觉又在试探心理准备了吗?”

“好了，快回答。”

我眼神坚定地说，他的认真让户部瞬间退缩了。但他很快就给出了答案。

“……那是不能放弃的。”

“知道了。”

点了点头，轻轻地后退了半步。我把户部的全身都放在视野的正中央，不顾其他三个人在听，说道。

“绝对，不要放弃，绝对。”

“哦、哦……这是……”

一瞬间似乎被我的气势压倒了，但户部立刻以一副毫无意义的好表情回答。说到这里，已经足够了吧。

“…………”

“还真是稀奇呢。”

我回到雪乃他们身边，他们用柔和的表情迎接我。但是，一想到今后的事情，那种表情也让人心里堵得慌。

“不，我只是说可能会被甩。”

没错，一定会被甩的。“跟我一样”，现在就要被甩了。

望向青翠竹林的另一边，熟悉的制服映入眼帘。我们要等的人——海老名姬菜，沿着灯笼照亮的道路慢慢朝这边走来。

今后的事情，是同样的事情的重复。

但我知道光这样是不行的。即使虚假的告白不可避免，但我应该还有回旋的余地。

结果想来想去，也没能想出最好的办法，也不知道这样行不行。但可以肯定的是，雪乃比我所知道的过去更容易理解，她对我充满了善意。如果是以前的我，也许会刻意装作没发现他内心的微妙之处，但在现在的我看来，那是确定无疑的。

因此，至少要避免陷入不了解彼此心意的状态。

“雪下。”

这么一叫，看着竹林对面的两个人的视线转向我。

真是的，这是说这种话最糟糕的时机。即便如此，如果不说的话。无论如何，只要有可能，就必须改变。

“我喜欢你。”

这句话太唐突了，直截了当地说。我确实传达了那个。

雪乃惊讶地睁大了眼睛，一旁的结衣则低下了头。她觉得在结衣面前告诉她这件事是不对的，但如果错过了就没有时机了。

“我现在要做的事，希望你不要误会，我现在就告诉你。”

朝竹林的道路中央看去，海老名停了下来，正对面是因紧张而浑身僵硬的户部。

面对结结巴巴地说着话的户部，海老名脸上浮现出一张冷冰冰的笑脸。差不多是时候了。

“……对不起。”

我只说了这么一句，就背对着她们。

\* \* \*

一切都结束了，我怀着不愉快的心情回到竹林的小路上。

那是什么哇，夹杂着失望和安心的平静热烈的声音，就连竹林里沙沙作响的声音都听起来很遥远。

“……比企谷。”

听到那冰冷的声音，我抬起头一看，一副问责的眼神盯着我。

她双眸的温度低得让人毛骨悚然，宝珠般的瞳孔中浮现出些许浑浊。

“刚才那是怎么回事?你想干什么?”

想做什么是很清楚的事，但正因为无法用语言表达，才让人感到揪心。

她觉得雪乃冰冷锐利的视线比那时更锐利了。那一定不是我的错觉，那带着悲伤的声音像毒药一样绕到我的内心深处。

我赌一把，赌一把。

而且我输了。雪乃的反应，以及她身边浮现沉痛表情的结衣的表情，都让我知道了这一点。

只要避开这种不透明的感情，也许就能理解——我的想法完全落空了。

“为什么是你……”

雪乃握紧双手，说到这里停住了。

结果，没能让她明白。说理所当然也是理所当然的。既然我没有理解海老名的委托内容，那么我的行动只能看作是在肯定他们表面上的亲昵。

雪乃愤怒的理由是——这种感情的根源本来就是应该高兴的。正因为她把我看得很重要，所以不能原谅为别人受伤。

所以她才说不出话来吧。我为什么要为了他们而受伤呢?甚至不能直接说“我讨厌你的做法”。这句话的利刃仿佛正指向自己，令雪乃的脸上染上痛苦。

“……回到前方。”

说着，雪乃背对着我们走了。他的步伐很快，仿佛要表达留在这里的痛苦，我只能眼睁睁地看着他的背影越来越小。

“…………”

听到结衣的声音，我悄悄地把视线从他背后移开。结衣用无力的笑容掩盖了刚才沉痛的表情，看着我。

“我们也回去吧!”

“啊……”

我这样回答，慢慢地走了起来。

在这种时候也表现出温柔的结衣，又拯救了我。面对残酷现实的我，根本没有被拯救的价值。

“哎……”

走在灯笼照耀下的路上，结衣不看我说。那一瞬间，冷风吹过竹林，让人不由自主地打了个寒战，那树叶像下雨一样发出沙沙的声响。

“希基考虑了很多，才这么做的。”

那声音与其说是提问，不如说是确认，在我的脑海里嗡嗡作响。

——我是这么想的。应该是这样。

但如果有人问我，这难道不是装出思考的样子，结果委身于一副好人模样的粗鲁判断吗?我没有辩解的余地。

“…………”

落在小路上的结衣的视线，已经完全没有了当时那种紧紧依靠的幼稚感。

我行动的结果，把她原本还包含着的坦率都压下去了。而且，因为悲伤，她不得不长大成人。

“难道只有那个方法吗……”

结衣这个问题的答案，到现在也不知道。

就算重新来过，我也不知道。大概我无论重做多少次都不知道吧。

穿过竹林，我仰天找寻答案。散发着淡淡的蓝色光芒的月亮就像她一样，我想。

感谢您的阅读。修学旅行篇，是后篇。

没有刻意改变结局，恐怕会让人感到意外吧。

大人也有烦恼，犯错也是妈妈的事，甚至让人觉得是犯错的事越来越多了。

故事已经接近尾声。这个错误会给他们带来怎样的变化呢?

如果能守护到最后就太好了。

一色伊吕波多次这样说过。

修学旅行回来后，隔着周末的星期一。

这两天的休息日真是太难熬了。除了吃饭的时候，我都躲在房间里，没完没了地寻找答案。

那片竹林里苍白的夜晚在脑海里反复播放，自己却觉得不行，换句台词也说不出来。

但是已经是星期一了。

我不去学校，放学后还得去义工部的活动室。无论怎么自责，那一刻终究会到来，我没有选择和她们无关。

“啊，早上好，哥哥。”

洗完脸走进起居室，小町正在为我准备早餐。热腾腾的米饭和味噌汤的香气充满了鼻腔，阴郁的心情稍稍缓和了一些。

“早上好。”

我说着在椅子上坐下，准备好早餐的小町坐在我面前。我开吃了，他双手合十，并没有拿筷子，而是盯着我的眼睛。

“……嗯。你脸色好多了。”

“……我有那么严重吗?”

“太惨了，别说眼睛死了，连火葬都结束了。”

是吗，你的眼睛是那么灰色混浊吗?连爱妹都为我担心，看来我是不行不行的。

我为了逃避他的视线，端起碗，喝着味噌汤，小町战战兢兢地说了和上次一样的话。

“哎……发生什么事了?”

“……有过。”

“雪乃小姐和结衣小姐也有关系吗?”

“有…………这一切都是我的错。”

这么断言着看了看小町，眼前出现了一副泄气的表情。

“很少见……我还以为你一定会逃出来呢。”

如果是以前的我，肯定会这么做。但即使这样也没有任何意义，我清楚地记得当时兄妹俩吵了很久。没必要在这种地方重蹈覆辙。

“什么……”

我放下筷子，端正坐姿，直视着小町。作为哥哥，问亲妹妹这种事会怎么样呢?遗憾的是，合适的商量对象除了小町之外，我想不出其他。

“如果自己受到一点伤害，就能保护重要的东西，你会怎么做?”

“嗯…………太抽象了……”

小町虽然这么说，但并没有提出问题，而是一脸严肃地抱着胳膊。嗯，沉吟了一会儿。小町猛地睁开眼睛，用非常轻松的语气说道。

“嗯，至少要保护一下吧。”

听到他的回答，我不禁笑了起来，果然是兄妹啊。不过，我的问题才刚刚开始。

“那么，这样做会伤害到其他人吗?”

“这又是抽象的……这不是很简单吗?”

小町拿起筷子，“啪”的一声把筷子指着我。没礼貌。

“能保护的人和会受伤的人，考虑哪个更重要再做选择。”

小町说着把煎鸡蛋塞进嘴里，我一动不动地看着她。

对，是什么呢。

小町说得没错。这是一个非常简单、非常简单的问题。

我错的是那个选择。以为谁都能救得了他，但这种自满又伤害了她们。

“……谢谢。”

“……?为什么要道谢?”

我没有回答小町的问题，摇了摇头。

答案已经决定了。下次的选择不会错。这次一定要。

\* \* \*

从上学到放学，我一直保持沉默，静观教室里的一切。

每个人都保留着修学旅行的热情，但和往常一样。叶山他们一帮人也一样，没有什么特别的变化。不然的话，就麻烦了。

要说有一点在意的话，那就是结衣的视线经常朝这边看，这一点和以前一样。互相在意对方的样子是必然的吧。

我摇摇晃晃地走出教室，没有去特别大楼，而是走进了一楼的自动售货机柜台。买了热乎乎的罐头后，会在手里滚动一会儿，把热量带走。

打开拉环，一口、两口地咽下缠绕舌头的甜味。结衣也差不多该去义工部的活动室了吧。

罐头只剩一半时，我一口气喝干，把空罐头扔进垃圾箱。他走着和平时不同的路，向活动室走去。

刚走到活动室前面，就听到里面传来了窃窃私语。她们好像已经在活动室里了。

“…………”

我努力像往常一样打开那扇门。

瞬间停止的对话。连走廊都弥漫着沉默。

“……”

“……你好。”

“希基……”

桌子上放着盖着茶花的茶壶和两个茶杯。烤点心和红茶的香气令人怀念。

关上门，我坐在老座位上，也没有要继续对话的意思。这也难怪。

我甚至想干脆站在她们面前，为我的欺瞒和自满道歉。但这样做满足的只有自己，对她们来说什么也没有。而且，考虑到之后的来访者，我觉得还是不要太过反常为好。

“我还以为你今天不会来了呢。”

“啊，我顺路去了。”

我一边说着，一边若无其事地从包里取出文库本，翻开已经看完了的那一页。

从那以后，我们再也没有交谈过。结衣为了消除沉默，也没能找到话题的尽头，雪乃也一样。

只有翻页的声音和杯子放在碟子上的声音在房间里回荡。

这就是我选择的结果吧。比以前更加阴郁，连批评都没有的隔绝。但我做的不是后悔。我们必须集中精力做出正确的选择。

——咚咚。

因为房间里太安静了，所以声音很响亮。

“请进。”

雪乃用略显僵硬的声音说完，门咔嚓一声打开，冷风吹了进来。

“打扰了。”

说着走进来的是平冢医生，他梳理着被风吹乱的长发。

“有件事想求你……是不是不方便?”

大概是注意到了我们之间的沉默吧。平冢医生说完，依次看着我们的脸。

“不，没什么。”

听我这么说，平冢医生用手摸了摸下巴，点了点头。

这个问题只能由我来回答。雪乃是不会说谎的，所以代替她的应该是我吧。

“改一下比较好吗?”

雪乃和结衣似乎也察觉到了一言不发的违和感。平冢医生这么说，我却摇了摇头。

“不，我没事。”

说着看向雪乃和结衣，她们也微微地点了点头。虽然是让他这么做的，但如果错过了今天的时机，那就太不好了。

“你可以进来。”

平冢老师这么一说，就出现在走廊里的是现任学生会会长轱辘学长。

“有件事想和你商量一下……”

说着，从她身后踏出一步的，是一个亚麻色的中长发随风摇曳的女学生——一色色。

可爱的发型，大大的眼睛。只要和我四目相对……或许以前也是这样吧，她就会轻轻对我微笑。

以前在校内看到他，也只能远远地观望，再近距离看时，怀念之情涌上心头。高一年级的伊吕波浑身散发出令人目眩的魅力。

“啊，伊吕波。”

“结衣学长，你好~ ~”

看着她们轻轻挥手，我不由得松了一口气。太好了。到现在为止，几乎和那时一样。

虽然我觉得万分之一都没有，但是我至今为止的行动给予了各种各样的变化。如果蝴蝶效应不让这个事件发生的话，那可就麻烦了。

“你知道学生会选举马上就要开始了吗?”

围绕前辈的这句话开始的对志愿部的委托内容，和那时没有任何变化。

姗姗来迟的学生会选举。会计以外的候选人也出现了，之后就等着信任投票了，但是在伊吕波意想不到的情况下被推选为学生会会长。那份希望设法避免被选为学生会会长的委托内容，和那时没有分毫的差别。

“是不是因为是一年级学生，就不能当学生会会长?”

“不会的。”

“章程里并没有规定会长只限二年级学生。”

雪乃立刻回答结衣的问题，学长也补充道。

回想起来，从这段对话中，也能推测出雪乃的心情。连学生会的选举规则都能掌握的佩迪雅小姐，这可不是那种话。

也就是说，记忆这种东西能否固定下来，取决于兴趣和刺激。能把读过的东西原封不动地记住，除了被称为gefted的特殊人才能做到。因此，雪乃当时的发言，正是她对学生会感兴趣的佐证。

“也就是说，要么在信任投票中失去信任，要么只能推举新的候选人。”

雪乃总结了一下情况，在场的所有人都沉默了。

我已经不再大言不惭地说只要落选就行了。因为这样的事产生摩擦已经很勉强了，今后发生的事情没有任何意义。

“老实说，不信任这条线很严峻吧。”

说着，我朝伊吕波瞥了一眼。

谁都看得出来，伊吕波是个非常可爱的女孩。不管助威演说多么糟糕，选举演说多么拖沓，首先都会得到信任。即使把马候选人撞在一起，半途而废的人也无法分出胜负。

假设演说的内容和选举公约是势均力敌的内容，很多人都会做出这样的判断。作为学生会长，“进入视野后感觉很舒服”的是哪一种?

每个人心中都隐藏着这样残酷的判断标准。

“那么，找一个可以做的人……”

“要是有这样的人，早就参选了吧。”

我委婉地否定了结衣的提议。结衣似乎也明白这一点，视线落在桌子上。雪乃看着我，似乎想说些什么，但刚张开的嘴唇又恢复了原来的形状。

“有什么办法吗?”

本应是当事人的伊吕波，却像个局外人似的，慢条斯理地说。现在的我明白，她的态度是为了消除这种沉闷的气氛。

“说实话，我实在想不出什么好办法。”

我双手交叉在脑后，仿佛在说“束手无策”。伊吕波看到我的样子，脸上带着笑容看着我，但装作没注意到。

“好像还没得出结论。”

看到我们不再说话，平冢医生从靠在墙上的墙壁上站起身，说道。

“一色小姐，明天再给我吗?”

“啊，是的。”

听到雪乃凛然的声音，伊吕波不由得坐正了身子。今天到此为止。

“那明天见，请多多关照。”

伊吕波从椅子上站起来，面向雪乃殷勤地鞠了一躬。对雪乃还没有习惯的感觉，让人无比怀念。

平冢老师带着前辈和伊吕波离开了活动室，我们之间再次迎来了无声的时光。按照刚才的对话，这种沉默可以被称为“沉思”。但现在的我不需要那种安慰。

“……我该回去了。”

“啊……嗯……”

我说着站起身，背起包。在两人看来，在放学时间之前主动回家，可能会觉得很奇怪。也许会被认为是无法忍受这种气氛而想要离开，但我绝不能放过这个机会。

我没有回头看她们——故意不看雪乃的表情，离开了义工部的活动室。走到走廊上，我的脸颊散发着冬天的气息，我快步走着。

下了楼梯，正好走到通往空中走廊的岔路口，看见伊吕波向谁挥手。从他的动作来看，应该是和前辈分开了。

“一色。”

我快步追了上去，对着他的背影说。伊吕波像发现天敌的小动物一样猛地跳了起来，回头看着我。

这么说来，对她来说，我叫她名字还是第一次吧。而且，突然有人从背后叫住你，吓一跳也不难理解。

“啊，是…………怎么了，前辈?”

伊吕波刚一回头就露出了警戒心，但一知道是我，马上装上了紧急制造的笑容。

“明天我会再来跟你说的。结束后，你能给我时间吗?”

“啊……我明白了……”

我很在意他的话的结尾，等了一会儿，他收起笑容，露出微妙的表情。

“你的意思是，不能告诉结衣前辈他们的内容吗?”

“啊，对了。”

我毫不隐瞒地说完，伊吕波瞪着走廊的墙壁移开视线。不过，这种反应也只是一瞬间的事，下次四目相对时，她又变回了可爱的女孩。

“我知道了。那明天就拜托你了。”

“嗯。”

我说着转身离开，走廊里响起了一个脚步声。

我还是装作没注意到背后刺痛的视线，继续往前走。

\* \* \*

第二天放学后。

在义工部的活动室里，我们又按照各自的距离坐成一排。

“那我再请教您吧。”

雪乃这么一说，伊吕波很有精神地应了一声“是”。这声音稍稍响起之后，活动室里便充满了静寂。

“啊………………我不想当学生会主席，所以想落选。”

伊吕波注意到有人给了他话题的线索，便挺直了身子开始说。

“在信任投票中，比起不信任投票，最理想的是决战投票!输给谁都赢不了的厉害的人是最好的。”

恐怕伊吕波还没有完全想象到其中的困难。活泼的声音变成压力压在我们身上。

“决战投票…………”

“还是去参选，找一个愿意做的人，还是说服他?”

雪乃抱着胳膊，闭上眼睛，结衣在她身旁低声说道。我也夸张地叹了口气，表情变得更加难为情。

“即使有，也有三十名推荐人的签名，还有选举承诺和选举活动……”

他的声音很沉闷，似乎在强调这种可能性很低。雪乃没有丝毫反应，只有结衣悄悄垂下了视线。

“还是感觉很难啊……”

伊吕波似乎也认同我们的反应，完全垂下了肩膀。即使在重新做的过程中，这种困难也不会改变。

“不管采取什么手段，都必须让一色先生站在讲台上。”

“嗯，这倒是没关系……”

雪乃睁开闭了一会儿的眼睛，忧伤的眼睛里映出冷却的红茶。但是，当她把视线转向伊吕波时，她的眼睛里浮现出微弱的灯光，仿佛从一开始就没有这种态度。

“我觉得不管怎么说都是必要的，所以事先考虑了一色的公约和演讲内容。”

“嗯……真了不起……雪下前辈，工作真快啊……”

明明是为自己而做的事，伊吕波却有些犹豫。就是这样，伊吕波斯。

“可是，只有两个吗?”

伊吕波从雪乃手中接过写有选举公约的纸，重新检查内容后露出惊讶的表情。

“不，我也觉得应该很少。”

“这种情况下，并不是说人数越多越好。最重要的是，你是想落选吧?”

“这是……是的。”

雪乃沉着冷静地说，伊吕波用手摸了摸下巴，故意做出反应。

我仔细观察着伊吕波的样子。她对现在的状况一点都不紧张，难道她真的不想当学生会主席吗?我突然想到了这种可能性，静观他们的对话。

“……前辈有什么好的方案吗?”

大概是在意我的视线吧，四目相对后，他微笑着问道。被我的腐眼睛盯着还笑脸相迎，果然是一个可怕的孩子……

“不，完全没有。我从昨天开始想了想，也没有合适的办法。”

对于这个问题，我只能这么回答。我有必须这么做的理由。

我这样回答后，对话就中断了，沉默越来越深。寂静得连叹口气都觉得麻烦，伊吕波的表情也凝重起来。

“总之，我先去问问有没有可以帮忙的人。”

“是啊…………在考虑解决方案的同时，我们也一起推进吧。”

听了结衣的提议，雪乃悄悄地说道，只觉得空气轻松了几克。今天就到此为止吧。

“一色先生，解决方法我们会继续考虑的，不过能不能拜托一下请谁来做声援演讲?”

“啊，是的。我想找个合适的男生帮忙。”

坦率地说，我朋友的女孩子之类的不说，这才是黑暗的深处……这也可以说是伊吕波的魅力。

“那就拜托了。”

伊吕波从椅子上站起来，深深鞠了一躬。事情毫无进展，从他的举止来看，和昨天相比没有任何变化。

伊吕波一离开，房间里再次陷入一片寂静。无法产生对话。也就是说，你可以理解为相信我说的没有任何方案。

“……我也回去。”

“希基……”

就像昨天的回放一样，看来他还是有什么想说的。结衣这样问道，但似乎无法很好地表达出来。

“我也想想看。”

“嗯……拜托了。”

一边对结衣这么说，一边瞥了雪乃一眼。虽然只有一弹指一男子之间的对视，但她低下头，闭上了眼睛。

现在回想起来，只是不像那时那样互相批评对方的做法，或许还好一些。或者恰恰相反，可能连争吵这种交流都没有成立。

我关上活动室的门，为了不让她们听见，叹了口气，开始在走廊里寻找伊吕波的身影。

\* \* \*

“那么，有什么事吗?”

和昨天一样，我们在通往空中走廊的岔路口相遇，坐在特别大楼一楼外保健室旁边的楼梯上。

从网球场传来球“嘭”“嘭”的弹跳声，那熟悉的声音甚至让人觉得像牧歌一样。

“啊，这个…………能先告诉我你的联系方式吗?”

“什么?”

伊吕波瞬间变了个样子，挪了挪腰，留出了一个人的时间。

“……你的意思是说，两个人在一起的时候有点不方便吗?嗯，如果只是想知道对方的联系方式的话，那是因为我现在有喜欢的人，所以不好意思。”

“不是……是为了选举学生会会长。”

我打断伊吕波的话，毫不掩饰地叹了口气。他的语速没有像往常一样快，看来距离感还没有拉近，这暂且不提。

“刚才你说没有解决办法，我只有一个办法。”

“是……”

伊吕波全力投来惊讶的目光，我想这也难怪。在她看来，我的行为太莫名其妙了，离被认定为危险人物还差一步吧。

“这和交换联系方式有什么关系?”

“我只能说有，解决方案的内容还不能一概地说出来。”

虽然觉得这是不可能的，但如果伊吕波告诉雪乃和结衣的可能性有一点点的话，还是不要告诉他们为好。但是只有我一个人接受了这种推进方式，伊吕波终于要把我从可以信任的人名单中除名了。不，说起来，我的名字有没有出现在那张名单上也是个疑问。

“具体来说，不能说…………夜里有没有发奇怪的短信?”

“不死……”

雪乃也好，伊吕波也好，对我有什么印象呢?就像别人说的，我长着一双罪犯的眼睛，要想赢得别人的信任，就要看我今后的行动了。

“要说一件具体的事的话，有必要请一色帮忙，所以想交换一下联系方式。”

“嗯……这个嘛，要是我不做学生会会长就好了。”

伊吕波不情不愿地拿出手机。

交换完联络方式后，我盯着伊吕波的脸。为了确认她的想法是真心的。

“一色。”

她故意用硬邦邦的声音这么叫，伊吕波似乎察觉到声音的异质，正了正身子。伊吕波瞪大眼睛认真地看着我。

“你真的不想当学生会会长吗?”

这个问题，无论怎么想，无论怎么看，都是为我而提出的。

我会在这次学生会会长选举中做出巨大的改变。理由很简单。今后的事情就算按照自己知道的那样去做，也救不了谁。不能再这样回到原来的世界线的未来，是无法接受的。

而且在这个世界线上，我和雪乃在志愿部的“胜负”是不存在的。因此，即使重现当时的情景，也一定会在某个地方受挫。我坚信，比起这种不安定的未来，面貌大变的未来更光明。

“是啊，我昨天就说不想干了……”

伊吕波露出一副“事到如今还问什么”的表情，从肩头到后背的紧张终于放松下来。

这么一来，我也下定决心了。

一色伊吕波已经当不上学生会长了。也就是说，在伊吕波的人生中，作为高中一年级学生会长的宝贵经验会被遗漏，也不会像原来的世界线那样和我们有很深的关系。关于这一点，虽然有办法解决，但关系能否持续下去，就会变得扑朔迷离。

但是现在是选择的时候，不能出错。正如小町所说。“选择哪个更重要”，这个残酷而单纯的行动原理，会改变这个世界线的学校生活和人生吧。

“知道了。剩下的事情就交给我吧。准备好了就联系你。”

我说着站起来，背着包仰望天空。

我瞪了一眼暗红色天空中鸟影雁行的样子，转身。

\* \* \*

从第二天开始，我就不再出现在服务部了。

我只联系了雪乃和结衣，说“想一个人考虑解决方案”，结果那一周一次也没参加社团活动。

为了促使她做出决断，有必要这么做。我待在那个房间里，我的意见多少会对她们的想法产生影响吧。

周六周日，星期一。

和以前一样，我心不在焉地听着上午的课。第四节是现代文，是平冢老师的课。

一边听着粉笔噼里啪啦敲黑板的声音，一边一个劲地抄板书。结束后，门铃正好响了，大家各自收拾教科书和笔记本。

尽管如此，我还是继续看着黑板的方向，必然地与平冢老师四目相对。

“比企谷。”

“……是……”

平冢医生深深叹了口气，平静地说。

“一会儿到教职员办公室来。”

平冢老师只说了这么一句，就走下讲台，走出了教室。我把教学用具放回课桌，走出教室追平冢老师的背影。午休的走廊上，来往的学生络绎不绝，和往常一样热闹。

进了教职员室，就进入了设在里面的会客区。玻璃茶几和黑色皮沙发，只在我心中充满乡愁地存在着。

“……今天早上，雪下来找我谈话了。”

我们面对面坐在沙发上，平冢医生吸了一口紫烟后说道。

“听说他要参加学生会会长竞选。”

“是吗?”

听到这句话，我不知不觉间放松了肩膀上的力气。对雪乃来说，学生会会长这个职位果然很重要，即使在这个世界线上，她的决定也不会改变。

“什么啊，你不惊讶，听她说了吗?”

“不，我只是觉得，在雪下，这么说也不奇怪。”

现在想来，岂止是不奇怪，反而是必然的。

雪乃想超越阳乃。我想证明，即使不能实现，我也可以与之比肩。对雪下的家，最重要的是对自己。

她的这个选择，在阳乃看来，就是一直追在后面，永远不变的妹妹吧。但是雪乃真正的目的并不是成为阳乃。她的目的是追寻从小的梦想，而不是追着阳乃的背影走，现在她明白了。

“声援演讲好像是叶山做的。”

我没有回答平冢医生的话，反复回味着我所知道的世界线上发生的事情。

伊吕波第一次来志愿部的那天，回去的路上，我碰巧在一家甜甜圈店碰见了阳乃。再加上折本的加入，叶山也被叫了出来，登场人物越来越多，不知不觉间就变成了在那个礼拜的星期五进行W约会之类的事情。在那个过程中遇到的雪乃和结衣的表情，至今都无法忘记。

我当然不会放过这样的活动，所以那天我回避了和阳乃的邂逅。根本没有必要伤害她们。

不过，这一变化似乎并没有影响雪乃的想法，叶山这张最可靠、最强的王牌已经掌握在自己手中。叶山被雪乃拉进自己的阵营就有点不方便了……嗯，总有办法的吧。只能勉为其难。

“那你打算怎么办?”

平冢医生在烟灰缸里摁熄烟头，直直地看着我。对此我的回答是，我已经决定了。

“那是肯定的。我们会尊重雪下的意愿，为他加油。”

在我的脑海中回放的，是在迪丁尼乐园发生的事。登上雪碧山后休息的时候，她说‘我想要你和姐姐都没有的东西’。

我想她一定也搞错了。把目的和手段颠倒了。尽管如此，我还是尊重雪乃的决定。

“因为我觉得只要有它，就能救你。”

紧接着她说的那个应该拯救的人，问了也被回避了。但那一定是她自己的，是拯救她的唯一方法。

“……是吗?”

说着，平冢医生用充满慈爱的眼神看着我。这是残酷而令人怀念的景象。那淡淡的焦油香味，那清澈透亮的眼眸，都让人久久不愿放手。

“但是，光这样还不行。”

我用裤子擦了擦手心的汗，握在膝盖上。

“我也要向平冢医生说话……或者说，有件事想拜托你。”

我实在无法忍受，我接下来要说的话将那光景扭曲了。

即便如此，我还是不得不说。放在西装口袋里的那张纸上，只有两个字。

“救我!”

真正响应这个指令的时候到了。

为了拯救我最重要的人。我直直地盯着平冢医生的眼睛说。

“请让我把服务部废除吧。”

感谢您读到这里。

很快，下一个故事就是最终话了。

如果这次也能收到您的感想的话我会很高兴的，但是我有个习惯，总是在回信的时候回答一些别人没有问过的问题……。

因为想让大家不剧透地享受到最后，所以感想会在完结后回复。请您谅解。

那么下次，最终话见吧。

再见了，义工部。

“……对不起，能再说一遍吗?”

“他说想把志愿部废除。”

平冢医生惊讶得差点睁大眼睛，但我努力克制自己，冷静地对他说。

虽然我觉得说明不够充分，但说话这种事，先得出结论更容易传达。平冢老师用眼神催促我继续说下去，我继续说。

“如果是在雪下的话，我想我一定会顺利地赢得选举，成为学生会会长。不过参加学生会选举的不只是雪下，我和由比浜也会参加。”

“……是这样吗?”

也许是领会了我的意思，平冢医生摆出雪乃平时那样抑制头痛的姿势。

平冢老师果然是“我们的老师”。我可以盲目地相信，不用我说太多，你已经完全明白我的意图了。

“义工部虽然消失了，但我们要做的事情不会变。如果平冢老师有需要商量的事情或委托的事情，希望他能帮我们介绍到学生会。”

“那也没关系……”

说到这里，平冢医生闭上了嘴，又取出一根烟，点上了火。那句话的后续，我自以为也明白。

为什么要取消服务部呢?

虽然没有听说过义工部创立的经过，但对平冢医生来说，义工部应该是一个特别的地方。理解我的想法和迁就服务部的想法是两码事。

但即便如此，我还是认为义工部应该废除。如果我们加入了学生会，在志愿部成员之前，学生会干部的头衔和责任就会随之而来。这样一来，学生会的事情就变成了最优先的事情，实际上志愿部就是个半途而废的存在——这和消失没有什么两样。我和她都没有自信适应这种状态。

“她们知道吗?”

“不是…………我只是假设雪下说要竞选会长，才这么想的。”

“是吗?那就快点吧。因为候选的截止日期快到了。”

“嗯，我会的。”

我站起来走了起来，在离开会客区之前回头。我对着坐在沙发上吐着烟雾的平冢医生深深地鞠了一躬。

“不好意思，我自作主张。”

“没什么好道歉的。……我对你的委托，好像已经顺利完成了。”

平冢医生在烟灰缸里熄灭刚点燃的香烟，站起身来对着我。平冢医生的眼睛像冬日清晨一样清澈，所以连一脸没出息的我都被他鲜明地映在眼里。

“比企谷，请你亲口告诉我，你现在感到孤独吗?”

平冢医生眼中的男人对这个问题露出苦笑。

真是不像老师的愚蠢问题。答案已经很明确了。然而，我扭曲到无法坦率地回答这个问题，只有想法是笔直的。

“如果我说这样就孤独的话，他们会生气的。”

“……如果能听到的话，我就没有什么遗憾了。”

平冢医生轻轻地将双手放在我的肩膀上。下一个瞬间，他把我的身体旋转一百八十度，推了推我的后背。

“你去吧，她们应该都在活动室吧，午休时间是有限的。”

“是的。”

我很想知道平冢医生现在是什么样子，却没有勇气回头。

他顺势推着我的后背，快步走出了教职员室。走到走廊上，我感觉平冢医生的目光还在盯着我，于是我挺直了背，加快了脚步。

\* \* \*

来到服务部的活动室前，我调整了一下微微上扬的呼吸。

我抬起头，看着雪白的签名牌。我还能再看到几次这样的情景呢?想到这里，我放弃了。没有时间感伤。

“…………”

我把手搭在门上，一口气打开门，只见拿着筷子的雪乃和结衣正呆呆地看着我。

桌子上放着两个小小的便当盒。今天她们好像也在这里一起吃过午饭。

“雪下。”

我抓起那把椅子，在雪乃面前——原本委托人应该坐的位置坐下。

“刚才听平冢老师说，他要竞选学生会会长。”

“什么……”

我这么一说，雪乃垂下了眼睛，结衣则发出了轻微的惊讶。雪乃好像还没把参选的事告诉结衣。

“接受了你的建议，我有个建议。另外，我还委托了雪下和由比浜。”

她用明确的语气说着，直视着雪乃的眼睛。长长的睫毛翘了起来，那双眼睛抓住了我，她放下筷子张开了嘴。

“……我有话要说。”

“先从提案开始。”

我把视线从雪乃身上移开，看着结衣。结衣不知何时也松开了筷子，比平时挺直了腰板。

“我也要参加学生会选举。”

“…………等一下。希基也要竞选学生会会长?”

“不，不是这样的。接下来是委托……”

我重新坐回椅子上，把结衣放在正面。张大的嘴和眼睛，听到下一个发言后会睁得更大吧。

“我希望由比滨作为副会长参选，我作为书记参选。如果全体成员都当选的话，志愿部就废部，把活动移交给学生会。”

结衣似乎还没来得及理解，他眨巴着眼睛，在脑子里全力运转。

“…………为什么连你们也有必要加入学生会?一色先生的委托是为了避免成为学生会会长。如果是我的话，那就是——”

“光这样还不行吧?”

我打断雪乃的话，直直地盯着她。他回视我的眼神，仿佛点燃了蜡烛大小的火。

“志愿部会怎么样?没有你，能有什么志愿部的名字?”

“这个……没关系。我自认为理解学生会的工作，这个社团也能继续下去。”

“不可能。雪下是专注于一件事的人，学生会忙的时候就专心做，只有空闲的时候才参加志愿部吗?你以为我们什么都不想吗?”

雪乃眼中的火焰在晃动，长长的睫毛再次垂下。

连我自己都觉得自己说得太狡猾了。即便如此，如果不当场说服她，就没有未来。

“与其这样，还不如单一化到学生会里，这倒是个好主意。”

“……我不能把你们牵扯到我的独断之中。”

“不是这样的。”

突然这么说的，是刚才一直保持沉默的结衣。

结衣在椅子上转向雪乃，用从未见过的强烈视线看着她。

“把她卷进来就行了。以前不也是这样吗?我也好，希基也好，都想待在幸乃身边。只有这个理由不行吗?”

这句出乎我意料的帮助，让我的心一下子堵了起来。

回想起来，结衣的话总是能戳中本质。正因为如此，他的话才会如此强烈，不容反驳。我真的总是得到她的帮助。怎么做才能把钱还回来，我都不知道。

“希奇。”

结衣转向我，同样坚定的视线投向我。言外之意，他已经做好了心理准备。

“希基的提议，我会接受的，但是我会拒绝。”

“……是?”

“副会长由希基担任。”

面对目瞪口呆的我，结衣继续说。

“……说这话的人不就是个偶人吗?而且我觉得非偶人不可。”

结衣很想问为什么，但眼睛里的力气已经放松了，似乎不打算继续说下去。

结衣看着雪乃的眼睛，拉起她的手，用祈求般平静的声音说。

“行吗?幸乃?”

结衣的那只手，不知道有没有被回握。光从侧面看是看不出来的。

“……你是认真的?”

“我是认真的。就算别人说不行，我也会自己去参选。”

看到结衣爽快地说着，雪乃突然短暂地叹了口气。她眼中的火焰已经完全熄灭。

“我知道了。……对不起。”

“不，那也不对。这种时候，说声谢谢就行了。”

“是吗?”结衣微笑着说，雪乃松开了紧闭的嘴。

“是吗…………谢谢。”

雪乃说着，将左手搭在握住右手的结衣手上。她那小小的举动让我联想到雪的融化，我不禁为那耀眼的景象眯起了眼睛。

“比企谷。”

她转向我，用消失了迷茫的眼神正视着我。

“我想听听你对我的委托内容。”

“啊，是这样……”

说实话，在这样的气氛中，实在难以启齿。这真是太无情的请求了……

“听说你拜托叶山做声援演讲，不好意思，请你回绝。我想拜托他做声援我的演讲。”

“那倒没关系……为什么?”

“说实话，如果是在雪下或由比浜，不管谁发表声援演说都能赢得选举，但我做不到。我和你们不一样，无名也是一大优点。我打算让一色和叶山帮忙召集推荐人。”

“原来如此。”两人点了点头，但这实在是一件令人寒心的事情。但是背不能代替腹。只有我落选了，真的很不潇洒。

“……还是快点比较好。我们三个人要召集九十个人的推荐人。”

“嗯……但是一定没问题的。”

结衣说着，将右手放在雪乃双手握住的左手上。

“到现在为止，一切都是想办法解决的。我也会努力的，一定没问题的。”

她那温柔的声音就像在开导孩子一样，连我都安心了。

至此，服务部的方针终于定下来了。

如果没有太多的变动，志愿部就会消失。失去一次，小町又重新开始的那种复活是不可能的。这次服务部要彻底消失了。

“……那后面的详细内容，放学后再说吧。”

看了看表，午休时间已经不到十分钟了。午饭完全没吃，但不可思议的是，并不觉得饿。

“嗯，回头见。”

“嗯……”

我对她们露出安心的表情点了点头，站起来离开了活动室。

走到走廊上，“啪”的一声关上了门，不由得长舒了一口气。就在这时，他那夸张的叹息声传到了耳朵里，仿佛和他的呼吸重叠在一起。

“……你是从什么时候开始在那里的?”

“……是你进房间后一会儿。”

叶山隼人背靠着墙，看也不看我。

“对不起，我本来没打算问的，但是门开了一点。”

也就是说，叶山全都听说了。

我所知道的世界线只是在走廊上擦身而过，但叶山本来是被叫到活动室去开会的。

“没关系，因为省去了解释的工夫。”

我走了起来，叶山也跟着一起走。他已经没有任何理由来服务部的活动室了。

“把借给我的……还给我。叶山。”

“真贵啊。”

从喉咙里发出的喘息声让叶山苦笑了一下，他在走廊正中央停下了脚步。我也停下脚步，回头看着他。

“帮我倒没关系，只是告诉我一件事。”

他的眼睛比平时更严厉，有时甚至会亮起苍白的火焰。看到我转身，叶山用沉重的声音问道。

“你到底是哪一种?”

又在问这个问题啊，我不禁仰望天花板。

但叶山的心情，我也能理解。他以他自己的方式对待着她们。既然如此，就应该尽可能真诚地面对对方，这才是礼仪吧。

“我喜欢的是雪下。只要是为了雪下，我什么都愿意做。所以我也要参加学生会选举。”

听我这么断言，叶山仿佛被他的气势所震慑，瞠目结舌。但眨眼之后，又被不同的感情支配。

“那结衣……结衣的心情会怎么样?你应该也注意到了吧?”

叶山的脸上浮现出一副苦思冥想的表情，眯起的眼睛险恶地盯着我。

看着他的脸，我突然感到安心了许多。

结衣的周围有很多人。其中有真心为她着想的人，比什么都可贵。

“即便如此，答案也不会改变。因为在雪下是必要的，所以由比浜也要加入学生会。”

“结衣会因此受伤吗?”

叶山的这句话，让我的脑海里浮现出很久以前的事情。她在通往东京湾的河口桥上抽着烟说。

“珍惜某个人，就是做好伤害那个人的心理准备。”

简直就像是为了给现在的我找借口。尽管如此，我还是相信这句话戳中了真理，没有错。

“……即便如此，我还是希望由比浜能待在雪下。再说，在这种情况下，只有由比浜不加入学生会，会很受伤吧?”

叶山听了这句话，目光突然减弱。她终于明白了我的真意。

“我明白比企谷的心情。……也许是多管闲事，但请不要半途而废。”

“…………我可不想让你这样说。”

我忍不住哼了一声，叶山瞪了我一眼。他的反应似乎说中了，对于以坚垒健垒著称的他来说，这是罕见的反应。

“完全不像是求人办事的态度。”

“我没求你，只是让你还钱。”

“你真是个好性格啊。”

预备铃“叮”地响了。不快点的话，第五节课就要迟到了吧。

我和他好像聊了很久。我们再次迈步，从此再也没有交谈过。

\* \* \*

放学后，我就去义工部的活动室——前面，我有一个要去的地方。

和几天前一样，特别的一楼外面。我呆坐在保健室旁边只有三层的楼梯上，等待着约定好的那个人。

“辛苦了。”

轻快地说完，出现的是服务部的委托人一色伊吕波。

伊吕波一边把裙子的一角折到膝盖里，一边在我旁边坐下。

“能告诉我解决方法吗?”

“嗯。”

他和伊吕波对视了一下，然后轻轻叹了口气，盯着柏油路。然后尽可能简单易懂地说明今天午休发生的事。

雪乃成为学生会长，完成伊吕波的委托。我和结衣也加入了学生会，志愿部的功能移交给学生会。每当提到这个解决方案已经得到平冢医生的同意时，伊吕波的眼睛就会睁大。

“嗯……你是认真的吗?为了不让我当上学生会主席，你这么做吗?”

“是啊。而且，我觉得在雪下也可以做……或者说，我想我是想做的。不然怎么会记得学生会选举的章程呢?”

听了我的回答，伊吕波不知在想什么，一脸茫然的表情。在伊吕波看来，这是相当粗暴的解决方法。

“那就好……学生会和志愿部的活动能兼顾吗?”

“那里应该没问题吧?社团本来就很闲。”

而且伊吕波进入志愿部后，几乎都是和学生会有关的工作。所以作为实绩··能断言那个没问题。

“嗯……我只有一个疑问。”

伊吕波停了下来，盯着我的眼睛。他目不转睛地盯着我，不让我从他的动作和表情中看出他的真意。

“为什么不是空着的会计，而是要竞选书记呢?就算全体当选，也缺一个人啊?”

伊吕波的疑问很有道理，其实也是个难以回答的问题。

小町进总武高中的时候，志愿部应该已经废部了吧。在原来的世界线上小町希望守护的那个地方，将会消失。所以作为代替的位置，想空出一个座位。

但是，我不可能把这种想法说出来，我只说了另一个理由。

“人数少确实是一大损失……即便如此，我还是想由服务部的三个人来做，不需要我们以外的杂质。”

说完，伊吕波一脸茫然地看着我。

“是……啊。”

“不，……什么也没有。”

虽然怎么看都没什么，但我还是不再追问了。恐怕结果只能是自掘坟墓吧。

伊吕波突然站起来，好像想到了什么，站在我的正对面。然后漂亮地弯下腰，低下头，保持着那个状态说道。

“对不起，把前辈们卷进来了。还有，谢谢你们。”

“住手!”

我制止了他，伊吕波慢慢抬起头。她的眼神很认真，我好像很久没有看到她那样的表情了。

“我可没说过要免费接受这种任务。”

“是……?”

因为我的一句话，那张原本严肃的脸浮现出惊讶的表情，仿佛在说:“这家伙到底在说什么?”

“答应我一件事，学生会有困难的时候，或者人不够多的时候，请帮我一把。”

“……是……那倒没关系。”

“真的吗?”

“嗯，当然可以。因为是我的请求才让你接手学生会的，这点小事我还是会做的。”

“真的吗?”

“哎呀，真烦人……我说要做啊。我会帮助前辈们的!”

“好!”

我听到这里站起身，把手机放到伊吕波面前。

按下画面中的播放按钮，就会播放几十秒前的对话。伊吕波会帮我们的忙，会帮我们的忙，在小小的壳体里这样证明。

“我已经答应了，你一定要来帮忙，一色。”

“是……吗?真的是这个人吗?”

我对着缩成一团的伊吕波扬起嘴角。

这是我送给伊吕波的，和我们有关系的借口。当然，就算给了她理由，她能不能和我在一起也要看她了。

“那么，你就一边和叶山商量一边进行规划吧，我已经拜托你了。”

“是……”

看到伊吕波垂头丧气地叹着气，我放松了一下，转身走了。

本来就是个认真的伊吕波。一定还会像那时一样——这次会泡在学生会室吧。现在只能这么相信了。

进校舍之前，我抬头看了看活动室附近的窗户。

好了，现在是和她们见面商讨选举事宜的时间了。我必须把活动室里的情景，把我们三个人的时光，都铭刻在心里。

因为我在那个活动室里度过的时间已经所剩无几了。

\* \* \*

从那以后，为了学生会选举，我每天都很忙碌。

学生会选举的推荐人集合、应援演讲者的确保、各自的选举公约的决定、演讲脚本。为了防止万一，在仔细阅读学生会选举章程之前，我们以一丝瑕疵都不放过的集中力和觉悟进行着选举的准备。

到了十二月，终于到了学生会选举的当天。

今天第三、第四节课，全体学生被召集到体育馆，进行学生会选举演说。收集到的投票用纸将在当天开票，放学后所有的结果都会揭晓吧。

我和结衣被带到了候选者的舞台侧翼前室，坐在椅子上等待出场。就是在拍摄毕业舞会宣传时，用来换衣服的那个房间。

坐在对面的副会长和书记——这句话在这个世界线上有些语病，遗憾的是，不记得本名的两个人都一脸紧张地等待着出场。

包括坐在她旁边的伊吕波在内，她们的学校生活又迎来了与原本应该过的日子不同的日子。一想到因为我所带来的变化，副会长和书记再也不会来往了，我就觉得最大的受害者应该就是他们了……不过这也可以通过学生会的活动或者其他什么事情，强行把他们拉到一起。没有。虽然觉得很不负责任，但我已经不能再继续犯错了。

“幸乃，你太慢了。”

对结衣的问题，我简单地回答了一声“啊”。确实，这是很少见的事。这种时候，她应该是第一个站在这里的。

就在她这么想着的时候，有人敲了一下门。正当他犹豫该不该回答时，敲门几秒钟后，门被打开了。

“嗯……”

一瞬间，我不知道进来的是谁。

站在那里的应该是刚才大家都在谈论的雪之下雪乃，却不是我熟悉的她。

“雪农，头发……”

“嗯。”

让人产生强烈违和感的是她的头发长度。雪乃标志性的长发被剪到了肩头，红色的小蝴蝶结也没系。虽然和阳乃的头发很像，但不像她那样梳头，给人的印象要冷静得多。

“剪了。”

雪乃拈起一绺头发，让她尽情地把玩。她说的是一看就知道的事，仿佛在说我接受得太夸张了。

“是……不合适吗?”

但是雪乃似乎认为我们的反应是否定的，表情一下子失去了自信。

要说适合还是不适合，那就是很适合。怎么说呢，她那缺乏自信的表情才不适合她。

“那个……”

刚才还张着嘴的伊吕波想要站起来——我用手挡住他。雪乃剪头发的真意，现在这个时候不可能知道正确答案。但是，如果伊吕波有什么想法的话，那绝对不是。

因为雪乃剪头发的理由，毫无疑问是我的决定。

“啊?…………怎么样?”

我本想不去问的，结衣带着混乱问道。仿佛本能地明白，这恐怕只有她才能问出来。

“……应该说是表明决心吧。”

既然雪乃这么说了，那一定是不容置疑的事实。

雪之下雪乃不会说谎。她给自己定下的不成文的规矩，据我所知是不会消失的。

一阵低沉的敲门声打破了全场的沉默。不等回答，平冢老师就进来了。

“差不多该出场了，我们走到舞台侧翼。”

我们各自回答后，从椅子上站起来，径直走向出入口。

那么，这才是真正的关键。

新的未来，从现在开始创造。我像是在鼓舞自己似的，用力踩着体育馆的地板。

\* \* \*

学生会选举结果从下午开始计票，在放学后不到一小时就能确定。

我们来到学生会室，看着白色小船上写着的候选人名字。

总武高中学生会选举结果——。

会长雪之下雪乃。

副会长比企谷八幡。

书记由比滨结衣。

每个人的名字上面都画了一个大大的花环，而不是表示当选的玫瑰。

“太高兴了!我现在太高兴了!”

从刚才开始，前辈就一直重复着同样的话，紧紧地抱住困惑的雪乃。如果不去管他，他就会用手蹭腮，我和结衣只能苦笑。

“那个……城巡前辈……差不多……”

“啊，嗯……是啊。”

前辈终于放开拥抱，和雪乃一起看着我们。今后，作为学生会会长一定会接受大量的交接吧。

“你先回去吧，没关系的。”

“嗯。”

走到前辈打开的门前，雪乃回过头说。结衣柔和地微笑着，在胸前挥挥手说“拜拜”。

门咔嚓一声关上，学生会室瞬间被无声包围。

过去在伊吕波的帮助下去过好几次学生会室。从今以后，我们将不再去服务部的那个房间，而是聚集在这里，红茶的香气又会飘出来吧。

这样一来，我所知道的世界之线就完全断了。今后的事，完全无法想象，全是不知道的事。

“喂，希基。”

结衣环视了一会儿室内，然后坐在折叠椅上，双腿舒展着说道。

“……谢谢。”

“……什么?”

我明明知道她想说什么，却像要回避似的这么说。

“保护我们的地方。”

她直直地对我微笑，对我来说太温柔了。

结果我所做的选择，如果被告知是为了不让自己后悔，那也就罢了。也许是在对自己说，都是为了她吧。

“……服务部就没有了。”

“社团活动呢，但是我们的地方，不会消失的。”

结衣的视线过于耀眼，我不由得移开了视线。

我想结衣一定是想用自己的方式肯定我们取消服务部的决定。但肯定会和服务部永别，小町也没有重新开始的理由和可能性。

那种悠然自得的田园风光消失了。一想到那件事，明明是我自己决定的，却感到胸口被剜去一般的疼痛。

“……”

结衣举起双手伸了个懒腰，一言不发地站了起来。

“去散步吧?”

结衣一脸轻松地俯视着我说。雪乃说不用等，但结衣似乎打算等她回来。

“……很好。”

反正也没什么事可做，我这么回答后从折叠椅上站了起来。

走出学生会室，结衣像是有了目的地似的，快步走在前面。走过特别大楼的走廊，爬上楼梯，不久来到连接校舍和特别大楼的空中走廊。四楼的走廊没有屋顶，通风良好的地方有着接近屋顶的氛围。

在已经失去的这条世界线的尽头，这是不可能发生的事——是在某天晚霞中，结衣和雪乃流泪拥抱的那个地方。

“还是在外面舒服啊。”

风吹着结衣的头发，她扶着扶手仰望天空。夕阳洒下鲜红的光芒，即将消失在体育馆屋顶的另一边。我也把手放在扶手上，靠在扶手上默默地眺望着景色。

在这个地方，有这样的心情真是不可思议。选举进行得很顺利，让人感到安心，但其中却夹杂着对未来未知的些许不安。但总的说来还是希望更强烈，感觉就像站在新的赛场上的故事主人公一样。

不经意间看了一眼旁边，结衣静静地伫立在她的眼中，暗红色的云彩和夕阳。可能是注意到了我的视线，结衣慢慢地转向我。

“……喜欢……”

——她像没有听错一样，清清楚楚，就像在说自己喜欢猫狗一样，漫不经心地把这句话告诉了我。

“我喜欢希基。”

然后，她直勾勾地看着我说，好像什么都没弄错似的。

她的声音比平时低沉沉稳，眼神温柔得就像在公园里玩耍的孩子。

简直就是从没有动作的直接。我无法像烟花大会时那样预知，也无法做任何事，在那赤裸裸、毫无防备的话语面前动弹不得。

“什么…………”

勉强挤出来的声音和那句话，都是我所能想到的最残酷的。这个问题没有任何意义。

“我知道希基喜欢幸乃，但就算知道了，也没什么用。”

夕阳完全消失在体育馆的另一边。

只有散落的残照模糊地照在她的脸上。

“我想过放弃，但是不行，因为希基太帅了。”

她嘿嘿地笑了起来，似乎有些害羞，却又开朗得不合时宜。我离开扶手，面对着结衣，两人直视着对方。

“所以，我要好好告诉你。”

结衣缓缓地向后退了一步，仿佛要把我的全身都收进视野里。

“比企谷八幡君。……我喜欢你。能和我交往吗?”

听了结衣的这句话，我的内心一下子狭窄起来。声音也好，浮现的微笑也好，都像无风的大海一样平静。

在结衣的眼中，描绘出鲜明渐变的天空，每刻都在改变着颜色。他的表情没有一丝忧愁和哀愁，一定是——。

“……对不起。我无法回应由比浜的心情。”

她一定已经知道我的答案了。所以才会笑得那么开心。

“嗯……谢谢你回答我。”

结衣说着，放松了压在肩上的力气。我没有资格接受“谢谢”这个词。

“对不起……”

明明知道总有一天会变成这样。我对雪乃——总是优先考虑自己的选择。

结衣可能无法抑制自己的心情，他也全都知道。即使会因此受伤，我也肯定这一点，直到现在都重新来过。

“为什么道歉?”

嘴角挂着笑容，但结衣用坚定的眼神问我。我并没有责备他，温柔的声音就像吹拂新绿的微风，轻轻地震动着我的耳膜。

“因为我……因为由比浜的事……受伤……”

“伤口在哪里?”

结衣张开手臂，微微歪着头。

“希基，你大概误会了，因为能伤害我的只有我。”

那是当然的，她的笑容没有消失，一直对着我。她的表情似乎是为了解除我的束缚而充满了祈祷。

“如果希基向幸乃表白却被拒绝，会因此受伤吗?”

“这是……”

这个意想不到的问题，让我无言以对。无处可去的话语，化作了蓝色的天空。

“不顺利的时候，会觉得自己一无是处，所以才会受伤。但是我不觉得自己一无是处。我是真心觉得喜欢希基真好。”

结衣所说的感情，深深地渗入了我的心中。结衣的眼睛微微湿润，茜云也变了形。

到底为什么?

结衣为什么会过敏到这种程度呢?创造理由的一定是我，被拯救的也是我。明明我连一个结衣都救不了。

“我是第一次真心地喜欢上某个人。非常……非常喜欢，只要一想到希基，就会感动得哭出来。”

结衣的每一句话都抓住我的心，一刻也不能离开她的眼睛。比刚才睁大了一点的眼睛，已经不会看错，湿漉漉的。

“能喜欢上你，真是太好了。所以，不要道歉。”

结衣眨眼的瞬间，一道宝石般闪烁的泪珠从她的脸颊滑落。

那是多么珍贵，美丽得令人窒息的眼泪。它毫不留情地把一个事实推给了我。

——我为什么会搞错呢?

为什么会觉得结衣和我这样编织羁绊是错误的呢?

咬紧牙关的牙齿发出嘎吱嘎吱的响声。

呜呼，又来了。

无论何时都不会做出错误选择的她，又教会了我。

“…………我能问你一个性格非常恶劣的问题吗?”

“……是什么?”

结衣稍稍缓和了一下语气，直直地盯着我的眼睛问道。

“如果……如果没有幸乃，希基会喜欢我吗?”

这个充满祈祷的问题，我已经有了答案。我知道一个非常简单、无论如何都不会出错的事实。

“那是当然的。一定……不，绝对是喜欢上了。”

“……是吗?”

结衣好像放下心来，一下子闭上了眼睛。我也像被它吸引了一样，不知不觉间把潜藏的力量从眼睛里抽走，轻轻地闭上了眼睛。

所以我就放过了。

结衣朝这边逼近了一步。他的手颤抖着，抓着西装的下摆。带着无法掩盖的热度的嘴唇——。

“————”

嘴唇传来的柔软和热度，让我吃惊地睁大了眼睛。

结衣带着天真无邪的笑容看着我。

“我们还没交往呢，这样也不错吧。”

结衣“咚”的一声，把额头抵在我的肩头。热乎乎的呼出的气息，从互相接触的那里传达出来的热度，现在清楚地揭露出一个真相。

毫无疑问，我爱着结衣——一个叫由比滨结衣的女孩。

在连道理、理性和思考都消失不见的内心深处，确实被疙瘩，一直被静静地封闭着。原本悄悄藏在里面的东西，被她的热情强行拿出来，以不可能的程度搅乱了我。

其实，我一直装作没发现。因为我知道，一旦意识到这种心情的严重性，就无法挽回，也无法挽回。要将这种感情升华为幸福的形态是非常困难的，因为我和她都太笨拙了。

“我先回去了。”

我一言不发，僵在那里，结衣说完就转身。结衣一脸茫然地看着她小跑着远去的背影，在敞开的门前回头。

“希基!今后也请多关照!”

“嗡嗡”地大大地挥动着双手，精神饱满的大音量传入耳中。

结衣在消失在门后的一瞬间，把手放在嘴边，大声说道。

“谢谢!最喜欢了!”

\* \* \*

回到学生会室，结衣的行李不在那里。就像刚才说的那样，她先回去了。

他一屁股坐在折叠椅上，夸张地叹了口气。一闭上眼睛，脑海里就浮现出刚才的情景，从头到尾，每次都回到最初。

就这样一遍又一遍地倒推记忆中的影像，入口的门咔嚓一声打开了。

“哎呀，你还在啊。”

雪乃走进学生会室，说着微微一笑。终于完成了前辈的交接。

“我说了可以先回去的。”

“不用……反正我已经习惯了在社团活动中等待。”

我猛地从椅子上站起来，背起放在地上的包。

“已经能回去了吧?”

“嗯。”

雪乃也把包搭在肩上，关了房间的灯。走出学生会室，雪乃静静地锁上门。

从今天开始，她拿到的不是服务部活动室的钥匙，而是学生会室的钥匙。就连这么小的变化，都让我知道了它的巨大。

我去了教职员办公室，把钥匙还给他，然后从楼梯口走了出去。虽然她一句话也没说要一起回去，但在我取自行车的时候，雪乃一直等着我，什么也没说。

“久等了。”

黑梨和雪乃轻轻点了点头，推着自行车从我身边走了出去。虽然所处的环境大不相同，但和下定决心要联合毕业的那天情况很相似。

沿着海滨公园大道一直走，穿过京叶线的高架。从学校出来后一句话也没说，只是偶尔听到脚踏车传来的轻微的棘刺声。

“……其实……”

雪乃喃喃地说，没有任何开场白。雪乃看着她的侧脸催促道。

“我不想把你们卷进来，我一个人加入学生会就好了。”

我反复咀嚼这句话的意思，终于明白了。

雪乃一定是不想借助我和结衣的力量，真的想靠自己的力量做成一件事。说到底，我还是没有真正实现她的愿望吧。绝对不会让雪乃一个人待着，我的自我也很好。

“因为和你在一起是一件很可怕的事情。”

但是，我得出的答案却完全不同，雪乃说出了意想不到的话。

“我完全不知道你在想什么。一想到你可能又会伤害到我，我真的很害怕。”

来到陆桥的坡道上，他缓缓地爬了上去。一步一步地仔细品味这句话。

“最不明白的是我。……和你在一起，我真的不明白自己了。”

爬完坡。我不由得站住了。眼看着雪乃的背影渐行渐远，他停下自行车，再次迈步。

“是吗?”

我这么一说，雪乃站住了。他没有回头看我，只是沉默地催促我说下一句话。

“还记得修学旅行那天晚上我对你说的话吗?”

并不是说因为来了这里。其实我从很久以前就想问了。她的话，她的回答，我一直渴望着。

“……嗯。”

“我的心情从那时起就没有任何变化。”

我这么说，雪乃却没有回头。即便如此也没关系。只要能正确传达，就能断言那样做没有错，所以只要传达给她就没关系。

“我喜欢雪下的事，从很久以前开始，就不输给任何人，喜欢到连自己都笑出来的程度。”

行驶在国道上的汽车的轮胎噪音，就像退潮后的波浪般掠过耳畔。雪乃的表情，我还是不明白。即便如此，我也没有停止说话。

“我会用理解的方式告诉你我的事。如果你说害怕，我就陪在你身边，直到你安心为止;如果你说不懂我，我就陪你直到你完全理解我为止。”

那些太拙劣、太直接、太无厘头的语言。即便如此，只要传达给她，什么都可以。因为我觉得如果简单易懂的话，就能把那个部分完整地传达出来。

“所以我不会让一个人在雪下。也许这是我的自由，但我绝对不会让一个人在雪下。”

一直盯着的背影，微微颤抖着。

流淌的是车灯的光芒和深深的沉默。之后能做的事，已经什么都没有了。疯狂的爱情，撕心裂肺的呐喊，用什么样的语言都不够，只祈祷正确的传达。我只能做到这一点。

“比企谷。”

慢慢地。

雪乃回过头，从正面看着我。

我再次觉得她很美。透明白皙的肌肤，毫无瑕疵的细脸，如铃铛般清脆的嗓音，无论用怎样的赞美之词都无法正确地形容她。

血色红润的嘴唇变了形，努力冷静却不带任何感情的声音向我提出了一个问题。

“那是想和我交往吗?”

笔直的眼睛里，红色的尾灯闪烁着。

这个问题出乎我的意料，我一时不知所措，点了点头。

“啊，原来是这样。”

“是……”

呵呵。雪乃露出一丝放弃的笑容。

“那我就拒绝你的告白。”

这句话的意思一下子落在我的心里，我也学着他的样子无力地笑了。风从我们中间吹过，吹动着雪乃的短发。

“学生会会长和副会长交往，为什么不合适呢?而且……”

听了雪乃的话，我不由得短暂地叹了口气。

我几乎已经知道会变成这样。她在心里的某个角落想象着，雪乃也许会这么说。

一直盯着的眼睛突然晃动起来。为了确认这个事实，我向她靠近了一步。

“因为我一定会完全依赖你……”

本应坚毅的声音，却无助地颤抖着。我看到眼角渗出的泪珠，向她踏出了一步。

“所以我不能和你交往。”

雪乃离我很近，我伸手就能够到她，可她却不允许我碰她。即便如此，满足我的并不是绝望或放弃，而是实实在在的温暖。

雪乃的话，一定没问题。

因为我已经认识已经没事的她了。用自己的脚站起来，走起来，然后断言总有一天会允许我在他身边。

“可是……”

雪乃走近我一步，我的衣袖都能碰到。我的眼睛里映出一种连我自己都没见过的安心、满足的表情。

“……我希望你再等我一年。我觉得你的请求很狡猾。”

对于这句话，我摇头回应。即使狡猾，也无所谓。

“等一切都结束了，我会好好跟你说的，我要好好跟你说。”

雪乃的额头抵在我的肩头。他握住了我的西装前摆，我终于明白自己被允许触摸她了。

“啊……这样就行了。不管多少年，我都会等的。”

他搂着她的腰，轻轻抱住她纤细的身体。为了不让那瘦弱的身体折断。他慈爱地慢慢用力。

“……所以请让我再这样做一会儿。”

雪乃哼了一声，用力按了按贴在肩膀上的额头。

我已经知道从触碰的地方传来的热的名字。

所以我一直紧紧抱着她，不让她的热情溢出来。

\* \* \*

——我做梦了。

在义工部的活动室里，结衣对着雪乃笑着。

——她的脸被悲伤和伤心弄湿了。

在篝火的火光照耀下，留美露出又哭又笑的表情。

——她的脸陷入了认命和孤独。

文化节结束仪式后，相模在舞台前被人群包围笑着。

——她的脸因为无心的话语而扭曲。

雪乃站在陆桥上，吹着夜风，眼角渗出了泪珠。

——她的脸因丧失和空虚而凝固。

我做过这样的梦。

\* \* \*

睁开眼睛，看到了陌生的天花板。

柔和的光线透过窗帘洒满房间，弥漫着令人怀念的甜香。爬起来环顾四周，很快就发现了我以外的人。

“你终于醒了，睡得真香啊。”

雪乃和我四目相对，露出柔和的微笑。

孩子被竖抱着的脸颊贴在他的肩膀上，纤细白皙的手轻轻地拍着他的背。“噗”的一声小嗝声响起，她重新抱进了他的臂弯。

“这孩子哭得这么大声，也叫不起来，我真担心。”

她的声音有点像大人，让人感到无比怀念，她掀开盖在身上的毯子。就在这时，一张纸哗啦哗啦掉在地上。捡起来看到的瞬间，心脏扑通一跳。

“只要去做，不就能做到吗?”

字迹潦草，没有看错。我终于完全理解了。

——回来了。

终于。我终于回到了她的身边。

“啊……”

说完这句既不回答也不呻吟的话，我摇摇晃晃地从沙发床上站起来，不由自主地靠在雪乃的腰上。

那细腰、那气味、那温暖，都是我一直追求的东西。我无比怜爱，赌上性命也要守护的存在——我的全部，就在那里。

“喂，突然怎么了?”

面对困惑的雪乃，我无言以对。

只是现在，想感觉到她的存在。我想让我的内心充满她。

“……这孩子叫什么名字?”

“到底怎么了?今天要去问这个吗?”

听了雪乃的回答，我松了口气，悄悄地离开她，坐在沙发床上。

终于，真的花了很长时间，回来了。

但我刚才做的梦到底是怎么回事?我度过的那段重新来过的时间，到底怎么样了?

心中一片躁动，无法控制。知道这一点很可怕。但我必须问她。

“我说…………我们高中二年级的时候，谁当上了学生会主席?”

“我以为你在说什么……没关系吗?是不是做了噩梦?”

对于雪乃的问题，我摇了摇头，伸出手说:“不用了。”只有这一点，必须好好确认。

“一色伊吕波，你很熟悉的名字吧?”

听到这个名字的瞬间，我受到了天翻地覆的冲击。

这条世界线，并不是那些重新来过的日子的延长线。这应该是她本来的样子，但她却被绝望压垮，身体几乎要支离破碎。

我为了保持自己内心的平衡，伤害了结衣，把孤独强加给了留美。相模受到了无法抹去的心灵创伤，我周围的人时而愤怒，时而惊讶，时而轻蔑我。而雪乃——带给她无数的失望和失意。

“……对不起。真的对不起。”

她垂头丧气地向雪乃低头行礼。虽然知道道歉也无法挽回失去的东西，但如果不这么做的话，总会有办法的。

“你到底在为什么道歉?”

“……我做了一个梦……高中二年级的……所以我想起了很多事情。”

无数次地犯错，痛苦，让我痛苦。给她们带来的失望和痛苦，到底有多少呢?我想，我已经重复了很多难以想象的事情。

“我是说让你受苦了。除了雪乃以外，你一定也做错了很多事，伤害了你……事到如今……”

“八幡。”

回过神来，雪乃已经站在我面前，她叫着把孩子抱在我怀里。这个连名字都还没有被赋予的新生命，发出微弱的鼾声。

“你看这孩子。”

雪乃站起身，抚摩着我臂弯里还没长齐的柔软黑发。

“这孩子是我们的福气。”

就像对孩子说一样，她用缓慢而温柔的语气说道。雪乃把抚摩头发的手放在我的手上。

“看你……”

听她这么说，我不由得盯着她的眼睛看。在她的眼睛里，有个男人一脸没出息的样子，好像马上就要哭出来了。

“你是我的幸福，无论是过去还是现在，未来，都不会改变。”

雪乃轻飘飘地笑了，就像樱花绽开一样。阳光仿佛只照进了她的脸上，十分耀眼，她不由得眯起了眼睛。

“回想一下你周围的人，有没有因为你而哭泣的人?我不认识这样的人。”

重叠在一起的手紧紧握住我的手背。仿佛要传达她的确信。仿佛现在要说的都是事实。

“只要你还在这里，一定什么都没有做错。因为不伤害别人、不让别人悲伤地活着，是不可能的。”

视野变得模糊起来。尽管已经什么都看不见了，我还是一直盯着雪乃。

“——所以，不要露出那样的表情。我从你那里得到的一切，都是宝物，不管是什么样的语言，什么样的痛苦。”

眨眼的瞬间，大颗的眼泪滴落下来。婴儿服上渗了好几块，止不住地呜咽起来。

真是个残酷的父亲。这孩子出生的瞬间，我也没有哭得这么厉害。

“今天的你，真是个爱哭鬼。”

雪乃温柔地擦拭着我泪如雨下的眼角。那是和暑假那天，她看着又哭又笑的留美，帮我擦掉掉的眼泪时一样的温柔——所以，我完全理解了一切。在超越了理论和道理的纯然灵魂的地方，我确信。

那些重新开始的日子，绝对不是梦。

现在也和我接触过的她们，以及他们继续走在未来。

一定带着笑容，时而哭泣，时而孤独，一直活到现在。

唉，终于。

我终于可以这么说了。

我的青春没有任何错误。

过了十二年，重新来过，她告诉了我，我终于可以这么说了。

雪乃从我的怀里，轻轻抱起一个小生命。

我抚摸着在她臂弯中浮现出安详睡脸的孩子的头，那温暖渗透到我的内心深处，渗透到我看不见的地方。

“喂，你，该走了。”

“啊……”

我把收到的温暖装满胸口，慢慢地站了起来。

她微笑着，直直地看着我说。

“给这孩子起个名字吧。”

Fin.

后记

非常感谢您读到最后。

这个漫长的故事也顺利地迎来了完结。

我开始写这个故事的契机，是在推特上，一位二次创作作家的朋友发的关于时间的推特上。

从“timesleap”这个词开始，我就像从天而降一样一口气构建起了这个故事，等回过神来，我已经敲开了情节。

就算读的人再少，也一定要写到完结为止，每一集我都全身心地投入。从结果来说，能把这个故事带给每一集几千人，真的很吃惊。

我想通过这个故事传达的事情，虽然在后记里不敢轻易说出来，但是在最后的雪乃的台词里包含了。

包括这样的二次创作在内，小说是通过表现而成立的。我个人认为，表达只有在有接收者的情况下才能成立。

所以对我来说，读了书的你就是幸福。能够利用时间资源，将这个文库本大小的故事读到最后，对我来说是无上的幸福。因此，无论谁说什么，我都能断言你走到这里的过程没有任何错误。这个故事是对我所在的优秀作品和登场人物的爱，也是对你的爱。

那么，请允许我稍微问一下。

通过这个故事得到救赎的，到底是谁呢?

发出“救救我”这一信息的，到底是谁呢?

如果可以的话，请用感想和评价等进行反馈。

我想创作者应该会同意，读者的反应是作者生存的食粮。

今后将对过去的作品进行修改后投稿，同时也会投稿新的作品。

那么，在新的故事里再见吧。